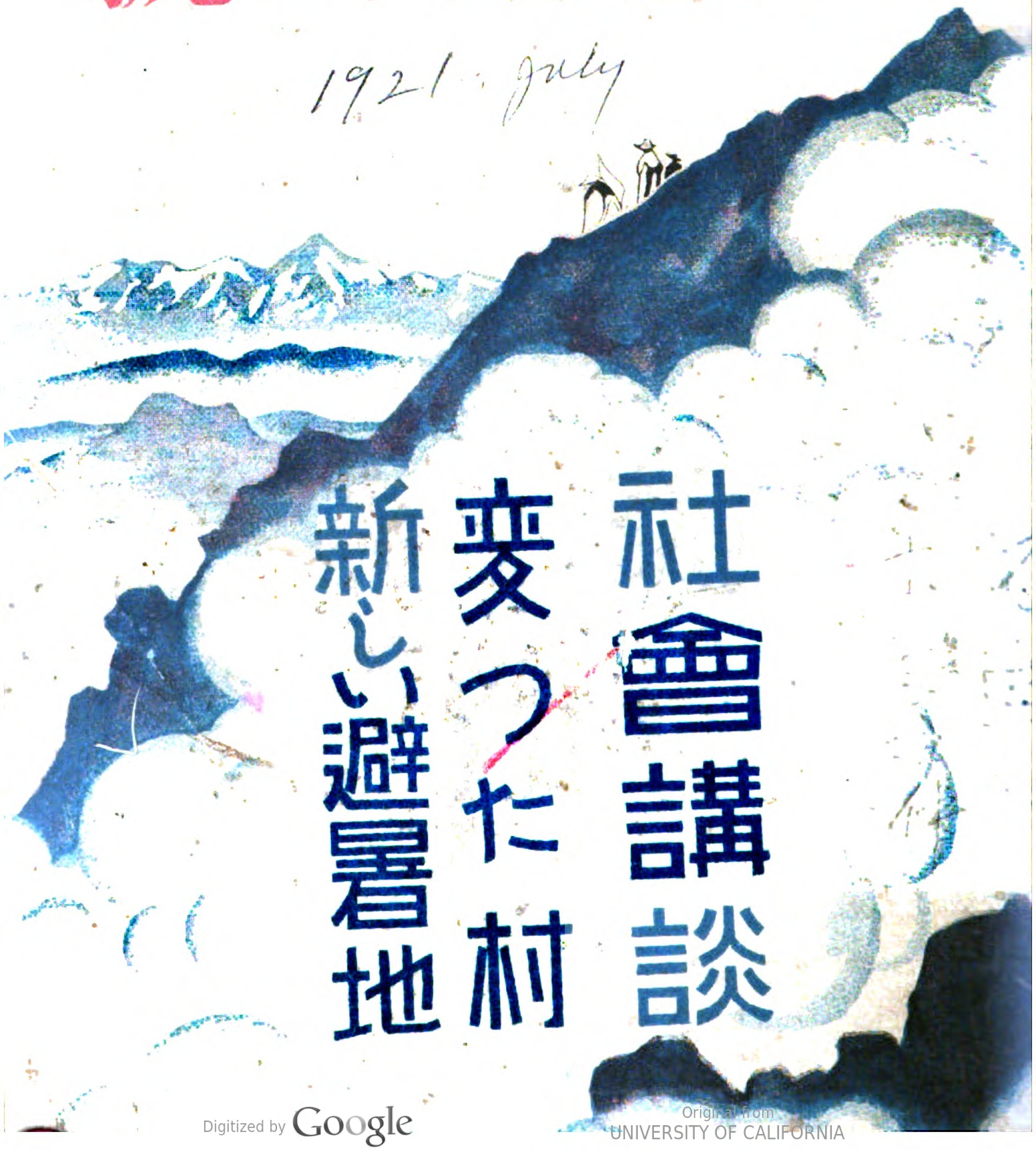
改造

夏期臨時號

1921. July





サンエス萬年筆

東洋の製品にして世界的レコードを作れる

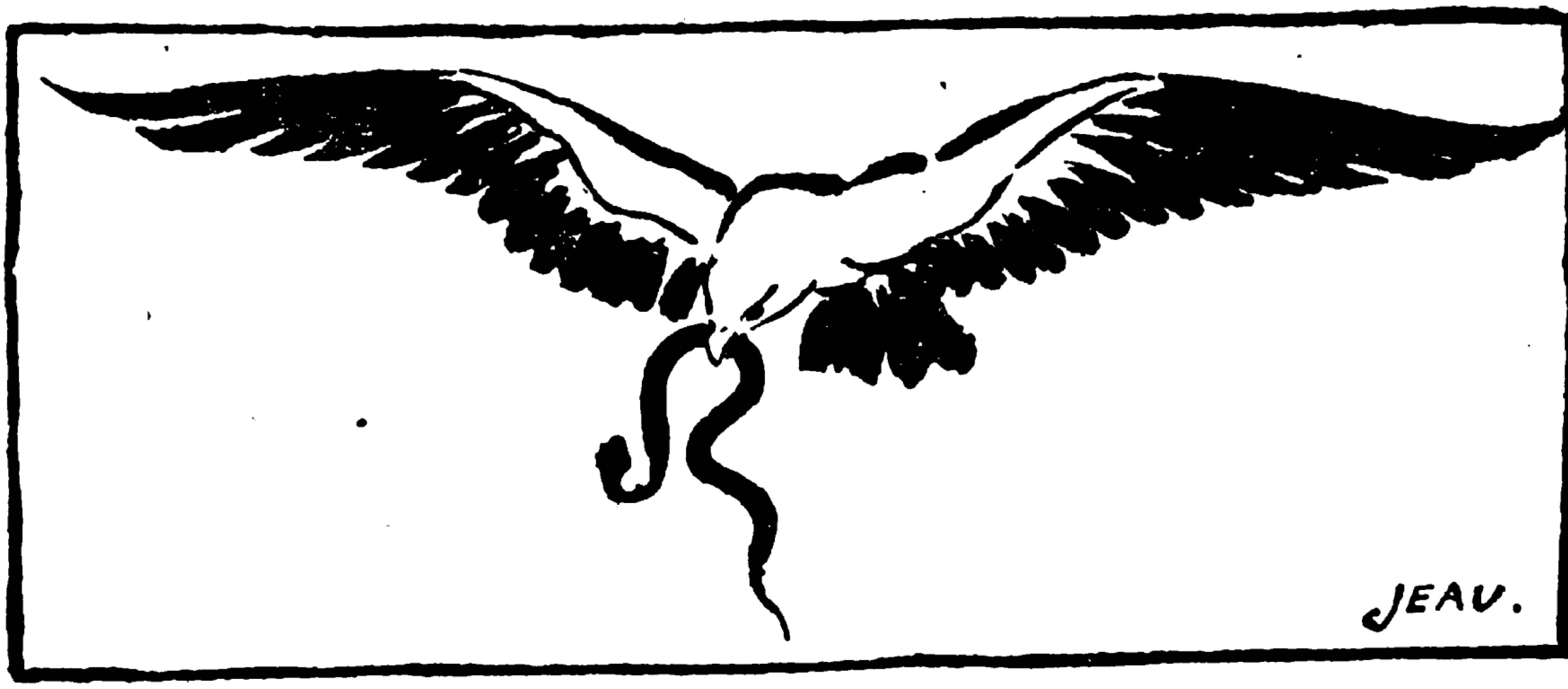
東京市 細沼株式會社 馬喰町

支店出張所・大阪・福岡・名古屋・金澤・札幌



改造夏期臨時號目次





((改造夏期增刊號))

「佛法僧鳥」を聽いて

大深林の奥へ――大雪山の頂きへ――これが眞夏の憧憬である。

或る夏の夜のことである、予は高野五千尺の峯頂で、此山での――佛教の山としての――名鳥であり、靈鳥と稱せらるる「佛法僧鳥」の聲を耳にしたことがある、ちやうど臥待の月が大森林の樹梢に利鎌のやうに冷く光り、さしもに廣き境域にすこしの風もなく、何一つの聲もない、このとき金鈴のやうに銹のない啼聲が地上に投げられた、けだかい聲であつた、玉音さらに濁聲を交へない、全く地上の音符にはない天上の麗聲であつた。――その時の美を慕ふ我心の囁き――高雅へと歸る我が血潮――敬虔なる心の芽生え――植物性によつて淨化されたる一鳥の心も聲も自然そのままなる――その夜は前後にない嚴肅な感じを味はつた、全く當時をふりかへれば一切の俗念が悉く拭ひ去られるやうである。

俗閙を離れて大深林へ――穢汚なる動物性の巷から觧放されて植物性へ――ーダラシない街から威嚴ある大雪山へ――これが人間の淸めらるべき容易なる道順であり、趣味ある理想生活であり、生命の永遠に保持さるべき最大醫料である。眞に下等なる動物慾は植物性の交錯によりて玉淨化さるるものである。

人間の誰にも均しく開かれつゝあるこの自然の仙寶を無產階級の人々にも均しく味はせることが天地の心であり、我等の使命である。（S）


阿寒湖より
雌阿寒岳
を望む
白穂画

變つた村



所謂「私共の理想郷」

法學博士　吉野作造

○好いことをやつて悪ざまにいわれることには慣れて居るが、下らないことをやつて結構なことをやつて居るように云れるのは、今度がはじめてである。伊豆の畑毛に私の發起で理想郷を拓くと云ふ、クスグツタイ風説は卽ち之れである。尤も全然嘘ではない、理想郷と云ふほどのものになるか、ならぬか、兎に角一つ變つた、氣持のいゝ遊び場を造ろうとして、一生懸命になつて居ることは、事實である。

○先づ、畑毛の地理に就いて語る。東京から汽車に乘つて西の方へ三四時間、三島驛で駿豆鐵道に乘換へ、二つ目の大場驛でおりて、更に馬車若くは人力車で二十分ばかり左へ入つて、畑毛溫泉がある、熱海線が開通になると、隧道を出てすぐ停車場が建つと云ふ話だが、さうなると其處から十五町の距離になるだろうと思はる。だから數多い伊豆の溫泉の中で、此處が一番東京に近い。西北に富士が見えるが、此の靈山の眺めとして、おそらく畑毛ほどの景色はなからう。而已ならず、背には老松参差たる石山を控え、右手には箱根二子山、左には韮山を控えて遠近それぞれ快活な氣分の眺めに富んで居る。賴朝時代の名所舊蹟が附近に散在して居ることは云ふまでもない。地形は大體に於て南に開け、三方或は遠く或は近く、山に圍まれて居るので、冬の暖いことは格別だ。斯う云ふ點から云つても、此の土地ほどいゝ條件の備つた處は、稀れだと自信して居る。

○此地に溫泉宿が五六軒ある。言傳へによれば、七百年このかたの古い溫泉場だそうだ。湯は透明で非常に綺麗であるが、何分微溫で夏分でもウツカリすると風をひきさうだ。元來が溫まるたちの湯だと云ふことであるが、それであまり微湯ので、之れが久しく顧みられなかつた原因である。それに皮膚病にいゝと云ふ間違つた言傳があつたので、不潔な客が多いだろうなど云ふ想像も傳つたのだろう。事實客はかなり多いが、その割に一般に知られない。吾々の仲間の一人たる木下醫學博士の鑑定によれば、皮膚病に特効のあると云ふ性質は毛頭ないとの

ことだ。兎に角、從來は溫泉場として余り認められて居らず、又現在の溫泉場は小山の影で富士の景色をさえぎつた處にあるので、一寸行つただけでは、全體の風景がいゝと云ふことはわからぬ。こんな處から不思議に此の土地は、世間の人から見殘されてあつたのである。

○それが計らずも私共が行つて色々研究することになつて、湯も熱いのが出ると云ふ確信を得た。それに就ひては片山理學士平林工學博士の詳細なる研究を煩はした。そこで現今已に出來上つたのが二本ある、何れも立派な溫泉で、然も分量は極めて豐富である、目下第三本目を掘つて居るが、吾々の團體の發展に連れて、更にも少し掘るかも知れない。

○私共の、此の土地に、着眼したのは一昨年の暮れであったが、始めはほんの數名の人と、本を讀みに行く處を造ると云ふに過ぎなかつたのだから、何も隱す譯ではないがコツソリやつて居た、それがだん／＼人の知るところとなり、理想鄕を造るなど〻云ひふらされ、理想鄕と言へば直ちに武者小路君などの新らしい村が聯想され、又對照され如何なる理想で此の村を經營するかと云ふ質問を受けるやうになつた。斯くして二三度新聞に書かれたこと等もある、そのうちに吾々の仲間はだん／＼ふえて、此頃では可成り大きな村になつた。「國本」と云ふ雜誌の六月號には可成り詳細な紹介があつたので、世間の注目をひくようになつた。「國本」の紹介は、部分的に誤りもあるが、大體に於てよく書いて下つたことを感謝する。斯ふして、兎に角、世間の問題となつた以上は、本來何も內證にすべき事柄でもないから、進んで吾々の方から計劃を明らかにした方が適當であり、且つ同樣な計劃をなさる方々の參考にもなるかと思ひ、雜誌「改造」の請ふまゝに玆に一文を草することになつた。

○先に陳べたる如く、始めの起りは、極く規模は小さかつたのである實は、友人の大村和吉郎氏が、私の日常生活が余りにせわしさうなのを心配されて、何處か靜かな保養場を造つてやらうと云ふ厚意から起つた話である、同君の鄕里大場は、畑毛の入口であるから、自然畑毛のことは同君はよく知つて居たのである、富士のよく見える畑地の賣物がある、故老の話によると、そこを掘ると湯が出ると云ふから、買つて別莊をたてないかと云ふ相談であつた。單獨で買ふ力はないが、二三の友人を誘つてだん／＼見に行くと云ふことになつたのが、話のはじめだ。折角の、友人の厚意に對して、實は初め乘氣にならず二三ケ月グズ／＼して過した。少し眞面目に考え出したのは三月頃からである。四月には數名の友人を誘つて實地檢分に行つたが、其の時友人は既に吾々の着眼して居る畑地の外に、この方面の高臺め

莊地を探して居たので、吾々の計劃を私の舊學友眞山胃果君から聞いて、仲間に入れてくれと云ふ話が起つた。俳優としての河合君の立場のことは、吾々玆に論ずる限りではないが、個人としては誠に話のわかつた人で、吾々の別莊經營の理想と云ひませうか、又、抱負とでも云ひませうか、それを非常によく了解して央れたので、私共は悦んで同君を友人として迎ゆることにしたのである。

○そのうちに、別莊を持つには番人がいるとか、番人をたゞおくより何か仕事をさした方がよいとか、又折角別莊が開けても在來のよりは、少し體裁（テイサイ）のいゝ宿屋も必要だと云ふ處から、だんだん話が進んで、河合君の親戚に多少さうした經驗のあるものが居ると云ふので、その人に上品な氣持の好い旅館をやらせようと云ふことになつたのである。之れが、河合君が旅館を經營すると云ふ話のもである。河合君の旅館經營の[illegible]

○斯くして、段々規模が大きくなり、吾々の仲間に加はる數も增えた。さうなると吾々は普通の別莊地に有り勝ちな弊風の起らない樣にと云ふ處から、色々の考えを廻らすやうになつた。そこで一つ理想的のものをつくろう、それには第一人を選ばなければならない、又吾々の造つて居る別莊の近所に異分子が入つては困ると云ふ處から、其邊の別莊地として適當な全地域を買占めようと云ふ計劃を立てた。併し買占めるには金がない、素寒貧の吾々のやる仕事であから、まとまつた金を整えて先づ以つて地面を買占ると云ふことは出來ぬ。されはと云つて、只だ金を出す人なら誰れでも歡迎すると云ふ譯にはいかぬ、現に金持で加入を申込まれた方に、此方から辭退した人も少なくない、斯く一方では人を選擇して居るもので[illegible]金の調達に困る、[illegible]を此の方面で大いに助けた河合武雄君と、木下正中博士・今村繁三[illegible]である。此間志

立鐵次郎氏の直接間接の援助も忘るゝことは出來ない。

○之等諸君の厚意によつて得た金を基金にし、大略吾々の着眼した地面全體の買收を着々完成した、色々の非難と惡評を甘じて受け乍ら、一年以上も專ら此の事に當つたのは大村君である。大村君の意を諒として其の持地を提供してくれた村民諸君の非常の厚意も、又私共の大いに感謝する處である。地面は一日皆な私が買取つたことにしてある。仲間になつた諸君が大金を私に預けられ、長い間全部の土地所有名義を私にさしておかれた、その信用に對しても感激せずには居られない、昨今段々それぞれ所有者名義に書換えつつあるが、未だ大部分は私の名義になつて居る。全部買占め終る爲めに、別莊側に關係のない數名の友人から、多額の負債もした、只だ一片の證文に對して、數萬の金を立替えて呉れた隱れた數名の友人の厚意も、又此の仕事の成就の上に、非常な貢獻をして居るのである。

○此の別莊地は、單に風景のよいばかりでなく、溫泉があると云ふのが一つの欠くべからざる要素になつて居る、吾々は土地の買收に着手すると同時に、溫泉の掘鑿に從事した。始めて着手したのは去年の三月で、之が爲めに、大村君は萬余の金を徒費せられたことだらうと思ふ、去年の秋更に方針をかへてやつたのがうまく當つて、現在二本の溫泉を有するに至つたのである、之から掘る分についても深く確心する處があるので、溫泉の問題は先づ解決されたものと見てよい。此處で去年の暮、今年の初から、愈々確實なる溫泉地として公表することが出來たのである、之れと同時に高井治衛、徳田與平の兩君が、吾々の仲間に加入され、且つ非常な熱心を以つて吾々の仕事を助けられるので、昨今は事が誠に順潮に進んで居る。

○全體の地面は約二萬坪もある、此處に別莊を持うふと云ふ仲間は、約五十人ある、はじめは所有名義は私で、專ら經營の衝に當るものは大村君であつたが、──尤もその影に主となつて助けてくれる人は澤山あつた、──愈々五十人も仲間が增えたと云ふことになれば、皆の考えをよくまとめて、氣持のいゝ別莊を造りたいと云ふ考えなのである、皆と共に計劃したいと云ふ當初からの考えであつたから、加入者の申込に對しても可成り嚴重な撰擇をした、斯くして各々の意見を聞いた結果、色々細い點に就いての希望はあるが、要するに全體共同の力で、別莊地を經營しようと云ふことになつた。

○其處で只今、ほぼ纏つて居る點は、此處に別莊地を持つ人、又之れから持うと云ふ人を總て網羅して、一つの社團法人を造ると云ふことである。此の法人が協力して道路を造り、下水、水道の設備をなし、又溫泉の配給をもやらうと云ふのである、

溫泉の掘鑿には可成り金がかゝつたが、出來たものは又大した財産である、團員で使用して余りあれば他に賣ることも出來る、之等の利益は、皆な團員全體のものにしようと云ふのだ。凡ての財産は此の社團法人のものであり、又此の社團法人が、將來電燈も經營したり、或は小病院も造つたり、又倶樂部や庭球場その他遊園地をも造る考へである。差し當り共同浴場は目下建築中だ、追ては之れにレストランを附設し、二三の寢室をつけ加え、吾々が單身で行く時は、此處で寢食することが出來る樣にしようと云ふ考えだ。

○しかし、之等の仕事には可成り大金がかゝり、俄かに凡ての人が出資をすると云ふことも出來ない、當分數名の有志が全體の利益の爲めに之等の經營に當つて居る。溫泉については、十名ばかりの有志から成る溫泉掘鑿組合が之れをやつて居り、道路其の他の經營に就ては、之れも十數名の有志よりなる別莊團組合がその衝に當つて居る、斯ふして之等の組合が、早晩全體を網羅する法人の出來上ると共に自から解散して、一切を之れに引繼ぐことになつて居る。

○別莊地をどう經營するかと云ふことに就ては、色々議論がある、建物の樣式につき、めい／＼の宅地の區劃につき、又交通機關のことや、生活品供給の方法について色々な注文もある、普通の別莊にありがちな奢侈淫卑の風を嚴禁すること、快活な上品な氣分を滿たさしむること、全體が公園である樣な趣きを呈せしむること、等種々の案がある、私が發起人の一人だと云ふ處から、プロレタリア的のケチな別莊だらうと想像されては閉口である。私は、私自身は貧乏人だが、仲間には金持が多いので、世間から見たら「國本」記者が許されたように、道樂半分の平民主義になるだらう私の平民主義は、今日實際の世の中での最低の生活まで、凡ての人の生活を下げると云ふのではなく、凡そ之れからの人間は、人間らしい生活としては此の位の程度であつて欲しいと云ふ處に、標準を置かふと云ふのだ。無用の贅澤は斷じて許されないが、溫泉場に別莊を持つて氣持よく一日を過さうと云ふことは、少なくも吾々の理想する將來の社會に於て、凡ての人に許さるべき最低の生活だろうと思はれる。今日の社會から見ては閑人の贅澤の樣に見えるだらう。が、吾々は一つ畑毛に行つて人間らしい生活をして見ようと云ふのである、此の點に於いて吾々の仲間になつて居る人々は、皆な同じ感想を持つ。

○吾々の別莊地域は二つの村に跨つて居る、即ち函南村と韮山村とである、字でいえば函南村の畑毛と韮山村の奈古屋とに跨つて居るのである、別莊地の大半は奈古屋にある。溫泉は奈

古屋にもある、しかし畑の方が主である、が從來畑毛溫泉として知られて居るから、私共の掘つた方は畑毛新溫泉と云つて居る、新と云ふ字をつけたのは、從來の樣に微溫い湯でないと云ふことを表示するためである、別莊地の大部分は、奈古屋の方にある處から、吾々の組合は特に韮山別莊團と稱することにして居る。現在の畑毛溫泉は、在來の湯では營業を榮えしめて行くことが困難であらう、吾々は何等か便宜の方法を設けて、之等の人々の將來の計劃をも、助けて行く考えを持つておる。

○全體の總面積約二萬坪のうち、一萬二三千坪は已に賣約濟みとなり、殘りの地面は之れを別莊團組合に引繼ぎ、別莊團組合は之れを時價に賣却してその利益を、道路共の他の費用の一部に當てるつもりだ、道路は幹線を四間幅に、支線を二間幅とし、當分の間は重い車は入れないことにしようと申合せて居る。之等のことは最近やつときまつたので、別莊建築は之れからのことだ、今建てつゝあるのは、河合君の親戚の人が、別莊團援助の下に經營せんとする旅館と、共同浴場丈だ、共に七月の半ば過ぎには落成するだろう。秋にはかなり別莊も出來る筈である。

○仲間のうちには、いろ〳〵の專門家が居る、めい〳〵分擔して計劃を立てる考えである、衛生上の事には木下正中博士と其令弟木下藤作博士之に當り、建築のことは佐藤成一博士、機械のことについては畠山一淸學士、溫泉のことに就ては前に擧げた平林博士片山理學士が骨折られつつある、實際の色々の經營の事務は、木下正中博士、高井治平、德田興平兩氏と、私とが取扱つて居るが、實地につひては最も多く働ひて居るのは大村君である。

○最後に一言したいのは、土地の賣買によつて生ずる利益金の處分問題である、湯が出て、場所がよいので、土地の値はドン〳〵上つて行く、買つた値段はさう高くはない。その間生ずる之等の利益は、別莊團全體の利益に歸するのである、其の以前の利益金は表向き名義上の所有者たる私の處得に歸する。之等は過去の一切の損失及び實地經營者の此の仕事の爲めに要した實費、隱れたる出資者に對する謝禮等を拂つて尙ほ余りあるものは、一部を當初からの關係者に分配し、他の一部は何等かの方法で公共の事業に使用したいのだ、金錢上の問題に就ひては、最近組合に引繼くまでは凡ての責任を私一人で背負つて居る。

○右の樣な次第で、大體の輪廓はきまつて居るけれども、愈々どんなものが出來上るかは今の處はつきり明言しがたい。只だ

めい〱皆な氣持のいゝ上等な、快活な保養場を造ろふと云ふ點には、一致して居るのであるから、多少贅澤の非難は免れまいが、一寸變つた一つの村が出來たことは疑を入れる余地がない、私共の抱負としては此處一につの模範的のものをつくり、一つには之れまでの別莊地にありふれた弊風を革正し、又一つには之れから新らたにつくる別莊地に一つの雛形を與えようと云ふことを、ひそかに考えて居るのである。之れが爲めには、物質的にもいろ〱新らしい設備を充分に利用するつもりであるが精神的にも、大いに緊張した氣分で眞面目に研究し相談し會つて行かふと考えて居る、

○要するに道樂半分の仕事と見ゆるであらう、けれどもやつて居る吾々は至つて眞面目で、至つたて眞劍である。少しも遊蕩氣分を持つて居るものゝないことを明に斷言することが出來るのである。





哲人村としての信州神川

土田杏村

1、序記

夏になつた。人はそろ〳〵夏期の旅行やら避暑の事やらを考へて動き出すだらう。私にさうした要求が無いでは無い。自分の健康を顧慮すれば、人一倍私は其の必要を感じて居る時だ。併したゞ無意義に旅行し、避暑して其れが何の愉快であらう。都會文明の墮落に沈み切つて居る人達は、かうした機會に田舍へ動いて行つて、田舍の健全な、又謙遜な、地方主義個性主義の空氣の洗禮を受けて來るがよい。そして我々現代人の痼疾となつた中央集權主義官僚主義の病氣の中から逃れ出るがよい。單なる避暑は自分に取つて全く無意義の事だ。さうした閑暇があるなら、私は一日でもよいから、私の愛する新しい村の青年の處で、お互ひに其の後の仕事の出來ばえでも語り合ひたいものだ。

私が今紹介しようとする長野縣小縣郡神川村大字國分は、今更ら私が紹介しないでもよい位に社會に有名になつて居る。といふのは、洋畫家山本鼎氏の熱心に主張し、又實行して居られる農民美術と自由畫と、何れも現代文明の批判として意味深い運動は、實に此の小さい一つの村を中心にして起り出したものだからである。昨年春の事であつた。私は當時著しく自分の健康を害し、讀書も何もかもすつかり禁ぜられて了つて、明石の海岸に轉住し、病蓐中の人となつて居た。或る日私のところへ山越脩藏といふ未知の青年から手紙が參り、其れによると普通選擧運動の爲めに私に郡内の數個所で演説をさせようと思ふから、即刻出て來ないかといふ事である。其の郵便の出所を見

村に相違無いと思つたが、どうしても其れを思ひ出せなかつた。此の時は今言つた樣な事情から、私はとても選擧運動になど行く事は出來なかつたが、其の秋の事、再び同氏から手紙が來て、一週間許り村の青年の爲に哲學の講義をしないかといふ勸誘である。村の青年が哲學を聞く。此れにも私は大いに驚かされた。併し其の頃は私も京都へ歸つて居たし、から熱心に勸められるとお了ひにはどうも斷り切れない自分の性格から、とう〳〵承諾する事にし、北越線廻りで上田へ向け出發する事になつた。驛へ着くと神川村の青年會を率ゐて居られる小學校長さんの外に、金井正、山越脩藏の二君が待つて居てくれた。神川村の事を語る時に此の二君の名を忘れてはならない。實はすべての新らしい施設は兩君の手によつて築き上げられたのである。兩君共に村での資產家の息子さんであるが、金井君は父君がなくなつてから、今では一家の主人であり、年輩も山越君よりはずつと進んで居る。此の二君ともが哲學に就て非常に熱心の研究者であつて、金井君の熱心さとなると、長野縣內何處でも評判もの

は勿體無いからと言ふので、讀破したものはそつくり村の小學校へ持ち出されて居るが、（山越君もさうして居る。）其の分量は實に堂々たるものである。以前に自費出版せられた心身相關に關する哲學論文など見上げた見識を示して居られる。政界へでも出て居たなら、今頃乾度縣會議員や代議士になつて居るに相違無い、近鄕の人望を博して居るけれども、何處までも新らしい精神的の途を進んで居るのは賴もしい。山越君は金井君に兄事し、仕事は何でも兩君共に提携して遣り、其の交情は傍の見る目も美しい。やはり此の兩君が揃はなければ仕事は彼れ程に進んで行かないのである。

かうして私は始めて神川村を知つた。其の後今年の春も講義に行き、なほ此の秋も行く事になつて居るが、何時行つても實に氣持ちのよい村だ。先づ村の大略の事を書くならば、其の位置は信越線の上田驛と大屋驛との丁度中間ほどの處に當る。大屋驛は實は神川村の中に屬するのゝさうであるけれども、農民美術の施設のある大字國分は、何方の驛から行つても驛からは

一里許りある。汽車は丁度此の國分の高臺の下を通り、下には千曲川の流れがある。私は講義の無い時間には此の千曲川の川端へ獨りで下りて行つて、詩を考へたりして居た。私の敬愛して止まぬ島崎藤村氏の小品にもある通り、すばらしく自然の美しい處である。

神川村は全部で十部落から成立し、可成りに大きい村である。各區からは一名或は二名の村會議員を選出して村の自治機關を構成するが、此れは頭の古い連中で何の經綸も無い。村の改造はすべて青年達の手に爲されるのである。人口三千五百餘。(此の中國分區は戸數五四戸、人口二八三)此の近傍は長野縣でも蠶卵紙の本場であつて、金井、山越二君ともに家では熱心に養蠶をやり、今では兩君合同で蠶卵紙の合名會社を組織して居る。

2、農民美術

農民美術とはどんなものかといふに、第二回製作品展覽會に際しての報告書を見ると、次の樣に書いてある。

此處に、彩畫した菓子鉢、若くは彫刻を施した本箱があるとします、農民によつて、木材から一定の刳り物や指物にされた其物は農民手工品でありまして、吾々はそれらの個物を指して實材と申して居ります。處で其材を受取つてそれに適應した圖案を作り、更に描いたり彫つたりして裝飾化されたものが即ち農民美術なのであります。

神川村の近傍は、前申した如き養蠶地であるから、四月から九月にかけては非常の繁忙さを呈する。併し其の後の時期は所謂農閑時であつて、從來はたゞ無意味に費され、又は浪費されて居た。此の農閑時を利用して「趣味と利得の無理なく結びつく工藝美術品の製作に充てしめ、漸次日本全國の農民諸君の手中に、彼の有名な Peasant art in Russia よりも質、量、共に優れた產業美術の一大種族を拓殖しよう」と言ふのが、抑も農民美術の建業の目的なのである。

此の事業の計畫を始めたのは言ふまでもなく山本鼎氏であつて、其れには片上伸氏も與る處が多かつた。而して始終山本氏を助けて現在の如き作品を製作し出すまでに成らせたのは、教師側では山崎省三、村山桂次、(槐多氏の弟)杉村鼎介、柴田禎子の四君、青年側では金井、山越の二君などの犧牲的努力と(金

く此の言葉が山崎君等以下の諸氏に中つて居ると私は信ずる）練習所生の素朴なる熱心とが協力しての結果であると言はねばならない。

最初此の計畫が立てられて、露西亞の農民美術の標本を農民に見せた時には、誰れもかれも其の技巧の巧みさに驚いて、とても此んなものは製作する事が出來ないと言ひ合つたさうである。然るに我々すべての人間の中に、伸ばせば何程でも伸びる無限の能力が潜んで居るといふのが山本氏の信念であるが、果して其の信念は練習所の作品の上に表現せられた。木つぱ人形の刀法を見たものなどは、今は却つて其の器用さの前途に一種の危険をさへも感ずるであらう。農民自身も今ではかうした立派な作品が自分の手に出來るといふ事の神秘に驚然を感じて居るのである。

愈々農民美術の練習所を開くといふ決心がついたのは大正八年の十一月十八日頃の事であつた。十月二五日には愈々開所の式が開かれ、郡役所、村役場、學校などの職員が參列し山本氏から練習生へ彫刻刀の授與などをやつた。此の時の練習生は男子部七名女子部十三名であつて、翌九年三月三十一日まで、正味百日許りの練習をやり、木皿、木鉢、角盆、煙草箱などいふものを作つたが、特に注目の價値あつたのは、白樺卷、木片人形といふ此地の地方色を持つて獨創的に生み出された二種の藝術品であつた。工作品は全部で一四四三點あり、此れを東京の三越へ持出し即賣會を開き約八割を賣つて金額五百餘圓に上つた。此の第一年度の練習所計費は總額四千五百圓に達し、全部金井君が犠牲的に負擔した。

練習所の第二年度は九年十二月五日開所、やはり十年三月三十一日終業、工作品合計一九四〇點、練習所生は男子部七名、女子部十一名であつた。此れは長野、東京、大阪の三個所で一般に展覧せられた。日本農民美術練習所の建築も愈々近々には建設せられるといふ事であつて、此の事業は我國の農村文化に將來は非常によい模範を示してくれる事であらうと信ずるのである。

3、兒童自由畫

兒童自由畫の趣旨はもうすつかり知れ亘つて居るから此處に

書くまい。併し我國での第一回の兒童自由畫展覽會はやはり此の神川村の神川小學校で開催せられた事を記して置かねばならぬ。此の計畫を進めたものは、やはり山本鼎氏金井山越の兩君であつて、大正九年四月廿七八兩日、前記三名岡崎校長、岡村郡視學、組合學校七校長の發起の下に盛大に開催せられたのである。當日は東京からは片上伸、岸邊福雄兩氏報知新聞記者谷好夫君などが出席して講演をせられたりした、

同年七月には有志協議の下に「日本兒童自由畫協會」が創立せられた。第二回展覽會は南信濃の龍丘小學校で開催せられ、龍丘小學校は爾來此の運動の最も熱心な鬪士になつた。

4、自由大學

神川村での經營の事を書いて居ると際限が無い。與へられた紙數がもう盡きさうだからあとはずつと端折つて書く事にする。

十年二月には小縣哲學會が創立せられた。此れは丁度私が同地へ講義に行つて居た時である。九年秋の講義は國分の國分寺で四日間開講せられたが、其の續講は十年二月上田女學校でやはり四日間開講せられた。長野縣は人も知る如く、形而上的要求の非常に旺盛な處である。上田市の小學校の教職員などの熱心さとなると、とてもお話にならぬ猛烈なものだ。此の二月の講義に集まつた教職員農村青年（遠方から一日がかりで汽車で來るものさへある）蠶絲專門の學生などで小縣哲學會が組織せられた。英語の研究會や哲學の談話會を開いて居る。後には蠶絲專門學校内にも別に哲學研究會が成立した。非常の熱心さといはねばならない。

金井山越兩君は更ら此研究會を延長して、大學教育の一般化を目的とした自由大學を創設しようと計畫中である。農閑期六箇月許りの間に一講座一週間位の五六講座を開講し、主として文化哲學的及文化科學的研究をやらうといふのださうである。

演說樣式の改良といふ事も大事であるが、私は尙ほ地方講演の樣式も大いに改良せられなければならぬと思ふ。其の爲に此んな事を考へて居る。講義を大學式にベラ〳〵しやべるのでは何の役にも立たない。豫め研究する書物を一二種定め置き、其れを講習員は長い間研究して置いて、さて講習の日に其れの要

點を話すとか、其れの相互研究會を開くとかする。又講習員が平素讀んで居て疑問になつて居る點を講習前に講師へ書き送り置き、講習の時に其れの解答を話す。かうした新法を此の秋にはやつて、講習員の實力をつける事に骨を折つて行きたいと思つて居る。

5、靑年會

神川靑年會は大正二年三月に創立せられた。各區が單位を爲す聯合會である。文庫の經營と講演會開催とに骨を折つて居るが、其の購入する書物の名前を見ると、近來此等の靑年が他の村の靑年と精神内容上どれだけの相違を來さしめて居るか、一目瞭然たるものがある。

6、國分農事組合

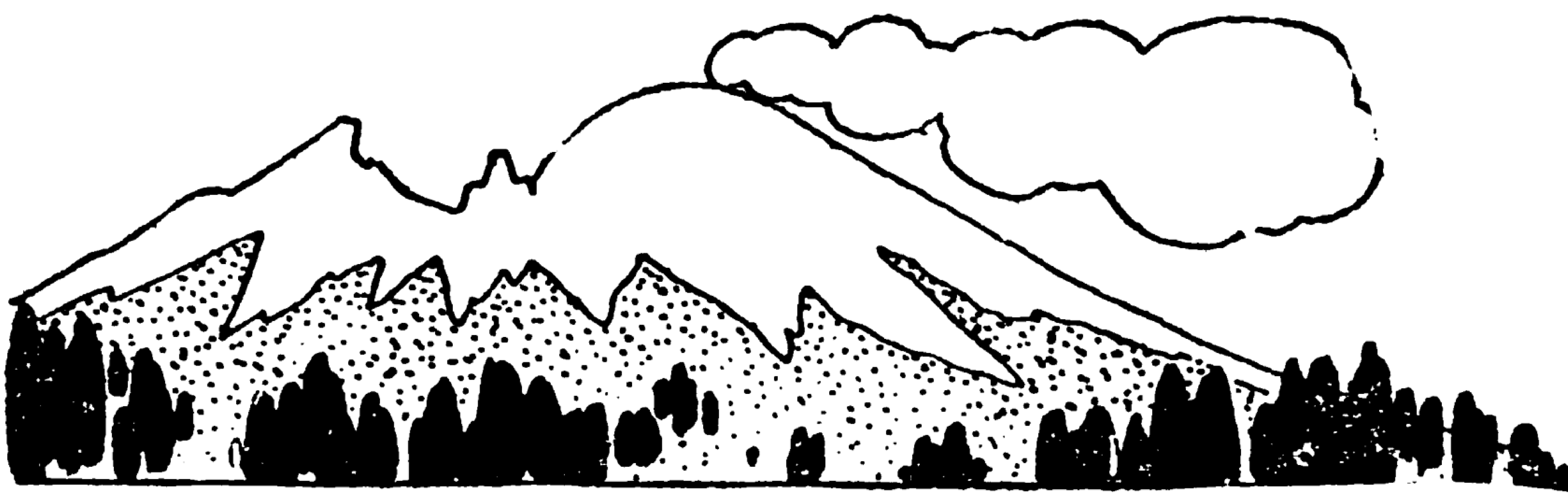
經濟的社會問題の解決に多大の暗示を與へるのは國分農事組合の組織である。此の組合はまだ十分完全に理想地に達しては居ないけれども、組合員諸君の熱心により、此の數年中に立派な成績を擧げるに相違無いものだと思つて居る。

組合員は山越荒太郎君金井・山越兩君其他すべて十一名の靑年である。此の地方は前述の如き養蠶地であるから、各戶の全力は養蠶業に傾倒せらせられて了ひ、其他の農業は自ら輕視せられる様になる。此れは非常に不利益な事であるから、農民が組合を組織し生產消費の全般の仕事を分擔し、すべての產業に均一の力を用ひ、勞働協力の意義を體驗すると同時に、從來よりも多くの收益を擧げようといふのである。其の成績がよいので諸方の組合から合併を申込まれるけれども、もつと自組合の組織が完備し、好成績を擧げるまでは合併をしない事にして居るさうである。

組合の仕事は生產係と消費係とに二分せられる。生產係は生產に關する一切の仕事、例へば共同苗代の經營管理、勞力の共同生產品共同賣却等の事を爲し、消費係は消費に關する一切仕事、例へば種子類の共同購入、肥料、藥品、農具、其他一切の日用品の共同購入等の事を爲す。例へば最近の寄合での決議といふものを見ると、一、稻作肥料の入用高調べ。二、共同消毒の入用高調べ。三、養蠶組合の設立。四、共同苗圃の設置。五、耕地面積。勞力に關して地圖の作製。六、脫穀器の購入決

定。などゝある。先般の決議により私は佐渡牛の購入の交渉を依頼せられたりした事があつた。生産に傭人を使用するので無く、すべてを組合員として生産者の自治支配により生産をするといふ方向に進んで居るのである。

以上私は神川村の施設の一班を紹介したが、其れの含む文化的意義は大いなるものだ。此れを擴大すれば何れも直ちに社會改造の方法になつて居るもの許りである。其等の事も述べたかつたのであるが、今其の餘裕は無い。最後に私は此村の農民が一層よい方向に進んで行く事と、全國の農村が此種の新らしい村を模して其の地方主義個性主義を發揮せられる事とを望んで已まない。





伊豆大島の桃源郷

有島生馬

昨今私の住んでゐる極樂寺の海岸から大島は眞正面にあたつてゐる。季節にもよるが、先づ三日に一度位の割で、水天髣の髴間に、三原山の噴火口を中心とする外輪山、愛宕、三峯、二子らしい山波がよく見える。

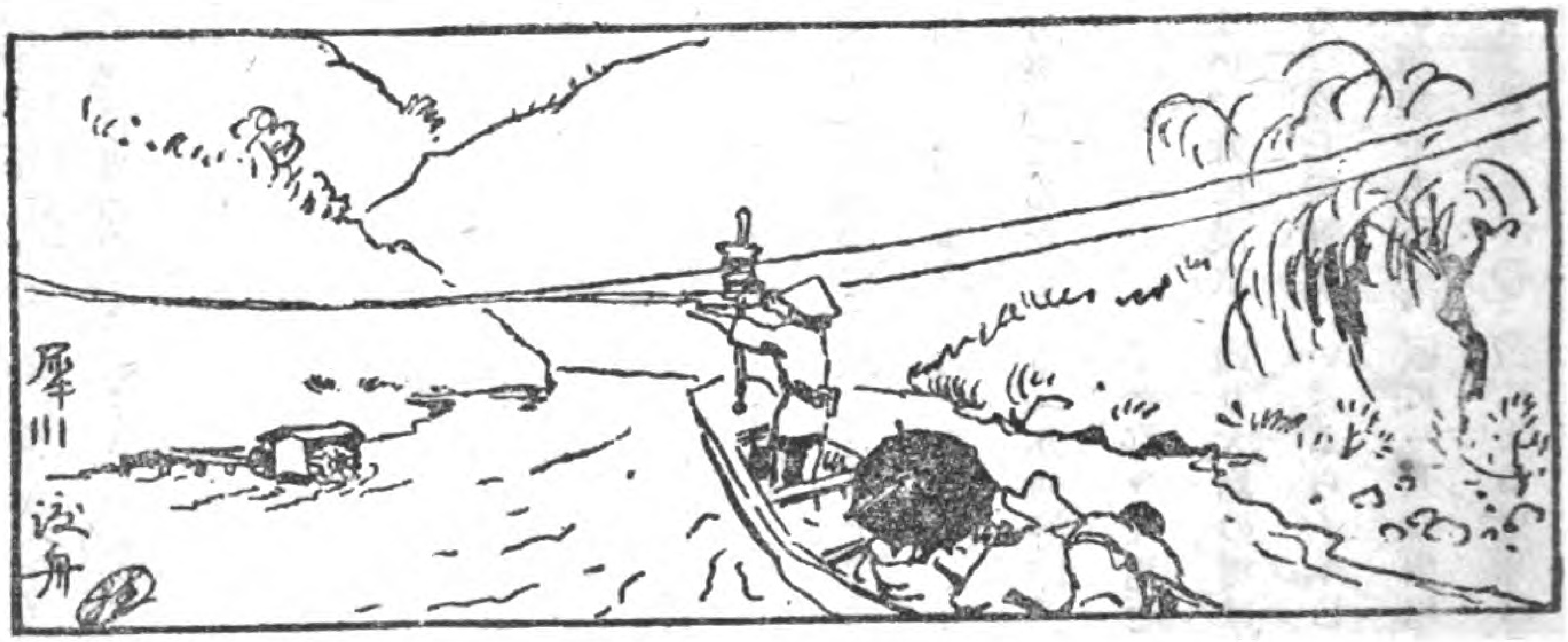
海上僅か五十浬位といふから、此近傍の漁士達は發動船に乘つて八九時間もあれば、所謂「御神火（ごじんか）」の仙郷に行つて終ふ。眞に一睡の間である。斷るまでもないが、この御神火といふのは島人の噴火を聖化して呼んでゐる俗言葉で、島に足を踏み入れると何かにつけて、古雅崇高なこの方言を、常に耳にする。吾々には「わたしや大島御神火育ち胸に煙は絶えやせぬ」の有名な大島節で久しく親しいものになつてゐるが、島人の口から此言葉を聞く時極めて懷かしい思ひがする。

大島の事情は色々な方面から、特に東京人に宣傳されてゐる。舊幕時代からそこのくさやの干物に江戸子の賞美したもの、椿炭、椿油の如きも物の質を吟味することに馴らされた通人からは珍重されてゐる。近頃ではバタアも十分食用に堪える良質のものを出すやうになつた。又一方文士畫家學生等の島へ遊ぶものが非常に多くなつたため、そこの特別な雰圍氣は誇張され五月蠅い位に傳へられてゐる。藤森君や中戸川君は小説にまで書いた。まして紀行などはどの位あるか知れない。私は一昨年の冬十日程行つて來た事がたつた一度ある切りだから、特にそれ等の上へつけ足して云ふべき何ものも持つてはゐない。

半日程前にも若い法學士の友が病後がてら島に行つてゐたが、私の泊つた事のある三原館から手紙を寄來して、

「大島は本統にいゝ處です。夕陽に對して類のない壯嚴の感を抱き、鬱追の青葉に對して去り難い愛着の念を起し、村のアンコ達の飾りも汚れも微塵もないのに對して尊敬したくなりました。勞働と健康とが今の私には限りない憧憬の的に思はれます。自分は大島に永住してもいゝとまで思ひました。……何がそんなにいゝのか自分にも結局分りませんが。」

こんな手紙を見ると大島が今更戀しくなる。同じ手紙の中に、「有島さんは後來る心算で荷物を置いて行かれたが、來られなくなつたといふ事で荷物は後に送り返しました、といふ宿の主人の話も面白いと思ひました。」といふ事なども書いてあつた。全くその通り、大島といふ處はさういふ處らしい。一度歸つてみると、思ひ出しながら再び出かけるのは仲々面倒になる。そこが離れ小島だ。そ



の容易に絕緣されやすい處に吾々の感じ得る或る無形の特色と價値とが可成り多く潛んでゐるのだらう。

大島の話は度々人から聞き、度々人の書いたもので見た。然し何んと云つても最初に然も最も深くこの興味を私に印象させたのは和田君に外ならなかつた。(之は個人的關係から許り云ふのではなく、大島の紹介者としては誰も同君の功績を認めねばなるまい。)「三原山」を畫いて白馬賞を得、「南風」を畫いて文展を驚かした三造君は、巴里に來ても絕えず大島の美を說いてゐた。實際和田君の識つてゐた二十年も前の大島は遙かに今日より興味あるものに相違なかつたらう。世界の都の巴里の街も、君にとつては渺たる相模洋の椿の木蔭の寂かさには及ぶべくもないやうに見えた。「早く日本に歸つて大島へ行きたい

な」とは優々君の漏らす嘆聲であつた。歎りでなく、少しサンティマンタルにさえなつてさう云つてゐた。もし後世界の紀念碑でも建てる場合にはその位置を乳ケ崎の斷崖の上にでも選んだらどうだらう。「乳ケ崎沖まで見送りませうか、それから先をば神だのみ」さう云つて老若男女の群は涙を流しつゝ數里の崖上を走り、和田君の歸船を見送つたといふのがこの乳ケ崎だ。そこは島の北端、海を距てて富嶽と相對し、潮流の最も急な鳳早燈臺の建つ岬りだ。

何んでも歸國すると直ぐ君は大島へ行つたが、そこには最早昔の面影は跡形もなくなつてゐたので、非常に失望して弱つて來たといふやうに記憶してゐる。之は勿論島の俗化した故もあらう、然し和田君のエキゾチツクな幻覺が幾分衰へてゐたせいもないことはなからう。

大島の自然は寧ろ單調で、貧弱の感を免かれない。殊に淡水の缺乏と火山灰の地層がその感を深くさせてゐる。然し夫等を補ふて餘りあるものは、その比ぶべきもののない氣象である。冬でも四五十度、夏でも平均九十度には達しない。この海洋の齎らす恩惠が様々なことに深く影響し、特殊な雰圍氣を作つてゐるのである。植物にも、人體にも、人事にも。

一例を云へば「あしたば」「たがや」などいふ青々した、いかにも甘さうな牧草が一年中繁茂する、ために大多數の島民は牛を飼ふ。それがために内地で見なれない様々な構圖が作られる。或る時は農家の裏庭に、或る時は山腹の野原に、或る時は搾乳場に、又或る時は暗い夜に、この靜かな目を以つた家畜と村人との組合が見られる。ゆるやかな鳴聲も至る所で聞く。一日二三斗以上の良乳を出す。（飲用としては殆ど無代價の有様であるが、バタア、煉乳原料、乳糖、カゼイン等が製せられてゐるから。）それによつて婦女子は楽々と獨立した生計を營む事が出來る（其他耕作、代木、運搬、有ゆる勞働に從つてゐるが。）又勝手に好きな男をも牛同様に飼つて置くことが出來る（御承知の通り大島の男は海上の仕事以外には殆ど何んにも手を出さない。ぶら／＼して女に喰はせて貰つてゐる。であるから昔は一家に一人の男以外は育てなかつたといふ事である。現今でも島[illegible]習による犯罪は全／＼[illegible]と絶たないでゐるといふ事だ。大島式[illegible]

兒制限法として敢て咎むべきものでないと思ふが、法律の統一主義は奈何ともし難い。又貞操觀念も內地人などとは違つて遙かに自由であり、文明的だといふ事である。從つて離婚などは重大事ではないらしい。甞つて基督敎の傳道者等が姦通の罪惡なる事を喧傳したために、忽ち人氣を失つたといふ話を聞いた事がある。）

牛の影響はまだある。吾々は純良な牛乳が飲めると同時に、甘い仔牛の肉を十分に供給される。その上東京のチヤリイ社からのパンに新鮮なバタアを添へて食ふことが出來る。先づ食物の有樣からいふと旅客は歐洲の田舍にゐるやうな心持がする。序に云つて置くが、現在この島は東京府に屬し、築地署の管轄の下にあるとかいふ事である。新聞も鎌倉大磯、熱海邊とは違つて市內版が屆く。



私にとつて一番興味の中心になるものは矢張り島民そのものであつた。言語、風俗、建築、習慣、生活、產業、社會組織、道德、宗敎、皆な一種の特色を備へてゐるやうであるから、仔細に觀察したらそれ〲一寸面白い點があるやうである。（どうせ大した事ではないが。）然し一々そんな事を云つてゐる閑がない。島民の體質と容貌、心狀と氣禀、これ等には一番驚かされた。體質は優良、容貌は端麗、心狀は健全、安定。氣禀は快活敢爲、勤勵を愛し、無道德であるけれど反道德ではない。こんな抽象的な言葉を並べたのでは何んにも傳へる事が出來ないが、餘白が、ないから仕方がない。兎も角彼等位樂園の住人に近い人間は他に澤山なからう。そうしてかゝる住民を持つてゐる事、それが大島の仙郷である最大な理由である。もし何年かの後にこの

ほど異つてゐるからである。私にはどうも原因がはつきり分らないやうな氣がしてゐた。處が島に行つた時、ある古老から次の樣な話を聞いて略ぼその原因が明かになつた樣に思へた。

[illegible]時代に甚だ妙な[illegible]る。この命令は幕府側から云へば島民に對する特殊な厚意的な保護など云ふよりも、一種の皮肉な政策に過ぎなかつたので

え、年一割以上の人口増加である。此有様では數年忽ち生存競爭は激甚になり、朴吶な島民は敗者幸福は全く內地人のために蹂躙され盡して終ふ

[illegible]

云ふ話だから、この桃源境の前途は知るべきのみで氣の毒千萬な狀態である。彼等は要するに行く〳〵

牲にされる外はない。

一夜各村長郵便局長など云ふ所謂島での有力者の會合が私のゐた隣室で催された事があつた。その人達の酒を飲んで騒ぐ無邪氣さの可愛らしいのに引替へ、その主張したり決議したりしてゐることは實に空恐ろしい事のみであつた。例へば一日も早く電話を通じさせねばならぬとか、乘合自動車を作らねばならぬとか、いふ類の事で、要するに資本主義侵略の前哨である。又村には化粧品とか、文房具とかいふ内地製の粗雜な贅澤品を賣る新らしい店がぽつ／＼出來かけてゐたが、皆な繁昌してゐた。アンコ等が祖先傳來の椿油を捨てゝ、えたいの知れない豚の油か何か香料入のものを用ひ、折角の長い美くしい髮を庇髮に結ふ時期が來るのも間もない事であらう。

然し全くこれと同樣な内容をもつた愚を吾々は東京の眞中銀座通りで行つてゐるのである。歐洲からの新歸朝者或は外人などの目にははつきりこの熱狂に近い輕擧盲動の何んであるかが見える。然しそれにはいつとなく忘れられるだけの欲望や要求が伴はれてゐるので、誰一人どうすることも出來ない。所謂大勢だと思つて諦める外ない。アンコが何等の價値もない化粧品で身を飾つて、半日かゝつて歩いた道を自動車で二三十分で飛ばして、それで幸福を感じてゐる間に、次第に周圍は彼女等を壓迫して來るやうになる。それは明瞭過ぎた結果である。今更ら大島許りをどうするといふ譯には行かぬが、目前にこの悲劇を見ると彼等のために一掬の涙なくして、内地人及び文明の狂暴を憎み呪はない譯には行かなくなる。

大島は、かく火山の上で孕みてゐる樂園だ。あの内地人と種を異にしてゐるかと思はれる程善良で、質朴で、優美で、豐麗な島民の將來は果たしてどうなる事であらうか。大島の島司を初め教育者、有力者も、徒らに表面的文化の形式や、物質的な民福の増進のみを思はないで、もつと本質的な個人の幸福、滿足とを謀つて、一種特別な自治的、平等的、協産的、無宗的、無道德的な舊制を保守し、大いに内地人及び内地の資本義を排斥して、永へにわが桃源境たらしめたいと思はないもか。既に然しもう時期が遲い樣である。文化の假面を被る奢侈惡趣味、及び椿油、薪炭、牛乳の賈占は根深く全島に行渡つ今や島民の致命傷にならんとしてゐる。寒心に堪えぬ次第だ。

（十年六月七日）

し

き兎も角それが實現せられて、今は日向の一角に、生活を地上

(村におろしてゐる。

——

宮崎縣の中央、西の山中によつて米良の莊がある、熊本縣の五家の莊に背後してゐる山奥で、そこに源を發し東に流れて日

[illegible]川が流れてゐる。その中流[illegible]

の土地がある。全く別天地の如ちな感じのする所で、獨立して如うなまとまりのいゝ土地である、そこが新しき村である。

湖水ときり思はれない、少しも川らしい感じがない。

が澤山ゐる。ことに秋になると實に澤山の鮎がとれ

人はそれを捕つて鰹節代りにする、鰻や鯉の大き

は驚く。冬になるとよく鶯鷥や鴉が飛んで來て

[illegible]

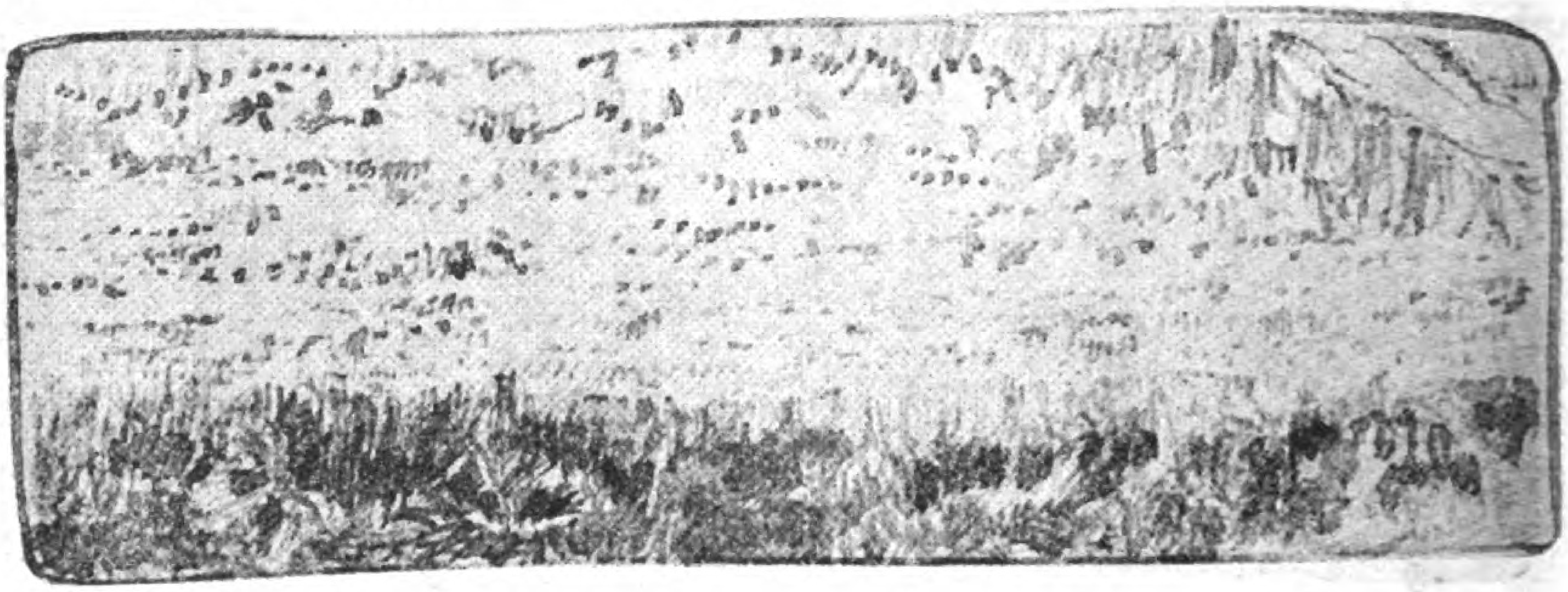
尾鈴山の餘波の峠を越えて、城を見下ろせばすぐ

見える。本當に村らしい感じがして、全く違つた氣持

新しい白い屋根、赤い道、ことにヂクザク形の道が、上の丘から下の川邊まで導かれてゐるので。

そして背後の雜木林がステキなタツチを表はしてゐるので、かくべつの深みを添へてゐる。その深みの山を鹿遊(かなすみ)山と云はれてゐる。その昔は鹿でも住んだらしく思はれる。

雜木林の大部は楠や、樫や、椎や、タブ等で、常に綠の繁みを保つてゐる、春の芽ふきはスバラシイもので實にゆたかな自然をあらはす、本土の中部以北に生れた私達には殊更にうれしいものとして印象される。秋が春來た如うな氣がする。その熱烈な嫩芽には實におどろかされて仕舞ふ。併し秋は燃える如うな色彩を見ることが出來ない。その代り豐富な果實が提供される、栗の多いと云つたらない、ことに大きいので嬉しくさせられる仕事の休み、「おやつ」頃からその繁みに入ると、二、三升位の栗はわけなく拾ふことが出來る。その他、柿とか梨とか葡子(あけび)とか總て野生の果實が多い。それから少し人工を加へると自由に椎茸を作ることが出來る。土地の人は多くの椎茸を栽培して生計の大部の資としてゐる。



麥口

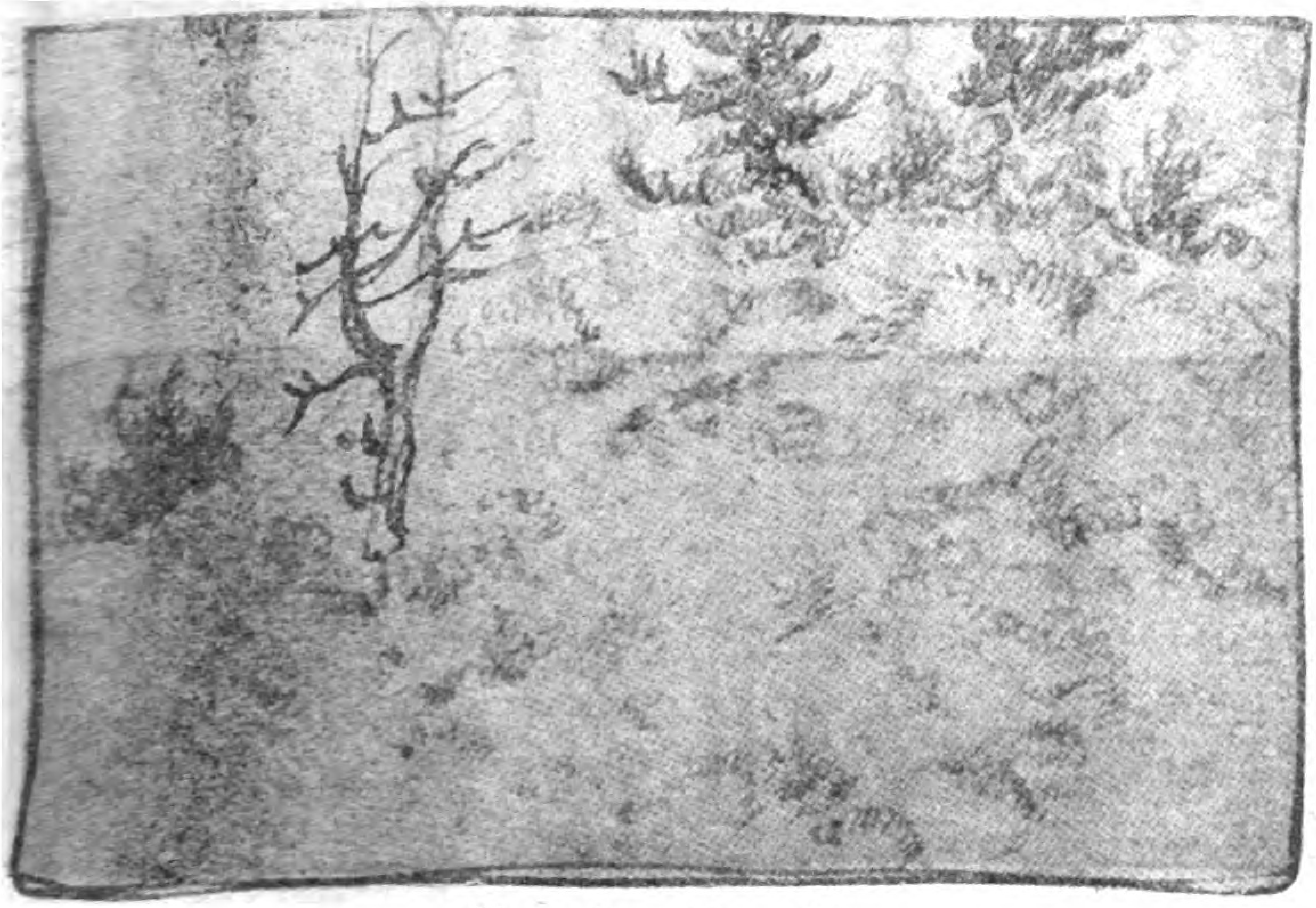
氣候は實に善いので暮すには本當にいゝ所である。たゞ雨量の多いことは一つの欠點ででもある。併し冬の永い地方に比較すれば、夏と春秋ときりないと言つてもいゝ位の地方だから、自然の中に生きるには持つてこいの所である。

此地を城と云ふのは無意味ではないのである。昔城があり、近くは西南戰爭當時この附近で戰つたらしい。で、村の土地に上の丘から下の段に通じる所に城門の跡と傳へられてゐるものが殘つてゐる。

こゝから西の山奥へ入つた所に『椎の木』といふ所があつて、

何でも平家の落人か何かの隠れたのであるとか云はれてゐる。兎も角地勢から見てもそうした人達の住み込んだらしい事がハツキリする所である。

村の對岸の部落を石河内と云つて、二三十戸の土着の人が住んでゐる、總ての生活は殆んど舊法を固守してゐるといふ風で、文化をよそに見て實に平氣に暮してゐる。米と甘藷とを穫つたり、椎茸を作つたり、鮎を捕つたり、冬になると部落中總出で野猪狩をして例の燒酎に前後を忘れて、實にのん氣に暮してゐる。



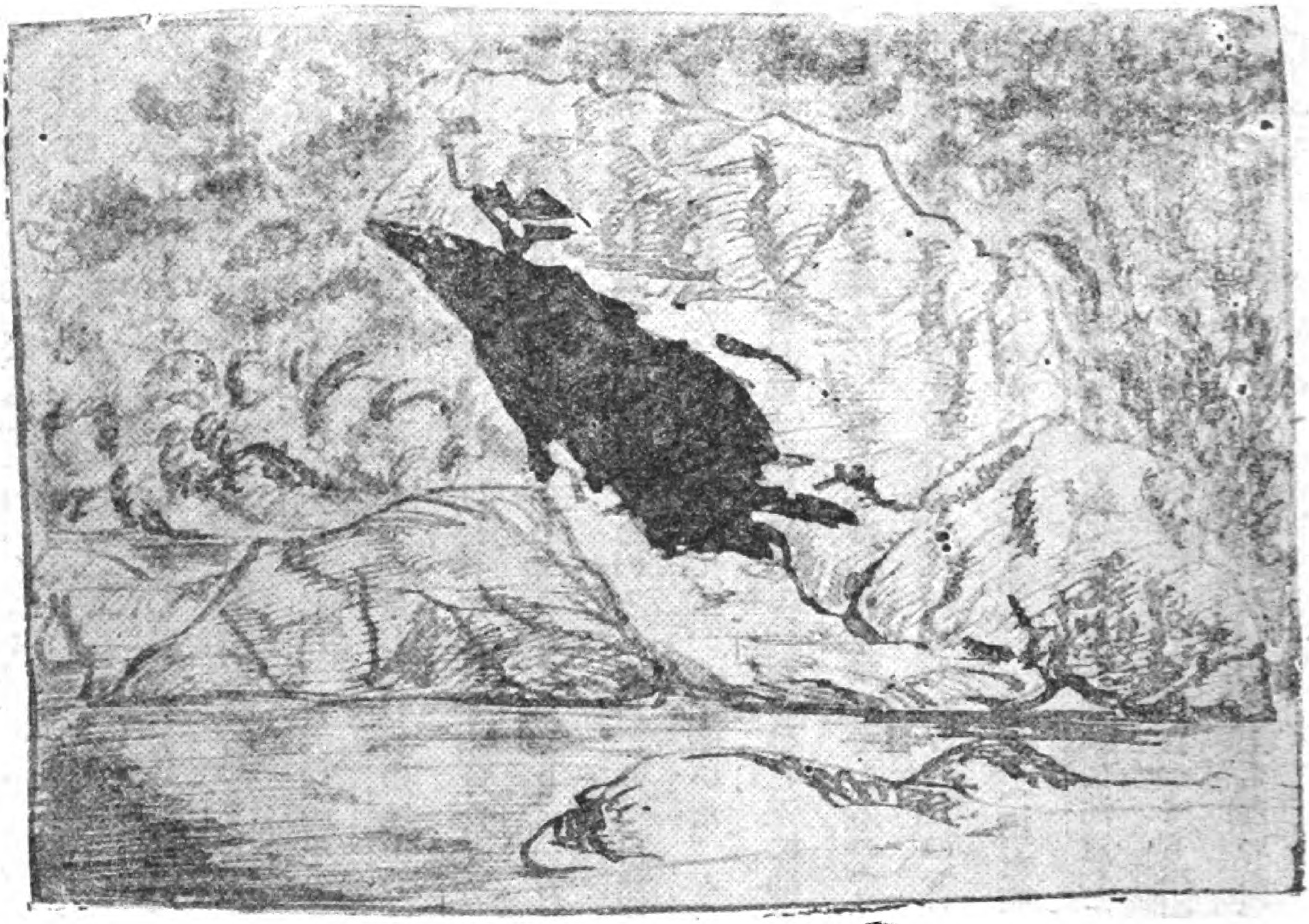
山の岩村

村の所有土地は七町歩程に過ぎない。その中の一町歩余は官有地を借地してゐるのだ、大部分は土地の人の所有だつたのを買ひ入れたのである。

□

大正七年の秋九月武者氏は我孫子を去つた。そしてその月の下旬に本郷の帝大基督教青年會館で最初の演説をした。それから濱松でやり、福井を廻つて信州路に入つた、長野で第三回の演説會を開いて、いよ／＼九州へ向つた。

私達は木曾路を通つて名古屋で木村藏太氏と一緒になつて京都に入つた。私達三人は京都の諸兄や大阪の兄弟の助けによつて三條の京都基督教青年會館で、自分達の視つめる道を宣べ傳へた。それから大阪、神戸の何れも基督教青年會館で盛んな演説を開いて西に向つた。神戸では酷く反對するものがあつて、



ロダン岩

壇上に立つた一人はとう〳〵中止しなければならなくさせられた。併しそれだけ私達の勇氣が出て、そのあとを受けて、その道を傳へた。

いよ〳〵本土を離れて九州の地を踏んだよろこびは實に大したものであつた。福岡で倉田百三氏に會つたり、その他二三の人に會つて引き返して豐後路から日向に入つた。

福岡では集りをするつもりはなかつたのに、そこの兄弟がすでに準備をしておいたので又しても演説をしなければならなかつた、否よろこんで仕た。この時は全く三人きりだので隨分緊張して三時間を三人でシヤベツた。

日向路に入つては延岡に一泊して直ぐ南へ向つた、霧島山麓がいゝと云ふので十月の中旬に小林町に足をとゞめた。それから土地を探しにかゝつた。十余日の後次第に中央に移つて今の土地に打つかつた。その間に同志も一人ふえ二人來して、いよいよ十一月の十四日に決定することになつた。その日は丁度ロダンの誕生日に當るので一同は實によろこんだ。そして村の土地の河岸にある大きな岩にその日を紀念すべく、ロダン岩と名

□

當時本部を東京におき、支部が全國の各地にあつたので、幾度か電報を打つて土地の決定されたのを喜び合つた。

村では、實に眞劒になつて勞働に服した。村の精神そのまゝの、互に愛し合つた喜び、分け合つた苦しみ、この地上では見られない純粹の生き方によつて共に伴に生活を續けた。

先づ家を建てなければならないのでそれにかゝり、一方又土地を生かさなければならないのでその方にもかゝり、自然に各自が得意の向きに進んで勞働に從つて、一心に働いた。ムキに働いたので誰でも一度は必ず病氣にかゝつた。併し互に助け合つてその苦しみに堪えた。町からは六里も離れてゐるので、日常品の準備等にも實に骨を折つた。冬にさしかゝつたので日は短かいし、隨分の苦しみがあつた。兄弟の一人が町へ出た夜は、きつと當番は起きてゐて夜食の冷えきらない樣に注意してゐた。疲勞が酷いので多くの兄弟は寢について仕まつても不氣で起きて待つてゐた。而かも村の土地に家が出來上らないので翌

の五月頃まで對岸の不消内にある家を借りてそこに雜居してゐたので隨分不自由の生活であつた。露天に風呂をたてゝ入つた。入るに先後の氣持惡るさもなく本當にうるはしく生活を續けた。

何しろ對岸に起き臥しして、城に渡つて仕事をするのだから隨分酷く無駄な骨折もしなければならなかつた。それに渡し場も不完全だつたので、一度一度に大きな聲で呼んでは、城から下りて來て舟を渡して貰はなければならなかつた。殊にこたゑたのはその日の當番であつた、二十幾人からの晝食と食器と湯なぞまで運ばなければならなかつたので。それから『お八ツ』には大抵甘藷をするので、それも大きなざるに入れて持つて行かなければならなかつた。それよりもちやんと時間に間に合ふやうにして、出來そこないの無い樣にしなければならないので、その點も隨分氣苦勞であつた。しかしそうした苦勞の事は尚進んでやる樣な傾向にさへなつてゐた。私たぞは三十を越してゐたのでその役だけは免じて貰つた。

仕事は時によつて色々別種の事があるけれども、炊事當番の

外に、建築掛り、畑掛り、薪掛り、家畜掛り、そんな掛りがある。その他會計をするとか、色々の官署との交渉とか、それから水路を作るとか、道路を作るとか、郵便を出すとか、寄附して來るものを注意するとか、實に色んなことをしなければならない。お茶の製造の時期にはお茶も作らなければならない。一寸のひまもない位だ。

併し月に三回五の日には休みとした。休みには畫をかく者も、散歩する



上の城の畑の一部

者も、文藝論で大氣焔を上げてゐるものやオルガンやヴァイオリンをいぢくつてゐる者や、釣りをする者、舟に遊んでゐる者、實に種々樣々の行動をしてその日を樂しく過した。

今では日曜毎に休む事になつてゐる。だから休みの日が樂し
たわけだ。夏になると晝休みの時間を永くとる。そして水泳
ぞに自慢のヌキ手を切る者もある。

年に四日のお祭りがある。村の紀念日の十一月十四日の
ンの誕生日、十二月二十五日のクリスマス、四月八日のお釋迦
樣の日、八月二十八日のトルストイの日、それらの日には少
は御馳走もしたり、集りをして樂しい日をおくる、テーブル
ピーチもある、よく劇なぞもやつた。或る時はチエホフの『
ツク』をやつた。それから武者氏の作『新浦島の夢』『二十
の耶蘇』もやつた。武者氏が耶蘇をした。可なりの出來ば
あつた。それからよく蓄音機をやる。殆んど寄附で、いゝ
ードがあるので、一日の勞働もきれいに洗ひ流されて仕舞ふ。これは唯一の救ひであつた。

村では外に社會的の慰安は今では何もないので。

病氣の人がある。その時には實に丁寧に見舞ふことになつてゐた。當時霧島温泉に入湯した者、福岡病院に入院した人、朝鮮に轉地した人等もあつた。私なぞもつい過勞の爲め肋膜炎を再發して仕舞つて、一家青島（あをしま）へ轉地した事もあつた。共にその苦しみを分つことになつてゐた。今は病人に對してはちがふらしい。

□

村に住んでゐる者には色々の人がある。主に學生が多いけれど始めの人達はそうでもなかつた。純百姓の人、會社員、教員、牧師の家にゐた人、電車の車庫にゐた人、宗教學生そんな人であつた。併し今はそれ等の人で殘つてゐる人は三人ばかりに過ぎない、全部は變つて仕まつた。

初めの頃は官憲は隨分きびしくて、出る人入る人のある度にその筋から色々の調査があつた、たまには憲兵隊からも私服位でやつて來た、そして別にそう大して調べるでもなかつた。人員や動靜を調べて去つた。

最初は村に入るとちやんと手續をしたものだ。要項を刷つたもが來てゐてそれに記入して出さなければならなかつた。づ、氏名年月日から始まつて、別名、族稱、住所、原籍、學歷職業、家族、兵役、宗教、崇拜人物、前科、入來の日、村に入る動機、等である。それに記入したものが亦ふるつてゐた。

ことに宗教といふところに、眞宗大谷派もあれば、「なし」と書いた書いてあるのに「有」と書いてあるのもある、「天理教と書いたどうか」とからかふ者もあつた。やつぱり基督教が多いのる。崇拜人物がまた面白い、孔子、スピーザ、ダーウヰン、ンカーン、保羅、釋迦、ヤソ、ミケランゼロ、ドストエフキー、ダンテ、ミレエ、ブレーク、ムンク、ルドン、ゴッホ、等出て來る、一切の宗教家を崇拜す、とか、乃木將軍とか人もある。多くの人を連ねてその終りに『尙數多あり』とつけしてある人もある。

併し當局では兵役、前科、村に入る動機なぞを余分知りたのであらう。

村に入る動機についても隨分色々の考があるので一寸注意ひくであらう。

□

村では初め多くの家畜を飼つた。馬、牛、山羊、鶏、兎、家鴨、犬、豚等、併しいよ〳〵豚が大きくなつた時に問題となつた。それは家畜掛りによつて提出された、豚は全く食ふきりに飼はれてゐないのに、村でこれを飼ふことは堪えられないといふのであつた。随分永いことそんな事を言つてゐたが、とう〳〵一頭は牛と換へ、一頭は他の兄弟によつて殺され食つて仕まつた、その後飼はずにゐたが今でも飼はないらしい。

□

村の生活費はわりにかけずにすんだ、三十幾人で毎月生活費だけは四百圓内外でやつてゐた、併し臨時費といふが中々かゝ



上の城から下への道

つた。それは、先づ建築費が主なもので、その他道路とか、水路とか、舟とか、旅行費が中々多くいつた。村に入る人、出人に出してやつたので。病人それにも随分支拂を要したので、これも臨時費の大きいもので
つた。つまり生活費以外のは皆臨時費として費消
た。月によると一千圓を越
た事もあつた、大體五百圓位
から七、八百圓ですんだ。

それらの收入は、先づ二
會員の寄附とそれから武者
の印税、原稿料、その他の
入であてゝゐた。併しどうても不足した月があつたので、志賀氏から借りた事もあつた。
京の曠野社からは毎月随分送金するので可なりの助となつた。
で、村では何とかして早く自活しなければならないことにつてゐる、自活出來るのは何年後であるか。

□

村で常にその道の宣傳につとめてゐる、宮崎縣でも數ヶ所で演說會を開いた、近く又熊本で演說會をした事を聞いた。武者氏が上京される度にその途中でよく開いた事もあつた。

それで全國には中々會員が多い、隨分な人數であらう、支部の數だけでも東京の印刷所まで數へて二十六ヶ所もある。實に大きな勢である。

□

村に入つた人、出た人、それは隨分なもので初めにも書いたが、最初の人で今殘つてゐるものは二三指を屈するに止まつてゐる、兎も角隨分出入りが多い、これには村を本當に知らなかつたものが多いだらうと思ふが、外にも原因はある事はあると思ふ。而し私はその事に立ち入つて言ひたくはない。次手に言はなければならない氣がして來た、自分はより自由なより罪悪を感じない生活を續けたい。そして、自分の常に要求してゐる生活により深く入りたい。その意味で村の精神をより深く地上におろしたい。み旨のまゝに生きたい。

□

一年中を通じて來訪者が中々多い、學生もあれば、あらゆる職業を通じて。宗教家もあれば若い人に老人に實に多くの人が集る。本當に考へてゐる人に、そうもないらしい人に、色々の人によつて訪問される。

よく學生が夏期休暇の幾日かをさいて、お手傳をして行く人もある。

支那の人で三人程たづねた、何れも熱心な新しい生活の熱愛者であつた。

□

村から約三里程離れた所に、第二の村を作つた、去年の四月そこに移り住んだが、事情があつて又第一の村に歸つて皆と一緒に力を合せることになつた。

兒湯郡川南村萱根といふ所がそれである。

□

今でもハツキリ印象されるのは、最初に私達の見つめる道について、演說をした時であつた。實に總ての人の心は純粹であつた恐ろしい位。それから第二種會員の集りにのぞんだ時であつた。多くの村の熱愛者に接した時であつた。

この事を考へるととてもたまらなくなる。

□

以上のこと。或る面をお傳へして筆を擱く。

（一九二一、六、五）



貧民窟の夏

賀川豊彦

△

夏はどうするかと仰しやるのですか？　夏は相變らず貧民窟ですよ。どんなにして送るかと云はれるのですか？　呑氣にして送るのですよ。どうせ避暑旅行する柄ぢやありませんしね。まア、そんな時には野狐禪の眞似でもして、心頭冷かなれば夏猶寒し位のことを云ふて居りましようかね。

△

夏は矢張り暑いですからね、僕だつて……七月十日頃から先は、貧民窟ではもう筆も採れませぬ、それこそ屋根が低くて蒸し暑くて、頭がジン〳〵して來て、目くらみが來て、すぐ疲勞が強くなりましてね、そこに寢轉ぶのですよ。

それで例年、私は私の誕生日の頃から筆を取らぬことにして居るのです、貧民窟に居る間は――。

それには、私に一ついやな聯想もあるのです。大正三年で
た私が『貧民心理の研究』を春の二月から長屋で書き續けて
ましたが、七月十二日に稿が了りますと、サアがつかりしま
てね、それから大抵の場合暑氣に敗け無い私もその夏は暑氣
敗けましてね、その後疲勞が激しくなつて、風呂からの歸り
道の上で卒倒したようなことがありました。『基督傳論爭史』
書き了へたのも春からかゝつて七月十日頃でしたが、私の誕
日が來るともう貧民窟は暑くて駄目なのです。それで稿を終
たくなつて、早く終了させたのはさせたのでした。そんな
七月十日か十二日頃になるともう貧民窟は暑くてとてもやり
れなくなるのです。

△

然しもう貧民窟生活も慣れて來ますと、呑氣なものです。夏は心氣一變する爲めに、いつも讀書の內容まで換へます哲學ものが自然科學ものに變り、歷史もの、旅行記自然紀行、山水美論などを讀んで一人で旅行した積で居るのです。

旅行せねば、旅行した氣になれぬ人は氣の毒なものです。私などは、旅行記を讀めば旅行した積りになつて一人で悦に這入れるのですから簡便なものです。だつて、旅行したくても、金は無いし、時は無いし、そんなに呑氣に人のやうにブラ〳〵やつて居られしませんからね。

△

夏は貧民窟の子供に取つては大事な時なのです。いつもであれば子供等は學校に行つ



て、貧民窟に居る時間が比較的少ないのですが、夏は休暇の爲めに朝から晩まで穢ない長屋や路次に居て、十一ケ月かゝつて作り上げた學校教育を僅か一ケ月の中に掻き壞して了ふのです。それで、貧民窟の子供の爲めには夏は是非とも一緒に居てあげて、お友達になつてあげなければならないのです。

△

その爲めには一緒に一日の山遊び、河遊び海岸の遊び、感化避暑と云つて、一週間位私のお友達の家に子供を預つて貰ふ運動をして色々と用事があります。今年は六甲山の麓に天幕を張つてみんなと遊びに行かうと云つて居ます。そして三日交代位にして貧民窟の子供を二三百人收容したいと思つて居ります。それには、私の友達が澤山援助してくれたので、仕事に少しも骨が折れませぬ。

△

こんなことをしない時は晝寢したり呑氣なことを書いたり、おしやべりしたり、將棊をさしたり色々と面白い遊びをして夏を送ります。呑氣に居ると、貧民窟の夏は少しも暑くはありませぬ。

殊に事務所と教會と治療所と食堂と寄宿舍とを一緒にした二階に十八疊の敷ける今の家に晝の間出て居ると摩耶山の方から冷しい風が吹いて來て、避暑なんかする必要は少しもありませぬ。

△

たゞ困るのは晩です。晩長屋に歸つて二疊の室に這入ると、晝の間燒け付いた屋根のほとぼりが室一杯になつて居て、とても辛棒出來ない程です。

結婚した當時にはあまり妻が可哀相でしたから散髮屋がよくして居るように襖を天井からつりさげて大きな團扇代りにしたのでしたがそれも効果がありませんでした。

然しそれより一番困るのは、何を云ふても南京虫です。

△

南京虫に打勝つことが出來る人なら貧民窟に辛抱は出來ます。

毎晩五十匹、六十匹と大豆粒ほどの大きさのある南京虫が床の周圍に押し寄せてくると大抵のものは一週間位で神經衰弱にかゝつて了ひます。

私は最始の年などは殆ど、之では發狂しはしないかと自分乍に心配したほどでした。その年には大阪の四貫島で工女が一人、南京虫の爲めに自殺したと云ふことを新聞で讀んだほどでした。

私は毎年南京虫に嚙まれるのがあまりに苦しいので、とうとう南京虫よけの『册』と云ふものをイエス團の信者に教へられて作りました。それは白布を以つて作り細い麻縄でそれをチンと張るようにしてあるもので四角を柱につるのです。幸にも私の室は二疊ですからよく吊れます。吊つたところを見ると、蓋の無い箱の中に這入つて寢るようなものです。然しそれはたゞの箱のような形のものでは無くて、南京虫が眞直に登つて來た

いようにへりが四五寸垂れて居るのです。南京虫はその垂れて居るへりをよく廻らないので、箱の中にはよう這入つて來ないのです。明治四十五年から私はそれを使用し初めましたが、それからは貧民窟の南京虫が怖くなくなりました。

然し蚊が居ります。それで箱の上に蚊帳を吊ります。つまり上と下とに吊るものがあつて重箱の中に寢るのです。たゞさへ暑いのに、二疊敷の重箱の中に這入つて寢る苦しさは一方ではありませぬ。

然し十二時過ぎると涼しくなりますからそれでも夜徹し苦しむよりましです。私達は先づそれで南京虫の禍より脫れて居るのですが近處の人こそお氣の毒です。近處の人は西洋式に寢臺を拵へ、その寢臺の四つの支柱は一々水の這入つた茶碗の中に立つようにして、南京虫が水に溺死するように工夫したり、或者は下水板の上に寢たり、或者は表の土の上に席を敷いて寢て居ります。

△

南京虫が苦しいものですから子供は決して早くは寢ません。夏に限つて不良少年が群團をなして暗い所に集合して野宿するのです。親もそれをよう咎め無いのです。それから段々取り返しのつかぬ不良少年になるものも隨分あります、それでそんな場合に親切に子供を監督して不良少年にならない前に親元に歸さすように私達は努力します。

△

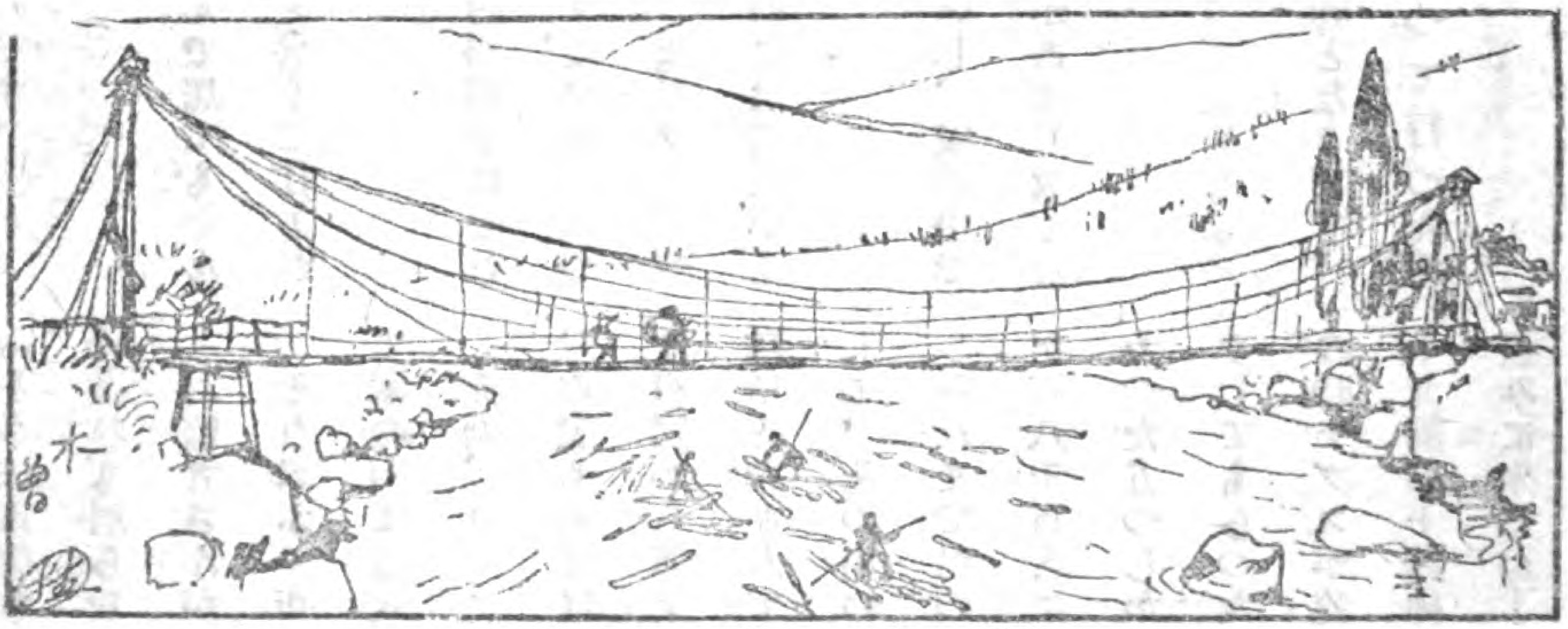
私は將棊をさゝないのですが——下手なものですから——夏だけは馬島ドクトルや敎會の青年達と一緒に將棊をさします。先づ勝つたことはそうありません。それでも夏は心理的避暑法として將棊をやるのも善いことです。神戸の店では店員が夏の夕、表に床几を取り出して將棊盤を取り出してやつて居ります。私はよくそれを立ちのぞきをします。呑氣で善いものです。私が立つて居ると、三人四人と人が立ち、五人十人、十五人と人が立ち、將棊の勝負の爲めに、冷かな社會に何とも云へぬ親睦が出來るものです。

△

臺撞もよくします。長くはしませんが、それでも時によ

ると、一時間以上することもあります。それは夜暑くて睡らないし、朝が早いものですから、晝の暑い時に眠つて夏の暑いのを忘れるのです私は元來あせりの方でしたが貧民窟に來て無理をすると、すぐ坐礁するので、決して無理をせず、呑氣にやつて居ります。呑氣になると、夏は涼しくなります。それでも勞働組合、消費組合、各種の講演、教會、日曜學校、無料診療所等の經營の仕事だけで充分夏の暑さを忘れる程の忙しさがあります。

去年の夏は支那に行きましたが、毎年夏になると日本アルプスに行きたいとか、岐阜の名和昆虫研究所に行つて「まつかれは」虫の研究をしたいとか考へて居ても、いつでも貧民窟の用事などに凡てが潰れて多分望み通りに日本アルプス山の横断も縦断も出來なくて一生濟むことかも知れませぬ。そんな時にはラスキンの近世畫家の第四卷でも引張り出して來て、ほんとのアルプスの山岳美論を地圖と引き較べて樂しんで居る位で辛棒して置きます。



△

訪問客が多いものですから、事務所の二階では晝寢が出來ないので、土間の上に武内君と僕とが板を張つて食堂代用にしてある、小さい一間に二間の板間に這入つて午睡をするのです。それは小さいベンチの上に――まるで芝居の『タイス』の中に出てでも來るかと思はれるような窮屈な方法で横になるのです。然し南京虫は居らぬし、蚤は居らないし、ベンチの上の午睡は誠に天下泰平なものです。

△

あんまり暑ければ電車に乗つて市内を驅け

△

神戸は山に近いし、海は近いし、貧民窟に住んで居てもそんなに困ることは無いのです。たゞ呑氣になれぬと暑くて仕方がありませぬ。

又二圓七十錢で古手屋から買ふて來た大きな肘掛椅子にそれより高い白い布片を張つて、疲れたらその中にすぽッと這入つて、午睡の一段、夕方かけては子供等と繩飛び、鬼ごッこ、隠れんぼ、角力――貧民窟の夏も呑氣になれるものには苦しいものではありませぬ。

貧しい人々も、夏だけは呑氣で着物はいら無いし、家の中で寢なくて善いし、仕事は比較的多くあるし、夏があまり暑くなくて傳染病が流行しなければ存外呑氣です。

△

然し傳染病が流行すると貧民窟の夏は恐怖の巷となります。

『巡査がお醫者さんと一緒にそつちの長屋に廻つて行つたぞ！』

は誰れも居らなくなるのです。

『お醫者さんが尻から何やら注射して廻つて居るんやとさ』

そう云ふて布れ廻るものがあると、みんなそれを、こわがつて家の内に這入ら無いのです。

赤痢、コレラ、チブスは長屋の次から次へと傳染して行く。私の家も去年は三人のチブス患者を出しました。私の家のものは裏隣から傳染して來たのだが、それと前後して私の近所で事務所と相並んで居る長屋の九軒の中五軒までがチブス患者を出して、その中の一人は倒れて了つたのでした。

それまで私の家には水道が無かつたのでしたが――貧民窟六ケ町八千百人に水道の活栓は……私が八釜敷く云ふまでは……たつた五つしか無かつたものです。それを私は最近更に五個殖やしてもらつたので現今は十個になつて居りますが、まだ五個の時チブスが流行したものですから、私はすぐ私の家の表に二十九圓五十錢拂つて共同栓をつけました。サア汲みに來るわ！汲みに來るわ！夏の眞盛には百八十軒からのものがそれを汲み

に來ました。私はその事情を話して水道料を割引して貰ひましたが、それでも三月目に支拂ふた水道料金が随分澤山に昇つたことがありました。

私は赤痢も、コレラも少しもこわくはありません。然しチブスには一寸と恐ろしい様な氣がします。それは何時とはなしにやつて來るものですから、うつかりして居るとみなやられて居るのです。去年私の宅に三人から患者を出したのはその爲めでした。

然し不思議にも私だけはやられません。大正七年から私のうちから五人のチブス患者を出しましたが、みなそれは預つた人々で私と妻はどんなわけか大丈夫なのです。然し五人からの患者を三年に渡つて出すとチブスは私達には禁物です。

△

それで傳染病さへなければ、貧民窟の夏は存外呑氣です。

（大正一〇・六・八）





新らしき村についての對話

武者小路實篤

A。君は新しき村に行つたさうだね

B。行つた。

A。どんな處だ。

B。山のなかの、すりばちの底のやうな處だ。三方川にかこまれて半島のやうな處だ。川美しいことは賞めてもいゝ。

A。汽車は何處でおりるのだ。

B。高鍋だ。

A。其處からどの位いあるのだ。

B。五里だ。

A。馬車でもゆくのかい。

B。二里あまりある高城と云ふ處までは馬車がある。それからあと三里近くは歩くのだ。

A。道はわるいかい。

B。荷馬車が通る道だからさうわるくない。しかし峠で自轉車では少し無理だ。新しき村の人も自轉車は高城においてゐる。

A。何人位ゐるのだ。

B。三十五六人ださうだ。

A。女は

B。皆で十一人ださうだ。その内三人は子供で、細君は五人だ さうだ。

A。不意に行つてもとめてもらへるのか。

B。室がないので駄目だつた。近くに粗末な宿がある。しかし村の人が一寸用があつて外出した時行つた人でとめてもらへ

た人もある。しかし今の處だめだらう。

A・村の仕事は有望だと思つたか。

B・さうだね。はつ切りしたことは云へない。まだ自活も出來てゐないし。住居も粗末だ。萬事まだあまりに未成品だ。しかし段々よくなつてゐるやうだ。皆の働いてゐるのは自由さうで見てゐると氣持がいゝ。しかし仕事の結果がどの位いあがつてゐるかは、一寸見た位いではわからない。

A・君は村へ住みたいとは思はなかつたか。

B・今の處、村に住むのは、妻子のある人間には一つの冒險だ。醫者は高城までゆかなければないのだから、急病人は困る、藥も氷も、滋養分も、五里はなれた所へゆかなければない。氷は宮崎までゆかなければないさうだ。學校もまだ出來てゐない。食ひものも勞働するもの丶食ひものとしては少しひどすぎる。身體が丈夫な時はそれもいゝだらうが、病氣の時は見ちめだと思ふ。



A・土地の人なんかどうしてゐるのだ。

B・醫者をよびにゆく時分は大概手おくれになるさうだ。それに滅多に來てくれないさうだ。馬をもつて三日三里の道をかよつて、向ふへ行つて泣いても來てもらへなかつた話を聞いた。相應の家でさへさうだ。尤も醫者が事實、足りないのだから仕方がない。

A・醫者が出來て、いろ／＼の設備が出來たら住む氣があるかい。

B・さうだね。あれで本當の町らしいものが出來たら、そして食ふ方の心配が本當になく、あの連中が考へてゐる通りに行つたら、住んで見るのも面白いね。實際、皆が親しくして、氣樂にくらし

てゐたら氣持がいゝだらうと思ふ、働いても見たが、あの連中と働くなら、働くのは氣持のいゝものだと思つたよ。尤も一日働いたらくたびれるだらうがね、何んだつて働くのは樂ではないだらうが、あの連中となら、働くのは當然な氣持で、平氣で、誰にも働くのを不思議に思はれずにすむから、氣樂に働ける。

A。あの世界には命令はないと云ふのは本當か。

B。それはないね。命令する資格のある人間も、命令されなければならない人間もゐない。何か働くことをさがしてやつてゐる。そして必要な仕事は有志の人がやつてゐる。中々よく働くには感心する。身體のわるい人は勝手をしてぶら／＼步いてゐるが誰もなんとも思つてはゐない。

A。君はあの生活が一番、正しいと思ふか。

B。あの生活で、萬事がうまくゆけば、あの生活が正しいと云ふことには反對する必要はないと思ふ。實際、衣食住の問題を義務勞働で解決して、天命を全ふするのに金のいらない世界が出來れば、僕はそれに反對する理由は見出さない。そして義務勞働と云ふものも、他人に命令されずに果せられゝばそれにこしたことはないと思ふ。たゞ義務勞働の實質がまだ村ではうまくいつてゐるとは云へない。また村の人は本當に新しき村らしい義務勞働を會得してゐない。換言するとま新しき村の一人前の勞働者になり切つてゐる人は少ない。と云ふ方が本當だらう。まだ新しき村らしい勞働の仕方を會得してゐない。よく働く人はある。義務勞働は八時間であが、よく働く人はあるが、それは今の百姓の人達の勞働の仕方以上に進んだ仕方ではない。文明の利器も利用されてはゐない。第一利用法をまだ心得てゐない。それから農業の智識も工業の智識も進んでゐない。たゞ協力の生活の心得だけは段々のみこんで來たらしいが、それも今の處いく分か呑み處がある。それだけにがつ／＼しないで、氣持はいゝあるが、規律がよく、時間が價値多く生かされてゐるとかない。しかし彼等の信ずる處ではそれも段々會得しつゝあるさうだ。しかしその點はまだ自分には信じられない。

A。それで、さう云ふ生活をすれば人類が救へると思つてゐ

のか、今の勞働問題がそれで解決が出來ると思つてゐるのか。

B．彼等の考へによると、全世界が新しき村のやうな生活をする迄は、合理的な世界が來たとは云へないと思つてゐるのだ。彼等の考へだとともかく一段でも、二段でもその土地を本當に有益に、生かすことを知つた人があつて、その通り生かせば、今迄の生かし方よりずつと利益が上がると云ふことがわかれば、默つてゐても、その人の土地の生かし方を段々眞似しだす人が出來て、ついにはその方法が全世界にひろまる、ひろまる方が自然で、ひろまらない方が不自然だと云ふのだ。一人の人がどんな片田舍で發明したものでも、それが人類に役立つ發明ならば、全世界にそれがひろまると云ふのだ。だから彼等は、人類はこう云ふ風に生活するのが一番合理的で、一番幸福で、一番進歩的であると云ふ生活を發見して、それを實行することが出來れば、必ずその生活は全世界にひろまると云ふのだ。一個の人間はかく生るのが本當である。そして人間はかく協力するのが本當であると云ふことを、本當に知り、その通り生れば、それは世界的にならない方がむづかしいと云ふのだ。

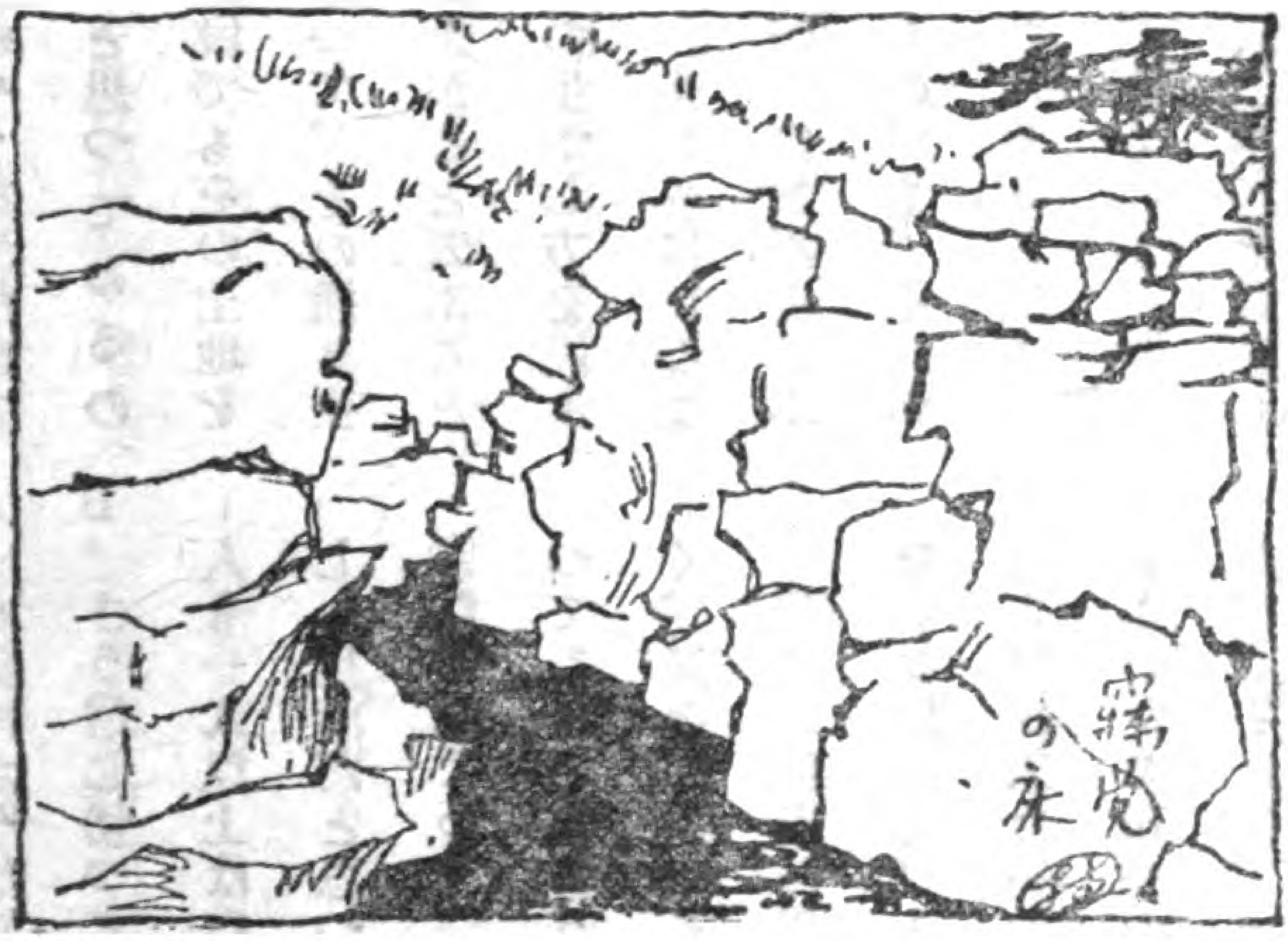
A．本當にさう信じてゐるのか。

B．さう信じ切つて居ない人もあるだらうが、さう信じてゐる人も一人以上はゐる。更に村の生活が今の世に出來る一番正しい生活だと思つてゐる人は多い。少くもこの村でのみ、勞働は神聖であり、義務を果すことが出來ることは事實だと思つてゐるであらう。其處では働くことは資本家の爲ではなく、又金の爲でも、利己心や、慾のためでもない。兄弟姉妹の爲に又自己の爲、村の爲になすべきことをなすのに他ならないのだから。人間と人間との關係においては之より正しいことは出來ないのだ。之は誰でもが認めなければならない思ふ。たゞ現在の新しき村に自分たちがあきたりない處があれば、それは、まだ新しき村の人間が、まだ新しき村の生活に入る力のないことだ。まだ衣食住の問題が解決されてゐない。勞働の方法が幼稚である。生活の仕方も幼稚である。個性を生かす方法がまだまだ具つてゐない。病人の手あてがゆきと

ゞかない。そして村に入れる人間に制限がありすぎる。

A。しかしあの連中は自分達で理想的な世界がつくれると思つてゐるのだらう。

B。自分達だけで出來るとは思つてはゐないらしい。さう云ふ實際的な方面ではあらゆる人から救はれることは救はつて、そして自分達の實力と日常生活で生かせるだけ生かし、その上、段々加はつてゆく力でだん／＼新しき村を新しき村らしくしたく思つてゐるらしい。何處まで出來るかは當人達も知らないらしい。たゞ出來るだけ目的に向つてつとめながらあとは天命に待つつもりらしい。龍になければ雲をよぶとか、歯醫者には歯のわるい人があつまるが、正しい社會には正しい人が集ると彼等は信じてゐる。彼等の仕事は一方、正しい生活、獨立した人間の生る道を知らすことになると共に、その生活を協力して築いてゆかう、築きながら、研究し、傳道もし、救も乞はうと云ふのだ。自分は外見には失望したが、内に動いてゐる精神は贊成してゐる。



彼等の信じるやうに、結果は早くくるか、おそく來るか知れない。しかし彼等の仕事は、生長する可能性はもつてゐる。いろ／＼の人の力さへ加はれば、たしかに面白いものが出來ると云ふことを信じる一人だ。自分は新しき村の仕事が、何處まで成長するか知らないが、正しい人間の生活を本當に知らうとするものにはあゝ云ふ生活を自ら始めて見るのも面白いと思つてゐる。

A。君は新しき村の會員だつたね。

B。ああ。

A。それなら僕は聞くけど、あの仲間は宗教的な運動をしやう

と思つてゐるのか、經濟的の運動をしやうと思つてゐるのか。

B。兩方だと思ふ。正しい生活をすることは神も人もよしと見る生活でなければならない、之以上正しい生活の仕方はない。神に愛される生活の仕方はないと云ふのが彼等の信仰なのだ。しかし一方、新しき村は衣食住の問題、壽命の問題を解決しやうと云ふ點で經濟問題と一致してゐる。厭制と、命令を嫌つてゐる點以外では、その問題の解決については、社會主義の理想、世界同胞主義の理想とちがいはないであらう。たゞその解決を眞理の力と、自己の內心の要求の力で與へやうと思つてゐるので、他人を強制せず、他人に强制されず又政府の力をかりずに個人の自由意志でやらうと云ふのだ。

A。つまり獨善主義なのだね。

B。先づ自己から生かさう。自己を人類の意志に叶ふやうに生かさうと云ふのだ。自己を正しく生かし、他人も正しく生かす、道を歩く主義が獨善主義ならさうも云へやう。しかし他人に支配されず、その他の影響をうけず、正しく自己を生かせる唯一の道を步くのに他に道がないと彼等、僕達と云つてもいゝ、は思つてゐる、他人が改心しなければとか、他人をやつけなければとか、何十萬の人の努力がなければとか、云ふ口實は彼等には許されないのだ。自分を正しく生かさうと思へるものは生かせる、ことを個人が知ることが出來るのはよろこびではないだらうか。元より道はいろ／＼あるだらう。しかしつまりは虫のいゝ人間がなくなつて、個人のなすべき隣人への義務を果し、その上に自己に托された自我を生かしぬく人がうへることによつて、人類は健全に生きられるのだ。制度をなほして個人をなほさうと云ふのも、個人を生かして制度を自づとかへやうと云ふのも、つまりは同じである。そしてたしかさから云つたら、どつちがたしかと君は思ふね。少くも個人によつてはね。大なる荒野をたがやすには、それをたがやす人間が必要だ。その人間がよろこんで働かうが、いや／＼働くものを一人でもふやすことを無意味とは思ふまい。正しい國を來させる爲には、正しき生活を愛す

るものが必要だ。正しき生活を愛することを知らないものは、い。

B。さうかね。しかし正しく生る人間が一人でもふへ、そして正しく人間が生活する方法を研究されることは無意味ではあるまい。

A。僕は彼等が資本制度を、少くもブルジョアを、プロレタリアートよりも愛してゐることを知つてゐる。

B。彼等はかう云ふだらうよ。人類の意志を尊敬し、すべての人に同じく正しく生ることを望み、そして正しき國のくることをのぞむものゝ味方だと。そして人間はすべて愛すと。

A。さうだ、貴族も金持も愛すると。

B。新しき村の生活には、貴族も金持も勞働者もない。人間としての價値だけ切りないことは僕は今の村で既に認める。の點だけは反對は出來ない。

A。今に尾を出すだらうよ。

B。僕は今に眞價を發揮してくれると思つてゐる。

A。よし、それなら賭をしやう。

B。してもいゝ。まけるとは思へないから。(一一、六、四)

正しい國を、不正な國に變へる力のあることを我々は心配していゝと思ふ。新しき村のやうなゆき方をするものを嫌つて、口だけで偉さうなことを云つて、道樂したり、のらくらしたり、不秩序な生活に誇りを感じたりしてゐる人間を、僕は正しい國の來ることも本心から望でゐる人間とは思へない。

A。君は資本家に飼はれた道德家のやうなことを云ふね。

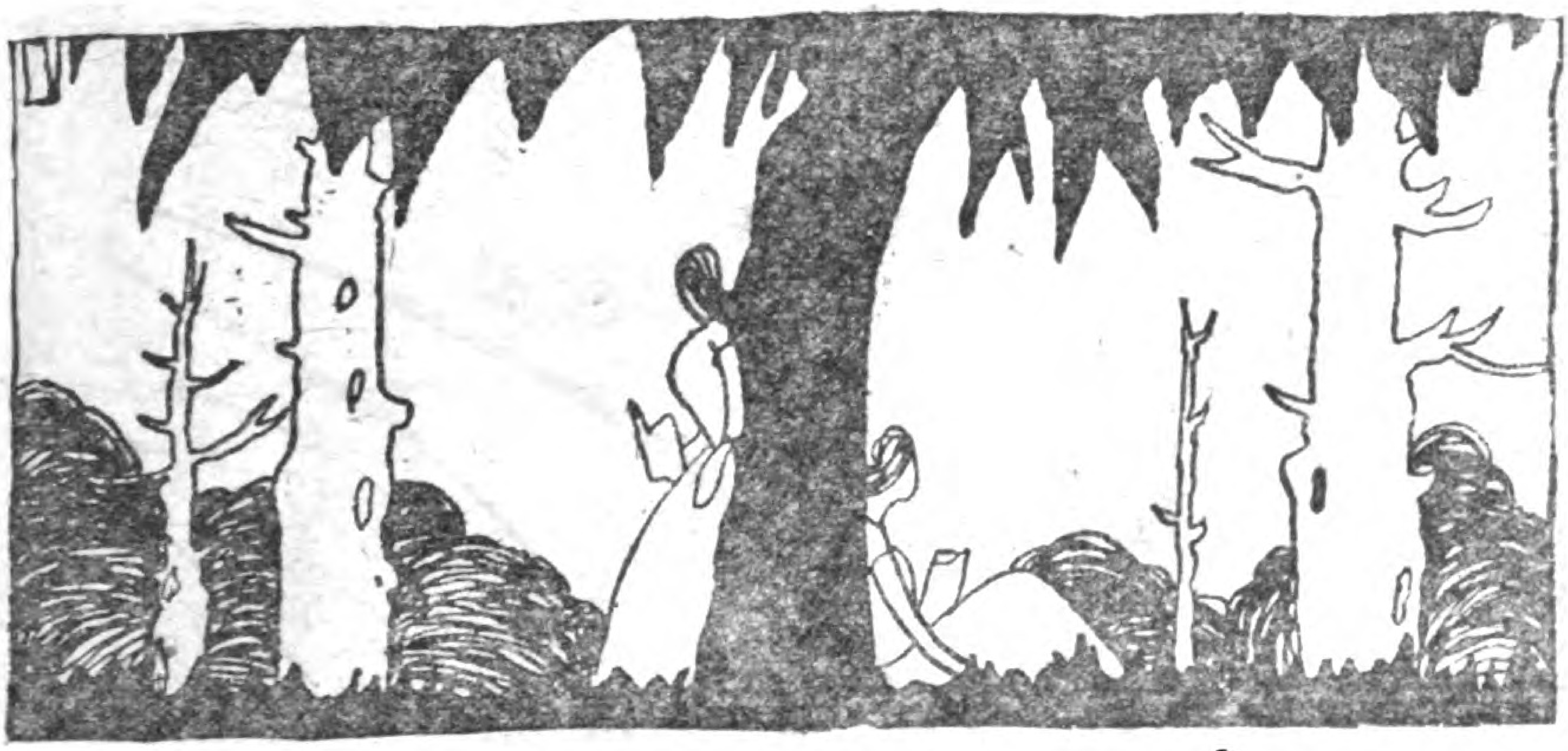
B。さう君は本當に思ふかね。正しい生活、誰をか働く、義務勞働を自ら進んでする生活、そして自分の財產を捨ることを目的としてゐる生活をしやうとする事は資本家讚美になるかね。人間に正しく生きろと云ふものは資本家の飼ひ犬かね。

A。しかし暴力に反對するのだらう。これはつまり資本家の暴力を是認することになる。

B。さうかね。妙だね。暴力を是認しないことは兩方を是認しないことになるにしても、一方を是認したことにはならないだらう。

A。しかし平賀君達の考へ通りだと。資本制度をつぶす力はな


草山の風
百穂生



變つた避暑地



日月潭に遊ぶの記

佐藤春夫

　去年一夏を臺灣で暮した私は、九月の二十五日ごろであつたらう——手帳を見れば直ぐわかるが、面倒だからいい加減でよならう——兎に角、その頃に日月潭に遊んだ。九月の末と言つても臺灣だから初秋と思つてはいけない。山地ならば兎も角も、平地ではこの頃もやはり眞夏なのだ。阿里山へ登らうと思つたのに、その十日ほど前に、全臺灣を舐して一過した大暴風雨で、登山の鐵道は全く通じなくなつてゐた。徒歩ででもと思つたがそれは至難の事だといふので斷念した。さうして日月潭はどうだらうと案じながら、二八水といふ停車場へ下りた。朝の十時ごろだつた。誰も道づれはなかつた。

　二八水から某砂糖會社の私線鐵道がある。それに乘つたところが、案の定、濁水溪が氾濫して川に沿うた線路が洗はれて仕舞つたとのことで二十町ばかり歩かされて、また汽車を乘り繼いだ。汽車のなかで乘り合した一人の人が話しかけて、私を內地から來た人だらう、日月潭へ行くのだらう——さう言ひ當てて、いろいろ道順などを教へてくれた。今日中に日月潭の水社まで行き着けるものと考へてゐたのに、途中で一泊しなければいけないとのことである。何とかといふ停車場——手帳を見なければ忘れてゐる——へ下りて、ここから日月潭を蓄水池にする有名な臺灣電力會社の臺車——內地のトロである、臺灣ではそれで人間を運ぶ——で集々街まで行くのである。今日はそこで一泊しなければなるまいといふ。

　私は故あつて——民政長官下村宏氏は歌人である、それ故我々文人を過分に遇してくれたのに因る——この地方では、それ

故、私はその電力會社の客分として案内して貰へることになつてゐた。小さな汽車が、その或る小さな停車場へ着くと、一人の若い紳士が私を待つてゐてくれた。それから籐の腰掛けに日覆のある特別仕立の臺車を用意してくれた。途中で向ふから來る臺車が私の臺車を呼び留めて、またもうひとり中年の紳士が、この人も私を出迎へに來てくれたのであつた。こんなに丁重に扱はれては擽たい氣がしてならないが、氣取らずに言ふとさういやな氣持ちでもない。

その夜は、汽車のなかで聞いたとほり集々街に泊ることになつた。――集々に着いたのは午後の二時ごろなのだが、これからさきは例の暴風雨で臺車の線路がさんざんにこわされてゐる。どうせこれから歩いて行つても日のうちに日月潭の水社までは行き着けはしないし、ここで泊るより仕方がないからである。宿は何れ田舍宿であつたが、うしろに川が見下されて涼しいので何よりであつた。

その夜は例のひる間私を迎へに來てくれた年とつた方の紳士が、大きな圖面をもつて訪ねてくれて電力會社の工事事業の大要を話してくれたりした。それから明日の行程のために駕を用意してくれたといふのである。三里か四里たらずなら歩くといふのに無理に用意してくれたのである。何でも、ここから水社へ出るには新舊二つの道があるが、新道の方が平坦な代りには一里何町とか遠い。駕かきは坂は急でも古い道を行きたいといふが我慢をしてくれるかと言ふ。勿論どつちだつて都合のいい方がいいのである。床を延べさせて疲れた體を横にしたが、何ごころなく隣室の高話を聞くと、愕いたことには、生蕃が蜂起して霧社の日本人は全滅したといふ噂である。霧社といふのは、日月潭の見物を終つてからの私の行く先きなのである。是非蕃界をも見て置きたいし、新高といふ高山へも行きたいのだが、その地方の蕃界の都會であり、また新高山への登り口である霧社が果して噂のとほりなら、さきに阿里山の森林を見そこねた私の旅行はここにまた一つ大障害を生じたことになる、

次の日の朝は、早朝に出立した。私に用意してくれたのは所謂椅子駕といふ駕ださうである。言はば足の無い背中と肘かけ

ば、普通の輿といふ奴では、斜な坂は登れないのだといふ事であつた。あまり輿などに乗る人がないと見えて、集々の町を出る間に皆が氣をつけて私を見た。二人の輿かきの苦力ともう一人、彼等の一人が疲れた時に代る苦力と、それに昨日から私を案内してくれる中年の紳士——この會社のこの工事區域の監督ださうだが——と、別に皆の辨當とお茶とを持つた若い工夫が一人。私はこんな大勢のお供に從かれて、大分得意であつたとお思ひなさい。一行は濁水渓を流れの岸に沿うた道によつて遡つて行つた。ところどころ先日の増水によつて崖くづれがしてゐる。そんな崖くづれの一つを下りて川原へ出たが、若い工夫は間接に私に注意してくれるつもりで監督に[illegible]

るなあ」——若い工夫は背後の方をひとりごとのやうに言ひ

した。この工夫はまだ二十ぐらゐだらう。監督の方は台灣へ來て半年ぐらゐにしかならないとかで、無論、阿里山は知らなさうだ。途中で第何區事務所といふところで輿を下りて休と、そこには水社にある事務所の監督がわざわざ迎へに來てれてゐた。やはり中年を過ぎた人であるこれからさきはこのが案内してくれるといふ。

私の輿はそろそろ坂道にかかつた。この坂道は登一里半ゐあるさうだ。さうしてところどころ可なり急で、坂道のに作られた椅子輿でも閉口する場所がある。しかし何時の間かこの輿に乗る呼吸がのみ込めて來た。水社から來てくれた

督は話のすきな人らしかつた。「化及蠻貊」といふ字を刻んだ石を見て來たか、それは殘念をした。私がゐたら敎へて上げたのに。いや、新高の見える川原まで來ないところの路ばたにあるので、巨きな石です――幅が一丈ぐらゐ高さが五尺ぐらゐでせう。光緒十三年に建てたのだとあります。そのころまではあの傍まで蕃地だつたのでせう。溫柔な口調でこの人はたへず何か言ひかけてくれる。この邊の道はやはり蕃人が出沒した時代に出來た道なので、わざと高いところ高いところと道をつけてあります。え、蕃人の襲擊にそなへたのです。展望が利くやうにです。だから坂は急になるし、近道でも展望のないところは通らないのでこんな道が出來たのです。こんな事も敎へてくれる。この人は台灣にもう二十年以上もゐると言つた、それに所謂趣味の人と見えて名蹟のことやら山川のことやら或は道ばたの草木のことやらさまざまなことをよく答へてくれた。我々の今登る山は土地公鞍嶺といふ山であつた。海拔二千五百尺だと言ふ。鞍部には土地公廟といふ小さな廟がある。我々はこの廟のそばの木かげで辨當をとつたが、時計を見るときつちり十二時だつた。今、手もとにある台灣名勝舊蹟誌を開いて見ると「土地公鞍嶺眺望」と題して「南投街集々の南約三里十一丁の所にあり。乾隆の初年小徑始めて開き未だ山名あらざりしが、道光十五年、鞍上に土地公廟を建て、始めて土地公鞍嶺と名く。光緒八年、吳光亮此の險を削り、大道を開き、埔里社に通ず云々」とある。さうして光緒十三年には殆んどすつかりこの地方の蕃害は無くなつたものであらうか。言ひなほせば蕃人達は乾隆から光緒までの百二十五年ほどの間に、ぼつぼつ支那人のためにこのあたりを逐はれたのである。

霧社の蕃人のことを辨當を食べながら尋ねたら、何でも霧社の奥の方で蕃情が不穩だといふことであるが、霧社の日本人が皆殺されたなどといふことは無からう。しかし今、霧社や新高へ行けるかどうかは、埔里社まで行つて見なければわからないと言ふことであつた。

道は下り坂になつて日月潭は想像したよりも近かつた。だんだんとあたりの具合が低く水に近い氣持になつてやがて水の一隅が見え出したのは二時ごろであつた。第一瞥に見たのは所謂

拔一千五百尺の山上周圍四里に餘れる大湖あり　水深平均一丈五尺、常に紺碧を作して池底、蛟龍の潜むかと疑はる」といふ文字にだまされて、何となく雄大な清澄境地を考へてゐたのであつた。しかし、私の目にうつる日月潭は周圍四里に餘る山上の大湖ではなく、ただ馬鹿に大きな沼である。ここは噴火口のあとでもなく、どうして出來た窪地なのだか不明だと地質學者は言ふさうである。湖齢はたしかにもう一萬五千以年上に達してゐて、もう頽齢に近い。今から二千年もたてば自然と涸死するだらう、とも言はれてゐるさうな。それ等のことは素より我々の知るところではない。ただ見る、ところどころに、その上に家を構へた竹筏があつて、八疊敷いや十二疊[illegible]

さうして何となく佗しい景色である[illegible]日本人の詩[illegible]さ、俳句のやうな佗しさとは何となく自づと違ふ。氣のせいかやはり雄大なところのあるへんな佗しさだ。私は無學でいい例は知らないが、何だか杜甫あたりの詩情の或るものにはこんな佗しさがありはしないか。沈着なそれでゐてどうにも爲し難い鬱憂を發散するやうな美しさ。高貴な人が平然としてうらぶれてゐるやうな佗しさ。父祖傳來の大きな吾が家の軒端が傾いゐるやうなうす汚さ。なつかしさ。この深い山と遠く廣[illegible]た水との自然、そのなかにある人間の營み、そんなもの[illegible]は前に述べたやうな幻影を呼び起すことが出來た。それが私[illegible]なかなかに厭ではなかつた。さうしてこれらの自然がや[illegible]

電力會社の工事によつてここ數年のうちに面目を一新するであらうことが――たとひその時にどんな新らしい別の美しさを生ずるにしても、やはり今日の自然でないであらう事が私の感傷癖をそそるのである。……こんなことを思ひながら、小さな木の橋、水社橋といふのを渡つた。少し丘になつたところを登つて行くと、私の駕は下ろされた。

宿の二階から見ると――樓に登つて欄に寄るといひ度いところだが――大山連嶺が眞正面に突立つてその足もとに、日の光を浮べた水が瀰乎としてゐる。古人の所謂水社八景なるものの「山水洪秀」は一目で見わたすことが出來る。この洪秀のなかにある一味の幽暗を表はさうとでもするかのやうに、雲の影が、山の中腹から水の面へ忍びやかに下りて來て、水の面を包まうとしてゐる。どこか後の方で潺湲と水の流れる音がしてゐる。この宿は、水社で唯一の宿屋であるが、なかなかいゝ場所を擇んで建てゝある。聞けば、數年前、臺灣勸業共進會のあつた時、この景色を紹介しやうとお客をここへ招待するために總督府で建てた建物が、今はそのまゝ宿屋になつてゐるのださうだ。成程、急拵への必要上、手を省いたやうなところにカテージ風な雅致があつていい。

一風呂浴びて出てくると、女中が一枚の名刺を差し出して、お目にかかりたいと言ふ。やはり電力會社の人で、名刺によると工學士で技師である。年のころ四十五ぐらいに見える瀟洒な紳士で、上品な靜かなさうしてしやれた口を利く人である。四五日前に仕事を視察に來て、明日は集々の方へ行くのだと言つた。話題として電力會社の事業のことを手輕く話し出して、あの水社橋のある水尾溪を工事してそこから水をきつて落す計劃や、この水の落差は――（精しい數字を私は忘れたが）水力電氣の瀑としては世界で十三位ぐらゐに相當する高さであるといや、水源地は山の向ふの東の方の蕃界にあつてそこから水を引くのに水道として延長六十町ぐらゐのトンネルを今工事中であるとや、この工事と同じやうな適例がスイツルのどこかにあることなどを話してくれる。「いづれ精しい事は夜分にでも、」と言つてもし疲れてさへゐなければ化蕃の蕃社を見に行かないか、

と、それに電力會社の運輸を引受けてゐるといふ二八水の或る運送屋の主人と、それに私。宿の浴衣がけで歸りに、水の上の夕方は寒いかも知れないと誰かが注意をしてくれた。宿の女中が麥酒やその肴などを用意してついて來た。宿で使つてゐる臺灣人が兩手にひつさげて來た大きな酒德利二つは蕃人達への土産である。

舟は水社橋のそばの蘆のなかに浮いてゐた。西の方に大きな雲が表はれてゐて、それ故、水の上には日が射してゐない。この潭上の水は一たい泥深いので、しかし水そのものの深さは極く淺くて、最深一丈八尺、平均水深は一丈かそこらだらうといふ。水の上に來て見るとこの水は一さう[illegible]

麥酒のコツプを取りながら話しかけ[illegible]

「でも、ふたりとも出ては來られませんわ。」

「然うとも。ばあさんが出て來れば君では臺所の采配が振れまいね。……私だつてさう嫌つたものぢやないとお言ひよ」

輸送屋の主人がこんなことを言ふ。女中はこれには何も答へないで、唯妙に淋しさうに目を伏せて笑つた。この表情が[illegible]を持つた私の心へほんのちよいと觸れた。この女といふは[illegible]は二十二（三にはまだなるまい）ばかりで、色の少し蒼白[illegible]しさうな[illegible]でその代りに顔には一面にそばかすがある。[illegible]長で、ちやんとした顔立ちだ。全體に[illegible]垂れて咲いてゐる[illegible]のやうに可なげないちらしい表情が[illegible]こと。こんな山の中の[illegible]

屋の女中にしては品位もある。ときれときれに少しせき込んで口を利く癖があつて、その人に與へる感じには頼りなげな寄りすがるやうな調子がある。額の上の半分が自分の好きな或る人に心持似てゐる。

「御覧なさい。あれが」と監督が私に言ひかけた「あの大きな楠の木のある嶋が浮島なのです。珠仔山と言ひましてね。八景の一つなので。蕃社はちやうどあの裏のところを道入つたところにあります。珠仔山のこちらに背の高いとび出た者がありますね。あれが石印です。石の印材に形が似てゐるからでせう。蕃社もあの岩の近所だから石印と呼んでゐますが。」

舟は、例の大きな四つ手網のある竹筏の前を二つほど行き過ぎて、今、湖心に浮んでゐる。

臺灣名勝舊蹟誌は記して言ふ。

――相傳ふ、水社化蕃は今を去る百三十餘年前、嘉義大埔の蕃人四十餘名、猫大山に獵し、一頭の白鹿を追蹤して西北に走り、水社大山に至りて踪跡を失し、彷徨三日、偶々此の大湖を發見し、以て天與の樂土と爲し、一旦歸社して酋長に情報し、一部は直に此に移住を決行せるなりと。蕃社また神秘的に碑を傳ふ。今より二百年前、水社湖の東北南に巨大なる茄苳樹一夕にして發生し、周圍二丈餘、根は十二尺の水底に蟠り、梢は三十尺の大空に擴がりしかば、蕃人は神木と稱して刀斧を加へず。この神木の精、蕃婦の胎に宿り、一男生る。生れながらにして身長九尺に餘り、膂力鈎を曲ぐるに足り、赭顔多髯にして、狀貌魁偉なり。衆推して蕃王となす。時の臺灣巡撫、縣丞を遣はして眞否を探り、尋で兵を派して附近に屯在し、先づ神木を伐採せんとせしも刀鋸立たず。巡撫大に異とし、一日茶菓を供へて上天に謝し、且つ神助を祈りしに其夜夢に「茄苳の大木は、天地日月の精靈を享け、一夕、湖中に生ぜしも實は既に千年の劫を經たるものなれば漫に兵を用ひ、斧鉞を加ふるも何の効かあらん。唯針を樹皮に刺して黒犬の血を塗るは、大木の忌む所なれば、斯くて後、鋸をもつて斷つべし」との託宣あり。乃ち靈夢の如くせしに果して驗あり。木忽ちにして倒るると共に、蕃王は湖に投じて死せりと。」云々。

この荒唐無稽な傳説をどこまで打興ずるかは人人の自由として、今から約二百年の昔、淸の雍正年間に、この日月潭一帶の地にあつた水沙連蕃社の骨宗（クッフォン）と呼ぶ勇敢な大頭目が淸の統治に對して頑强な對抗を試みて撃殺されたことは歴史上の事實であるといふ。しかしそれは昔のことで今、このあたりの地は蕃界に隣してはゐるけれども、既に王土のうちである。白鹿を逐ふてここに移住した化蕃はわれわれ——ここの風光を訪ねる者の座興を助けて土産の酒を樂しむのである。

さうして我々の舟が珠仔山の傍をまわつて舟の舳先（へさき）がその蕃人の小村落を指した時に、我々の舟の櫓の音をでも聞きつけたのであらうか、一人の小柄な老人が石でつみ上げた胸壁の後に立つて我々の方を眺めてゐた。我々の舟が折から獨木舟を一艘つないであつた岸につくと、彼は岸へ下りて來て、腰を低くして丁寧にお辭儀をした。この岸といふのは、山峽の狹い平地が水に接してゐるところで、なだらかな坂のやうに傾斜をして、汀の長さは半町とはないであらう。卽ち彼等はこの汀を間口にして奥へ行くほど狹まつた山かげの土地に住んでゐるのである。

出迎に出て來たのは近づいて見ると六十ばかりの白髪の老人で、彼の頭は短く散髪してゐる。彼等は生蕃ではなく、こは蕃地ではないから、この老人は頭目では無く區長なのである。さうして我々のやうな客が屢々あるから彼は我々の用向きを知つてゐる、それ故、目早く土産の酒のある二つの大德利を偸み見た。それから我々をば石の胸壁のある彼の庭の方へつれて行きながら、自分は小屋のなかへ這入つて行つた。

老區長の命令があつたと見えて、四五人の女が出て來た。二三人の小供が物珍らしさうに小屋から出て我々を見つめる。女達は手に手に七八尺もある長い棒をもつてゐる。それは杵である。老區長は木綿編の西洋風のシャツを着てゐたが、女たちは蕃衣を着てゐる。老區長は自分でいろいろの腰かけ、竹で出來たのやら木で出來たのやらを持ち出して我々に勸める。舟を漕いで來た若い工夫が何か老區長に言ひかけると、彼も何か答へた。言葉は解らないが何でも蕃語ではなく臺灣語——卽ち廈門地方の支那方言——を使つたらしい。

「皆は未だ畑から歸つて來ないさうです。今迎へにやるといふ

のです」若い工夫は今の問答を説明する。成程、お子供たちは、家のうしろから駈けて出て行つた。

杵を持つた女たちは、十三四ぐらゐのや十六七の娘も雜つてゐて、その庭さきに埋めてあつた二尺四方ほどの方形の石のまわりを取圍んで立つた。彼女たちはそれほど大きくない聲で歌を口ずさみながら、手に持つた杵で石の面を搗く。杵は徑八寸ぐらゐもある太いのやら三寸ぐらゐのものやら、もう少し太いのやら、それぞれの太さが一定してゐない。それ故、それが石の上で反響するひゞきが鋭いものや鈍いものやさまざまの音で、それの入り雜るひびきのうちに高低自らの調子が出來る。これが木と石の發する音かと疑はれるほど金屬的な快い音を出す。「ここで聞いたのではそれ程でもありませんが、水の上で、あの山のところを廻るあたりから聞くと何とも言へない氣持がありますよ」と技師が言ふ。「ほんとうに、あすこで聞くのが第一ですね」と監督が言ふ。杵を搗き下す女たちは、時々足を横に石の方へ蹴り込むやうな眞似をする。この動作は、この一種原始の音樂とも言ふべきこの杵搗きの本來である本當に彼女たちが臼の上で粟や米や稷などを搗く時に、こぼれ落ちた穀類を足で拾ひ込む眞似に相違ない。

「近ごろでは杵に合せて、七つ八つからいろはを覺えなんて歌ひ出すから參りますよ」と運輸屋の主人が言ふ。

そのうちに畑で働いてゐた男女が三三五五あちらこちらから歸つて來た。娘の子の多いところだ。「今は正月だから（――蕃地では粟の取り入れ月が正月になつてゐる）毎晩、芝居があるのだ。今日は折角のお客だから、どうせ夜する芝居を少し早目に今から始めやう」と言つたさうである。芝居、芝居といつてはゐるがたゞ手をつないで踊ることです」と若い工夫が説明をした。二十ぐらゐとも見える背の高い立派な若者が、にこにこしながら工夫に何か言ひかけて置いて小屋へ走つて行く。「皆で祭の着物を着てくる。その方がいゝ。待つてゐてくれ」と言つたのださうだ。果して、皆がそれぞれに赤い盛裝をして來た。男は陣羽織のやうな形の上衣を、女は腰には裙をつけて、胴にはやつと乳の上までしかない短衣を着てゐる。男のには袖はないが、女のには狹い長い洋服のやうな袖がついてゐる。これと

支那で男の着る馬掛といふものに似てゐる。これは短いから裙と胴衣との間から栗色の膚が隙いて見える。輸送屋の主人が、傍に來た十五ぐらゐの頭には赤い毛絲の房の飾りをした少女の胴衣をまつくて背中の膚をのぞいて見たら、その少女は少し嬌羞を帶びたやうな顏をして笑つて行つて仕舞つた。さつき、祭の着物を着て來ると言つた若者は、いそいそと出て來たが、蕃衣の下にシャツを着込んで、家柄の者と見えて胸に、勳章のやうに丸い貝がらをつけてゐる。

彼等は、やがて少し低くなつた廣場――これは特に彼等の所謂芝居の舞臺として用意されてゐる場所であらう――に集つて、七八人で手を繋いで、圓くなつて歩き出した。盛裝の出來上つたものが追々と、來て仲間に加はつた。やがて若い男女が二十人ばかり大きな環になつた。環に加はらない人人も澤山ゐて彼らは或は立ち或はしやがんで見物してゐる。環はくるくると廻る。廻る環のなかで時々、皆がそれぞれに手を放して身を翻すやうなこともある。幼稚園の幼童たちの遊戲のやうに單純である。一度、休んでゐた例の杵搗きはまた列まつてゐる。杵を搗く者も踊るものも歌つてゐる。歌は御詠歌に稍似た調子を帶びてゐて、モノトナスであれである。一人の勢力者のやうな男が、踊つてゐる者たちの傍へ盃を持つて行つて各彼等に飲ませてゐる。彼等は自分自身が飲む前にちよつと盃中の酒のなかに指をしたして、その滴を天の方と地の方とへ捧げるやうな手つきをし、それからその指で自分自身の額を指して、さてその盃を飲み乾す。この事を大へん素早くやる。中には自分は飲まずに、列から離れて行つて用意の酒甕のなかへ蓄へに行く者もある。老區長は悅んでしきりに飲んでゐた。

「去年ぐらゐまでゐた別嬪は近ごろ見えないやうだな」と技師が言ふ。

「あれは、この間どこかの臺灣人のところへ嫁入りしたさうです。」と監督が言ふ。

「もう一人いい顏のがゐるのだが、未だ畑から歸らないと見えますね」と運送屋の主人がいふ。さうして重ねて、宿の女中を振り返りながら「ね、あれやなかなか別嬪だね。」

空が、何時の間にやら怪しく暗くなつて、凄いやうな風が

來た。夕立が來さうだと言ふので、男ばかりでする劇しい踊りは見のこして歸らうと、舟に乘つた。彼等は氣を利したものか、その特別な、男ばかりが手を繋ぎ合つて旋風のやうに廻つて見せるのを、私は舟に乘りうつりながら見た。

重い空の下に日が暮れかゝつてほのかに暗くなつた水の上を、飛ぶやうに歸つて來る小舟がある。何れどこかの岸の畑へ出てゐた蕃人の獨木舟である。我々の舟が岸を遠くなつて珠仔山の影にかくれるまで、あの杵の音が聞かれた。その音は、水と空とにこもつて響いて、砧の音に似たさびしさを持つてゐる。活氣のない日の暮れの水の景色は、蕃家の杵聲によつて景色そのものが蘆の葉のやうにふるへて、私の心は哀切を高められた。ふと遠くで電が頻りに光つて、果して夕立が來るのであらう。晩秋のやうに冷たい風がかすかに水を辿る。四つ手網を上げてゐる竹筏の人に、我々の舟から誰かが何かを言ひかけると、向ふの人も問へた。「鯉がとれてゐるか」「鯉は無い。鮒なら大きいのがある」といふ問答らしかつた。

再び水社橋のところへ舟が歸つて來た時には、日はとつぷりと暮れて仕舞つて、潭水の上にはところどころ、竹筏に住む漁人の灯が長い影をあざやかに水の上に引いてゐた。

いゝ按排に雨は未だ落ちて來ない。宿にかへつてしばらくすると、劇しい大粒の雨が來て、やがてしめやかな秋雨のやうな雨になつた。雨が晴れると、七日か八日の月が僙の間東の岸高い山を照した。水はこちらの山の影になつて月光を浮べなかつた。



金沼銀沼の靈地

小杉未醒

不思議な村、變つた避暑地、日本のうちにはモハヤ餘り不思議も變つたも無くなつてしまつた、柳田氏などが一番面白い事を知つて居らるゝだらうと思ふ。小生などの少ない經歷に依つて見れば、不思議な村と聞いて、行つて見れば、矢張り麥畑茶畑電信柱、普通の寒村に過ぎない。何處其處の山奥の村は、平家の落武者の開いた村、だと云ふ事を善く聞くが、それを一々ホンの事に受くる時には、平家の落武者が日本中の山奥に分れた事になるであらう。併し傳説必ずしも全く噓ばかりではなく、沒落の一族が、相率ひて山の奥に籠つた事は首肯れる。沒落の一族は平家以前にも、平家以後にもあつたらう。それらが悉く平家の落武者、と云ふ事にもなつたのであらう。是も其平家の云々と云はれて居る、栃木縣鹽谷郡の、絹川の水源地に栗山村と云ふがある、二十年前に少年時代の小生が行つた時には、男は獵と樵とのみで、女が畠に働き、田なければ、米なく、粟ばかりの飯などを喰ひ、里へ出て鹽鮭を買へば、再びそれを鹽に漬けて貯ひ、味噌は、豆と鹽とのみの玉味噌、乾棚に吊して燻らして、庖丁で削つて味噌汁を作り、山の雪の模樣で、狼に追はれた鹿の群が現はれると、法螺を吹いて人を集め、或時は一時に鹿ばかりを三百頭も、火繩銃などで占めたと云ふ事もあつた。酒は濁り酒、お目出度い時は會津の直し、鹿の刺身や、鹿の腦髓の燒きたてなどを味つた覺えがある。富士見峠と云ふ處に小屋があつて、其處まで山の材木や割木を運んで置く。日光の町からは又日用の物貨を運んで行つて、何人の立會ひもなしに、好き程の物と物とを交換して來る。先方の居る時もあらうが、居ない時もあらう、それで何の苦情もなく、つまり相互の良心で損得なき交換が行はれる。かゝる不思議な村も、二三年前に行つた時には、絹川の下流に水電などが出來、材木も高く賣れ、金も入れば米も入り奢侈品も入り、火繩銃も二連無鷄頭となり、どうやら並の山村となつてしまつた樣子である。チツトも無理のない話ではあるが、汽車汽船の出來た爲に、世界が

狹くなり、神秘が消し飛んでしまつた。と嘆く小生共からは、何となくあきたらず思はるゝ。それでも一番奥の三軒家の小部落に川股溫泉と云ふがあつて、其處で三四泊して來たが、眞夏の盛りの雜木の木立ちが直ちに山頂より屋後に接し、畠の芋や黍が、椽側まで茂り溢れ、家の周りに草木、と云ふよりは、草木の僅かの隙に家らしいものがある。と云ふ程の茅屋の中に、蓬髮銅膚の老女が、大肌拔きで石臼を廻して居た。それを見た時には、昔の通りの栗山が此處に漸く殘つて居たと思つた、自身の着けて居た汗に汚れた背廣さへも、甚だその環境に相應しからず感じた程であつた。全く此のやうな山奥の住民は、カッフエとキネマの東京住居者などから見たら、何等の樂しみがあれば其の生を草木の間に托して居るか、と疑はるゝであらう。

避暑地として此の川股溫泉なども惡くはない。此の溫泉から足の達者なもので日歸りの行程の處に、絹川の水源なる金沼銀沼の勝地が在る。勝地と云ふよりは靈地、好い景色と云ふよりは、不思議な仙境、小生は未だ斯の如きチヤーミングな、清淨な神の造れる庭の如きものを他に見た事がない。地は六千尺の高さ、山頂の平地廣さは、半里程一面の毛氈苔、様々色々の草花、五十の大小の淺い沼、忽ち、日照り山[illegible]き忽ち、雲湧き霧捲き る、自然宗の求道者は正にかゝる處で大自然の啓示にも接す であらうか。しかし金沼銀沼に毎日通へるものでもなし、身 病あつて深く溫泉の効驗に賴るものではない限り、川股も長く留るわけには行くまい。多くの人は、山へ行つて山に遊ばず の中から出た蓄音器の前に半日を暮す。カッフエとキネマの 長を山村水郷に望むものであるから、結句箱根と伊香保とが も人を留め易い事にならう。伊香保を越して榛名神社の下の部落は、昔神社の盛りの頃の宿屋共が今も倚存して居る。此 で大根と芋と涼風の間に一夏を過したなら、大分讀書の捗も からうかと思ふ。信州の飯田は汽車路を遙かに離れた、落付い 小都會である。以前木曾谷へ夏休みに行く人があつた。當 通つてから次第に靜閑の趣を失つた。それを詫びしがる人に の飯田附近の天龍谷をすゝめたい。信越線柏原驛から十余丁 野尻湖の岸にも、北國街道の一村がある、宿屋もある。妙高は日本有數の名山、裾野には二つ三つの溫泉場もある。スキ の名處ではあるが、小生は避暑にも好い處と思つて居る。



羊蹄山と半月湖

水島爾保布

去年は一夏ほとんど北海道をうろつき暮らした。どこへ行く汽車も大ていは滿員で長い立往生を忍ばねばならぬ場合が多かつた。（私の旅行はいつでも三等だ。）大沼公園、それから定山溪、登別などの溫泉場は、どの宿屋もゴッタかへすばかり混雜してゐた。一人旅の私は至るところで、懇願してやつと宿泊を許して貰ふといふやうな有樣だつた。

それやこれやで、同地の誇りとしてゐる諸所には餘り好感情を持つ事は出來なかつた。却つて汽車の窓などから瞥見して過ぎた部分部分に、非常にいゝ印象なり記憶なりが殘つてゐる。その斷片をつなぎ合せて圖卷を作つて見たいやうな氣には時々なる。

夕暮れの津輕海峽で連絡船の周圍を跳躍して走つてゐた海豚の群も珍らしかつた。函館灣内に電飾の如く充滿してゐた烏賊捕船の漁火も美しかつた。

石狩平野は雪中馬橇を驅つた時の壯快な記憶にも增してに爽快な感じがした。札幌大通り（幅一町）の花壇の鮮麗と忘れない。至るところに牛馬の放牧場があり、至るところに麥の丘とその一面の黄色を劃したタモの密林帶があつた。瀧ではてうど七夕祭りの夜で、少女達が手に手にタモの小枝や竹に色紙で張つた燈籠をつるしたのを提げて、唄ひながら町群れ歩いてゐた。

石狩膽振の國境の茫漠たる荒野の眞中に、たゞ一本建つつた白い榜示杭、それから、犬蓼と茶褐色の穗を靡けた草と女郎花と、それらの密生した沼地を隔て、白樺の疎林を裾にぐらして、Elfe の如く飛翔する狹霧の中に隱見する怪奇な岳の山容、石狩十勝の國境の雄大さ、これなどは大陸的といても決して間違ひはなささうだ。それからもう一つ國境では狩天鹽の國境も宏壯な眺めだつた。

それから又大深林の焼け跡——眞黒に焦げた大木が、高い山の頂からその中腹を廻り屋根を渡り裾野を傳はつて更に他の丘へと這つてゐた。鮮麗過る程青々した下草と、それとの對照がいはん方もなく凄壯な感じだつた。

根室のある沼で小舟を操つてゐたアイヌのメノコ、小雨に烟る緑樹の蔭と、薄濁つた水の光の中にそれが何かの物語めいて見え又一種暗示じみても見えた。

支笏湖、洞爺湖あたりの寂寥さには神秘的な、そして心持のいゝ感じだ。いゝ馬といゝ犬とを連れていろ／＼の食糧を用意して半日程もテント生活をしたらばとそんな事を考へた。考へたが考へた丈で直歸つて來て了つたが、羊蹄岳と、その中腹の半月湖では前後五日ばかりを過した。そこなどは變つた避暑地としては先申し分のないところだらうと、私はおもふ。

羊蹄は北海道を知つてゐる人は先刻御存知だらうが、一名を蝦夷富士といふ通り富士山を小さくしたやうな恰好の山で、七千二百尺ほどあるさうだ。(各所に何富士かに富士と呼んで富士に似た山は隨分あるが、この羊蹄山位ゐ酷似したものは殆ど見當らない。寧ろその圓錐形狀の正確なことと權衡のとれてゐる點で、本ものの富士より勝れてゐる。)

傳說によると蝦夷地開闢の時海底から突出して凝り固つたものださうだ。そこへ男女の神五色の雲にのつて降臨して、乘つて來た黒い雲を海へ投げ入れて巖とした。それから黄色いのを巖の間々へ埋めて土に、白いのを海へ投じて魚類に、青いのを草木に、赤いのを金銀珠玉の類に、それ／＼變化させた。するとそこへ雌雄の鵠が飛んで來て二柱の神に子孫繁榮の方法を教へた。といふことである。アイヌ語では鵠の事をカムイチカプといふさうだ。神樣に人間の道を教へたといふところにその鳥の神聖と敬虔とが係つてゐるのださうだ。

こんな傳說はとにかくにその山を廻るタモの大深林の原生のまゝの姿で密生繁茂した壯麗さは、何と形容しやうもない。半月湖といふのは、その密林に包圍されて、美しさ靜かさの透徹したやうな湖水だ。

午前の一時頃登山の青年達に交つて、懷中電燈やら提灯やら石油松明やらで路を求めながら、まるで地底のやうな樹陰を潜りつゞけ、人丈よりも高い大虎杖や傘ほどの蕗の密生した間を分けつゞけた果、漸く白々あけの冷えきつた空とそこに散亂する水晶のやうな星影を仰いだ時の淸爽さは思ひ出す丈でも胸が廣くなるやうだ。苔のやうに地殼へこびりついた葉の硬い灌木の叢を縫つて、齒にしみるやうな空氣の流れにひたりながら、やゝ頂き近くまで來ると茶店があつた。薄暗い箱ランプの下、

年寄り夫婦が澁茶を煎じてくれた。染つけの燕ものにコケ桃の鹽漬けにしたのを駄菓子にそへて出した。店には金富士といふレッテルのサイダーそれから札幌ビールの瓶などもならべてあつた。

茶店の家根を越して向ふの山の背から谷へかけて、殘雪が仄暗い中に薄いコバルト色をぼかして幽に光つてゐた。

山頂の日の出の壯觀はどこも同じだが、眞朱の烟の中から、火焔のやうになつて上つて來る大日輪の眞下に、擴き平いだ一面の大深林の莊嚴な眺めは内地のどこの山でも見られない。やがてして空の茜は紫に、紫は藍に、明るく晴れ上つて行くのにつれて樹林は漸徐に影から姿を、形から色を整へて來る。碧の梢を果てもなく連ねて、遠く雲霧の間へと浪のやうになだれて行くさまは、樹海といふ言葉の如何に適切だかを語つてゐる。——その樹海のある隙間々々に光る燕麥の丘、それからあちこちに散點する牛の放牧場、馬の放牧場、奇峭な遠山＝有珠岳、駒ケ岳などの凡ての山その物が盡く大陸的だ。

半月湖へはこの降りに立寄つた。一日は舟を浮べて遊びくらし次の日は鮒を釣りながら終日湖岸のあちこちをうろついて過して了つた。三日目は雨だつたので朝から書きものをして、四日目の午後雨の晴れ間を見て倶知安の町まで歸つた。

本當に夏であることを忘れてゐた。日中タオル浴衣では少し冷々冷えするのでシャツを着た位だ。夜は布團をかぶつて臥た。湖圍からは奥底しれず密生した林が犇々と押し迫つて、その青暗い影が絶えず湖上を壓した。水は碧瑠璃をのべたやうに清らかに澄徹して偶々小さな魚の跳ねる音にも幻覺を起させるやうな靜かさだ。その湖の緘默に對してポツ然と浮木の赤い一點を凝視してゐると、いつか自分迄が凄じさに同化したやうになつて了ふ。二十日もこんなところで過したら乾腐骨の髓まで綺麗な人間になつて了ふだらうなどと想つた。

倶知安の町には東京からの爲替を待つて三日ばかり滯在した。毎日毎日羊蹄山を見、そこに變幻去來する白雲を見て暮らした。支那人が白雲を見て樂しむ心持ちも幾分か理解されたやうな氣がした。

たゞ少し困つたのはどこへ行つても食物の惡いことだつた。今度行くときにはテントと罐詰を用意して半月湖畔と限らず、北海道のあちこちを足の向く儘旅行して見たいとも思つてゐる。

近頃では日本アルプスも少し鼻についたし、踏破だの縦走だのいふことも何だか兒戯に類するやうに考へられてならない。餘り山はないが、北海道の山々はどこへ登つても面白い。のみ

ならず變つた旅行、變つた避暑地——そんな端を求める人は、是非一度北海道をテント旅行なりテント生活なりを試みることだ。

大して不思議といふでもないかは知れないが、數年前に大和の十津川を抜けて熊野へ出たことがある。その時、その十津川の上野地といふところに泊つて、宿屋の主人からきいたのに、十津川といふのは全村五十二部落に分れ南北十三里東西七里に亘る日本第一の大村で、村民は何れも平家の落武者の後裔ださうだ。昔はその盡くが郷士として名字帶刀を許され今では何れも士族ださうだ。家の營みは何をしてゐようと槍一筋に大小、劍術の道具を備へてないものはなく、男と生　たものは子供の時から竹刀をもつて打つたり突いたりの稽古　勵んでゐるのださうだ。風習として一寸の遠出にも必ず腰に一本横へる。これは特に十津川村民だけに公許されたものださうだ。さういはれゝばその日も途中で、九寸五分程の脇差を横たへて蝙蝠傘をさした或人に行あつた。名義は山刀といふのだらう、その拵へは絲卷乃至赤木東黒漆若しくは栗皮朱など中々數寄も凝らしてあれば嚴めしくもあつた。そしてもう一つ妙に思つたのはその村の人々、宿屋の主人烟草屋荒物屋の主人までが、みんな髯を蓄へて頗る威厳を作つてゐる事だつた。

この十津川に明治二十二年とかに大水害があつて、田無瀬なんてところは全村一軒殘らず押し流されて了つた。その災害を被つた各所の部落民を盡く北海道へ移住させ、土地を與へて開墾させた。瀧川町の近くの新十津川村といふのがそれだ。十津川米といつて同道有數の良米の産地である。その新十津川村へは行つて見なかつたが、帶刀の方は兎に角、髯だけは依然として保存されてゐる事だらうと思ふ。

それから北海道のアイヌ部落のうちで訪問に便利なのは白老線の白老といふ驛の近くに散在する部落だ。そこにはアイヌの子弟丈を收容する特殊小學校がある。そこの先生の話に、アイヌ婦人の口の端にする黥は配偶のあるなしに拘らず婚期が來れば誰でもさうするものださうで、つまり發毛の公示なのださうだ。蠻風だなどと一概にいひはするものの、永くアイヌ等と一しよに生活してゐると、自然彼等の黥といふものに對する觀念なり又その粉飾的價値なりが解つて來る。殊に十六七位ゐの少女が、チヨイと鼻の下を黒くしたさまなどは一種媚惑的な美しさがある。——といふ事だ。

東山から熱鹽

近藤浩一路

會津は再遊である。今度は中村鶴心堂主人と二人連れだ。前には夜行を選んだがそれでは途中の風景に浸りながら行く譯に行かぬので特に朝の九時上野發に乘り込む。これなれば丁度東山へ夜になつて到着するので都合がよい。赤甕皆の連中と行つた時は晝日中着いたので折角の東山も乾燥しきつたものに感じてしまひ第一印象を臺無しにしてしまつたので今度はたしかにこれを恢復することの出來ると信ずる。鶴心堂主人は東京に生れて京都に修業に行つてゐた人なのでまづ〱純粹の都育ちでしかもこれまで殆んど旅に出たことがなかつたといふので、都を離れて行くといふことが非常にもの恐ろしく思はれるといふことから吾等と同行を敢行した次第だ。僕たちのやうな旅行好から見ると何だいい年をして、心細い事をいふやつだと思はれるのだが、よく考へて見ると都育ちのものにはかくあるべき筈のものかもしれない私は上野廣小路で有名な永藤のあんぱんを一袋買つて乘り込むと鶴心堂は大きな風呂敷の中からバナヽ枇杷なぞを開放する、これを兩人ぱくつき乍ら雨中の苗代など只多く眺めて行く。

六時間の後郡山驛で乘換へ岩越線の貧弱な二等室の中から高玉溫泉や猪苗代湖など鶴心堂の爲に車窓から指摘しつゝ夕方の七時に漸く會津若松へ到着する。生憎雨が盛んに降り出して來た。同車した他の客がどうも自動車へ乘るらしい氣配なので若し先じなかつたら、次ぎの自動車（それとても二十分程待てば引返して來るのだが）まで待たせられるに違ひないと只戰々のうちに無暗に鶴心堂をせかせ第一番にプラットホームを出る

と果して驛前に待つてゐた東山行の自動車はたゞの一臺、私たちのすぐ後から來た件の連中は次ぎまで取殘される氣の毒な運命に逢着してしまつた。買切一臺三圓、自動車は雨をついて實に全速力で走つた。東京のより田舍の自動車の方が目茶に早く走らせる。二十分もかゝらぬうちに暗の中に狹まつて行く溪間の路を走るかと見るうちに橋を渡つて向瀧温泉旅館の明るい玄關に横づけされる。中は意外にも非常に混雜してゐる樣子。表二階の中央の室に案內されたが先客の慘澹たる殘骸がまだ片付けずにそのまゝになつてゐるので、急に掃除に着手するやら大騷ぎ、其片付くまで廊下で立往生はあまり感心しなかつた。其間も各室々から絃歌が湧き上つて來る。丸で女郎屋へでも揚つたやうな感じだ。騷々しい。

漸く片付いて落ちつき場所を得たはよいが、十五疊のだゞ廣い中に、床の間といつても間に合せの持運びの出來る例の簡便床の間が軸物なしで言譯ばかりに置いてあり旅館といふより料理屋へ來てちよいと一杯といふ時の感じしか起らない。前に來た時泊つた新瀧旅館に比べると雜風景この上もなしだ。それであたりが騷々しいといふ譯なので、これなら直接喜多方へ行けばよかつたと後悔せざるを得なくなつた。實は汽車の疲勞の殘つてゐる間にすぐ多くの人に面接する煩を避け、一先づ此處で旅疲を休めて然る後悠々と喜多方情調に接しやうと考へたからだつたのでこの有樣では全然當が外れてしまつたといふもの。迚もゆるりと靜かに寛ぐ事は出來さうもない。東山といふ處はまあづこういつた處なのだ。と諦めて何はともあれ一浴しに行くと以前とまつた新瀧の湯殿とは余程趣が違ひ落着があつてよいと思つた。全體東山の溫泉はたゞ自然のまゝに湧き出す溫泉といふだけで何等効驗のないのは世間の定評だが、旅に溫泉ほどいゝものはない。その湯上りの上氣した頬を滴るやうな雨中の翠微に對し乍ら欄に凭る心地つたらない。何分にもあまりに周圍が陽氣過ぎる。何かといふと苦情ばかり云つてゐるうちに隣室の川つきの坐敷が定つたといふのでそれへ席を移すことになると不滿の中にも聊か蘇生の氣味がした。成程此處なれば雨の音も河の音もはつきり聞えてたしかに心の澄むのを覺える。しかも河鹿の聲が頻りに聞えて來る。始めて來た鶴心堂は非常

に旅の快味を覺えたらしく「たまりませんね」と長つ首をひねつて見せるのであつた。私も急に愉快になつた。そこへ今度出て來たのは十三四になる桃割に結つた女の子、點々と口を噉して木像の人形がばね仕掛で動くやうに茶器や膳部を運んで來る。此女の子が卽ち東山情調の特種のものだとはさる人の東山紀行で讀んだ事があるが、さてはこれだなと思ふと一層彼女の一擧一動が注意をひく。

「おまへは何といふ名だね」聞き乍らも迚も滿足な解答は得られないと大呑込みに呑み込んでかゝつた處、何ぞしらん今迄無言をつゞけてゐた彼女は「花！」と立派に明瞭に返事をして呉れたのには逆捩を食つたほどに驚かされる。こいつ迂濶な眞似は出來ないと直ちに態度を愼重に代えてそろ〳〵質問を試みて行くと彼女は今云つた寸法で沈默のうちにどし〳〵返事だけは明確に片付けて行くのだつた。彼女は今は給仕女であるが仍ては三味線とつて客席に侍する藝妓になる運命におかれてゐるのでつまりSの卵なんだ。東山へ來てこうした



女の子の出現を見たときはつきり其客は少々甘く見られゝ譯になるのださうだ。といふのは最初客が來ると變手古な至極つまらない女中が出て來て散財する客か否かを探知し若し甘さうな客と見るとこれらの少女を出して一種の遊蕩氣分を徐々に煽り上げるといふ仕組になつてゐることは其東山紀行に出てゐたと思ふ。實際東山は靜かにねむるには水の音があまりに近すぎる。

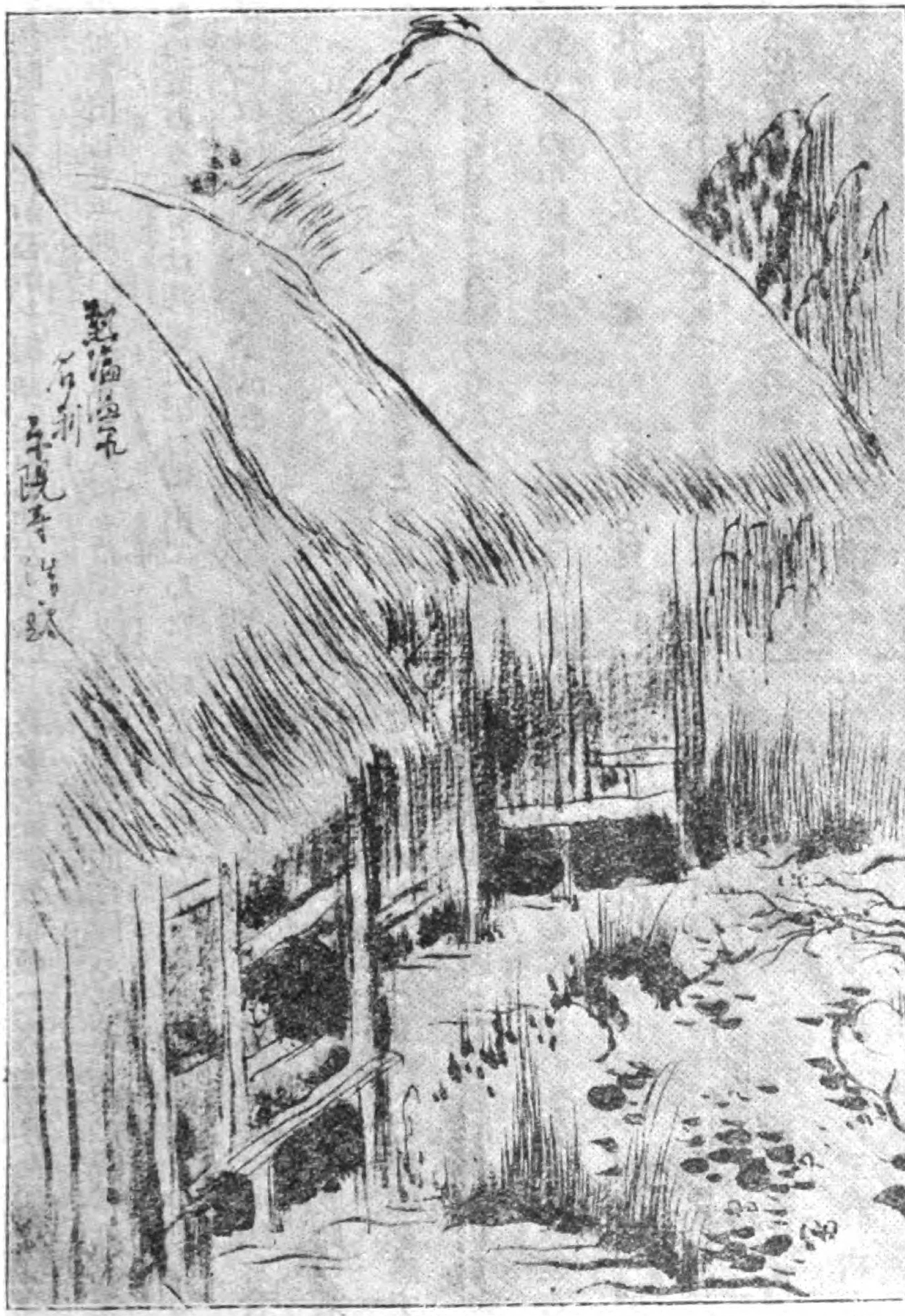
翌朝は意外にも天氣になつてゐた。河音も晴々と身にせまる。來た序でに白虎隊の義魂を弔ふ。若松の町からちよいと折れるとすぐであつた。登り坂の中途に螺線のやうな螺線堂がある。特異な建築物だ、其側に茶店があつて、參詣の人と見ると老婆が線香に火を點じ乍ら後からついて來て吾等に代つて墓碑に手向けて呉れる。此茶店の名物は豆腐、好な名物だが見晴しの四阿でこいつを食べながら若松の城趾を眺めると旅情が潮のやうに湧いて來る。喜多方町は若松驛から一時間もかゝらなかつた。熱鹽温泉は此處から鐵路から脇道へ二里はいつて行かなくてはならない。今度の旅は東山よりこの熱鹽が目的で喜多方の次ぎの驛山都の田代氏も此喜多方から同勢打揃つて、私を案内して呉れる約束になつてゐる。

喜多方笹屋旅館の一夜は明けた、今度の旅はもう梅雨に入つて旅中幾日間は降られずくめに降られる覺悟で來たのである。殆んど偶然のやうに今朝は晴れきつてゐる。雲の動き、青空の光、それに地上を吹く風は爽快な涼味を含んでゐるので全く最も清澄な初夏の氣分だ。東京で一度此の氣分を味ひ今又此處に來て之れを味ふ。何とも云へぬ幸福を感ずる。殊に東山の一夜と昨夕喜撰庵の優遇とで非常につかれてゐた奴をぐつすり寢込んでしまつたために一切の疲勞が拭ひさられてしまつたのだから身體の輕くなつただけでも、素敵だ。庭の芍藥と名はしらぬが紫の草花が目覺めるやうに目にうつる。

いよ〳〵熱鹽出立となる。觀心堂は笹屋に居殘り同行は田代大盡と笹屋の息子千光坊と私の三人。宿の前から馬車に乘る。形は一寸會津式で他所のとは違つた處があるエン太郎ともガタ馬車ともいふ奴さ。乘台は四十恰好の女と其子供が二人にもう一人の男の客であつた。後から千光坊などとは知り合ひの男と

更に一人の學生とが割り込んで來たが滿員の爲學生だけは踏臺にのつかつて窓の縁につかまり熱鹽まで立往生は氣の毒に思つた。

一町程行くと色々な荷物を持つた田舎紳士が一人馬丁臺へ乘かつて來る。車中はこれで馬鹿に賑やかなものになつた。馬丁は初太郎といつて田代大盡が大觀の作右衛門に似た顔をしてゐると感じた、成程そんな顔をしてゐる但し目の縁がただれたやうに紅くなつてゐ、ところは立派な特色だ。この馬車といふ奴が素敵もなく暢氣な野情を帶びた愉快なものである。



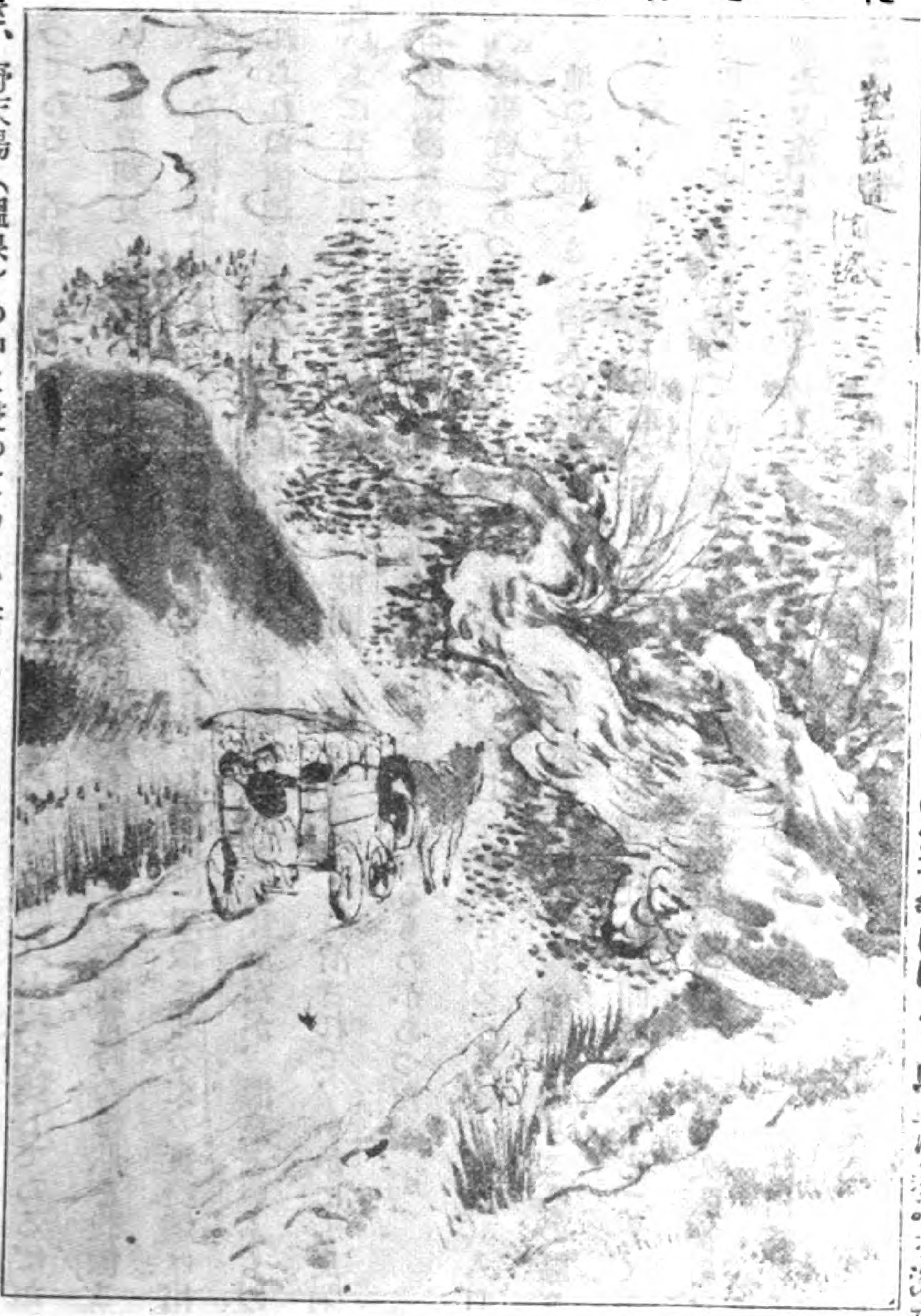
人間の運搬ばかりでなく途中の村々の荷物運搬御用を兼ねてござる。だから路草を食ふ事夥しく一町行つては荷物を下ろし一町行つては荷物を預り馬脚はどうして捗らない。殊に蹄鐵工場で馬脚の修繕をやらせる間ぼんやり待たせられたのは閉口した。しかしこんな處が熱鹽道の愉快ないかにも暢氣（のんびり）した感を與へる特色かもしれない。いつまで待たせられるか見當もつかぬのに狹苦しい馬車の中に閉籠つてゐても局がないといふので下へ降り、蹄鐵師がフイゴをプーくやつたり眞紅に燃えた鐵の蹄を馬の足にあてがふとき爪が妙な臭ひをして「チューツ

と燒きつく處などをさも大事件のやうに見てゐる間、眞晝の村の靜かさの中を燕が低く飛びかわす、蝶々が紛れて來る。川端に菖蒲が紫の目を見張つてゐる、名物の桐の色の香りが何處ともなく流れてくる。といふ風で初夏の引締められるやうな氣分のうちにいかにも春のやうな餘裕が求めずして四周に搖曳してゐる處などほんとに忘れられぬ情趣を覺えずには居られない。

熱鹽までは二里半といふに普通馬車は往き二時間歸り一時間の期定、それからして可成閑漫なのに吾等の此の初太郎馬車は殊に二時間半を要したのは事實であつた。途中あちこちで路草を喰ふ許りか走るべき平地の大通でさへ倘人の步行と大差のない遲々たるものであるから驚く。學生は時々馬車を下りて近道を靜々と步み倘且向ふで馬車の來るのを待つてゐるといふ風だから大抵想像がつこう。たゞ途上平坦な路も流石に會津桐の名産だけに桐の花の芳香と其花の群靑のやうな紫色のその中を行く旅情だけはどうしても此熱鹽道でなくては味はれぬものと云ひたい。熱鹽へ着いたのは丁度眞晝である。生憎の事にはこの四月十七日に全町悉く火災の爲め烏有に歸し、殆んど恢復の見込なしと新聞で聞いてゐたし無論其燒跡の慘たる有樣を想像して覺悟はして來たのであつたが成程只一軒入口の溫泉宿が燒け殘つただけ其他は只土藏を殘してゐるばかり、こう見た光景はいかにも淋しさうに其當時の慘狀を想像させるものがあるが、それは只無理に想像させる丈で實際燒け出された土地の人々には誠に相濟まぬ言草だが、溫泉といふものがあるために燒跡の悲慘は不思議に打消されて、いかにも長閑な原始時代の野の生活を感ぜしめるものがあつた。

しかし今の場合泊るべき家とては其入口の災厄を免れた一軒の旅館の外は全く客を迎えるどころの騷ぎではなかつた。こんな時に來る客は餘程間拔けたものでなくてはならない。幸ひ吾等一行は千光坊の親戚が此處で矢張笹屋といつて第一位の旅館を營んでゐたのが不幸にして燒け出されてしまつたが、その土藏だけは頗る完全に殘つてゐた爲、そこに泊めて貰ふ事に見當がついてゐたから間拔の仲間入をせずに濟むといふもの、兎も角も笹屋の燒跡を弔ふ笹屋は丁度町の突當りの崖に沿ふて幾棟かを段々に重ねた建物だつたらしい。土藏だけがチョコナンと

繁る若葉の山裾に瓦に燒かれたと見えて菰を一面に被つて案山子の頬冠のやうになつてゐる外景は頗に慘めだが内へ入ると實に堂々たる座敷、此處の名刹示現寺は燒跡から石段を上るとすぐだ。亭々と樹つた老杉に暗くとりかこまれてゐる。鐘樓を兼ねた山門の形は特種な面白いもの、奧深く庫裡へ入ると、天井から駕籠が二挺下つてゐていかにも古寺の感を起させるものがあつた。若い僧侶が出て來る。これが住職らしい。よく〱見ると今さつき、野天湯（溫泉）の中に浸つてゐる、若衆はこの住持さんだつたのだ。住持は寶物を一々説明して與れる、開祖の黎（あかざ）の杖、木履、其他數品いづれも古色を帶びて所謂有難いものばかりであつた。（しかしこのありがたいものよりも[illegible]そのものが吾等にはより以上に親みを深からしめた。實に寂寥[illegible]してゐる。宏大な建物は五百年前の昔からその儘殘つて來たもので少しも修繕の跡の見えない處、庭の池の水草蔓るまゝの有様などほんとうにうれしいもの、碧梧桐氏も此寺へ來て示現寺荒廢して[illegible]と一句やられたといふが實際その荒れ果てた處が氣に入つた。それで又此寺に住むこの若い住持さんがなか〱の變りもの、昨年私の友人の畫家が此寺に室をかりて



夏中籠つたことがあるが、其友人の話によると實物を見に來る入湯客のうちの美しい人と見るとすかさず、まだあちらに立派な實物があるといつて友人の室へ案內して友人を喜ばしたり、なか／＼惡戯をやつたりする。何しろ法道を說く和尙さんからしてこんな風だから此の溫泉場の情調の悠暢で可成浮世離れのしてゐたことが想像される。これも實際に就て見ることは出來なかつたが此處には觀音參りといつて近鄕近在のお百姓だち男女のものが團隊で入り込む季節があり隨分其時は狹い少さな小山のほら穴のやうな此溫泉場はわれ返るやうな騷ぎを現出するさうだ。觀音參りといふ名稱だけ聞いても餘程變つてゐると思はれるが內容を聞くと寧ろ驚くほどの話の種がある。唄は忘れたが玄女節と云つて此連中につきものの音調の不可思議な唄があつて、隣合はせに泊つた知らぬ同志が此唄をうたひ此唄の音律をかり胸のうちのほどを唄ひかわす風習があり又湯槽の周圍を舞踊場と心得、裸體の女許りが唄ひ乍ら一晩中踊りまわるといふ。可成原始的なものらしい。

笹屋の土藏へ戾つて浴衣に着換へ溫泉に一浴を試みる。昨日までは板が張つて立派に天井も出來てゐたのだがそれは借りものだつたとかで其貸主から剝ぎとられてしまひ丸太の三角形の屋根柱だけは殘つてゐるが上は全く靑天井。湯につかると山風が首から上を掠めるので上氣した頰のあたりは何とも云へぬ爽快な氣を覺える。雨の日には皆傘をさして這入つたさうだが其珍妙な光景は一寸でもよいから見たいやうな氣もする。此際だから食ひ物なんか贅澤は云はれないが却つてすぐ裏の山からとつて來たといふ蕨、蕗。椎茸の類は流石に山の溫泉の難有味を推賞させずにはおかれない。常日なら肴屋も毎日かつぎ込むが燒失後は商賣にならぬと見切つて一人もやつて來ないさうだ。それで食物は當分矢張り原始時代に歸つて前述のやうな山の食物ばかりで滿足しなくてはならなかつた。但し晩飯の時の鮎の天麩羅は實に振つた御馳走だと思つた。忘れてゐたが燒跡の便所は實に珍妙なもの、周圍は腰の邊だけグルリと葭簀張で入口は莚を一枚ぶら下げてあるだけ。實に御粗末を極めたものだ。中でしやがむと外はすつかり見え、馬が通る、人が行く、野天湯の裸體男女がすぐ目の先にちらつく、其色は馬鹿によいがいつ

見してそれと親、に知らしたものだから忽ち出て來て川上氏を　も玄女節も相變らず賑ふには相違なく、機を見てもう一度行つ
無理に内へ引き入れる、私も卷添を食つて、この振舞の渦卷の　て見たいと思つてゐる。あたりの風景は山もあり河もあるが頗
中へ引き込まれてしまふ。這入つたが最後なかく退却不可能　る平凡を極めてゐるが、あまり目や頭を刺激しない平凡を極め
といふ事になる。大きな朱塗の盃や茶碗に酒を滾れる程注い　てゐる處が此處の特長であり、又私の此頃憧憬する場處なの
た、悪く強ゐるので實に閉口した　しかし此土地でどうかして　ある。つまり、[illegible]の強い處、重ねて云ふが喜多方か
例の玄女節を聞かうと思つてゐた。その玄女節を偶然頃ひ出し　らこの熱鹽へ通[illegible]が馬鹿によい。
た。すると川上氏まで音頭をとりはじめいよく簡單には此處



信州星野溫泉

與謝野晶子

信州の星野溫泉へ此夏は是非行つて御覽なさいと山本畫伯が勸めて下すつたのは、去年の四月の櫻の花の散りかかる頃のことであつた。私等と山本さんとは何處でそんな話をしたかと云ふと、書き物をするために攝津の武庫溫泉へ行く私等と、丹後へ少年の自由畫に就ての講演に行かれる山本さんとが偶然に乘り合せた汽車の中でのことであつた。落葉松の林の道を馬車に乘つて行くこと、其處の溫泉宿の若い女主人のこと、私達には大久保氏が別莊を貸してくれるであらうと云ふこと、是等のことを山上の朝夕の雲の行きかひなどを既に心に描きながら私は次々に聞いて居た。

東京へ歸つてからも私は落葉松の山に包まれた星野溫泉を時々想像して見ることを忘れなかつた。けれども地理書や名所案內記にはもとより、山本さんの外には誰からもまだ名を聞いたことの無い星野溫泉とはどんな字で書き現す所とも知らなかつた。或は保科であるのかも知れないと思つたこともあつた。

私等がいよいよ星野溫泉へ出掛けることになつたのは八月も末に近い日であつた。丁度紀州の西村さんが二人の子を伴れて東京へ遊びに來た時だつたので、其人達を誘つて立つ日の前日に、山本さんを京橋の鴻の巣へ來て頂いていろいろのお話を伺ふ會合をした。日中に其處へ着かぬやうに、涼しい夕方前に着くやうにと汽車の時間までも選んで下すつた山本さんの、人間及び自然に對する好意に私達は深く動かされた。鴻巣山人も同行したいと云ふ望みだつたので一行に加へ、私達と西村氏親子三人とその親戚のふか子さんが先發になつて午前十一時頃へ

の町へ白い條を引いたやうに小い川が長々と流れて來て居た。荷物は一時驛へ預けたために私等七人と出迎へてくれた明星樓の女主人のやつと乘ることの出來た小形な車は、殆ど不釣合なくらゐの逞しい栗毛の信州駒に由つて引いて行かれた。落葉松の林の前の道は山の氣に濕つて、薄物を着た人達は黄昏の淋しさをしみじみ感じた。冬の日に氷の作られる棚のやうな建物の前を過ぎて、水の音のいよいよ烈しくなつて來たのを覺えた頃、

山の煙が横に靡くのが見えた。千が瀧の方から來る流で、遠く深い溪を傳つて居る水は此處まで音が聞えない、唯だ油のやうに見えるのであつた。

私等の居る山莊の縁側からは西南に甲武信嶽が見える。その下に離山があつて落葉松の青が目の下の溪にまで續いて居る。左の縁側からは書室の裏に遠く見えた川が一回りして白々と流れて來るのが眺められた。

の枯枝を焚いて湯加減を作つて居た。

水色の空も來りてひたるなり淺間の山の明星の湯に

悲しけれ北の信濃の山あひの明星の湯にわがゐることも

山莊から溫泉へ通ふ路の中程に清水が湧いて居て、私等は共處で口を漱いでは草枕の旅人らしい氣持を朝々味つた。

波よりもあまた重ることにより信濃の山は悲しかりけれ

私達は山の馬車で輕井澤へ行くことを思ひ立つて、千が瀧の沖野夫人をも誘ひ、離山の麓を傳つて行つた。支那の四川省にでもありさうな馬車に乘り零れた私達を迎へた輕井澤ホテルのボオイは目を圓くして居た。訪れて夕方にお別れして歸る時に有嶋生馬先生が二町程も送つて下すつたのであるが、私達の乘つた小い馬車の動き出した刹那は悲しかつた。四川省では無くて其時は胡地へ引かれて行くやうな氣がしたのである。星野溫泉へ歸ると河崎女史と伊上さんが着いて居られた。

私等は或時は明星樓の階上の部屋とか、其處の裏の川に近い別莊とかで食事をしたのであるが、大方は輕井澤の材料で鴻巣山人に由つて調理される草枕式の物を食べて居た。厨の流しのあたりは誰が摘んで持つて來るともない高原の花で埋まつて居た。小田卷草、虎の尾、藤袴の薄紫、桔梗の藍、われもかうと萩の紅、撫子をとこへしの淡紅、萱草と女郎花の黄、是等が人々に由つて或は唐紙に或は板に寫される日が續いた。

手すさびにわれもかうなど玩ぶ人も混れる山莊の客

日の沈む方も見えずて暮れ行けば心淋しき山莊の客

山莊は朝も夕に續くごと淋しき霧の立ち迷ふかな

或日の朝早く高木さんがお着きになつた。

或日にまた伴の人々は輕井澤行きを思ひ立つた。けれども、もう馬車で乘り廻ることだけは諦めて居た。私は東京から持つて來た仕事をしながら西村さんの子供達を遊ばせて居た、澤山集めて來た山苺に砂糖を掛けて一所に食べたりなどして。

水の音烈しくなりて日の暮るる山のなりはし秋のならはし

大空の星に混りて鳴く如し高き方にて鳴けるこほろぎ

他の人々より先に歸つた高木さんは明朝の未明から淺間へ登山すると云つて宿の人に用意をさせておいでになつた

達は船で運び出された夕食にも手をつけずに、横濱を出るとき買つたバナナを嚙つて、まぢ〳〵と夜の明け離れるのを待つてゐた。そして漸つと白々とした曉の光りがさし込むで來るのに力を得て、私は顔を洗ひに甲板へ出た。

四斗桶に清水を滿たしたのが据えてあつて、それを圍んで船員や三等客が頭をつき合せながら口を漱いでゐた。あたりは一面に濡れて痰や、齒磨粉のまぢつた赤い唾が吐き散してあつた。

京都あたりの、なるいカアブをした山の姿を見つけてゐる眼には、その形は一入ソヴアジュに見へたのである。『鳥も通はぬ』と唄はれて、伊豆七嶋の中でも一番はなれてゐるだけに、幕府時代當時の爲政者に取つて、最も危險だと目されてゐた思想家達が流されたと聞いてゐるその嶋へ來たのだ。私は又少年時代に聞かされた『弓張月』の話や、芝居で見た嶋の爲朝のセーンを思ひ出して、おのづと傳奇的な空想を描き出してゐた。

『えゝ』と首肯くと、
『あなたはどちらの方です』とまた尋ねた。
『京都です』と答へると、
『へえゝ、京都から態々こんな所へ……御商用ですか？』とよく物を聞きたがる人と見える。
『いゝえ、たゞ遊びに』
　その人は呆れてもう尋ねなかつた。昨日の夕方船へ乗り込んだ時、私が手にしてゐたバナナを見て、船でたべるつもりとは知らないで、『態々そんなものを買ひ込んで行く人もないもんだ』と笑つた四十近い男である。夏休みを利用して、東京へ講習にでも行つて來たかと思はれる、小笠原嶋歸りの學校の先生らしい言葉つきと、身裝であつた。

×

　船は三ツ根の沖で止まつた。鋸歯を並べたやうな、黝黒な膚をした嶮山の頂には、荒い潮風に吹き撓められて、枝も幹も曲りくねり、紙片をクシャ〳〵に揉んでくつゝけた樣な葉のかたまりをつけた樹が生えてゐた。嶮山の根が海中へ落ちこんだ所には、白い浪の泡が一丈程も飛んでゐた。嶮山の蔭になつた所に五六軒の焦茶色をした藁葺屋根が並んでゐた。いら〳〵と照りつけた海岸の砂地の上を、赤銅色を人間が走り出したと思ふと、間もなく艀を漕ぎ出すのが見えた。
　それが船の胴腹へ横づけにされると、荷物と一所に吐き出される樣に其所へ降りたのは私達三人と、他に嶋の人らしい、これも赤銅色の顔をした漁師風の男や、女たちであつた。艀が漕ぎ戻される間、その人達や船頭が話しあふ言葉はまるで私達に分らなかつた。濱には人がたかつてゐた。そして船から降りた人たちと親しさうに話しあふのであつた。それらの間へ、荷物と一所に拋り出された私達は暫らく途方に暮れた。何所を何う行けばいゝのか、何所に何と云ふ宿屋があるのか、此樣子では聞いても解りさうになし、勿論當ずつ方に行けさうもなかつた。私はふつと淋しくなつて沖を見た。其所には今まで乘つて來た船が、黒い煤烟を横ざまになびけ乍ら横はつてゐる。海は眩しく光つてゐた。波打際には大勢小兒が遊んでゐた。中にはカノオと云つて、黒く塗つた細長い小舟の、兩側にコの字形の木材

島　つた。

の　×

思　そうしてゐる中に一行中のK君が、丁度濱へ來合せてゐた、

ひ　此邊には珍らしく白の夏服を着て、麥藁帽子を冠つた若い人—

（出　—あとで村役場の人とわかつた——に話しかけられて、宿の所

——　も教へて貰つた。

『八丈ホテルと云ふのがありますが、それよりは三平さん所へいらつしやい。料理屋をしてゐるのですが、なに宿もしてくれますよ。氣樂な家だからまあ行つて御覧なさい』と云ふのであつた。

のである——であつた。まるで演說でもしてゐる様な口調で話しかけるのであつた。砂糖黍や、唐茄子の畑の間をしばらく行くと、右手に木造の小學校があつた。爺いさんは大聲で云つた。

『これは豫算一萬圓で此頃村で建てた學校であります』先づこんな口調である。

それはよかつたが、所謂『三平さんの家』が近づくに從つて

『旦那、あなた方は都の方だから、此所等の男よりはきれいだ

や。三平さん所には別嬪のかみさんがあるで、うまくやらつ

やい』

と……同口調の、切口上でやるのだか

ら、吹き出さずには居られなかつた。

村へ來た。どの家も椿の木立で圍まれて、道と、家と家との境界は石垣で仕切つてあつた。地面は一面の黒い火山灰である。三平さんの家へ着くなり、かみさんに水を汲んで貰つて、汗を拭いたり、頭を洗はうと思つて、思はずずにしたシャボンを地びたへ取り落すと、一面に黒い砂がついて、とつても／＼取り切れなかつた。

×

村をあるいて、一番はじめに氣がついたのは、暑い時分でもあつたらうが、女達が皆裸かになつて、腰巻――それも紺がすりの――一ツで、穀物を臼でついてゐる風俗であつた。椿油の廣告の長い髪の毛を引ずつてゐる女の畫を見て、あれは嘘だと思つたが、實際あれ程でなくもずゐ分髪の長い女を見うけた。

此島は水に乏しい所なので、方々へ長い樋を渡して、雨水を受け、それをどの家にも備へつけてある大きな水桶へ導いてある。水桶には青々と苔が蒸してゐる。しあはせな事には度々驟雨がして、その水桶に水があふれ出すと、桶のへりを傳つてちよろちよろ小溝へ流れ出す。椿の葉蔭を洩れた丸い日かげがちらちらその上に躍つてゐるところ、私達は折々髪長き女が櫛を水に浸して梳き上げ、またはその髪を洗つてゐるのを見た。

三平さんの家には風呂がなかつた。料理屋と云つても、普通の百姓家の、台所を合せて高々三間しかなく、その一間を私達が借りて額を突き合せて寢てゐると、襖一重隔てゝ時々飲みに來る村の若い衆の、わいせつな唄も聞かうと云ふ所だもの、それも無理はなかつた。で、私たちはよく風呂を借りに、隣りの家まで行つた。風呂は無花果の葉蔭の、茅葺きの堀立小屋にあつた。隣りが牛小屋で、うつかりしてゐると、肩の所から涎だらけの獸の頭が覗くのである。

風呂に續いて、私たちを弱らせたのは便所であつた。何の事はない、大きな野壺と云つた恰好で、さし渡し一間もあらうかと思はれる穴を地面へ堀り下げた上へ、板を二枚渡して、其一枚一枚を踏へて用を足さうと云ふのである。二枚の板を除いた前後左右は全く凭るべきものがない故、なれない中は余程中心をうまく取らぬと、轉び落ちて、ひどい目にあはないとは限、

これも野壺と同じく、茅を揃へて入口から奥へ、後下りにしつらへてあるのみだ。雨の日には傘をもつて入らねばならない。夜は提灯を持つて用を足さねばならない。他に一物の蔽ふものもない所とて、其前を往き來する人にあさましい姿を見られるのはありがちの事である。よくあの邊の女たちがあれで耻かしく思はない事と思ふ。

×

三平さんの所へ泊つて、二三日經つたと思つた頃、ある朝かみさんが私たちの部屋へ來て、如何にも云ひにくさうに、金を何がしか借してくれないかと云つた。それはおたちになる時、宿料からさし引いて貰へばよいとの事であつた。後で拂つても、前に取つて貰つても同じ事なので、私たちは云ふだけの金をさし出した。そして一所に外へ出て、村をあるきまわつて、お晝になつたので歸つた。

すると、またおかみさんがやつて來て、今度はさも恐縮した風で、

さう恐縮がられる譯もないので、いゝえどうしましてとか、何とか返事してゐると、も一度『本當に濟みませんでした』と繰り返して置いて、實は今朝村の駐在所から、あなた方の事に就て取調べる事があるから、とりあへず主人に來いと云つて來たのです。斯う云つては何ですが、私たちはまだあなた方がどんなお方だか、委しくは知りませんので、失禮だがどんな事になるかもしれないと思つて、宿料だけは頂戴してをかないと思ひましたので、あゝした事を申上げまして。悪く思はないで下さいと云つた。

『へゝえ、で、どうなつたんです』とたづねると、かみさんは答へて、ところが主人が行つて見ますと、村の者の中でどう聞違へたか、あなた方が女連れの驅おち者だと、駐在所まで密告たものがあるのです。で、巡査がお前とこの客は女連れだらうと云ふので、まるで話がちがふものですから、よく話しあつて見るとはじめて聞違ひだつたと知れた譯なのですと云つた。これには私たちも驚いた。それは三人の中でやさ男は居ないでも

ない。併し女に見違へられる程でもないのにと云つたら大笑いになつた。

『でも此邊の巡査は呑氣ですねえ。そんなら何も御主人を呼び出さないで、自分で來て見たらすぐ知れる事ぢやありませんか』と云ふと、

『えゝ〳〵呑氣ですとも。此嶋では滅多に泥棒なんぞも居ないので、巡査は毎日魚釣りをして暮して居ます。制服を着てあるいてゐたのも見た事はありません』との話しであつた。

よく聞けばそれも無理がなかつた。高々周圍が何里と云ふ嶋では、物を盜つた所で山へでも逃げ込まねば隱れる所がなかつた。逃げた所で食物がなければ里へ戻らねばならない。船に乘つて逃げるにも四方は荒海である。うつかり逃げ出して、このあたりを渦卷き流れてゐる潮流にでも引つかゝらうものなら、それこそ何處まで押し流されるやら知れたものでない。そんな危險を冒してまで人のものを盜らうとするものがないのはあたり前だ。道理で、晝も夜もあけ放しで、金入も時計もほり出してあつても、何も事が起らない筈だと思つた。

×

そんな事から私たちは、三平さん所のかみさんや主人とも親しくなつた。主人の三平さんは相當に教育もあるらしく、そして男盛りの年配なのだが、どうしたものか何もせずにのらくらして暮してゐる。時にかみさんに怒罵られて漁に行く位が落ち。

三平さんは暇があると私たちに向つて、嶋に傳はつてゐる古人たちの話をして聞かせた。ずつと昔しの爲朝の傳説や、降つては浮田秀家の事や、維新前までの嶋の樣子を面白く話した。その大部分は忘れたが、今になつても頭に殘つてゐるのは、此嶋に流されたのは、前云つた如く、幕府に取つて危險思想家と目せられた人が大部分であつて、其等の人達は皆進んだ教養を有ち、嶋人の子弟を集めて薫陶した。中にも京都上賀茂の神官で、何とか云ふ勤王家であつた人は其功最も著しかつたと云ふ。其ために其れらの人々の感化を受けて、かゝる僻陬の地に似ず、いまでも教育の程度は比較的に高いと云ふ事である。また方言を説明するために、三平さんはこんな唄があると教へてくれた。

『ばつくり、うんなびいて、そでひつつかみやあて、おみや、

けわす此あめに』（譯して『下駄を脱して、袖引止めて、お前何所行く此雨に』）

×

する中に、私たちは此土地にも飽いて來た。飽いたからと云つてすぐ歸る事は出來ない。何しろ横濱から出る郵船の船が一度――それも小笠原嶋往航の途中に寄るだけで、歸りは寄港しない――と、東京灣汽船會社の定期船がたしかに月二三度往復するばかりで、定期と云つても暴風でも續けば、その間だけ延びるのである。行きたい時に行け、歸りたい時に歸れないと云ふ事は、つくづく私たちをして嶋流しの感を深くさせた。そろそろ私達の顏につまらなさうな色が浮んで來たのを見ると、三平さんは親切に一層嶋を一周して來てはどうですとすゝめて、自ら案内に立つた。あたりの景色を探ぐり乍ら物の一日半もかゝれば人の行ける所だけはぐるりと廻つて來られるのである。

私たちは朝早く三平さんの家を出て、道々寫生なぞをし乍ら私たちのゐた村とは反對の側の大賀郷を經て其夜は樫立の三平さんの知人の家で泊めて貰つた。そして大に歡待された。そのあくる朝である。其家で朝食をしたゝめてゐると、郵便脚夫が來て其所の主人に、

『郵便物は九時までに出して下さい。××丸は正午に出帆するんですから』と告げて行つた。

『出帆』と聞くと私たちの胸は轟いた。よく聞き訊すと、一昨日あたりから三つ根の沖に止まつてゐる東京灣汽船の××丸が東京へ向けて出ると云ふ事なのである。誰れが云ひ出したともなしに、私たちは嶋まわりを止して、今日の船で歸らうではないかと相談一決した。樫立から私たちの泊つてゐた村まで、急いで行けば三時間で行ける程の道のりであつた。その時は朝の八時頃であつた。歸るとなれば矢も楯も堪らずなつて、殘り惜しさうに引き止められるのを厚く謝して、其所の主人に椿の花咲く頃の再游を期した上、三平さんを促して飛ぶ樣に宿まで歸りついた。そしてあたふたと纏めて、豫定通り××丸に乗り込んで、あくる朝東京へ着いた。私はそれ以來此嶋を見ない。もう十年程にもなるがいまだに再游の約を果たせる機會が到來しない。そしてその機會が何時來る事やら、毎日侘しい朝夕を迎へ

送つてゐる今の身の上では、それも判然しない。でも私は何時か椿の咲く頃に渡らうと云つた、其希望を棄てないでゐる。

□

京都では、その昔伊豆の嶋流しに定められた人達は、高瀬舟に乗せられて、あのせまい堀割りを淀川まで下るのであつた。別れを惜しむ人たちは涙を袖に包むで、舟のあとを追ひ乍ら伏見まで行つて、其所で鬻いでゐる泥人形を求めて、遠く行く人の道の伴侶ともしたまへと、舟に入れてやつた。それで伏見人形には美しい姉さんもあれば、爺、媼、小供、犬、猫の形まであるのだと、ある年老つた人から聞かされた事がある。その眞僞は知らないけれども其話は不思議な詩趣と色彩とを添へて、折々私の想像に上る。そして、その度に思ひ出すのはあの椿の嶋である。その爲に、最初ソオヴァアジュに見え、親しみ難かつたその印象も何處か modifier されて、恐らく實際よりはいまの私の頭にある方がずつと美しいものになつてゐるのではなかつたかと思つたりする。

（一九二一、五、一）

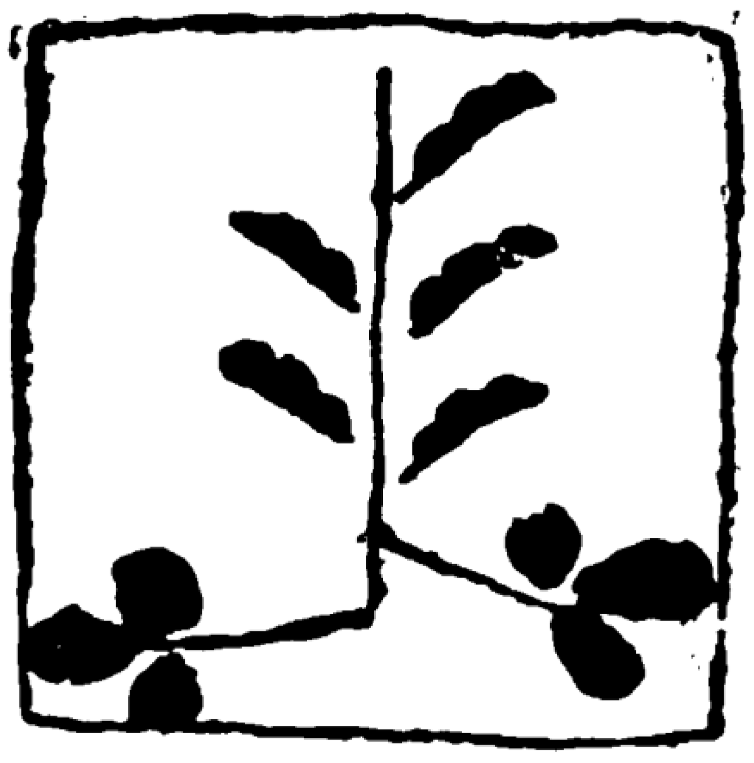
中山　啓

○

浪を見てをれば岩は川上へのぼる如し
わが立てる岩危くゆるる

○

屏風岩を離るれば水は急に立ち騒ぎ
岩かみ岩のゆるる早瀬とかはる



島原紀行の中から

大泉黒石

断章の一

私がまだ故郷の長崎にゐる頃であつたが、近いうちに中學を出て東京へ上ると云ふ話をある西洋人にしたところが、その西洋人が俄かに眉を潜めて、こんな景色のいゝ人氣の諄朴な半島から東京のやうな殺風景な處へ行つてお前さん辛抱が出來るかい、用が濟んだらさつさと戻つて來ることだと云つた。勿論東京がどう云ふ風に殺風景なのか知らないから、私は只さうですか、それでは成る可く早く戻つて來ませうと答へたことを今日時々思ひ出して、その時分住み馴れた長崎のすべてのものにあまり親しみ過ぎたゝめにそれほどの興趣を覺えなかつたことを馬鹿々々しく思ふことがある。自分の生れた場所をほめたところで決して見つともなくないことだと思ふから、逢ふ人毎に國の自慢をすることにきめてゐる。長崎といふ昔ながらの古風な町は西南に港がひらけてゐるだけであとは山なのである。その山は左ほど高くないが、登りにくい山なのである。私はその山に登るのがその頃たつた一つの樂みであつたと云ふのは、空が晴れてゐさへすれば、島原(しまばら)や天草(あまくさ)や五島(ごとう)などが霞の中に遠くすく〱見えるからであつた。それは殆んど水平線に近い景色であつて、すぐ私の足もとには、港口の小さい島々が恐ろしきまでにくつきりと海原から突出して眺められた。白い波がしらが北折のゆたかな濱に沿ふて、一里も二里も三里も四里も糸のやうにうねりうねつて行くのがことに美しかつた。そうした大きな凸凹の烈しいパノラマは、とても關東や關西のやうな平盤な國では見らないと思つてゐるが、その頃その山々に一人立つては殆んど毎日のやうに島原天草曾遊の空想に耽つてゐたことが、實際に現はれたとき私はどんなに歡んだことであつたか。

断章の二

私がはじめて島原に遊んだのはその頃のことであつた。長崎の街を南へ歩きつくしたところに、小さい断崖があつて、その断崖の中腹を垂直に截つた跡に茶屋がある。そこから一條の[illegible]

り路を一里あまりだらだらと下れば小さい港になる。その港は寂しい漁師の町ではあつたが湖の色や、山の姿がことに變つてゐたゝめに、西洋人が別莊をつくつたり、大きなホテルが出來たりして、その入江の鼻にあつた汐見崎の觀音寺に月々町から詣づる善男善女の足も繁くなつたのである。そこから私は始めて小さい三百噸ばかりの汽船で島原へ渡つたのである。それは一等も二等もない田舍々々した船で、恐ろしい千々岩灘を拔けるまでにはひどく揺れた。船の上から島原の突端が判然見えて、そしてその岬を歩いてゐる素裸の男や女の形が目に映る時分に、大きな岩の洞門が波の間から突つ立つてゐることも解つたりなどして、口ノ津港に入つた。口ノ津からは目の前に天草が見えた。こゝから、天草へ行けば嘸近いだらうなどゝ思つたこともあつたが、そこからは船の便がなかつた。たゞ島原半島と天草の島との間の、所謂天草灘に無數の漁舟が波に浮いたり消えたりしてるだけであつた、私が乘つてゐた船は島原の港行だつたので、口ノ津で二三人の客を上げたり下ろしたりして了ふと、すぐ有明海へ向つた、そして一時間ばかり立つと私は布津と云ふ村で船を棄てた。そこは島原亂の古戰場だつた。そしてその村に庄屋をつとめてゐた人の子孫で原と云ふ中學時代一人の友人が波止場まで私を迎ひに來てゐた。

その頃は今のやうに肥前の諫早驛から港まで汽車が通じてゐなかつたやうだつたから、歩るくのが面倒な人は皆この船で行つたものである。今は九州鐵道と島原の鐵道とが連絡して、その線路を日本で始めて通じた東京横濱間の汽罐車が走つてゐるから、一寸妙な感じがする。二度三度目に出掛けた時、私はこの因緣づきの汽車に乘つた。

斷章の三

切支丹が禁ぜられて、島原に內亂が起つた其跡は何處にも見ることが出來なくなつたと思つた私は、この村で一夜を明して、翌日人力車で島原港へ出掛けた時に、當時の切支丹宗徒が立ち籠つて德川勢を散々に惱ました島原城の石垣や堀のあとや、その頃基督を祠つてゐた神社の廢墟を發見して歡びに絕へなかつた。『鍋島信濃守殿父子其勢一萬餘人、立花左近將監殿父子共勢一萬餘人、引續き板倉內膳正殿其勢三千餘人、有馬家の分々一萬餘人、寺澤松倉兩侯同勢も其中に打ちまぢり楯竹束を用意して鬨聲をあげて押し寄せたり』と云ふ昔の記錄に切支丹宗徒包圍軍が屯したところには瓦ぶきや藁屋根が鱗のやうに廣がつて、『山上は白雲のたなびくが如く必死を究めし諸浪人の勇士を始め一の揆黨民二萬餘人寄手來らば一戰なさんと待ちかけたり』とあるその農民が到頭屠られて投げ込まれた堀の中に甘

雜草にまじつて白蓮が處に花をつけてゐた。初夏には斷雲が多い。ことにこうした海と山に挾まれた釜地の空には白い雲が絶えず飛んでゐて、その雲が城下の海に映るところは恐ろしくも美しいものであつた。城あとからはさだかに見えないけれども濱つきに出て見ると、港ぐちの松島がぼんやり見えるし、私が泊つた宿の座敷の直ぐ前にも松島の一つが紺青の水に浮いて見えた。「あの松島は全體でいくつありますか」

「そうでしけなあ。八十八あるちいましがな」宿屋の娘にもよく解らぬらしかつた。

「船頭が居りましけん。舟でも出して見まつしよか」

「此宿に傭ひの舟子がゐるのですか」

「そうでしたい」

ところがその日波が少し荒くて何となく氣味が惡いし、海にはあき〱してゐた私は、それに及ばぬと云つて斷つたが、大低の客はこゝに四五日泊つて松島をめぐるのだと云つた。「舟は結構だが、この邊に不知火が見えますか？」

「いゝえ。」

「出ないのですか」

「どうでしか知りませんばい。妾は一ぺんも見たことがありませつけんどな、夜妾たちが潮につかると、水の底から銀のやうな玉が百も千もぷか〱浮き上つて來て、お了ひにや肌一ぱいにくつつきますばい。」

宿と云へば、一條か二條しかない通りの、この濱つきに石垣を築いて、ずらりと列んでゐる。その客間は大低こうした海を見下ろす處に構へてあるから、涼しい潮風が海面からまとゝに吹きつけて來た。そして、食べるものと云へば、この海で漁つた魚が多かつた。前を眺めるのは雨の日の他は大低熊本あたりの陸地を見るためで、後ろは、直ぐゆるやかな綠色の勾配から嶮しい溫泉嶽を見るためであつたと思ふ。

斷章の四

何遍遊びに來ても最初の印象ほど強いものはないと見えて、どうしても初め一目見た風物が目さきにちらついて、どつちかと云ふとそれがなつかしくもある。私は港町からまた俥で札津の村へ戻つた。その夜私と友人とは、彼の家の二階で枕を列べて寢たが、夜半に目が醒めて蚊帳の中から外を覗くと、戸が締めてなかつた。海に面してゐる高欄にかさ〱と音がするのも見れば、天井から這ひ下る蟹がゐたのであつた。蚊帳には青白い田の虫が一ぱいたかつてゐた。私はまたさわ〱と騒ぐ波の音を聞き乍らとろ〱と眠りに落ちた。翌る日友人は「どうだい。これから溫泉嶽へ登つて見ないか。またいつ來るか解らな

いし、この邊の海岸よりはずつと氣持ちがいゝよ」と云つた。

その朝であつた私とこの原と云ふ男とは竹杖を拵へて尻をからげて二日の豫定で溫泉嶽へ登つたのであつた。長崎にゐると夏になれば、料理店や停車場やそのほかに人の集る處だと、私は乾度溫泉嶽の廣告を見たものだつた。溫泉嶽と云ふよりも、その山の西麓に拓かれてゐる小濱と云ふ溫泉町へ街の人や旅人を誘ひ出す廣告を見たものであつた。こゝに私の死んだ叔母が死ぬ少し前にこの小さい湯の町に湯治に行つて居つたことから、一度は出掛けたいところだと思つてゐたのであつた。その小濱の町と云ふのは今私達が登りかけた山路とは裏表に當つてゐた。小濱には西洋向きのホテルやカフエーなどもあるが、この有明海濱に沿ふた村々には、まくわ瓜をひさぐ小店の他に何にもないので、私達は海拔三千尺の高山に登り切るまでは、何一つ食べることも飮むことも出來なかつた。ことに小濱から登れば、籠があつた。西洋人や都會から集まる女達は大低このパランキンに乘つて登るから左ほど骨が折れず、途中で休む必要もないのであつたが、布津の村からは、そんな便利なものもなかつたから、私達はその雨と霧とに包まれた山や谷蔭をとぼ／＼歩るくうちにも、蝮に襲はれる用心をし乍ら、何遍腰を休めたか知れなかつたが、登り登りに、一帶の小松原があつたり、夏鶯のさへづりを聞いたりして足をなぐさめてゐた。溫泉町に近づくにつれて、山肌は赤土と粘土に化つて、町の入口に來た時には、黃昏空とすれ／＼に眞紅な山躑躅の林に出會した。溫泉町は全體の人家を數へたところで百戸あるかしらと思はれるほどの小さい部落であつたが、町圍んでゐる壁のやうな丘の足元から、物凄い勢ひで噴き上つてゐる眞つ黑い熱湯圓柱の轟きが、今にも飛びかゝつて來さうな場所にこうして喘りついてゐるやうな家々が全部木賃宿だと知つたときには、流石に面白く思はれた。町を貫いて一筋のどろどろした路があつた。その兩側に家が列んでゐた。その一番端に西洋館が水色ペンキに塗られて白々と見えた。それは私達が小濱屋と云つた木賃宿に落ちついてから知つたのであるが、西洋館のホテルには長崎から遊びに來てゐる外國人が殆んど空間もないほど一杯に逗留してゐた。そして、こゝから十七八丁も登つた山嶺から切り出して來る天然の氷を小錢を出して買つたり、海岸からこゝまで賣りに來る魚の手から鯖や鰯を買ふが頗る奇異に見えるのであつた。私は友にこう尋ねた。

「僕等もやつぱり自炊しなければならないのかね」

「實際はそうなんだが、こつちで魚野菜を買つてやれば、宿の女中が煮てくれることになつてゐるのだ」

その晩、それはまだ私達の足の疲れが癒へないうちに、熱湯をさまして導いた錢湯へ出掛けて、歸りに出會つた魚屋から鯖を五六匹買つた。宿の女中が膳を片づける頃から、ひどく冷え込んで來た。私達は浴衣の上から借り物のどてらを着込んだ。

「今夜はゆつくり寢て、明日この邊一帶を歩いて見やうぢやないか」

「それがいゝ。だが、朝晩は氣つけたまへ。時によると、氷のやうな雨が降つたり、霜が降つたりするから」

女中は私達の貧しさうな姿を見て、

「あの、夜具は十錢にしませうか。二十錢にしませうか」

と云つた。そして私が不愉快な顏をしてゐると、友人はかう說明した。それは、この町の宿は皆木賃だから碌な夜具はないのだ。五十錢の蒲團を貸せと云つてもないのだ。どんな金持ちでも此溫泉場だけは抱辛をしなければならぬし、何も彼も貧乏人を標準として作つてゐるのだから、平等だと。それでも、溫泉があるのと、空氣がいゝのと、馬鹿に安いのと、暑さを知らずに夏が過せるので、どの宿も家族を携へて來る都會の客で滿員なんだと。その客と云ふのは、この半島の百姓達や商人や、長崎の街の人達に限られてゐるやうであつた。その人達がこの部落の端に造られてゐる洗湯にぞろぞろと出掛ける。五錢の湯と十錢の湯と二つあつた。私は日光の湯元にも行つたことが、その邊の空氣とよく似てゐると云つた。たゞ日光の方はいくらかお貴族的であつて、この町の湯がずつと平民的な氣持ちのすることが大きな違ひであつた。そこで、地獄の湯をこして饂飩粉に混でて拵へた輪形の駄菓子を賣つてゐた。その側に硫黃臭ひ湯の花や湯の花せんべいを列べてゐる小店もあつた。ひやひやする灰色の霧の中から、時々は地震かとも思はれるほどの地ひゞきを立てゝ噴出する大地獄小地獄の湯の音が聲えた。私の宿は叫喚地獄に近かつたゝめに、その夜は幾度もこうした響に驚かされたのであつた。夕方少しも氣づかなかつた路面が、翌朝見ると、一面に黃味を帶びた絲錆でも吹いたやうに光つてゐて、今にも湯氣を吹き出しさうにぷくぷくと動いてゐる足元を平氣で町の人々は往つたり來たりしてゐた。そのなかには、山頂の洞穴から一夜をすごして小濱の方へ下つて行く氷豆腐賣もあつた。洞穴の中で豆腐を凍らせるのが彼等の仕事であつた。

これから一通り此邊を見物するつもりで、私達は脫ぎ棄てゝ置いた草鞋を又穿いた。



縮撮山水

岡本一平

房州波太（なぶと）仁衛門島といふ島がある。岩礁ほどの、小さい島である。此島を一軒の家で持つて居る。先祖が頼朝公から、住まふのを許されたと云ふ由緒のある家柄に、相應はしい石で見付の様に拵えた門、黒光りする程拭きこんだ柱や縁側の奥座が敷古風だ。前の渚には、生洲があつて何時でも鯛が飼つてある。陸地との交通は川程の渡船によるのだが、そこは、難所と見えてオイそれと船頭が船を出して呉れる日は月の中何日もない。

□

この太洋中の孤島に似たる島へ行つて、懐つかしく思つたのは、岩の上の貝殻の多い砂を耕して畑が出來て居ることである。其處には藤豆の花や茄子の花が咲いて居た。石塀の中には芭蕉が一株青かつた。

島の家の人は庭の池の金魚を自慢そうに示した。

□

房州小湊誕生寺前より船を出して鯛の浦見物に行く。場所に着く。船頭が柄杓で海水を海面へ汲では注ぎかける。それから持つて行つた鰯の子を投り込んでやる。そこへ浮き上つて來た鯛は黒い頭が禿げて穢なくなつて居る年老いた鯛であつた。

□

上總おせんころがしを車に乘つて通ると車屋が崖下の海水を透かして海底を覗かせる。其處には昔、人の住んだ跡があると云ふ。あれが柱の跡で、此方のが竈の跡など、細かく説明する。成程そう云つた、跡がある。嘘か眞當か、よりよく頭を働かせ様とすると、旅の興味は、無くなる。

□

房州館山灣で稻光のする翌る朝は烏賊が、渚に打ち上つて居て、幾等でも拾えると云ふ話を、土地の人はする。此方が行つた時には、一度も稻光の夜に、遇はないから、拾つた例がない。

□

房州布良(めら)は美術學生が盛んに行く處だ。其處の宿屋では、座敷を穢されるので畫學生を入れる部屋は一つの間に定めてある。其部屋へ入つて見ると長押や襖に繪具の滓が接着いて居る。

□

房州金谷(かなや)の宿より二里より近い港へ行く街道筋に、黄金井戸と云ふのがある。二三間深い洞穴に、水が溜つて居る。菜の花が咲く時分と云ふから、夏は見えないが、その時分にこの水溜りが黄金色に、光を放つ。昔の人は遠方の菜の花が寫つたものとてし、奇蹟として居たが、實は珍らしき、光蘚だそうな。前の理髪店へ棚の締を開けて呉れる樣賴みに行くと講談本を蓋にして、午睡して居た。おやぢが不精不精鍵を持つて出て來た。寢惚け眼に不機嫌と來て居るから鍵が仲々穴に嵌まらない。前の街道筋には、この近在から港から船で横濱へ渡つて自分の乳を、賣りながら、お產をしに行く、牛の產婦が、飼主に勞はられながら、時々通る。同じ房總線の青塚から、一里余の所に、念佛池と云ふのがある。錢を投げ込んで合掌して、至心に念佛を唱えると、池底の砂が、四五寸ムク〳〵と持ち上がる。池底の砂へ水が涌き出す具合で、斯く砂を持ち上げるのだ。だから念のため、お賽錢も上げず、合掌もせず、念佛も唱えず、默つて見て居ても、池底の砂は矢張り、ムク〳〵持ち上がる。

奇蹟好きの旅人は、これにて馬鹿馬鹿しく思ひ、又物足らぬ樣にも思ひ、踵を返して、社の外へ出る。

たしか、その社は辨財天が、祀つてあるとか聞いた。

□

山陰道伯耆國美保ケ關海中に突出し左右に岬を控えた名所である。神社がある。惠美須樣を祭神として居る。此處の惠美須樣は、傳說があつて、鷄を非常にお嫌ひだ。土地の者に誓はれて云ふにはどうか鷄だけはこの美保ケ關へ入れて呉れるな、左すれば何の成業をしてなりとも、衣食の事に事は缺かゝせない

だらう。美保ヶ關の住民は、その位の不自由さを忍ぶ位で、生活を保證されるなら、この方が割がいゝと、今でもこの掟を守つて居る。鷄を喰はないだけで、生活を保證されるなら、階級鬪爭も、富の分配も、何も必要はせぬ。逼迫した國民は、須らく、此處の惠美須様を總理大臣に、推戴すべきである。

その代り卵が必要な客の懇望があると、家鴨の卵を出して來る。船で遊びに來る所らしい。旅館兼料理屋が海沿ひに軒を並べて居る。宿屋の裏庭の戸を開けて波の寄せる石垣の上に出る。其處で小さな海老を餌に付けて、投り込むと、酒の肴のぎすけ貴位の大きさの、小鯛が釣れる。海老で鯛を釣ると云ふ諺は、眞實だ。右手の岬の端に在るのが、有名なる關の五本松である。「關の五本松一本切りや四本あとは切られぬ夫婦松」と云ふ歌を港では唱ふ

晴れた日は伯耆大山を眞向きに眺める。生烏賊とも鯣ともつかぬ程度の濕度を帶びた生干の烏賊が此處では美味い。

□

安來節のお糸が出た安來は軒を連ねた漁師町だ。安來千軒名の出た所社日櫻に十神山。」

すぐ前に全部松に蔽はれて、綠の饅頭の樣な山が有ると云ふよりは湖水に近い濃と翠さとを持つて居る水に影を浸して居る。これが歌の十神山である。全く水際迄、松の木は、水あるを知らず顔に、生え下つて居る。

□

山陰道松江市は、繪卷物の中に、描かれたる都市。繪卷物を操つて行つて、一つの蠻の、大きな塊がある。その塊の中には、商家あり、京都風の好を見せた衣裳風俗飾窓を有する吳服店や、陶器所の店あり。種物屋あり。玩具屋あり。生魚商の店には鰻の籠に噴水を垂らしてある。骨董商がある。宿屋がある。官衙がある。これ等の變つた生活は皆、之不昧公の御城下と云ふ、錆びた水墨の中に潤ふて居る。行人も共に潤ふ。

繪卷物を更に操る。其處にも一つの蠻の塊がある。塊の中には新築の銀行、玩具屋、理髮店、金物商時計商、等の樣々た生活がこれ又之不昧公の御城下と云ふ、水墨の中に潤つて居る。行人も共に潤つて居る。この塊と彼の塊と離れんとする關係を

風雅なる一つの橋で繋ないで居る。松江大橋である。橋下の水は直ちに大洋の如き、宍道湖である。空莫なる水面に、觀者の眼を飽かせまいとして、程好き位置に蜆取りの船が居る。土地の人が歌に唱つて愛する、嫁ヶ島も、蜆船の近かくに在る。鳥居が立つて居る。

舊家老の邸を造作仕直した、旗亭で飯を喰ふと、鯉の糸作りと云ふのを持つて來る。身をそうめんの樣に細長く切つてそれに茹でた子の粒が南京玉の樣に細かく振つてある。自慢の妙酒と云ふのにつけて、喰ふ。緑樹を越して其處は宍道湖だ。

町の中を右往左往する。行き當れば其處は何處でも宍道湖の水である。

安來節の中で出雲訛のみを集めて作つた歌を副えて置く。

雨のひるふに（降る日に）竹やび（竹藪）こえて來て見りや勘太がたかうぶき（新）あだんちやどげしよか（わたしやどうしよか）このちやつちや（この兄貴は）腹がたち（たつ）

□

夏目漱石先生の著の「坊ちやん」遺跡を探ぐりに、松山から道後へ行つたことがある。高濱へ汽船で着いて、一休した後船を雇つて、釣をしながら、坊ちやんの中に在る、赤シャツが、ターナー島と名付けた島を、物色する。高濱の海には、島が二つある。九十九島と云ふのと、四十島と云ふのとである。九十九島と云ふ方は、肩甲骨の樣な骨立つた岩波に洗はれて根元に貫通した穴等があいて居る。島の頂に松の樹が潮風に節くれ立つて居る。四十島の方は鬱蒼として草や木が繁茂して居る。何方も余り大きくない。漱石先生の想を構えたターナー島は、マドンナと假稱する女を、あの松の樹の下に立てたらと云ふ、說明があるから、松の生えて居る、九十九島の方かも知れない。糸を下すとベラが一番釣れる。間に混つて鯒が釣れる。五月蠅なる程釣れる。餌についたのも構はず、打つちやらかして置いて、船中に寢轉び、河一つ距てた程の、ごご島の景色を眺める。美しい紫色の中に、眼を見据えて居ると山の背を、開墾した跡や、人家の屯して居るのが見出される。人家からは煙を吐く樣だが直ぐ全體の紫色に呑まれて仕舞ふから搖曳する迄に行かぬ。波も靜かだし長閑ないゝ避暑地だ。

——(水山撮縮)——

□

道後溫泉へ行く鐵道は二つの會社を憲政會と政友會とで作つて競爭して居る。直ぐ隣り合せにステーションを並べて驛夫が鈴を振つて客を呼び合つて居るのは笑止だ。

溫泉は共同湯になつて居て、洒落た立派な建物だ。湯錢に差別が付いて居る。上等の湯札を買ふと、三階へ上つて床間に懸軸がかゝつて花が生けてある室で、更衣させられる。それにうちものお菓子にお茶を持つて來る。普通の湯は何も待遇はない。着物を脱いですぐ石疊を降りて行つて浴槽へ浸かる。緩い湯だ。大きな湯の出口を圍つた壓えがある。一寸橋の擬寶珠を肥らせた樣な、或は茶釜を縱に細くした樣な形である。その周圍へ萬葉假名でこゝの溫泉に因んだ歌が書き込んである。何とか云つた命が何とか云つた命を抱えて居る表徴圖等も彫つてある。湯の口からの湯は熱いので皆な浴びたがるが順番でないと不可ない。それで晝守の樣に浴槽の板に取付いて目白押に番を進めて行く。悠長なものだ。

□

中禪寺から出發する。湖岸を縫つて馬車は行く。空家の別莊が澤山ある。建てる時の思ひ立ちは至極よかつたのだらうが何程景色がよくても不便には辛棒出來ぬと云ふ眞理を見せた。西洋人だけは流石に偉い平氣で住んで居る。岸に近い水にポツカリ水死人が浮いて居る。この邊では發見しても屆け出る迄には非常な手數が要るので大概打擲つて置くさうだ。すると水死人は何日でも氣の向いた方へ漂ひ流れる故に馬車の御者が、「この土左衞門は一昨日は何處其處に居ただ」と馴染の樣なことを云ふ。

湯本の湖水に出る。湖水に出崎や島があつて、湖面は、變り形の瓢の樣に、處々くびれて居る。硫黄の香が鼻を撲つ。湯の村に這入る。外人の泊るホテルが一軒、濕氣を避ける二重硝子扉の設備がしてある。邦人の上客が泊る宿屋が、三四軒ある。食膳には湖水でとれる養殖した鱒の子を鹽燒にしたり、フライにしたりして持つて出る。或の宿は、よく慶應の幼稚舍生徒が、夏期修學に來る相で、宿のかみさんが、その腕白さを、我子の樣にして、自慢氣に話すと生徒等は、退屈すると、先生の手と

り足とりして、座敷中を、さげ廻るそうだ。軒を並べて、昔本の案内記にある樣な、木賃宿が並んでる。田舍から、本當の湯治療養の目的を持つて來る客に部屋貸しをする樣になつて居る。其處を過つて、野へ出はづれの處はどこもかしこも、硫黃の氣にむされて、木も石も靑白くなつて居る。悽慘の趣きを極めて居る。地獄の河原は、こんな所であらう。玆が元湯のあるところ。その周圍に、小屋が建つて居て、何の湯、何の湯といふ名のついた湯場がある。表格子から覗くと、薄暗い湯槽のなかに、病みほほけた老婦が、神妙に浸つて居る。本當に、身動き一つせず侵つて居る。えぐり取つた樣な、ほら穴のあいて居る鎖骨と肩胛骨との間のくぼみに、それでもかすかな息があるのか、滑らかな湯が、こころもち、そそぎ入りそそぎ出る。隨つて、湯の面に倒映する山や林の繪も、こころもち動搖する。

食後、座敷に寢轉んで居ると、階下へ異人の子が來て、畫をかいて吳れとせがむ。降りて行つて寫生してやる。すると今度は、材木の上へ乘つたところを寫生して吳れといふ。また今度は、檻のなかに這入つて居る豚を寫生して吳れといふ。その子のおふくろが予に氣の毒相に、もう澤山だろうと子供をなだめる。異人の母親も、母親らしいところはおんなじだ。そのうち、靑眼玉の腕白は池の中へ徒涉をはじめて、出て來た時には足を切つて居た。おふくろは、腕白を、見守り乍ら、毛糸の靴下を編んで居る。船で湖へ出て見る。靑い透きとほつた湖水へ、溫泉が流れこむ處だけ白く分明になつて居る。幽邃なお伽ばなしの魔の國の樣な、岬埼がある。岬埼に船を着けると、樹立の間から、人を神秘の恍惚に誘ひよせる靈氣にふれる。霧が、思ひのままに、山に這ひ、渚に這ひ、森林の奥に這つて居る。時々岸に近い方で、水面に跳ねる音のするのは、税を出して、釣ることを許された鱒釣りが、鱒の子を釣り上げるのであつた。砥ぐがごとく滑かな湖面に、風が渡ると、極めて小さいさざ波がたつ。その部分には關係なく他の平滑な湖面は靜まつて澄む。

□

足尾から日光へ拔ける道は荒い石礫の山や丘許りだ。風が來ると石が向ふ脛や頭へ當つて痛い陽の色もつれない烈しさに照

る。下を向きながら、二歩に一滴、三歩に一滴落つる汗を見守りつゝ、トボ〳〵と行くと人生味と云つた樣な味ひが湧く。

□

足尾へ更に山奥から材木を切り出す索道がある。峯と峯とに支柱を立て鐵の網を曳く。材木をぶら下げ電力の力で鐵索を辷き材木を送る。工夫の中でこの索道の材木に乘つて燒酎を呑みながら白雲の上、谷の上を越して、足尾の町へ遊びに來るのがある。稀に谷へ落ちる粗相もあるから命懸の風流だ。山の石楠樹が咲く頃が一番美事だそうだ。

□

和歌の浦は紀三井寺の多い石段を登つて其處から一瞥すると要領を得る。

外海の波が打寄せて內海の波と鬪ぎ合ふ所に洲が出來て居る。其へ持つて行つて外海から寄せる波が所謂片男波だ。洲の根元の所に小さな島がある。景色を引き締めて觀海閣や九輪の塔が建つて居る。淨瑠璃の文句にある下り松はこの島の外側に在るが今は殆んど枯れた。

鹽釜明神は皺の多い石の洞の中に祀つてある。颱風に錆びた御扉が洞口に懸つて居る。そこの蠟燭の燃えさしを安產の御守になると云ふて戴いて歸る。

土佐派の繪にある樣な雅かな玉津島明神だ。

權現の社は數の多い石段を登つて廣前に出る。保護建造物とて屋根を除くの他木の蓋をしてある。

和歌の浦とは非常に不調和な亞米利加のデパートメントストアの樣な建物が遠くに見ゆる。これは新和歌浦の新設備だ。新和歌浦は、益々、現代人を刺戟して遊ばせ樣とする興業的な京み場だ。兩側に毒どく並べたてた土產物や繪葉書を賣る店。宿屋は玄關に大鏡の衝立を置いた樣な小成金式の好みだ。兩側から女共が聲を爭つて呼び立てる。

□

一個所身投の流行る場所があるので、身投げ留めの番人を巡回させてるそうだ。

□

濱名湖の干潮に干潟に船を打擲らかしてダツ網の船頭と海老とる船頭と獲物を示し合つてそれから晝飯を始めた。



夏知らぬ三境

高須梅溪

隱れた外房州の奇勝

私は割合に夏まけしない方である。あの烈しい太陽の光りを浴びるのが、むしろ、好きである。それで、避暑と云つたやうなことは餘り考へて見たことがない。けれども夏季になると、一週間位の豫定で、海邊や、山間を旅することがある。左樣した時の印象その他について、二つ三つ記したい。

私が先づ人が知らぬ好適の避暑地だと思ふところは、外房州の海岸である。其の中でも、勝浦から小湊へゆく途中に於ける『おせんころがし』と云ふ有名な難處の邊が、殊に宜いと思つた。此は一方は削つたやうな岩石の山、一方は太平洋の波を控へて居て、古い家が、二つ三つ宛、點在して居る。全く人里離れたところだ。

此の春から、小湊へ行くには、別に平坦な新道が出來たけれども、それ迄は、此を徒歩してゆくか、或は馬車に乗つてゆくかしなければならなかつた。馬車が一度、顚覆すると海の中へころがり落つるよりほかはないのである。曾ておせんと云ふ女按摩が、こゝから轉り落ちて死んだところから、『おせんころがし』と云はれるやうになつたと聞いて居る。またある男が、自轉車で、此處を通つた時、誤つて海へ墮ちて、直ぐ呼吸が、絶えたと云ふ話もある。

私は、曾て小湊から勝浦へ出る時に此處を通つたことがあつたが、數町の間、誰ひとり人の影を見なかつた。而して太平洋からくる烈風が、直ぐに一方の小山にぶつゝかつて、強く私を

吹き飛ばさうとするので半町ばかり風の力の儘に急走させられたことがあつた。それで土地の人は、たとひ、馬車に乗つても此處へくると、數町の間、馬車を捨てゝ徒歩するものゝ方が多かつた。

中には、馬車の中で、小聲で念佛を唱へながら、無事通過し得るよう、祈る老人さへ見受けた。單に、斯うした話だけしても、夏日、肌を寒うするやうなところである。從つて『おせんころがし』を難場として恐怖するものが多いけれども、此處を避暑地として目ざして來るものは殆ど絶無である。唯私の友人G氏が一夏を此處に送つたと云ふ位に過ぎない。だが、避暑地としては、却てこんなところが妙だと思はれる。

勿論、宿屋などは無い。素人の家を借りねばならぬ。而してそれ等の家は、奇怪な形をした巖石の上に立てられてあつて、直ぐ下には、山のやうな怒濤が高い叫びをあげて吼えてゐる。家の窓からは、太平洋の青い色が無際限に見えて、颯と吹いてくる風の强さに面を向けることが出來ないほどだ。斯うした境地であるから、殆ど暑さ知らずだ。朝晩、遠く人界から離れて居て、海風と海波とに親むのみである。

朝早く床を離れて、太平洋から出る日の光りが、波を射て、やがて八方に金線を投げるのを見る時、或は夜に入つて、圓い月が、空にかゝつて、月光の下に波の狂ふのを見る時、頓に心氣の爽かになるのを感ずるのである。

『おせんころがし』の近くに、興津と云ふところがある。此處は須磨、舞子に似たところで、波の色が青く光つて、靜かである。此處も私は夏の舟遊などするに適して居ると思つた。けれども『おせんころがし』のやうな奇勝を見ることが出來ない。其の代りに、清海樓とか云ふ宿屋で、相應にうまい料理を喰べることが出來る。また東京から、此處までくる客が比較的に少い爲めに、成金風が絶體に吹かないだけでも涼しい。

けれども『おせんころがし』附近の素人屋で、シンプル、ライフを送つて、終日、家族のものと怒濤を見ながら、閑話したり、机によつて、冥想しながら、ペンを走らせたりすることが、一段の興味があるだらうと思はれる。

友人G君は、妻君と子供二人、すべて四人で、村長の家を借

りて、『おせんころがし』の附近で、夏の暑さを避けて居たが、眞に自然の眞趣に味到するには、斯うした大無名の避暑地を見出すに限ると誇つて居た。酒屋へ三里、豆腐屋へ五里と云つたやうな不便はあるが、新鮮な魚を味ふだけの便宜はあるから、ウヰスキー、くさやの干物、つくだ煮、鑵詰の類さへあれば、必ずしも、不便を嘆息するに及ばぬわけだ。

夏の姉ヶ崎

私は昨年の秋から、千葉縣の姉ヶ崎といふところに居る。姉ヶ崎は、矢張、避暑地の一つだが、殆ど東京の人に知られて居ない。東京から、約二時間ばかりで行けるところではあるが、私自身も、昨年秋まで此處を知らなかつた。ある夏、友人から姉ヶ崎へ遊びに行かないかと云はれた時、私は、それに對して、大原や、一宮をあげて、姉ヶ崎の邊鄙と不便とを想像して、それに反對したことがあつた。

ところが、昨年秋、神經衰弱に惱んで、轉地して、暫く靜養する必要があつた時、私は勝山や、北條へ出かけた歸途、不圖姉ヶ崎に立ちよつて見た。そこには、別荘風の新築した家が、四五軒ばかり立てられてあつたので、其の一軒を借りることにした。それ以來、私は初夏まで、姉ヶ崎に居た。勿論、此の盛夏も、そこで生活するつもりで居る。

此處は、『おせんころがし』ほどの奇拔な避暑地ではない。まだ北條、木更津ほどの繁華と便利もない。けれども余り人に知られて居ない丈に、何處か田舎の味が深い。眠つて了つて居るやうな町も、東京を見た眼には興味がある。

私の家は、畑に面して立てられてある。其の畑は、五町四方ぐらゐの廣さを以て、眼の前に展開されて居る。滿目唯『青』だ。鮮かな『青』の世界、『緑』の世界だ。それ等の畑を隔てゝ、藍碧の東京灣が、靜かに控へて居る。

波の荒い日は、東京灣が混濁して、青黒く見える。波の穩かな日は、白帆を張つた船がいくつともなく、沖の方に現はれて、悠々と動いて行く。而してガラス窓をとほして、軟かい風が、快く吹き入つてくる。朝の太陽がのぼる頃の海の色も宜いが、私は寧ろ夕日が靜かに西の空を染める頃の海の色が好き

だ。日は、極めて落着き拂つた女人のやうに、沈んで行く。

私の家の前には、小さい噴井があつて、其の水がたまつて、池を形造つて居る。池には青い藻が出來て、大小の鯉が七八尾、始終泳いで居る。私は筆硯勞働に倦むと、池邊へ出て、ちつと鯉の動靜を見ることがある。鯉は、世事人事の外に超然として、其の小さい、自由の共和國を樂んで居るやうに見える。時には、潑剌と水の上に跳ね返つて鱗と水沫を四邊に飛ばすことがある。それが、何となく、私に夏の涼味に調和したことを思はせる。

私は毎日、午餐前に、海岸を散步したり、廣い街道へ出て見たりするが、其の中で、一番、私の氣に入つて居るのは、城山公園である。そこは、もと城のあつた跡だ。それが小さな公園になつて居るのである。附近には、二三の別莊がある。

此の公園の頂上にのぼると、綠樹の下から東京灣を一望の下に眺めることが出來るので、眼界が急に豁大となる。屈曲しながら、延長して居る沙濱が白く見えて、すべての田畑は、はつきりした、正しい線で巧みに區劃された花圃のやうに見える。

眠りこけて、古び切つたやうな町が、青葉若葉の間に出沒して、陽光を浴びて居るために、美化された觀がある。左樣した景趣の前にひろがつて居る海は、藍色に輝いて、一大湖水のやうに靜穩を湛えて、柔かに囁くやうに、岸を洗つて居る。明麗、溫雅と云つたやうな風趣が、そこに流れて居るのを感ずる。

城山を下つて、山の中腹から、右へ通じた道をゆくと、そこは、高地になつて居て、畑には、麥が青々とのびて居る。それが無限に續いて居ると思つてゆくと、突然、丘の上へ出て、そこから、また海の一斷面が見える。四邊は、沈默の化身であるかのやうに靜かだ。爽かな、冷い空氣が、肺腑に滲み通るやうに流れてくるのを感ずる。

私は、大抵斯うした順序で、散步することが多い。此に居ての樂しみの一つは、朝早く、生きた魚介や、蟹の類を持つてくるのを買つて、直ぐに料理して、午餐の食卓に味ふことだ。私は朝起るのが早い方だから、肴屋のくるのを、いつも樂みにして待つのである。

姉ケ崎に於ける夏は、平凡と云へば平凡だが、割合に東京の

秩父赤壁の名がある長瀞の景致である。勿論旅行好きの人たちは、恐らく、長瀞を知らぬものはあるまい。だが、其の割合に東京から行く客が少いのは、秩父鐵道にがたがた揺られるのを好まないためか、或は交通が稍不便なためか。何れにしても、長瀞は宜いところだ。

夏になると、私が何よりも先づ思ふのは、水の美しさと涼しさとである。それには、海も宜い、川も宜い、けれども海にも川にも飽きた眼には、溪谷の美に心をひかれる。紀州熊野に於ける瀞八町は、天下の奇景として、誰れも嘆美しないものはない。恐らく、溪谷美の代表であらう。だが左様した風趣を東京附近に求めるとしたら、長瀞を擧げるよりほかはない。瀞八丁の縮圖がそこに展べられて居る。

一つになつて、幽邃な、涼しい感じを與へる。

寶登山驛で、溫泉の烟が、ゆるやかに立ちのぼつて居るのを見て下車すると、左方に長瀞の水を見ることが出來た。

私は先づ寶登山神社へ參詣してから、長瀞館と云ふ小綺麗な宿で午餐を食べた。此の家から、長瀞の一部が手に取るやうに眺められた。一瞥すると、それは山間の川と云つたやうなものだ。普通にそれは瀞溪と稱されてぢつと淀みながら、渦を卷いて流れて居る。其の水の色は眞青で可なりに底知れぬ沼のやうに深い。其の水をはさんで、兩岸に怪奇な灰色の長石が多く立つて、水の中にも、いろいろの形した岩が突出したり、[illegible]たり、横臥したりして居た。其中の比較的大な岩の上に、[illegible]した小亭があつた。そこで秋の月を眺めるのだと聞いた[illegible]

私は、午餐をすませてから、舟を傭うて、對岸へ渡つて見た。絶壁から細い瀧が蛇のやうに迂曲して流れて居るところがあつた。青葉が陽光のために白く見えて、水の上に影をひたして居るところもあつた。舟は寂靜な溪の上をすべるやうにして、對岸に着いた。舟中から躍り出て、岩の上に跳びあがると、そこには名工が細工したやうな岩が、いくつも續いて居た。雨水が溜つた岩もあつた。尖つて起つことの出來ない岩もあつた。だが單にそれ丈で、矢張眺の中心となるのは瀞溪の水である。

私が再び舟に乘つて、元の岸へ戻らうとし時、一艘の舟を浮べて、此の瀞溪を下らうとする白衣白帽の人たちがあつた。其うちの一人は寄居（よりゐ）に別荘を持つて居た松本幸四郎であつた。

其の夜、私は長瀞館で一泊しないで、其の附近の心安い家で涼しい一夜を靜かに寢た。蚊の多いのには困つたけれども、稻田を前に控へ、更らに長瀞の山水が、遙かに展開されて居ることを思ふと、爽かな氣分になつた。夜の明け方は、少し寒い位涼しかつた。翌くる朝、顏を洗つて、また長瀞の岩の上に起つた私は、ぢつと眞青な水を見下し乍ら、もう半日、此に居ようと思つた。

中戸川吉三

「兄弟とピストル泥棒」と云ふ私の小説は、作品としてもいろ〱な意味で好きな作であるが、(作家にとつてさう云ふ作は極くわずかなものだ)あの小説の題材に使つた、兄と二人の實際の旅行も、私には非常になつかしい記憶が殘つてゐる。

もう十二三年も前の昔になる。私は中學の一年生の時だつた兄も今の私より二つ三つ年の若い頃のことだつた。夏休に、北海道の釧路へ父を訪ねて一と夏送つたが、歸京の日近づいてから、急に思ひついて、釧路の奥の山を十日ばかり歩いてみることにした。阿寒(アカン)にしやうか、屈茶路(クチャロ)にしやうかと一寸迷つたのであつたが、どう云ふ都合だつたか屈茶路(クチャロ)の方を撰んだのだ。どつちもあの地方では有名な湖水で、釧路の町からは二十里以上もある、——丁度、北見の國と釧路の國との境のあたりを走つてゐる山脈に沿つてあるのだけれど、行く道はまるで違ふ。非常に交通不便なところなのだ。私の小説は、その屈茶路行の旅行で途中に起つた事件を描くのが目的だつたから、遠野(トウヤ)とか、標茶(シベチャ)とか云ふ途中の村落のことしか、背景に使はれてゐないが、實際の旅行の目的は、屈茶路の湖水だつたのである。往復に日をとられすぎて、屈茶路(クチャロ)湖畔には二日ばかりしかゐなかつた。今はどうなつてゐるか、——恐らく昔と變りもあるまい[illegible]ばかり[illegible]なか。——宿屋と云ふものはなかつた。湖畔[illegible]畔では堀立小屋のやうな[illegible]に泊めて貰つてゐたやうに思ふ。[illegible]テシカガ[illegible]した溫泉宿がある。湖

兄と私とは何等金もうけの目的でもあるのでなく、旅行すると云ふことだけの目的で、そんな不便な山の中へ來たことを不思議がられたやうに思ふ。附近に牧場でもあるとか、木材に關係した商人とか人夫との外は、故意々々遊びに行く者はゐないのだ。

湖水は非常に美しい。美しいと云ふよりは凄いと云つた方が好からう。水の奇麗さは、湖畔の住民が、湖水の水を飲料水にしてゐることでも解るだらうと思ふ。湖水の底は見える限り固い石の盤で、あまり深い底まで透いてみえるので恐ろしくなる私は兄とアイヌの乘る、丸木船で湖水に遊んだが、凄くて泳いでみる氣にはなれなかつた。周圍は十八里あつて、中に島もあつたやうに思ふが、驛亭の親父にいろ／＼おどかされてゐたから、島へは行かなかつた。ウツカリ風が出て、無人島に幾日もとり殘されたりしては堪らないからだ。溫泉は、湖畔至るところに湧いてゐる。湧き出る溫泉と、湖水の流れの一と條とが合して、はいるのに丁度好い、天然の浴湯が幾つも出來てゐる。兄と私とはどんなに喜んで天然の浴場を享樂したか解らない。

釧路川は、源をその屈茶路湖に持つてゐるのだ。十四里をうね／＼流れて、釧路の町を橫斷した末海に注いでゐるのだ。釧路地方の鮭は、卵を生みつけに、屈茶路湖までのぼるのだ。釧路の町では、はゞ二丁以上もある釧路川だが、屈茶路附近では二三間の底の淺いちよろちよろ流れだから、附近に住んでゐる熊が、のぼつて來る鮭を平手でひつぱたいてとる位な藝當は、さう難しいとは思へない。やりさうなことだと思ふ。もつとも捕つた鮭を、笹の葉にさしてかついで來る繪は、少々信用なりかねるけれとも……。

阿寒の湖水までは、山越しすると、屈茶路から四里か五里しかないさうだ。併しとても山越しはアイヌの他出來ないさうだ。釧路から別な道で行かなければならない。

阿寒は、屈茶路に較べるとかなり有名だ。不幸にしてついまだ私は行かずにゐる。屈茶路へは歩いて行く他、途中まで川舟を利用するか驛亭の馬で行くより方法がないが、阿寒の方は途中まで汽車がある。製材會社の關係でよほど開けてゐるやうだ最近は夏、毛唐が天幕生活をするために出かけたり、釧路の町

で團體を組織して出かけたりするやうだが、避暑のための旅行と云ふ呑氣な氣持より、探險氣分の勝つた旅行だらうと思ふ。湖水は屈茶路より少さいが、湖畔の風景は屈茶路以上素張らしいさうだ。雄阿寒、雌阿寒と云ふ有名な山がある。湖畔に一歩園と云ふ五千町歩からある牧場がある。

私は旅行好きで、それに職業の關係で、原稿をかくためにもよく田舍へ行つたりするから、一年の三分の一位は旅で暮してゐる。北海道へも、年に一度位はきつと用が出來て出かけることになる。が、此頃は無精になつて、歩く旅行をしない。交通の不便な場所や食ひものゝよくないところを、さけるやうな旅ばかりしてゐる。そのため、機會がありながら阿寒にさへも行かずにゐる。兄は、十年前と變らない有樣で、相變らず山岳熱が盛んで、よく役所の仲間などと寫眞器を持つて山へ出かける**私の無精と物ぐさを嘲けるのであるが、口では、高いところへ**登つたりするのは、九段坂でも閉口だ、などとは云つてゐるものゝ私は内心多少恥しい。

屈茶路にしても阿寒にしても、鐵道が近くひけるから、たちまち昔日の面影を失つてしまふだらう。面影を失はないうちに阿寒へは行かうと思つてゐる。友人たちを、――里見弴だの、久米正雄だの、田中純だの、旅先で酒と藝者のことしか知らない連中を、阿寒の山の中へ引つぱつて行く痛快な空想もしてゐる。うちの牧場の馬にのせて、食料、防備用具、などゝのえ原始的な乘馬旅行をやつてみたいなどと思つてゐる。

屈路湖と阿寒湖とのことは、いろ／＼ていねいに書きたいと思つてゐたが、――天下の旅行好きが、私の文章で旅行慾をそゝられるやうな、――忙しくて書けない。粗末な文章で勘忍して頂く。（十年六月）



飛驒平湯

富田碎花

山脈(やまなみ)の波折(にと)れのかぎり月あかく
てらして飛驒ぞ靜まりて居れ

―（舊作ノートから）―

乘鞍ヶ嶽は、小島烏水氏の所謂日本北アルプス假定六線中の第一線を構成する御嶽火山帶中の、木曾の御嶽に次ぐ、山岳重疊たる飛驒での、絕大な高峰であつて標高は三、〇二六メートルを算する。その北麓に戶數二十を出でない一つの村落が、巨大な巖石にこびりついてゐる僅少な牡蠣の生活群のやうに存在してゐる。それは他ならない飛驒吉城郡上寶村の東南端に邊在してゐる平湯の部落である。

―私は岐阜驛で汽車を乘り棄てて、美濃路の關、金山などいふ町々を經て、耶馬溪に匹敵すと稱せられる中山七里の勝景を過ぎ、飛驒の高山（岐阜から約三十五里）に先づ腰を下してから、平湯へ行つたのだつた。（高山から平湯まで約九里）六月の末であつたが平湯峠の絕頂には芳烈な匂ひを放つ山櫻が眞盛りだつた。そして樹立の間やら、簇生した高い隈笹の蔭などには白い雪が殘されて固まつてゐた。この峠の絕頂は、海拔一、六八四メートルから上下二里半可なり苦澁な行程だ。これは高山町から平湯を經て信州松本に出る平湯街道に當つてゐる。高山の町を出はづれて、小八賀川に沿つて五六里行くと、丹生川村の旗鉾といふ部落がある。そこから右手に當つて木曾の御嶽が、コバルトの空にその雪白の冠を着た姿をして旅人の胸を躍らせるやうに聳えてゐるのが仰げるのだつた。愈々平湯の峠越にさしかかると、そこには放牧場があつて埒柵はしてあ

自由に森林中を馳驅してゐて、旅人の姿を見たりすると、鼻を鳴らして寄つて來る、別に何をするでも無く不思議さうな顏をしてノソノソと、或ひは思ひ出したやうに活潑に歩みを運んだりする、氣の弱い人間はひどく驚愕させられるのだが、暦日を無視するに近い山中に一歩入れば、人間も獸類も同じ生物だ、さうした境界では俺れは人間樣だなどいふケチな誇りは捨ててしまふがいい、そして煙草に火でも點けて、ゆつくり一つフェヤリー・テールスのなかの主人公にでもなつた氣で、さうした動物と會話を交へて見るのも面白からうではないか。

峠の頂上からは、羊腸たる山徑とでも支那風に表現され得る峻險な路を一里足らず下るとそこが平湯だ。尤もその途中からは立派な改修された道路がついてゐたけれど。

平湯の溫泉場は、平湯、下の湯及び數丁距つたところにある山伏の湯の三つから成る。溫泉には附きものの素朴な堂宇を有つた藥師如來が祭つてあつて、その境內附近から湧き出す浴槽へと樋で引てゐる、浴槽を圍んで小部落が形成されてゐるのだ

は、さすがに男女の別を浴槽に設けてはあるが、夜更けにでもなればそんな堅苦しい境界は自然撤廢、況んや下の湯や山伏の湯になれば、そんな區別などは全く無く混浴である。夜など、行きなり飛び込んで行くと、若い女がたつた一人で浴槽のなかに蹲んでゐたりするのを稍々暫らく經つてから發見することなどがある、そしてそれが何らの不自然な、粉飾の心を起させないのが愉快である。盛夏八月の平均氣溫七二・九、午後二時の最高氣溫でも八十度內外だから朝夕は推して知るべしである。

浴槽を出たときに、瞳がとらへる俗にタケジロと稱へる白樺森林の樹葉がまるで綠色に燃える火災のやうに陽に映える姿は實に耐らない。そして脚の下から直ちに起つてゐるその白樺の森林帶のうへにひよいと笠ケ嶽（約一萬尺）がのぞいてゐたりするのを發見したら人は恐らく驚喜の叫びを擧げるだらう。また少しく何處かの高いところを選んで登れば硫黃嶽からの不斷の噴煙に、大空を背景に自らの姿にさまざまの色彩の魔術を演じてゐるのが望見される。

鑓ヶ嶽の南麓からの溪流と相合して高原川となる毛受母川の水源である平湯大瀧は溫泉を距る十八町のところにある、瀧の長さ六十丈と稱せられて實に壯麗を極めてゐる、今は殆んど廢抗狀態だが、日本に於ける人間の棲息する最高所であると云はれた平湯鑛山（海拔七千尺）に至る途中の「破斫り」の邊から顧みると、笠ケ嶽、錫枝ケ嶽（二、一六三メートル）燒ケ岳（二、〇九四）穗高山（約三、〇〇〇）がそれらの雄渾な姿の寫見を恣にせしめてゐる。乘鞍の頂上を眺めるには一日行程で足りる。

時として夜など、一錢二錢と浴客各自から寄進して篠竹の尖端に裸蠟燭を突き通して、藥師如來の境内やら、往來やら所嫌はず地面に刺して、それを點じて大蠟燭？と稱する一種の祭典を執行する、そして部落中での最大の座敷（と云つても知れたものである、私の記憶にして誤りが無ければ八疊二間位のもの）に、各自に酒の入つた銚子を提げた浴客が各戸から集つて來て、破れ三味線に合はせて唄ひ拔き、踊り拔く。

――かうした夜に、若し遠くから旅人でも到着したならば、部落に足を入れるに先つて神秘な情景の現前を感得するだらう、それは地上に ca 2200m に點ぜられた無數の蠟燭の火が、人々の散じた後も點り殘つて一つのボーツとした大氣を蒸成して、立ちのぼる溫泉の湯氣に混つて蜃氣樓のやうなものを幻出するのである。

それは或る月のいゝ夜の出來事だつた…………

この山間の小部落の寂寞を破つて、『泥棒、泥棒！』といふ烈しい叫びが、木靈のやうに人々の耳に傳はつた、小百人ばかりの湯治客と村人とは總立ちになつて、目を擦り擦り、叫び聲のした家の方へと馳け集まるのだつた。

そこには髮を振り亂したその家――木賃宿の女房と、異樣な風態をした山奥から出て來た精靈そのもののやうな男とが旣に格鬪の最中だつた、その戰場は往來から丸見えの薄汚れた部屋のなかだつた、この部落では家々に錠も無ければ、無論殷盛夜戸閉りの必要は無いのだから…………

人々は、兎に角その男を取り押へた、そして細引で緣側の柱に遮二無二くゝりつけてしまつた。

仔細を訊くと、かうである──

湯治客たちの例の徒然に持ち出して調子外れに掻き鳴らしてゐたポコポコ三味線や、それに合はせる様々な卑俗な唄にも飽いたと見えて、何時の程にか聞こえなくなつた、そして夜は、月が明るく、飽くまで靜かに更ける。

木賃宿の女房もすつかり疲れてイギたなく寢呆けてゐた。

ところが、

ところがである──ふと眼を覺ますと、枕元に雲突くやうな大男が立つてゐるのだ、少しは驚いたが、また例の〇〇びだらう位に考へて、多少の悪戯心もまじつて寢た振りをし續けてゐると、行きなりその男は女房の枕の下の財布に手をかけた、さてこそ！

「泥棒、泥棒！」の叫び聲が、人々の夢を破つたのだつた。

泥棒！少しの誇張も雜へずにこの事件はこの部落初まつて以來の大事件だつたのだ。人々の評議が一決して、四里もある駐在所へと人を走らせるのだつた。想像しても見て呉れたまへ、「場所」は乘鞍ケ嶽の麓、行くところとして鼻がつかへるやうに四面を山で圍まれた海拔四千尺に近い原始的な山間の小溫泉場である、『時』は現代、飽くまで澄んだ月光のてらしてゐる夏の一夜、『登場人物』は木賃宿の女房である女主人公(ヒロイン)と、山男のやうな竊盜未遂犯人の主人公と、外に人物多勢、それは部落民乃至遠い町からや近郷から來てゐる商人、百姓たちの多數の男女の浴客の一群である。さらに君の舞臺面を延長して呉れたまへ、谿谷に沿つて開鑿された路を四里もある遠方の駐在所へと眞實一路に走つてゐる一人の男の姿！月は時々、黒々と塊り繁いてゐる樹の影から姿を現はすこの男のうへに、その澄み透つた光を投げてゐるのだつた。

駐在所に着いたときはもう夜が明けてゐた、ところがそこには迎へるべき人物が留守だつた、さらに彼れは三里距つた次の駐在所の所在地まで走つた。

結局、洋劍の音がガチャガチャと、山間の平安な溫泉場に不協和音を響かせたのは事件があつた翌日の夕方だつた、それまでの長い時間をその不幸？な竊盜未遂犯人はどうしてゐたか？

彼れは細引で高手小手に緊しめられて柱に繋がれてゐたの

で、飯は握飯を人々が交互に食はせて呉れた、そして用便と云へば人々の見てゐるまへで、そのまま垂れ流しである、大の男の泥棒君はヒイヒイ泣きつづけてゐたのだつた。

彼れはかうして九里先きの所轄警察署へ、さらに九里ある監獄分監所在地へと、無論、徒歩で送られて裁判に廻はされた。

私はこの悲喜劇のやうな窃盗未遂事件を想ひ出すごとに、世にも厳粛な顔をして犯人を引き連れて行つた〇〇官と、それを重く断罪したであらう〇〇官の心理に立入つて想像を逞しくしては苦笑を禁じ得ないのである。

ガンジスの月

町田曲江

畫材を探るべく印度に行つたのは、もう十年前のことである。そして其の時の情調は何うしても忘れることが出來ないので、一種の追憶をこゝにかいて見る。

自分が印度に行つたのは、夏の雨季上りであつた。晴れたと思ふと直ぐにスコール（驟雨）が襲ふてくる。そこへ印度特有の白牛の角に青味勝の装飾を施し、其の角の先に鈴を懸けて、人を乘せた車や、いろ〱の車を牽いてあるくのを、熱帶植物特に多い椰子の木蔭の間から瞬見出沒する光景をヴエランダの籐椅子にうたたねしながら望むとき、それは彼地に於ける云ふべからざる滋味である。その椰子の葉が月影にパサつく音、鈴の鳴る音等、餘韻があつていい知れぬ快感を催さしむる。

ポンペイの西方にあるアグラ附近に行くと、庭園は自己の天地と悠然と構へた美はしい孔雀鳥の群が、沙林の中を縦横に跳躍して、人に慣れ〱しく言ひよるさまは、われ〱をして神秘的に導く、宗教的の感懐に燃えしめる。此のわたりの大猿、小猿がまた汽車などには慣れたもので、その大音響を發して通過しても、平氣の平左なるが面白く、そして孔雀同様に人間と親みをもつてゐるやうで、藝術家の目から見ればそこに面白き境地が味はれる。佛教史で名高いサンチといへるところは、高臺であつて有名なる佛骨の塔門が巍乎としてそこに宗教の心持を新たにせしめる。此の地前面展開して恰かもパノラマを見るやうで、例の椰子の葉蔭から孔雀の鳴聲が盛んにきこえる。

印度政府經營のホテルに泊つた晩のことである。夜更けてポツリと天井から落ちて來るものがあつた。氣味惡さに思はず腕

がヒヤリとして、跳ね起きて見れば、それはヤモリであつた。續いて大きな蝙蝠が飛び出す、イヤハヤ百鬼夜行の客房、ママよと度胸をすえて强ひて眠れば、いつか夜は明けて朝の涼味に夕の苦悶は何處へやら消えて行く。

綠の丘へ――綠の川へ――そこには滴らんばかりの椰子の林に、山羊や驢馬が多く放飼されてある。其間を我が槐に似た、紅色の小さい花の咲いた樹木が點綴して、萬綠叢中紅一點のおもむきは、全く印度チエリーの美觀といひたい程である。

印度人は槪して呑氣に出來てゐる。汽車の時間におくれなどすると、停車場のプラットホームにゴロ／＼寢て仕舞ふなどは、何處までも呑氣で、男は熱帶地にふさはしい白の服を着け、女はそれに赤色を配し、朝鮮人同樣被衣にて顏を蔽ひ、椰子の林からノツリ／＼五色の衣を翻して頭上に物を乘せて歩いてゐる樣子は、正に一幅の好畫題である。

印度人の俗謡は、お寺の坊さんがお經を讀んでゐるやうな、悲哀なる亡國の韻を含んでゐる。シヤモジの形をした拍子木で噺し立てゝ歌ひながら。客から錢を貰つてゐる乞食も、鳥渡人の目を牽くものゝ一つである。

ガンジス河――幾多の神話を含めるガンジスの濁流に、赤裸々となつた赤銅色の土人たちが、身を濯ぎ、朝の日の出を禮拜してゐる姿は實に莊嚴の極である。土人は死すれば火葬にして其灰を河流に投げこむ。ガンジス河口の階段を下りたところで、大きな傘を立てゝ、その下で土人が休んだり雜多な物を賣つたりしてゐるありさまは、東京の夜の緣日をおもはしめる。河の岸邊で土人男女が衣すすぎするさま、自由に着物を脫いで濯ぎ、大きな石の扁平な一面に力をこめて打ちつけるのだ。洗ひ終れば自分で手に持つて乾くのを待つてゐるのを見ては思はずお臍が宙返りする。

印度人の樂器は、笛、羯鼓、喇叭、箏、篳篥、銅鑼、マンドリンなど日本の樂器に似たものが多くて、其の奏樂を聞いては何となく活氣に乏しく、そこに亡國を回想せしめ、悲哀の調の印度人の身の上のさびしさに袖をしぼらせる。

その首都カルカツタ劇場で、彼等の演劇を覗いたが、舞臺面の背景など豫想以上に、技工を凝らしてあつたのには驚いた。

印度語の分らぬ自分——その自分には科白などはもとより啞である——それで味ふことの出來ぬ自分はただ上べりだけの觀客だ、それでも觀客をチャームする技工はすてたものでもない。

文藝上の視察である。單にそれのみの視察である。それでもコロンボを經てツチコリンに上陸してからは、探偵の尾行が嚴重となつた。ポンペイでは旅行免狀を調べ、武器（護身用のピストル類）を取り上げられた。同行の九里四郎君（洋畫家）は非常な感情家だ——、そう云ふことでモウ印度の探檢もイヤだ——と悲觀してしまつた。ポンペイのホテルに着くと橫濱正金銀行の五十嵐君を訪ひ、同氏の厚意でホテルを引揚げ、同君の宅に厄介になることになつたが、相變らず政廳の探偵がうるさくつきまとうので、怪しき人物でないとの五十嵐君の好意的交涉のためたうとう探偵の尾行しないやうになつたのも、喜劇の一であつた。

喜劇の二は、印度の巡査が胸部腹部に紐で蝙蝠傘をくゝりつけて、ノソリノソリと歩いてゐるその姿。それはまさにチャツプリンの滑稽活動劇の領域を侵犯するものだ。

印度人が汽車に乘つて、炊事を平氣でやつて食事をしてゐるさまなど、相變らず大陸的呑氣サ加減。呆れざるを得ないが、大きな鶴が赤い口をあけて、烏と爭つてゐるところなど、好一對の神秘的なところがある。

ホテルに泊つてゐた或る夕、其處の廊下に土人が三々五々ゐて、何か口走つてゐたが、やがて天井の一端より吊り下げられたる綱を調子よく歌を歌ひながら引つ張ると、丈三尺巾六七尺位の一種の大團扇が動き出す。そうしてゆるやかに起る風は、椰子の樹をもれてくる程の凉味は無いが、嫌な感じのしないのものの一であつた。

此の地方ではマホメツト敎が多く、會堂には種々の彫刻物がある中で、日本ならば早速風俗壞亂といふので、其の筋から撤去を命ぜられさうな如何はしいものなどがそこにも彼處にもとり散らされておる。

ポンペイから船で行く離れ島のエレハンタケイフは、佛跡の靈地として有名な一孤島である。此處に上陸した時、海面から吹き送る凉味は、今に忘れることの出來ない思ひ出である。

ブッダガヤの下方に、ボヤの町といふところがある。たそがるる空に輕裝して散歩してゐたら、蛙の鳴く樣な聲がするので、其聲をたよりにダン／＼尋ねて行くと、不思議や路傍樹の密生したる枝に多數の鶴が巣籠りをして、子を哺みながら鳴いてゐたのであつた。雌雄かはる／＼雛の餌をあさつて、隣枝の親鳥とつゝき合ひ騒いでゐる姿のいぢらしく、且つ氣高さよ、此の鶴は日本の鶴のやうな、丹頂などとはちがつて、全身灰色がかつた毛羽が生えてそこに數十、幾百の群が屯してゐる、靜夜一管の笛をたづさへて「鶴の巣ごもり」でも吹奏したらいかに心神の爽かさを覺えることだろう。

實にも、印度の沙林や椰子の木蔭を逍遥しては、總ての心神が神秘的に引きずられて行く。





雲州松江

石井柏亭

雲州松江

松江へ行つたのももう九年の昔になるが、何となく懐しい所である。汽車の通じるのが遲かつた爲に人氣が荒びて居なかつたのか知らぬ。それとも不昧公の茶道の餘響もあるか知らぬ。

それは大正二年の八月半から九月へかけてであつたと記憶する。私は其地の高等女學校の圖畫を受持つM先生に招かれて畫の講習に行つたのであつた。講習は一週間であつたが暑い最中だから隨分苦しかつた。女學校の敎室で靜物寫生を課したり畫の講話をしたり、また講習生を城山へ連れて行つて野外寫生をさせたりした。城山の天守は兎も角保存されてそこに兵器などが陳列されて居た。城山一帶は公園になつて居てそこには大樹も茂り萩が枝垂れて居た。

『松江大橋流りやうと燒きやうと……』、あの大橋の袂に旅館料亭の類が並んで居るが、私の宿もそのうちの一つで岩田支店といふのであつた。湖水を瞰下す室に居たものだから朝夕の眺めがたまらなくよかつた。

嫁ケ島はつまらないが夕暮の靜な水に白潟の方の白壁と柳とが倒に映つたりする景色は何とも云はれない。男が二人腰まで水に浸つて、さでのやうなものを手にして相對して次第に接近し行き、結局其さでをくつゝけて引上げて蝦かなどを取ると、ばい〳〵とか云ふ方法をも面白く眺めた。宿の下は湖水と北海と、間を往復する石油發動汽船の發着所になつて居るものだから、漁夫等の一ぱいに乘つた其船を瞰下すことも屢であつた。

其頃東京の或日本畫家との關係を諷はれて居たM子と云ふ藝

者を宿に招んで二階の欄干に凭れさせ、大橋を背景にしてテムペラで畫いたこともある。

大橋を渡つて、白潟の方の河岸に立つた、俗に三階館と呼ばれて居た、あまり奇麗でない旅館の三階から稍大きい風景畫をも畫いた。これには水上警察の小蒸汽を前景として、河岸に軒を列べる旅館から、城山と倘其うしろの北海を劃る山なみ迄を入れた。其時世話を焼いて吳れたSと云ふ丈の高い青年は呼吸器を病んで一二年前に亡くなつた。彼れは其頃から身體もよくなかつたが、ぶら〳〵して出雲の特產になつて居る一種の漆畫を練習して居た。色漆で花模樣などを畫いた上に黑漆をかけて後から模樣を磨ぎ出すと云ふやうな方法であるが、私はあまりそれを好まなかつた。

高等女學校のM先生と此S君とそれから、末次本町の文房具店のO君と、これも白潟に住んで石版畫工を業として居たK君などが、一夕宍道湖の舟遊びに私を誘つた。それは月のいゝ晩であつた。妓の彈く三絃に合せてO君やS君は安來節やら出雲節やらを唱つた。さう云ふ返らぬ日のことが、これを書く今も馬鹿になつかしく思ひ出される。

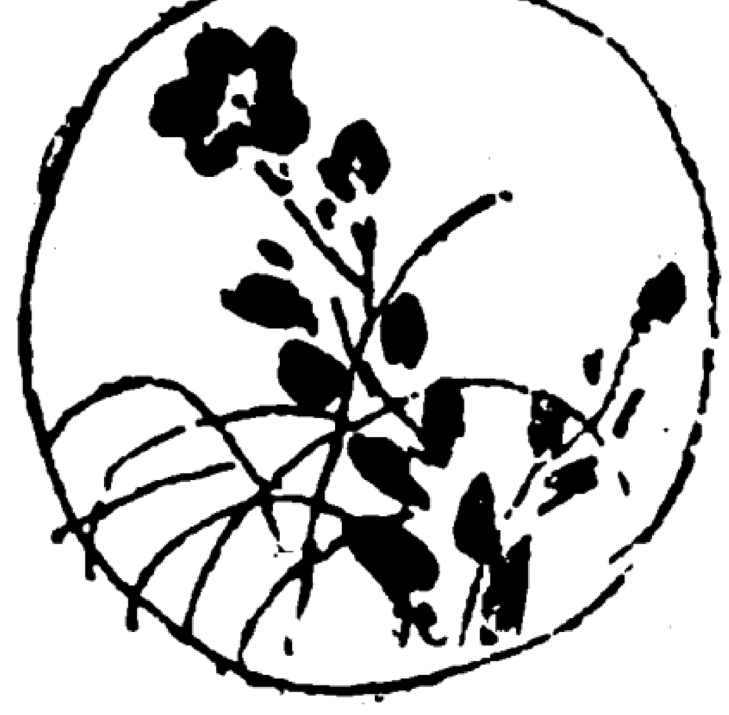
私は本庄より今少し先の何とか云ふ處に上陸して見たが大した景色のある譯でもなかつた。海から見る汀の舟小屋に畫趣はあつても上陸しては一向面白くないのであつた。

美保關は圓い小さい灣である。私は宿の二階から雨に濡れた蒸汽の棧橋と漣に倒映のぼける青い水とを寫した。

松江は宍道湖に沿ひ大橋川を以て貫かれるばかりでなく、舊城の周圍から市の外廓へかけて堀川が多く、並藏や其他の建物のそれに沿ふところに、しつとりした水郷の氣分が漂ふ。一日市の東の郊外にある樂山と云ふ陶窯へ行つて樂山燒のいたづらをして見た。茶がかつた陶器である陶窯から淡く烟りがのぼる、其向うの青田を貫く細川に舟の滑つて行くなども亦靜かな水郷趣味たるを失はない。

安來節の安來は、どんな所であるか、汽車を降りて見ないから何とも云へない。併し今では其處に安來節のいゝ唱ひ手が居るとも限るまい。

大橋川の三階館より少し東へ寄つた所から出る汽船に乘つて、私は中の海の方に遊んだ。大根島と云ふのも私の好奇心を動かしたが、併し上陸しては見なかつた。ヴエネチアのゴンドラのやうに兩端の反上つたそりつこ舟が海の上に群るのを見るのは奇觀である。



西湖と太湖

成瀬無極

一、西湖

滬杭鐵道は四等に分れてゐる。特等に相當するものを頭等と云ふ。そして第四等を、貧民車と名づける。これは隨分思ひ切つた名稱であるが、支那人は特等でも四等でも着く時間は同じ事だといふので所謂紳士連もどんどん四等へ乘り込んで來るので、かういふ名を附けたのだと云ふ。貧民車には長い裾の衣服を着た者は載せない事になつてゐる。それに係らず、支那人は勞働者に切符を買はせておいて窃に安い車に入り込む者があるさうである。日本の鐵道より廣軌で內部も贅澤に出來てゐる。卓を挾んで座るやうになつてゐて、茶が出る、熱湯を浸したタホルが出る。御大名のやうだ。始め吾々は仕切られた部屋にゐたが、喫煙室と食堂とを兼ねたやうな箱に移つた。舊の部屋へ荷物を取りに行つたら、若い支那人の夫婦が陣取つてゐて、そのハイカラの若い夫人が英語で「エキスキユース、ミイ」と挨拶したのには少し面喰つた。一體に新らしい支那人には恐ろしく歐化したのがある。英語などは自由自在に操る。日本の新らしい婦人は到底及ばない位である。案内をしてくれるK氏は十七年も支那に住んでゐるだけあつて支那の生活には徹底的に同化してゐる。家も純支那風で、呑氣な、自由な支那の天地に親むと日本の窮屈な生活には堪へられなくなると云ふ。杭州へは五時間程で行ける。ジエスフイールドあたりから沿道の風光が繪の樣に美しくなる。茫々たる沃野が續いて、その間を清流が迂曲してゐる。河畔には眼を蔽はれた水牛が一つ處をぐるぐる廻つて河水を田畑へ汲み上げてゐる。何故眼隱しをするのか

分らないが、恐らくいくら従順な獸類でも單調な旋廻運動を何時間も續けたら仕舞には癇癪を起すのではあるまいか。或は又外の牛が眼に入つては作業が澁滯するといふのかも知れない。ともかく盲目の牛がぐるぐる廻りをしてゐる有様は、髪を切られたサムソンが臼を挽く姿が想ひ出されて悲慘であつた。デリラといふやうな妖婦の魔力に魅せられて山を拔く膂力も挫け、唯々として賤業に從事してゐるかと思へば哀れである。



杭州驛の一つ先きの停車場で下車して、河沿の猥雜な漁師街へ入つた。轎を傭ふとしたが、存外高價を吹懸けたと見えて、支那通のK氏は一笑に附して對手にしない。そこで俥二臺を命じて先づ六和塔の見物に行く。俥夫は三十位の痩せた男と、六十以上の長壽を諸へた、落魄した關羽と云つた老人である。自分は若い方の俥に乘つた。後の俥に支那通が乘つてゐるので、こつちも一通り分ると思つたか、しきりに「先生(シイサン)、先生(シイサン)」と云つて何か話しかけるが、勿論皆無分らぬ。それでも「うむ、うむ」と調子を合せて置いた。關羽の苦しさうな息づかひが如何にも氣毒である。往來は亂暴極まつたもので、線路でも何でも構はずに俥を入れる。

塔は十三層八角である。南支第一の稱に背かず、中々立派なものである。殊に靜寂な周圍の風光が遊子の心を樂ませる。塔守の老翁が茶を薦めた。芳香鼻を撲ち、乾いた舌に快く味はれた。日本のかうした茶店で出す煮花とは雲泥の相違がある。一服の點茶で十分に支那氣分を味得して塔へ昇る。一個所暗黑な場處があつて、老翁は龕に設けた燈

明に火を點して呉れた。塔は宋の紹興年間の建立に係ると云ふが、中頃頽廢したと覺しく、壁畫などは生々しい近代式のもので、稚拙見るに堪へない。塔上の展望は然し昔ながらの俤を止め、錢塘江を脚下に眺め、遠く杭州城を望んで頗る雄大なものである。

塔を下りてまた舊の漁師街を通つて呉山へ行く。俥上で直に火を點けやうとすると、俥夫が態々俥を止めて呉れる。頗る親切であつたが、愈々街外れに來ると、俥を止めて、外の俥夫を呼び寄せて談判を始めた。口角泡を飛ばして盛んに論議してゐる。O氏曰く、

「吾々を賣つてゐるのです。」

支那くんだりまで來て賣り物にされるとは思はなかつた。これから先き幾何と交渉するのであらうか、双方相持して中々下らない。時々吾々の方を向いて何か懇願するやうであつたが、K氏は頑として受けつけない。小半時間經つてやうやう協調が成立したと見えて、吾々は新らしい俥に乘せられて凹凸の道を走る。到るところに武裝した支那の警吏が立つてゐる。如何にも物々しい。

呉山は淺草の奥山と云つた風のところで、堂宇が連なり、抹香の匂ひと鐘の音とが靈場らしい感じを與へる。廣場に支那の兵士が調練をしてゐた。下士官のやうな男が頻りに號令を掛けて新兵を虐げてゐる。かういふ風景は天下到る處に充滿してゐると見える。眼腐りの女乞食が路傍に蹲まつてゐて、施物を强請する。支那通のK氏は勿論一顧も與へぬ。うつかりかういふ連中に錢を投ずると蜂の巣を衝くやうに四方八方から群をなして乞食が現はれるといふ。袂を拂つて行き過ぎる吾々を見送つて老婆達は何か口々に喚いた。O氏の説明に依ると、

「あの旦那達は金を持つてゐるのだが吝嗇で惠まないのだ」

と嘲罵してゐるのだと云ふ。かういふ時には言葉の解らないのは頗る便利である。日本から將來（しようらい）したといふ古鐘を見て湖岸に懷かしく思つた。此處から城内を通つて西湖畔のホテルを指して俥を走らす。城内は非常に殷賑で商賈が軒を連らねてゐる。

西湖が繪のやうに眼前に現はれた。然し、湖畔は茶樓や旅館

が立ち並んで餘りに俗化してゐる。並行した通りには活動寫眞の小屋などが見られた。迂廻して新々旅館といふのに投宿する。西湖畔第一のホテルで、萬事が洋風に出來てゐる。惜い事に眺望のある部屋は悉く占領せられて裏向の一室に案内せられた。幕を垂れ、莫蓙を敷いた廣い臥床がある。支那料理が運ばれた。K氏は舌鼓を打て盛んに箸を動かしたが、自分は上海で連日夜更をした祟で、熱氣があつて恐ろしき太儀である。西洋風呂も濁つてゐると聞いて試る勇氣が無く、發汗劑を服用して早くから臥床へ入つた。夜西湖に扁舟を浮べたら嘸と思はれたが、折から細雨が霏々として降り初めたので、結局蟄居することに極めた。

K氏は燕趙悲歌の士である。熱心な基督教徒で社會改造の理想を懐き、無自覺な支那人に對して甚深の同情を持てゐる。狷介人に容れらずと云つた風があつて、談論風發當る可らざるものがある。自分は氏の眞摯な態度に動かされて「東洋」の運命といふやうな事を考へさせられた。今迄の無關心な自分が恥かしくさへ思はれて來た。支那へ來て始めて「世界」といふものを朧ろながらに想像する事が出來た。日本を離れなければ日本の事は分らないと思つた。

寢苦しい一夜を明かした。汗で肌着がぐつしよりしてゐた。雨上りの清々しい夏の朝が吾々を迎へた。船を傭つて湖上に出る。西湖は泉水の趣である。不忍池を幾個か集めたやうな感じであるが、流石に鏽が着いてゐる。水は淺く濁つてゐる。白堤紅蓮が眞盛であつた。名も知らぬ水鳥が水を潜つては遠くへひよいと頭を出した。不愛想な年寄の舟子が舟を操つた。蘇堤を望みながら蘆荻の間を擦り抜けて舟は行く。

西湖の勝は雷峰が塔を中心とする。案内記に依ると呉越王の妃黄氏が千尺十三層の塔を建てようとして財力が足らず七層の塔を建てゝ置いたのを、後に風水説に從つて五層に毀つたものだと云ふ。何だか知らないが古色蒼然として樹木鬱蒼と生へ茂り、頗る頽廢の趣を示しつゝ、しかも「時」の絶大の力に對抗して飽迄大地に根を張り、無限の大空に向つて憧れ進む偉力を發揮してゐる。血のやうな夕陽が之に映ずるとき塔影逆まに湖水に浸つて凄婉の美を現すると云ふ。

る。舟夫が相應酬する聲が非調を帶びて湖上を亙る。

府岸で船を棄てゝ山轎に乘る。長い柄を通して二人で舁ぐ極めて悠長な乘り心地の好いものである。處々に石門を望みながら、青葉の繁り合つた細徑を搖られて行く「ほうほう」と云ふ轎夫の掛聲が如何にも病み疲かれたやうに空虛に響く。上天竺に近づくと路傍に蹲る乞食の數が漸々殖えて來る。中に一人陰濕な人相をした四十男が往來の人の姿を見ると俄に作病して哀號する樣が可笑しくもまた怒ろし氣であつた。

三天竺は流石に規模が廣大で、殊に上天竺は壯麗である。佛像の眼を驚かすやうなのがある。然しいづれも近代の改築に係



々吉であつた。

歸り途に靈隱寺の石佛や、石に刻んだ經文を見て、自分の心は一種の悲愁に襲された。十數年前に世を去つた自分の父は幼少の時から書道に志して七十餘歳の生涯を通じて斯道を生命とした。どんなに支那名家の筆蹟に憧れてゐたことであらう。その眞筆が今自分の眼の前に在る。筆行の文字に親む不肖の子が圖らずも支那の地を踏み、久戀の地を見ること無しに逝いた詩人の墓は既に青苔滑かである。放鶴亭の泉水に鯉魚を眺め飛來峯を攀りながら董其昌の額面を仰いで更にこの感を深くした。

岳飛廟の門內に晒された逆臣秦檜夫妻の鐵像は醜惡で鼻が缺

剩さへ嘔吐かれ糞尿を以て汚され、異臭紛々として面を背向けさせる。死屍に鞭打つといふ事を徹底的に實行したもので、支那人の殘忍性を具體的に示してゐる。之に反して可憐なる革命兒秋瑾女の廟が明媚なる西湖畔に千年の名妓蘇小の墓と相對してゐるのは美しい一篇の詩を讀む風情がある。

この他三潭印月、花港觀魚等西湖十景と稱するものがあるけれども、惡寒が去りやらぬ身は烈日に照されて倦怠甚だしいものがあつたので、早々に引き上げて、茶樓に時を消し、再び鐵路を走つて上海へ歸つた。明月の夜西湖に舟を浮べなくては湖上の風光を說く資格は無いのである。

二、太　湖

蘇州に遊んで蘇州を見ず、不思議な旅であつた。日清汽船のS氏は有名な支那通であるが、まだ太湖を探らずとあつて、自分の支那行を機會として工學士O氏、東亞攻究會のK氏、及S氏の親戚に當る外國語學校の某君を誘つて七噸ばかりのモーターボートを艤裝して運河に依つて蘇州の西三十里と稱せられる太湖に遊んだ。支那の水夫が四五名乘り込んで運轉、庖厨、の事を司り、船舶の輻湊する黃浦を船出して一夜を船中に送り、終に茫洋たる太湖に出た。太湖は東西二百里、南北二十里と稱せられ、洞庭に次ぐ大湖水で、所謂五湖と云ふのがそれだと云ふ。運河へ出ると兩岸は綠滴る原野で、到る處に見られる土饅頭の上に山羊が飄逸の姿を現はしたり、河水に水牛が浸つてゐたり、また窓から支那の男女が好奇の眼を光らせて一行を見送つたり、汽笛の音に驚かされて茶樓に賭博する者が立ち上がつたり、刻々に變つて行く風物は寔に應接に遑なく興趣の盡きざるものがあつた。船中で調へる簡單な食事は山海の珍味に勝り、甲板の上の放談は時の移るのを忘れしめた。

市へ着けば舟夫が上陸して魚を求めに行く。S氏は古書を繙いてしきりに太湖の東西兩洞庭山の事を調べてゐる。時々運河の水が盡きて船が河底に膠着しさうになり、或は又兩手の石崖に舷が觸れようとして纔かに通ずるやうな事もあつた。夜は蚊群の襲來に苦しめられたが、拂曉の凉味は到底筆紙に盡しがたい。また夕陽の美しさも陸路を往く人の想像外に在る。遠く虎邱を望み、寒山寺は何處と物色しつゝ暮れかゝつた蘇州の外廓を眺めつゝ吾々の船は進むのであつた。蘇州美人に接する機會を逸し、姑蘇山、孔子廟等の名蹟を割愛し、鈴を吊げた驢馬に乘る風流を味はなかつたが、邦人未踏の處と稱せられる太湖の風光に接したのは誠に望外の喜びである。

さて愈々太湖に出て見ると、見當がつかなくなつた。どれが洞庭山だか分らない。水先案内の支那人に訊ねても要領を

い。

「旦那方は水を見にいらしつたのだと思ひました。」

といふ返事であつた。玆に於て溫厚なS氏も船長時代の威風を發揮して、水を見るなら誰が太湖くんだりまで出て來るか、

「上海之水太湖之水奚擇乎。」（シャンハイウオタ、ターフーウオタ、オール、ザ、セエム）

英語で大喝したが、まさに虎髯逆まに竪つといふ慨があつた。然し、どうも仕方が無いので、結局諸葛孔明の俤のある老漁夫を臨時傭ひ入れて案内して貰ふ事にした。

この老人頗る泰然と構へて大に人意を強くしたが、上陸した一島が果して東洞庭であるか、西洞庭であるか、或は又他の無名の島であるか、確實な事は分らずに仕舞つた。成程洞窟はあつたが規模が小さく且つ淺い。書物にあるやうに龍宮とかまで達してゐようも無い。然し、梁山伯の根據地であつたと云はれ、現今でも海賊が出て物騷だといふこの湖上に船を乘り入れた者は極めて尠いといふのであるから、吾々の好奇心は十分に滿足せられたと云つても可い。

史實の如何よりも自分には運河の舟行が無限の興味を與へた。夏の水鄕の氣分と清新な平野の趣とを味得するには南支に遊ばなければならぬ。そして濃麗纖巧の美と幽玄閑寂の意とを兼ねるものは西湖の水で、雄大豪宕心胸を豁き無限に憧れしめるものは太湖の水である。（完）



朝の庭

高濱虚子

萩の若葉の心のところに油虫がついて居る。又た其に蟻が群がつて居る。よく見ると油虫は時々痙攣を發したやうに動いて居る。蟻は其上を無造作に這ふて居る。これは結局どちらの勝に歸するのであらう。萩は一體己をどうする積りだと言つたや

うに菲さうに首筋をもたげてぢつとして居る。

其萩の下に蟻が塔を作りつゝある。梅雨が大地をぼと〳〵と柔かくして居る、其土を山のやうに積み上げて居る。何匹とも數知れぬ蟻が其山の上を右往左往さまようて居る。五六匹の蟻が頭を突合はして何か談合してる容子であつたのが慌だした連立つて巣の中に這入る。又連立つて巣の中から出て來る。

何處やらに蝿のうなる聲が聞こえる。

庭の芝生に菌が生えて居る。每年梅雨の頃には此菌が生える。白い小さい菌で一所に十許りもかたまつて生えて居る。又た芝生には小さい草花が生えて居る。其は斯うやつて芝生にしやがんで居ると始めて目に入るやうな小さい花である。小さい莖の尖に白い小さい花が咲いて居る。小さいと言へば芝の尖に一つ〳〵宿つて居る露は馬鹿に小さい。裳や下駄を濡らすのは此露だ。其よりも愈々小さいのは菌の傘の端に宿つてゐる露だ。傘の端がぎざ〳〵になつてゐる其一つ〳〵の尖にある露だ。

白い蝶が三匹もつれて松の樹の向に飛んで居る。

睡蓮の莟が少し締りをゆるめてゐる。

一番電車が通る。

雨氣がすぐ近くの山の上に迫つて居る。隣の庭の松の樹をも霧が包んで居る。

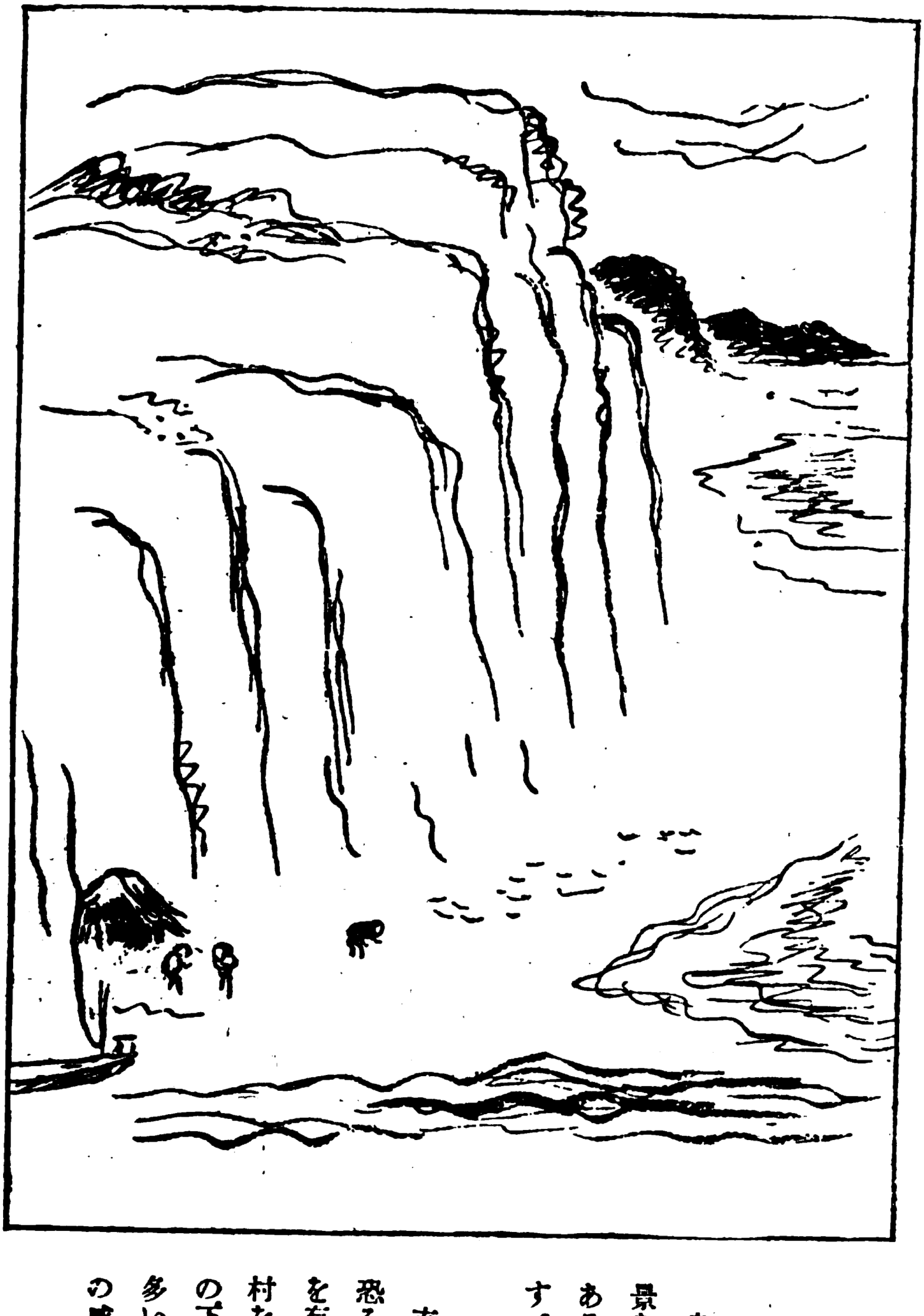
芝生に樣々の虫がゐるのに氣がつく。其中に小さいばつたが居る。これは赤ン坊のばつたであらう。私の下駄の影を恐れて逃げまどふ。他に芝にしがみついて居る一匹の蝿が目にとまる。これは今やつと生れ出た儘であらう。羽が極めて奇麗で全體が薄紫色をして居る。其に二つの黒い眼が馬鹿に大きい。

蝶が殖えた。七八匹も松の樹の間を飛んで居る。一匹は私の背中のあたりを飛ぶ。

睡蓮の莟を覗き込む。芭蕉の雫が株元に落ちる。熱帶の病を此の雫が持つて來たやうな心持がしてぞつとする。睡蓮の莟は少し口を開けかけて居る。其中に黄色い蕋がほのめいて見える。

青梅が三つ圓らになつて居るのが目立つ。其他にもなつてゐるのであらうが青葉がくれに見えぬ。

二番電車が通る。



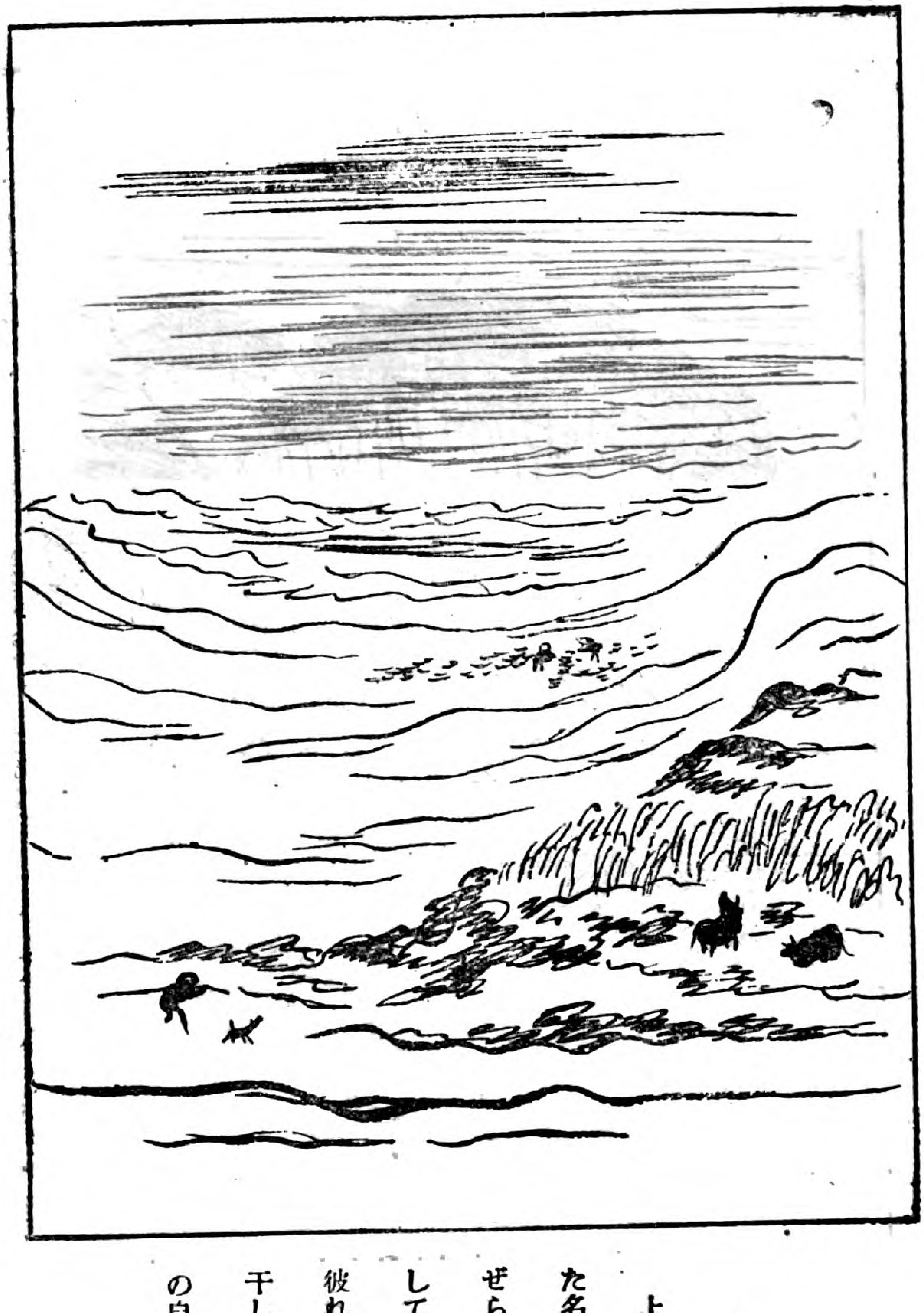
海景四種

森田恒友

島國日本は、到る處に海景をもつ。余は此處に異色ある曾遊海景四種を撰び出す。

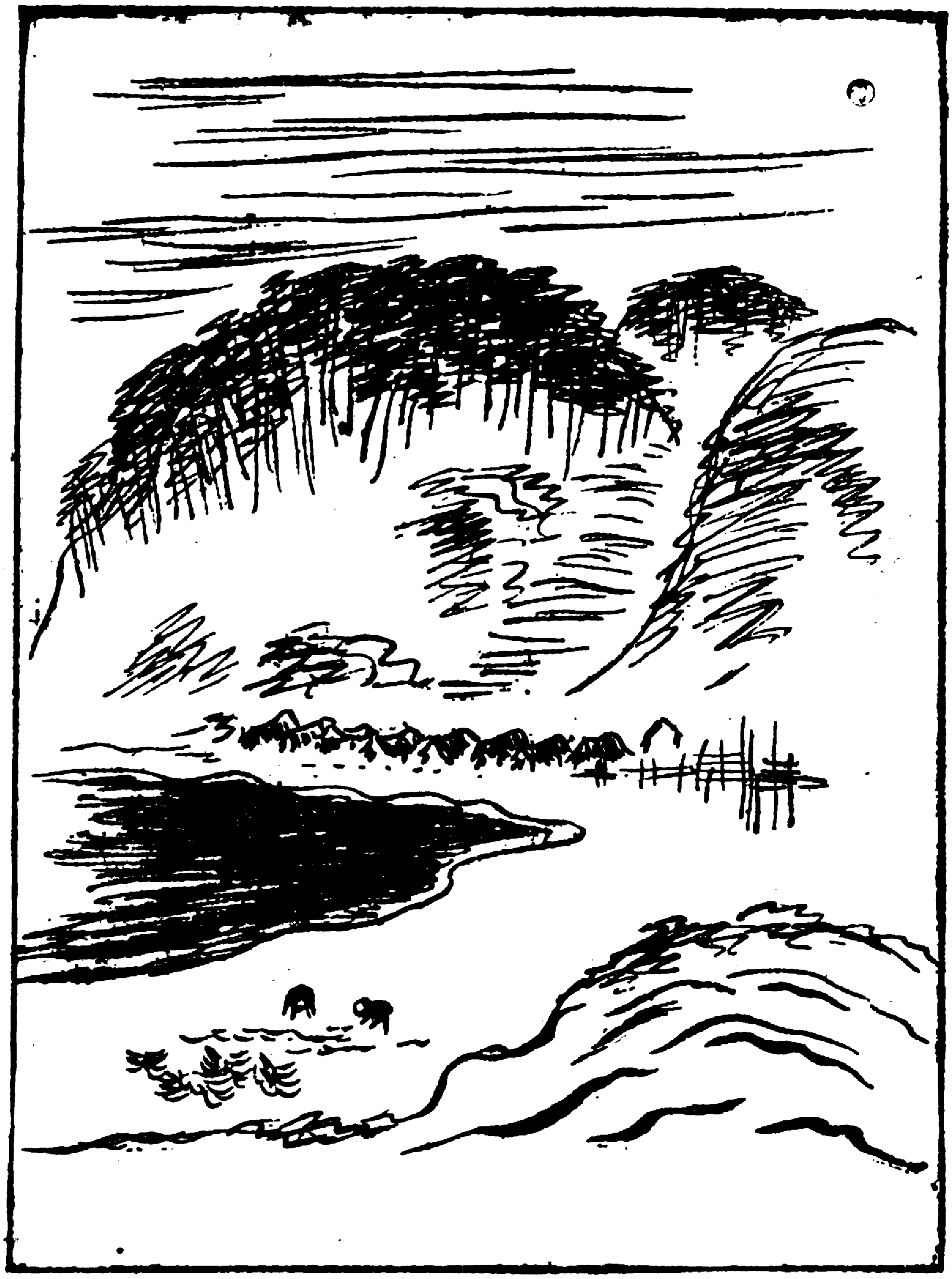
(1) 玄海岸

玄海灘の岸は、なかく〵恐ろしくして又寂しい感じを有す。彼れは時に砂丘麓に村を沒し、時に赭土の懸崖の下、蒼潮を湛ふ如き景が多い。人小さくして天地大の感がある。



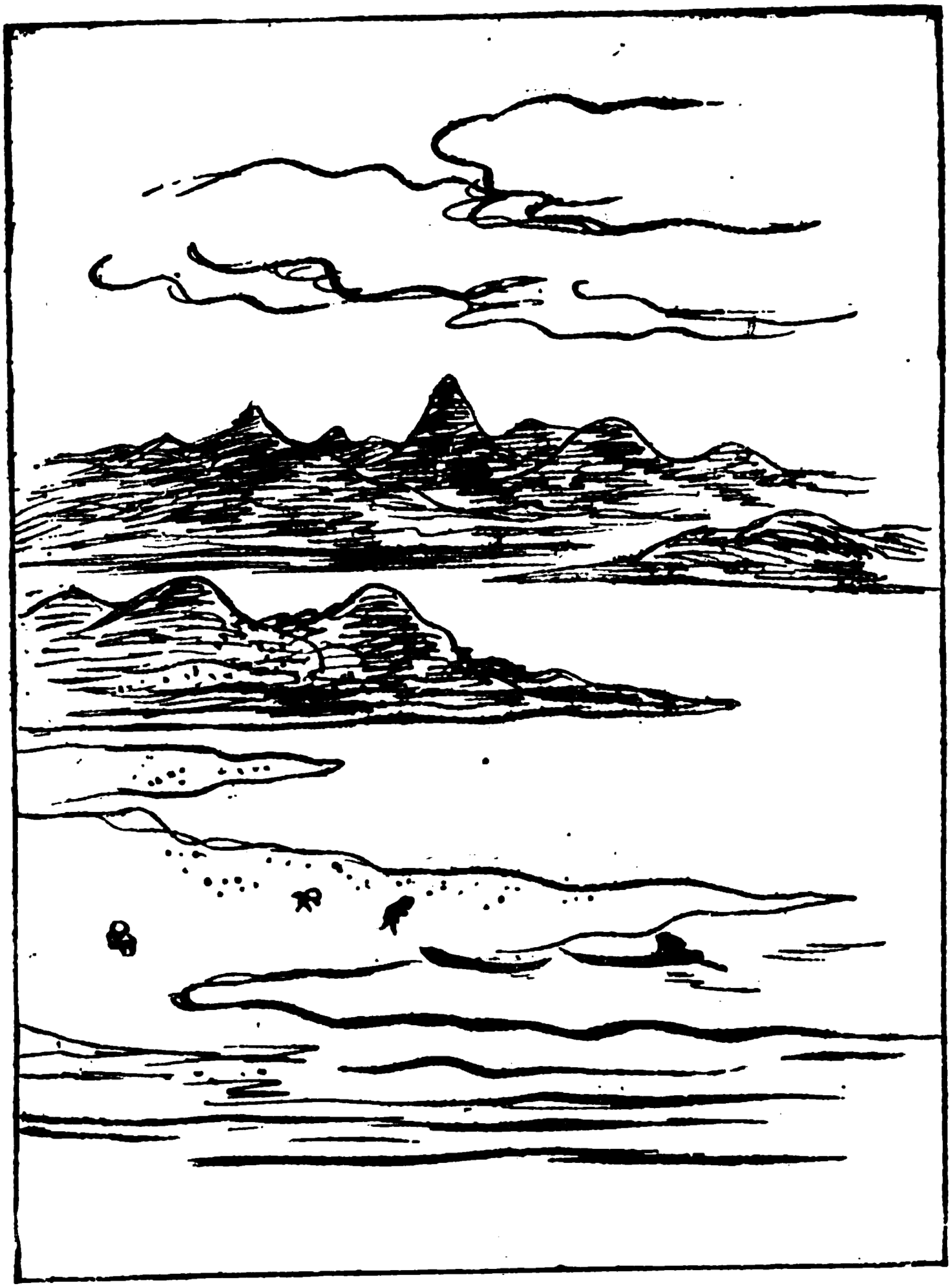
(2) 太平洋岸

上總房州の海は、耳慣れた名の爲めに、都人に輕んぜらる。だが恐らく壯快にして而も親しみ易き海景は彼れであらう。濱に天草(てんぐさ)を干し、薯畑に牛のうなる彼の自然を甚だ私は愛する。



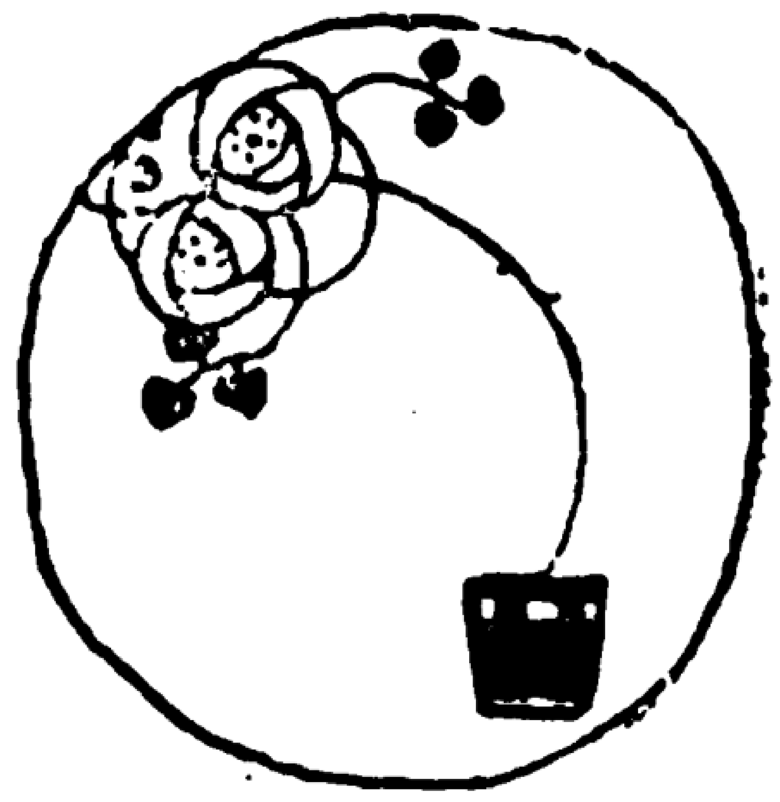
(3) 山陰の濱

丹波、但馬の日本海岸の寂寞。山路を下れば小灣あり、椀を伏せた樣な山の根の濱に碧波寂しく打ち寄する。旅人は斯ふ云ふ多數の景に會ふ。誠に旅情徒らに胸に迫る情景哉。



(4) 八代灣上

八代灣は九州の一角、一日の舟行、油の如き水上に浮ぶ天草郡島の間を行く。不可思議な、人の樣な島々が明るく澄み渡る。時に濱邊に近づけば、二三の人影あり、手を拍いて船を迎る。旅人自から涙ぐむ。



ダアルジイリンの夏

鹿子木員信

一

それは、或る年の六月中葉過ぎの事である。印度は、カルカッタのセアルダア停車場のフラットフォルムに、親しき見送りの同胞の友に別れて、幾分風氣味の身體を、サンクハル行きの列車の質素な何の裝飾もない一等室の冷い黒革のソフアの上に横へたのは、午後五時過ぎであつた。

合客は大部分英人である。その半數はカアキイの軍裝した將校であつた。印度人は十人のうち一人あるかないかである。

汽車は、しつとり雨に濡れた、柳子や芭蕉、マンゴや菩提樹に青い、水田の續くベンガルの平原を北に急いだ。車窓の外に、陰雲深く天を鎖さして、雨は、降つては止み、止むではまた降つてゐる。それもその筈、六月の中葉と云へば、丁度印度の梅雨――嚴密に言へば、印度の有名なモンスウンの雨期の始まる時なのである。

二

梅雨、雨期と言へば、我等溫帶の居住者には、自づとしめつて冷やかさを、思はせる。陰鬱ではあるけれど、却つてその爲めに、或る冷えびえしさを思はせる。併し、印度のモンスウンは、その沈鬱鈍重を以て、冷氣を購はない。その齎らす所は人體の、最も堪え難しとする濕暑である。華氏八九十度の高溫度に於て、遙かに日本の梅雨に優る濕度、雨と霧とを想像しても見よ。それが即ち印度ベンガルのモンスウン時の氣候である。暑さは中々に暑い。汗は玉を爲して流れる。併し高度の水分に飽和されてゐる空氣は、此の玉爲す汗を吸收しようともせ

ぬ。汗は我等の満身に層を爲して、殘る。譯はない、我等は四六時中汗の肌衣を着てゐるやう、汗浸りである。慣れぬ者は、呼吸することにも懶さを感ずるほどである。

私は、自分の頭腦までが、恰かも風呂屋の窓硝子のやうに、水蒸氣に朦朧と曇るのを感じた。併かもそは頭腦の明晰を生命にも優りて愛する私の、堪へ得る所でない。そこで私は、親しき友の圍繞と、その心地よき住居とのカルカツタを後に殘して、唯だ本にのみ讀み、人傳にのみ聞いたダアルジイリン、知る人とては皆無の、未だ見も知らぬダアルジイリンに向つた。夥しき書籍の重荷を携えて、半永住の覺悟で出發した。たゞ、それがヒマラヤ前山七千呎の山上の都會であると云ふ『ヒマラヤの近さ』にあこがれて。

三

さらでだに温暑に蒸さるゝ心は、風邪の熱に、浮かされて、幾千哩の長途の旅行に疲勞せる肉體の中を、印度の平野を走る汽車と共に、夢現と駈け廻つた。私はまどろむだ。

唯だならぬ、騒がしさに眼醒むれば、汽車は、既に、ガンガの河を渡り、一八四哩を走りて、闇を照す電燈の光のみ眩きサンタハルの乗換驛に着いて、乗客の半ばは、既にその手荷物を纏めて下りてゐるところであつた。私は、あはたゞしく身仕度して、赤帽ならぬ印度人の『赤帽』に荷物を頼んで、シリグリ行の狹軌の鐵道に乗り換へた。

『ダアルジイリンヒマラヤ鐵道』——印度の山岳鐵道の基點シリグリ驛に着いたのは、その翌朝午前六時の頃であつた。此處で私達乗客は、驛のレスタウテントで輕い朝食を取つて、直ぐ、玩具の汽車のやうに小い山岳鐵道に納まつた。

シリグリは、カルカツタより、鐵路を北に走る三二八哩、印度のガンガ平原の北に盡きんとする所、ヒマラヤ層重の連山の波濤が、遂に、南に消え去らんとする所にある。

シリグリを出て暫らくの間は、此の玩具のやうな汽車は、野性の象や虎の住み家であるテライーヒマラヤ山麓の大森林の中を走り、約七哩を走りてスウクナ驛あたりから、愈々、ダアルジイリンのある七千呎のヒマラヤ前山の尾根を目掛けて、谷を縫ひ谷を廻りて、峯より峯に峯傳ひに、孜々として登り始

（エ

より語らず、私もまた語るべく餘りに諦と徹[illegible]

て、ネパルの下僕が、たして具れた。單なる風邪に過ぎなかつ

一

痛憤と悲哀を胸に抱いて、獨坐した。

た、私の熱は、數日のうちに下つた。併し、あの鈍重な、牢屋の

その日の午後一時過ぎ、汽車は遂にその目的地、七千呎のヒ

マラヤ前山山上のダアルジイリン——漢譯すれば、金剛[illegible]に[illegible]と謂ひ、常[illegible]の[illegible]

着いた。

[illegible]の、[illegible]生活は、[illegible]

私は、默々としてその容貌、我等と寸分違はぬネパル人の容り、[illegible]け[illegible]りの生活の[illegible]

寂寥があつた。否、一種の社會的寒冷の空氣があつた。私は今日尙ほ、之れを深酷なる嫉視呪咀の感情なしには回想することは出來ぬ。…社會的寒冷の空氣、そは、卽ち白人種が、集團として、その征服せる集團としての有色人種の間に立つ事、非人間的な心の態度である。人間としてあるまじき潛越不遜の凍結權化せるが如きその冷酷なる心である。私は、一般に、此の溫かき心の缺乏——その凡ての罪と過ちを以てして尙ほ溫かき心の缺乏、鐵の如く冷酷なる惡魔的雰圍氣を始めて印度に於て經驗した。而して特にその一小縮圖とも見る可きダアルジイリンに於て經驗した。

と云ふのは、ダアルジイリンは、世界に有名な避暑地であるばかりではない、そは盛夏四五六月の頃に於けるベンガル政府そのもの〻避暑地であり、また印度駐在英兵聯隊の所在地である。そしてその小賣商の大部分は、ベンガリ、カシユミリ、マルワリ、パンジヤビ等の印度人であつて、筋肉、勞働者、苦力、人力車夫等は、殆んど全部、蒙古人種の西藏、ネパル、シツキム人である。ダアルジイリンの頭は、英人であり、その中部は印度人であり、その下部は、蒙古種の民である。

私は實にこの人種的階級——社會主義者達の言ふ社會的階級の上に、尙ほ人種的抑壓を重ねた此の恐ろしい極端に外的機械的な人種的階級制度の支配する社會に、その何れにも屬せぬ者、として入つて行つたのである。併かも、かくの如き社會に、その何れにも屬せずして入ることは、やがて、か〻る社會の秩序の破壞に外ならない。私の周圍を取りまいたあの社會的寒冷の空氣も無理ならぬことかも知れぬ。

五

その後、私は、少くもより善き、より靜かなる住ゐをと思つて、町の中心より二哩も隔る山上の一小孤莊、イヤン・グレンと云ふを一軒借り求めて、年四十ばかりのネパルの忠實な下女と共に移り住つた。私の生活は、自由になつた。家は、山上の一軒家である。その一軒家は、私の獨占する所である。高歌低唱、思ひの儘である。私は、殆んど毎日、讀書研學の一日を終つて、孤獨の夕餉を濟ませると、天氣の好い日には、ゐながらヒマヤラ氷雪の大連山を一眸のうちに收むる硝子張りのエラン

る。

併かも我等人間は、元來社會的なる者である限り、私達の自り響の來る、ネパル牧童の歌ふ、調子の高い、元氣な、併し、我そのものが、社會的である。社會のうちに、私達は、その自凡ての亞細亞の調があるやうに、一種の悲哀を帶びた、抑揚に我を見出し、また味ふのである。私のイヤン・グレンは、常に富んだ歌を、極めてなつかしきものに聞くやうになつた。

最も溫かき心と [illegible]

私の孤莊の客は多くはなかつた。此の故に、さる機會のある毎に、私には、それは、祭り日であつた。私は、さる同胞の珍客

嵐の前

◇好評激

◇四六版最上用紙天金函入美本

若き日に襲はれた烈しい病苦と痛はしい懊惱——ニイチエは、全く絶々なる心を抱いて、遁れるやうにエンガデンの園にさまよひ來た。彼はこゝで淋しい孤獨を抱き占めながら長閑な沈靜の月日を送つた、エンガデンの園は彼になつかしい一人の

◇東京芝區櫻田久保町



今も
昔も
効能
逆上を引下げ便通をよくし梅毒其他諸毒を下す
効能で賣れる
七ふく
大阪高津表門筋
本家七ふくや伊藤長兵衛

社會講談



パリ・コンミユンの話

堺利彦

一　二個月間の勞働者の天下

今から丁度五十年前、日本では明治の新政府の出來たてで、諸大名が藩籍を奉還し、武士が祿扶持を買上げられて兩刀を腰から放した頃、フランスのパリでは勞働階級が政權を握つて、二個月のあいだ勞働者の天下を出現させた。世界何千年の歴史上で、勞働階級が政權を握つたのは、それが本當の皮切りで、其の次が今度のロシヤである。『パリ・コンミユンの話』は即ち其の二個月間の勞働者の天下を物語るのである。

二　普佛戰爭、パリの降伏

日本の明治維新と同一の意義を有するフランス大革命は、今から百二十年ばかり前に起つた。あの大革命でフランスの封建制度が崩れてしまひ、其あとに金持の天下、資本家の天下が出現したわけだが、其あいだには色々なイキサツ、六かしい言葉を使へば迂餘曲折といふ奴があつて、ナポレオン一世の帝國が出來たり、それが又引つくりかへつて第二の共和國が出來たりしたが、一八七〇年（即ち今から五十年前）の頃には、更にナポレオン三世の帝國が出來て、盛んに領土擴張の野心を起し、とう／＼プロシヤと大戰爭をオツぱじめた。普佛戰爭といふのが即ちそれだ。

當時プロシヤはドイツ聯邦の盟主として、王樣ヰルヘルム、宰相ビスマーク、參謀總長モルトケなどいふエラ物揃ひで、さしも英雄氣取りのナポレオンが散々に打ち負かされた。九月一日、セダンの戰ひでは、八萬四千人の兵士、五十人の將官、五千人の將校が皆な一度に降參した。そしてナポレオン三世陛下

御自身も捕虜になつた。

するとパリでは大騷ぎで、皇后ユーゼニイがイギリスに出奔し、帝政が仆れて共和制の新政府が出來た。間もなくパリはプロシヤ軍に圍まれ、內務大臣ガンベツタが風船に乘つてパリを拔けだし、地方を驅けまはつて新軍隊を編成したが、それも皆な敗北つゞきで、結局、十月の廿七日、メツツの大戰爭で十七萬三千人の兵士が、三人の大將と三千人の將校とに率ゐられたまゝ、おめおめ敵に降參した。斯くてフランスの軍隊は大部分、亡びてしまつた。

それから、プロシヤ軍は引續いてパリの包圍攻擊をやつてゐたが、翌一八七一年一月十八日、ヰルヘルム王は遂にパリの郊外なるヴエルサイユの王宮に於いてドイツ皇帝の位に登つた。其エライ威勢の前に、パリ政府はとう／＼二月二十八日を以て降參し、アルサス、ローレンスの二州を割き、五百億フランの償金を拂ふといふ條件をビスマークから押しつけられ、それでヤツト講和條約が成立した。

三　國民兵の大活躍

所が、パリの內部の混雜は容易な事でなかつた。最初、セダンの敗報が達して帝政が仆れた時、パリ市民は此の危急の場合差當り前の議會のパリ選擧議員に『國防政府』を作らせ、首相ツロシユ、外相ジユール・フアーブル、內相ガンベツタといふ役割でやらせたが、メツツの大敗以後、政府は最早やパリを防衞する氣力を失つたのに、市民（殊に勞働階級と、中の下階級の大部分）は、猶ほ依然として飽くまで戰鬪する意氣込を保つてゐた。

其の時、パリ市民の實力は『國民兵』にあつた。國民兵といふのは、正規兵が悉く國境に出かけたので、苟くも武器を取り得る總てのパリ人を召集して編成した臨時の防衞軍で、其の大部分は勞働者であつた。然るに此の勞働者の國民兵と、紳士閥の政府との間に、反目が生じて、それが遂に勞働者に勝利を得させる動力となつた。

十月卅一日、メツツの大敗に昂奮したパリの市民は、自然に大群集を爲してオテル・ド・ヴイールを襲擊した。此オテル・ド・ヴイールと云ふのは、元來パリの市役所の事だが、同時にそれ

が中央政府の所在地である。即ち市民が政府を襲撃したのである。然らば市民の要求する所は何かと云ふに、プロシヤの侵入軍に對してパリを防衛する爲めには、此の非常の際、特別の政府を樹立する必要があると云ふのであつた。從つて或者は公安委員會を要求し、或者は革命コンミユンを要求した。公安委員會と云ふのも、革命コンミユンと云ふのも、フランス大革命の時に非常な威力を揮つた臨時政府で、つまり革命黨の特別委員會であつた。元來コンミユンとは獨立した市町村自治體の事だが、當時革命黨がパリの市役所を乘取り、遂に其まゝフランス全國の政權を握つたので、それを革命コンミユンと云つたのであつた。そして今、プロシヤ軍の侵入を眼前に控へたパリの市民は、その昔しの革命コンミユンを思ひだしたのであつた。

　そこで市民の大群集がオテル・ド・ヴイールを襲撃したが、前記の國民兵は少しも政府を擁護しなかつた。そして政府員は直ちに監禁され、フルーラン、ブランキイといふ、有名な二大首領が、半日ばかり權力を握つた。然し準備のない政權把握者が市役所の内部で議論や憤慨に時間を費してゐる間に、保守派の連中は國民兵の一部を口說き落し、ブランキイだの、フルーランだのといふ、あんな亂暴者に政權を任せては大變だと、憶病な中流階級を威かし、巧みに政府員の監禁を解いた。斯くて政府は復活した。そして約束に背いてブランキイ、フルーランを捕縛した。

　それからパリは敵軍の包圍の中に新年を迎へたが、一月廿日、政府はモウどうしてもパリの籠城が出來ない、從つて敵軍と講和談判を開くより外はないといふ布告をした。すると廿二日の早朝には、國民兵が監獄を破壞してフルーランを救ひだした。勞働階級は再び一揆を起してゐた。所が其日の暮過には、國民兵の中の中流階級の分子がオテル・ド・ヴイールを擁護し、勞働派との間に砲戰を起し、準備の不足な勞働派は死傷と捕虜とを出だして潰えてしまつた。こんな風に、勞働派の革命的一揆が二度まで流產に終つた後、パリはいよいよ敵軍に降伏し、廿九日には郊外の要塞にプロシヤの國旗が翻つてゐた。

　そこでパリ政府は講和條約批准の爲に新に國民議會をボルドウに召集したが、其の選擧には巧妙な術策が行はれて、パ

り以外の各地方では、保守派が大多數を占めてゐた。そしてチエールといふ頑冥で老猾な政治家が行政長官に選ばれた。それから新政府は、今ではもうドイツ軍よりも國民兵が恐ろしいので、一日も早くそれを解散させる事に苦心してゐたが、さすがに輕々しくは手がつけられなかつた。そこで二月の初から三月の十八日まで、一方は武裝したパリの市民、一方は國民議會と政府其の二つの勢力が睨み合ひの姿であつた。

四　三月十八日の一揆

ボルドウ(日本なら大阪とでも云つたような處)に開かれた國民議會は、講和條約を批准してから、今度はパリを壓伏して保守派の天下を現出させようとたくらんだ。即ち彼等はパリを首府とする事をやめ、議會も政府もヴエルサイユに移すといふ決議をした。ヴエルサイユは昔しの王宮の所在地で、パリから五里ばかり西南の小都會である。丁度その事のパリに知れた日、即ち三月十一日、赤色共和黨(即ち平民的急進派)の機關新聞が禁止され、同時に又、フルーランとブランキイに對する死刑の宣告があつたので、パリ市民の憤慨は極度に達した。殊に國民兵の給料支拂をやめ、續いて其の武裝を解くといふ噂が傳はつたので、國民兵がいよいよ激昂した。

それから國民兵は急に評議を凝らし、各區から三人づゝの代表者を選出して、國民兵中央委員會を設置した。此の委員會について非常に面白い一つの特色があつた。即ち委員は總て其の人物の確かな事と、實際上の能力とに依つて、各區の同志から選出されたので、全く無名の人達であつた。それから中央委員會の外に局部的委員會もあつて、其の中で最も有力なモンマルトル支部などは、時として中央委員會と間違へられた程であつた。そんな風で國民兵の委員會が次第に權力を作り、當時西部歐洲全體に有力であつた『國際勞働者同盟』(即ちインタナショナル)や、其外諸種の勞働團體は後援されて、國民議會と政府とに對する』爆發の時機を待つてゐた。

チヨツトこゝでパリの内部に於ける急進派の色別をしておく必要がある。第一は、パリをどこまでもフランス全國の首腦にしたいといふ都市的愛國者。第二は、王政復活の陰謀が見えてゐるので、それに對抗して共和制を維持しようといふ共和主義

者。それで中流階級の人には、云ふまでもなく大體上、右の第一、第二に屬してゐたのだが、革命が進行するに從つて、社會主義的色彩が段々濃厚になり、二三週間の後には、それが全く運動全體を併呑してしまつてゐた。其の事は追々あとで分る。

扨、チエール其他の諸大臣は三月十五日、ボルドウからパリに戻つて來て、早速パリ市民の武裝解除に着手した。これは隨分市民を見くびつた話で、當時、政府は精々二萬五千人ばかりの、而もダラケきつた正規兵を持つてゐたのに、國民兵は約十萬人を算してゐるのであつた。尤も、國民兵の中で幾隊かは政府側につく見込もあつたらうが、それは殆んど物の數でなかつた。然るにチエールは[illegible]兵集て事を決行しかけた。それでチエールは先づ、モンマルトルに在る二百五十門の大砲を取り上げろといふ秘密命令を下した。そして十八日の朝の三時頃、市民のまだ寢てゐる中に、正規兵の二隊が[illegible]を襲ろて、わけもなく其の大砲を占領した。然し彼等はそれを他に運搬する準備を忘れてゐた。それでドサクサやつてゐる中

に飛びだして大砲のまはりに集まり、それを占領してゐる兵卒等に怒鳴りつけたのは、近所の婦人連だつたと云ふ事だ。程なく合圖の喇叭が響き、太鼓が鳴り、國民兵が續々と集まりだした。彼等は鐵砲の台尻を上に向けて、女や子供の群集と一緒になつて、ヒシヒシと詰め寄せた。正規兵の中にも存外國民兵と馴れあふ氣色が見えた。正規兵の大將ルコントが眞赤になつて三度まで發砲を命じたが、兵卒等は應じなかつた。初め二三發、打つには打つたが、大した怪我人も出なかつた。見る見る中に群集は前進してスツカリ兵卒等と馴れあつてしまひ、大將ルコンドはフンじばられた。これと同じような事が外の諸隊にも起つた。到る處、正規兵が市民と馴れあつた。國民兵と正規兵とがゴッチヤになつて[illegible]。十一時頃には總ての大砲が國民兵の手[illegible]取り返された。政府はどうする事も出來[illegible]僅々數百人に過ぎなかつた。[illegible]ルは、パリの全市が自分に反抗してゐる此の形勢を見

て、慌てまくつてオテル・ド・ヴイールの裏口から拔けだして、ヴエルサイユに逃走した。外の大臣連も段々に其の跡を追ふた。總督ヴイノイも夜になつてから、兵隊と彈藥とを引き纒めて落ち延びた。

午後の四時頃、クレマン・トマといふ將官が一人、群集につかまつた。これは一八四八年の騷動の時、盛んに虐殺をやつた男なので、直ぐに町家の壁に押しつけられて、廿挺のシャスポ銃で滅茶々々に打ちぬかれた。それから前記の大將ルコントは國民兵の本部の一室に拘禁されてゐたが、そこに群集が怒鳴りこんで來ると、地べたに這ひつくばつてオイオイ泣きだし、家族の者がどうのこうのと云つて憐みを乞うた。自分が今朝發砲を命じた時、其の砲先に死ぬる筈であつた群集の家族の事を、彼が少しでも考へたであらうか。兎にかく彼は引きずりだされて、群集の處刑を受けた。勿論、ブルジョアの新聞紙は盛んに此の二人の處刑を批難した。

一體、此日の一揆は全く自然に爆發したので、何等の準備も計畫も組織もなかつた。國民兵中央委員會は餘ほど遲くなつてからヤツト開かれた。それから初めて政府の役所や軍事上の要所を占領する事にかゝつたが、其の時にはモウ政府の諸大臣も兵隊もすつかりヴエルサイユに引揚げてゐた。それがパリ・コンミユン一揆の第一の失策だつた。若し全體の運動が今少し組織だつて、規律と訓練とが行屆いてゐたなら、早くから諸方面の大木戸を閉鎖して、目ぼしい敵を皆んな一纒めにからめ上る事が出來た筈だ。これにつけても、組織のない一揆の爆發では、折角の仕事を肝腎の所で滅茶にするといふ事が分る。

五　パリ・コンミユンの成立

三月十九日には、オテル・ド・ヴイールにも、其他の公けの建物にも、皆な赤旗が飜つてゐた。革命は正に勝利を得てゐた。パリの政權は既に國民兵中央委員の手の中に握られてゐた。中央委員は此の突然の權力把握に依つて寧ろ自ら驚き呆れてゐた。直ちに進んで敵をヴエルサイユに攻めるといふ大事の方策を主張する者も無いではなかつたが、多數の委員は只まごまごして何事も手につかず、空虚な法律論に拘泥して、早く正式のコンミユン選擧を行ひ、自分等の權力をこれに讓り渡す事ばか

り將へてゐた。如何にもワタクシのない公明正大な心掛には相違ないが、此の危急の場合を切り拔けるに必要な、大膽と機敏と果斷とを缺いた態度であつた。

それでパリの代議士と、各區の區長とに對して交渉が始まつたが、クレマウソウ、ルイ・ブランなどいふ其の連中は固よりブルジョアの代表者で、君等は一揆暴動の團體ぢやないか、などと中央委員の事を罵つたりして、オテル・ド・ヴィールを自分等の手に占領しようと掛つた。彼等は勿論内々でヴェルサイユと通じてゐた。そこで中央委員は彼等との交渉を打ち切り、次の水曜日（即ち廿二日）を以てコンミュンの選擧を行ふ旨を宣布した。

然し區長連、代議士連は此の選擧に對して抗議を試み、ブルジョアの新聞などがそれに加擔して騷ぎ立て、『中央委員を仆せ！』などゝ叫ぶ藁人形の示威行列もあつたりして、とう〳〵選擧は日曜日（即ち廿六日）まで延ばされた。さすが其の時には、國民議會のパリに對する態度が餘り露骨なので、穩和な區長連もパリ擁護の爲に反抗の鋒先を緩めて來た。

いよいよ日曜日に選擧が行はれて、廿八萬七千人の選擧者があつた。パリ・コンミュンが正式に成立した。その議員の數がチョット分らないが、多分百人以上もあつたらう。此コンミュンなる者は、市會のようでもあり、國會のようでもあるが、前にもチョット説明して置いた通り、決して單なる立法機關ではなく、立法と行政との全權を兼ね有する、純粹獨立な民政機關であつた。然らばロシヤのソヴィエットのような者かと云ふに、元來がブルジョア制度傳來の自治機關であつて、ソヴィエットほど明白な勞働階級の權力機關ではなく、まだ餘ほど漠然とした所があつた。元來フランスには、市町村の獨立自治體（どんな小いさなのでも）が主權となり、それを聯合して國家を作らうといふ中世のブルジョアから傳はつた、中央集權排斥の流行思想があつて、それが又、プルードン、バクニン等の無政府主義學説の根本となつてゐた。從つてパリ・コンミュンにも其の傾向が顯著であり其の色彩が濃厚であつた。然し一方から見ると、パリ・コンミュンの眞意義は只だ勞働者の天下であり、勞働者の共和國であつて、昔しの大革命が王權を仆したのに對

し、今度は金權を仆すのが根本目的であつた。其の意味からすれば、コンミユンは即ちソヴイエットの前身であつた。

それは兎もあれ、三月廿七日はコンミユンの宣布でパリの全市が狂喜のどよめきを擧げた。祝砲が鳴り渡る、マルセーズの奏樂がある。赤旗が到る處に飜へる。國民兵はオテル・ド・ヴイールの前に整列する。人民は其の前に群集して歡呼の叫びを擧げる。新議員等は代る代るオテル・ド・ヴイールのバルコニイに現はれて挨拶をする。子供や女や若い男は皆はしやぎ、年寄は只だ嬉し泣きに泣くのもある。實に『偉大な日』『莊嚴な日』であつた。

所で、選出されたコンミユンの大部分は勿論、革命主義者と社會主義者とであつたが、中にはブルジョアの自由主義者や急進主義者もあつた。議長に選ばれたベズレイは溫厚の長者で、ブルジョアではあるが最後までコンミユンの爲に働いた。執行委員はルフランセイ、デユヴアール、フェリス・ピヤ、ベルゲレー、トリドン、ユード、ヴアイヤンの七人、其他、軍事、財政、司法、保安(警察)、勞働、糧食、外交、救濟、敎育等の各委員會が作られた。

然し大體から見て、コンミユンの委員等は革命の政策について甚だ迂濶であつた。第一、革命コンミユンが新たに成立した以上、直ちに明晰な平易な宣言を發表して、今後着々實行しようといふ、諸種の新施設を具體的に說明して、一般人心に訴ふべき筈であるのに、彼等はそれを爲し得なかつた。ズツト後れて發表した宣言にも、例の潔癖な中央集權排斥論や、空虛なセンチメンタルな抽象論ばかりであつた。次に彼等は地方との連絡を取る事を怠つた。三月十八日以後、パリと自然に相呼應する頗る有望な運動が諸地方に起つた。即ちリヨン、マルセイユ、サン・エチアンヌ、ナルボンヌ、ツルーズ其他の都市に、續々としてコンミユンが發生した。けれども中央のパリから何等の援助もなく、奬勵もなく、通信すらもないので、物質上にも精神上にも皆な孤立の狀態に陷り、其の多數は僅に數日の中に沒落し、マルセイユとナルボンヌとだけが稍や長く持續したけれども、それでも二週間たゝない中に、地方に於けるコンミユン運動は全滅してしまつた。

之に反し、ヴエルサイユでは、國民議會もボルドウから移轉して來る、ドイツ軍に賴んで捕虜を釋放して貰つた爲に兵力も增大するといふ有樣で、氣勢が大いに揚り、地方のコンミユン運動はピシピシ叩きつぶす、パリへの貨物列車は遮斷する、パリ行の一切の郵便物は差し止める、其ほか種々な宣傳はやる、パリ降伏の準備は手ぬかりなく遂行してゐた。

斯くて三月の末頃には、穩和派のコンミユン議員は（ベズレー老人の外）辭議し、パリの上流人士は續々相率ゐてヴエルサイユに引移つた。

六　第一戰の大敗北

四月一日、チエールは正式に宣戰を布告し、ヴエルサイユ軍は何等の豫告もなしにパリに向つて砲火を開いた。パリ人は周章狼狽した。まさかこんな事にならうとは、今の今まで思つてゐなかつたのである。

然しコンミユンの軍事委員は兎にかく進擊の決議をした。二日の夜、深更、第一隊（即ち右軍）一萬五千人は二手に分れ、ベルゲレーとフルランとがそれを率ゐ、モン・ヴアレリーンの壘を包んで北方から進行し、其の壘の背後に於いて二手が更に一隊となつてヴエルサイユに向ふ。第二隊（即ち中軍）一萬人はユードが率ゐて眞直にヴエルサイユに突進する。第三隊（即ち左翼）三千人はデユアールが率ゐて南方から進み、ヴユルサイユの直ぐ手前で中央本隊に合する、といふ作戰であつた。若し此の作戰どほり實行されたなら、ヴエルサイユは多分不意を擊たれてコンミユンの手に歸したゞらうと云はれてゐる。

所が、コンミユンの國民兵も丸で規律がなく、三隊共に夜が明けてからヤツトのことで、パリの城壁を跡にしたといふ始末であつた。そして先づベルゲレーの北隊がモン・ヴアレリーンの北方に達すると、忽ち壘の中から砲彈を浴せられた。元來、この壘はパリとヴエルサイユとの間に於ける第一の要害で、最初國民兵が逸早くこれを占領しないのが、軍事上、最大の失策だと云はれてゐる。況んや其の後、ヴエルサイユ軍に占領されてゐる。今日、三月十八日の例に倣つて、正規兵が發砲しない約束をしたと云ふのを恃みにして、高を括つてやつて來たのが抑大失策であつた。それにベルゲレーが勇敢な戰士ではあるにし

ても、一軍を統率するだけの知識と經驗とを缺いてゐたので、砲彈雨下の間にシヤニムに突貫の命令を發して、瞬く中に自分の隊の半分以上を殺してしまつた。此の急報に接して早速道を轉じて應援にやつて來たフーランの一手が、同じく眞正面から壘の砲彈を浴せられ、二手が一つに合した時、一萬五千人の一隊が僅かに三千人になつてゐた。そこを又ヴエルサイユからも砲撃されて、散々の體で退却した。フルーランは敵兵に捕へられて、虐殺された。フルーランは中產階級の出身であつたが、深く勞働階級に信頼された有名の革命家で、此の人の戰死は頗るパリ人の意氣を沮喪させた。

右軍の此の敗北に次いで、ユードの中軍は退却し、ヂユヴアールの左翼は降伏した。ヂユヴアール其他多數の將校は射殺された。悲しいかな、此の第一戰に於いてコンミユンの運命は既に死してゐたのである。そしてヴエルサイユの軍隊內では、少しでもパリに同情を寄せるような言葉を發した將校は、片つぱしから秘密の中に殺されてしまつた。

七　多數派と少數派

それから以後、コンミユンは只だ敵の來襲を防禦するばかりであつた。ポーランド人ドムブロウスキイ兄弟が、モン・ウアレリーンの砲火を浴びつゝメイロウの壘を死守した勇敢壯烈な働話などは殘つてゐるが、コンミユン全體としては殆んど何等の積極的施設もなかつた。

四月十六日にコンミユンの補缺選擧があつたが、選擧人は非常に少なく、コンミユンの無能と失態とが漸く人心を失つた事を示してゐた。そこでコンミユンは人心を新にする必要を感じて、此の選擧の後、漸く政綱を發表したが、其の起草者は主として新聞記者ピエル・デニスで、其の內容は前に云つた通り、徒らにコンミユンの獨立自治を力說したものであつた。其の說を喩へて云ふと、フランス國といふ大海の中にパリといふ大きな離れ島を一つ作りあげれば、他にも續々として無數の小島が自然に現はれ、それらが自由に聯合して大海の全面に群島の組織を出現させると云ふのだが、強敵を眼前に控へながら、そんな魔術のような美しい夢を見てゐたのは、餘りに迂濶な非實際的な考へだつた。過大な中央集權の行はれてゐる官僚國家は誰し

此の危急の場合に於いて、潔癖な分權論に拘泥して、革命擁護の實力を確立する必至の方策を忘れたのは、パリ・コンミュンとして誠に〇しむべき不徹底であつた。

猶ほ其の時、コンミュン會議の內部に多數派と少數派が對立して、それに個人的の嫉視反目がからまつて、大事を前に控へながら下らぬ論爭と軋轢とに時間と精力を徒消したのは、どこの歷史にも有りがちの事とは云へ、如何にも情けない現象だつた。多數派と云ふのは重にブランキスト及び浪漫的共和主義者であり、少數派と云ふのは重に『インタナショナル』に屬する社會主義者であつた。ブランキストは卽ち豪傑社會主義者ブランキイの一派で、『勞働獨裁』の古い主張者だとも云はれてゐるが、其の『勞働獨裁』は『勞働階級の獨裁』といふ意義ではなく、寧ろ『少數豪傑の獨裁』であり、もひとつ手つ取り早く云へば『ブランキイの獨裁』であつたらしい。從つて彼れの靡下に集る者は、主義とか理解とか信念とか云ふ事よりも、只だ首

……になつて見ると、首領なしには殆んど何等の纏まつた運動の出來ない連中ばかりであつた。それで彼等は一生懸命、首領取戾しの運動をやり、こちらの人質を皆んな返してもいゝからブランキイと交換しようと、ヴエルサイユに申込んだが、チエールは斷乎としてそれを刎ねつけた。

こんな譯でブランキストがふら〳〵してゐる間に、其他の人々のコンミュン議員等は、浪漫的な、空現的な、舊式の共和主義を奉じてゐる、古い首領達にクツついて、取りとめもないホラ氣焰を擧げてゐた。フエリス・ピヤといふ人物などは、空言家の首領の標本であつた。一體、コンミュン議員は、何等の組織も準備も計畫もない運動の中から、あのドサクサの間に選出されたのであるから、隨分好い加減な、雜駁な分子を集めた譯になつて、外國人もゐる、スパイも交つてゐる、ゴロツキも紛れこんでゐる、といふ有樣で、まじめな勞働者と云つても、必ずしも一番有力なシツカリした人物が精選されたわけではなかつた。それで彼等の多くは只だ無暗に昔しの大革命の記憶にあこ

がれワイ／＼騒ぐ事の熱情に驅られ過ぎて、革命擁護の實力を堅める事は、兎かく忘れがちの有様であつた。

『インターナショナル』の人々は、社會主義の空想家と云はれながら、右の人達に比べると餘ほど實際的であり、現實的であつたが、其の理想とする所は、資本家の產業を勞働者の自治團體に引渡すと云ふので、政治上には矢張り分權自治制の國家を主張してゐた。從つてこれも矢張り、軍事上の急要など眼中に入れる餘裕がなかつた。デレクリユーズ、ヴアルラン、フエレなどいふ人には頗る識見の高い、才幹の多い人物だつたと云ふ事だが。少數有能の人物があつても多數の大勢を動かすには足りなかつた。

其間にヴエルサイユでは益々ドイツ戾りの兵隊が增加して、四月の末には十三萬と云ふ多數に達してゐた。そしてビスマーク其他ドイツの軍事官憲は猶パリの北方に駐屯してゐながら、チエールとフランスの紳士閥とに有らゆる援助を與へて、其共同の敵たるパリの勞働階級を壓伏することに努めてゐた。

八　內政の各方面

一般政策に於いてコンミユンが齒がゆいほど拙劣であつた事は右に云ふ通りだが、內政上の施設については隨分愉快な事もあつた。尤も其の間にも矢張り大失策もあつた。そこで今度は、各方面の施設について少し話して見る。

コンミユンが初めて政權を握つた時、彼等は第一に、一八七〇年十月から一八七一年七月までの、家賃、地代等、總ての賃貸料を免除する法令を發布した。それで先づ多數の貧民勞働者が大變に助かつた。それから各種の委員(即ち諸役所の長官)が出來て、それぞれの施設に着手したが、こゝに一つ特筆すべき事がある。それらの委員(即ち長官達)は總て勞働者及び小事務員の出身であつて、其の給料には最高制限があり、最高の分でも普通の勞働者の賃金と似たものであつた。凡そ大變事の際には之が是非とも必要で、現にロシヤでも其の遣口である。

財政部はパリ・コンミユンの仕事の中で最もよく整理してゐたと云はれてゐる。委員はジユールド、ヴアルランの二人で、ジユールドは元どこかの會計係をしてゐた人、ヴアルランは製本職工であつた。此の二人が、諸種の公共事業費から、國民兵

時フランス銀行には、約三十億フランの正金と紙幣とがあつた。今から五十年前の三十億フランは實に大した金で、それだけの金があれば、ヴェルサイユの政府員を皆な買收する事も出來るし、コンミュンの運動者を雨の如く全國各地に注ぎかける事も出來た筈である。然るにコンミュンは此フランス銀行に手をつける事を躊躇し、彼等の拒絶に會つて指を[illegible]ゴと引きさがつた。それは主として前記のベズレイ老人が、プルードン流の信用說を楯にして、コンミュン員の全體を威かしたからであつた。ベズレイは善良で正直な人物には相違なかつ[illegible]

[illegible]の職人が委員となり、其の[illegible]

従來の高級な役人は皆な追ひのけてしまひ、其あとに勞働者を入れて事務を取らせ、賃金を上げ、時間を短くし、その[illegible]の間に一切の郵便事務を確定した。尤も電信の方は、[illegible]等に電線を切られてしまつたので、どうする事も出[illegible]が、[illegible]村のポストに投入するといふ機敏な親切な遣方まで[illegible]の郵便[illegible]爲して[illegible]てゐた。

造幣局にはカメリナといふ青銅職工が委員になつたが、技術上し著るしい改善を加へたので、コンミュンの沒落後、ヴェル

サイユの政府が自分の造幣局長に其の改善の方法を敎へてくれと、彼に賴んだ程であつた。

救濟局にはトレーラールといふ古い革命家が委員になつたが、そこでは忽ちにして慈善といふ舊式の精神が亡びて、公けの救濟を受ける事は人民の權利だといふ思想が生じた。從來、貧乏人を馬鹿にしたり、虐待したりした、醫員や看護婦に對しては、トレーラールは特に嚴刻な態度を取つた。惜しいかな、トレーラールの改革を完成するには、コンミユンの壽命が餘りに短かかつた。

糧食委員は四月の末まで、パリ人民に食物を供給するのに別段困難を感じなかつた。チエールが貨物列車をとめてからでも、ドイツ軍の占領地とヴエルサイユとの間の中立地帶を通じて、糧食の輸送が續いてゐた。それにパリ市自身でも、まだまだ永く籠城が出來るだけの糧食の貯藏を持つてゐた。それで委員は只だ價格を下落させる事ばかり務めてゐた。

司法部にはプロボウが委員であつたが、人民を捕縛する事などについては、餘り神經質すぎると思はれるほど、人民の權利を尊重した。殊に所有權に對する用心は馬鹿々々しい程だつた。例へば、武器を密藏した瓦斯會社の家宅搜索をやつた時、そこで押收した金箱を態々返附したといふような事實がある。

敎育部の委員は後に有名な社會黨議員になつたヴアイヤンであつた。同じく有名な學者兼無政府主義者エリゼ・ルクリユなどは其の部内の博物館に働いてゐた。敎育部の主な改革事業は宗敎敎育の禁止であつたが、或區に於いて小學生徒に衣服と食物とを無料で供給する事をやつたのは、最も著るしい進歩であつた。

外交部の委員グルーセは絶えず金の不足に苦しんでゐたが、若し銀行にうなつてゐたアノ金をグルーセに供給したなら、隨分有益な宣傳も出來ただらう。それに今一つ殘念な事は、資本家政府の秘密文書を澤山握つてゐた筈だのに、ナゼそれを公表して彼等の罪惡を暴露しなかつたのか。

勞働部の委員はオーストリヤ人フランケルで、此人は『インタナショナル』に屬する勞働者であつた。こゝではさすがに社會主義的施設が可なり顯著に實現されてゐた。總ての質物は

の置主に返された。八時間勞働は提案しただけで行はれなかつたが、パン燒の夜業は禁止された。勞働賃金に對して資本家が罰金を課したり、支拂差止をしたりする事も禁止された。そして目下使用されてゐない工場は悉く沒收されて、勞働者の組合に引渡された。此の最後の一事は、兎にかく歴史上に於ける資本家剝奪の第一着手であつた。猶フランケルは戰爭の爲に破壞された勞働組合を復活させる事に非常な努力を費し、僅かな日數の間に卅四個の有力な大組合を發達させた。

保安部の委員（即ち警視總監とも云ふべき役目）はブランキストの手に握られ、最初は廿五歳の青年熱情家リジョールが其の任に就き、後にクールネー、フェレの二人が順次それに代つたが、此リジョールとフェレとはコンミュンの人物中で、一番コワイ人と稱されてゐた。彼等は舊警視廳の文書を引張りだして、それに依つてコンミュンの中に交つてゐるスパイ共を摘發した。彼等は又、ヴェルサイユが無暗に捕虜を虐殺したのを憤つて、今後若し猶は捕虜を殺すなら、コンミュンは其の一人に對して三人づゝの人質を殺すと宣言して、パリにゐる敵方の人物を人質として拘禁した。其の人質の中にはパリの大僧正ダルボア、副僧正ラガルド、マドレーヌの小教正デュゲリ、控訴院長ボンジヤン、メキシコ戰爭の責任者たる資本家ジエツケルなどがあつた。然し此の宣言は無効であつた。ヴェルサイユでは暫くたつと、又盛んに捕虜の射殺をやりだしたのに、コンミュンの手では四月二日から五月廿三日までの籠城の間、一人の捕虜も、一人の武裝せぬ人も、殺されたタメシがなかつた。

軍事部の方では、最初リュリエーといふ飲みぬけの法螺吹が司令官になつて大味噌をつけ、次にアメリカ戰爭で大變な才能を現はしたといふクリューズレーが委員になつたが、これが又サッパリ駄目で、イッシイの壘の撤退が報ぜられた時、其の處罰として捕縛された。其後に於ける軍事部の變化は追々に話して行くが要するに、パリ・コンミュンは初から終りまで、軍事上にはヘマばかりで、結局、悲慘な最期に到着した。

然しコンミュンの支配下に於けるパリ市の一般光景はどんなであつたかと云ふに、如何にも靜かで、平和で、而も犯罪らしいものが殆ど無かつたとは、敵も味方も一樣に認めてゐた所であ

る。從來ならば種々の暴行があつたり、賣淫婦が無數に出沒したりしてゐた場所に、コンミユン時代にはそんな者の影もなかつたと、或イギリスの旅行者は語つてゐる。そしてヴエルサイユの御用新聞が毎日、パリ人の大殺戮を要求してゐるのに、コンミユンの革命新聞には、一言でも血に渇いたような記事がなかつた、其の外教會の壇上には赤旗が揭げられて、キリストの福音の代りに社會主義の理想が說教され、チユイレリイの王宮は誰でも無料で聞きに行かれる音樂場に變つてゐた。

九　煙硝と火繩、柱塔の引仆し

四月三十日、國民兵がイツシイの壘を撤退したのはコンミユンの大打擊で、或る一靑年の如きは、こゝを明け渡す程なら寧ろ自ら死ぬると云つて、煙硝と火繩とを兩手に持ちながら、最後まで其の入口に立止まつて居たほどだつた。

そこで今度は昔しの大革命の當時に倣つて『公安委員會』を設置するといふ說が起つて來た。それは舊式革命の狂信者なる多數派の首領フエリス・ピヤの發言で、偶像的な飾り言葉を好むフランス人の氣質を最も善く現はしたものである。尤も、其の時の執行委員は先達て改選されて、クリユーズレー、ジユールド、ヴイアール、グルーセー、フランケル、プロトウ、アンドリーン、ヴアイヤン、リジヨールの九名になつてゐたが、其の威令は少しも行はれないので、此際シツカリした中央權力が必要だといふ一般の感情が生じてゐたので、それが自然、公安委員會の設置を促がしたわけでもあつた。そこで公安委員設置案は二十三對四十五の多數で、多數派の勝利となり、少數派は憤慨して委員の選擧に加はらず、つまりランヴイエ、アルノウ、メイレー、ゼラルダン、ピヤの五名が多數派だけの選擧で當選した。

それからクリユーズレーに代つて軍事委員に擧げられたのはロツセルといふ若い士官で、俺は社會主義なんといふ事は少しも知らんと威張つて公言したほど無智な男であつたが、軍事上の知識は多少あつたものと見え、暫らく大ぶん調子がよかつた。先づ戰線を三方面に分つて、北軍をドンブロウスキイ、中軍をセシリヤ、南軍をウロブレウスキイの三大將に擔任させた。キイといふ語尾のある二人はいづれもポーランド人で、いづ

中央委員が兎かくロッセルの命令に服せず、それを又公安委員のピヤが突ッついたりするので、ロッセルはとう〳〵ヤケを起し國民兵のデモクラチックな組織を變じてナポレオン式の軍隊にしようといふ案を出したり、五月九日いよ〳〵イツシイの壘が落ちた後には、コンミユンに向つてクーデターを試みたりして、つまり失敗して逃げだしてしまつた。

それからコンミユンは又、公安委員の改選をやつた。最初の選擧から僅かに八日の後だから隨分馬鹿々々しい。そして矢張り多數派ばかりで、ランヴイエ、ギヤンボン、デレクリユーズ、アルノウ、ユードの五名が當選した。そしてデレクリユーズが軍事委員になつた。そこで少數派はいよいよ憤慨して、少數獨裁政治に反對するといふ宣言でコンミユン會議から脱退した。然し此の危急の際、獨裁政治に反對するなどゝいふ議論は話にならない。

十六日、ナポレオン一世の勝利を紀念するヴアンドームの
に三色旗を掲げて、其の國旗もろとも柱塔を引仆したのは
供らしいと云へば子供らしいに相違ないが、見物の群衆の
呼を博したのも無理はない。

十　バリケードの戰ひ

五月廿一日の日曜、シヤンゼリゼーの大通りや、チユイ
ーの公園に、艶々とした木々の若葉が暖かい春の日に輝き
つてゐた。其の日の午後、チユイレリーの公園で、國民兵
死者の寡婦や孤兒の爲にする、野外奏樂の大會が催され、
といふパリ人が晴れ着を着飾つて集まつてゐた。そしてそ
終つた時、國民兵の士官がプラットフォームに立つて、
の日曜にもまた〳〵で同樣の音樂會を催しますと宣
それは眞暗い闇夜で。血の

がパリ市中に出現したのであつた。

丁度、右の案内をやつてゐた三時頃、ヴェルサイユの敵兵は、防備の薄いサンクラウドの木戸を破つて、パリの市中に侵入しかけてゐた。ドムブロウスキイは直ちに其の旨を公安委員會に報じた。公安委員會は更にそれをコンミユン會議に報じた。コンミユン會議は狼狽の餘り、三々五々の小群に分裂して、雜然紛然、取りとめもない論爭を續けた末、夜の八時ごろ不得要領の中に散會した。それがコンミユン會議の最後であつた。『銘々自分の持區を守れ』と云ふのが一般の叫びであつた。公安委員は此に至つて殆んど爲す所を知らなかつたが、只軍事委員のデレクリユーズが獨り沈着の態度を持し、市街戰はパリ人に取つて却つて有望だと數へてゐた。

夜の十一時頃になると、ヴェルサイユ軍はもうパリ市の中央に侵入してゐた。『これからバリケードの戰ひだ。』『銘々自分の持區に歸れ。』これでいよいよコンミユンの組織も統一も規律も亡びてしまつた。沈着なデレクリユーズすらも。握りこぶしで敵の整然たる軍隊に勝てるような、自殺的の掲示を出した。

廿一日の夜から廿二日の朝にかけて。陰鬱な沈默の(今はもう既に遲い)準備がはじまつた。往來の敷石を堀り起す鶴嘴の音が物凄く響いてゐた。男も女も子供も皆一緒に働いてゐた。そして廿二日の夕方までには到る處にバリケードが出現した。三要害の中、トロカデロは既に陷り、パンテオンも既に包圍されかけてゐた。殘るは只モンマルトルの高地であるが、それも中心に擁護するといふでもなく、組織もなく計畫もない、只だ雜然たる無數のバリケード、何百といふバリケードが到る處に出現した。『銘々自分の持場を守れ。』それより外に叫びは無かつた。分權主義、自治主義、獨立主義、離れ嶋主義、群嶋主義の理想が、悲慘に且つ壯烈に、こゝで實現されたわけであつた。

どうせモウ斯うなつた以上、いづれにしても滅亡の運命は免かれなかつたらうが、若し廿二日に、モンマルトルと、パンテオンとから、狙ひを定めた砲彈が發射されたなら、隨分敵を苦しめる事が出來たらうと云はれてゐる。然るにモンマルトルは沈默してゐた。そして夜の十時頃には、チユイレリー宮のうしろの財務局が敵彈の砲火を受けて炎々と燃えあがつた。これが

大火の初まりであつた。

廿三日の朝早く、ドイツ軍のビスマークは中立地帯を開放して、ヴエルサイユ軍のパリ侵入を援助した。こんな事實を見ても、階級的利益の前には『愛國心』といふ空虚な者が泡となつて消えてしまふ事が分る。愛國的なフランスのブルジヨアは、フランスのプロレタリヤを亡ぼす爲に、平生から惜んでゐるプロシヤ兵の助を求め、甘んじて泥靴を甞めたわけである。

然るに一方では、コンミユンの人々は此の共同の危險の前に平生の憎みも悲みも忘れてしまつて、多數派も少數派も、只だ最後の努力を競つてゐた。けれども今となつてモウ何が出來よう。其の日の晝頃には、難攻不落のマンマルトルが脆くも敵軍に乘り取られた。そして其の時が卽ち『血みどろ週間』の大虐殺の幕あきであつた。四十二人の男、女、子供等が、ロジエー街に引きすりだされて、ルコントとクレマン・トマとの人身御供として、滅茶々々に虐殺された。其の時、敵の兵卒等は彼等に迫つて皆な一樣に膝づまかせようとしたが、中々一人の婦人は兩手に子供をかゝえたまゝ、どうしても膝まづく事を肯んじないで、『此の奴等に、我々の立派な死にざまを見せてやれ』と、他間の人々に向つて叫んだ。そんな間に、ツイ二三日前まで大言壯語、悲憤慷慨をやつてゐたコンミユン會議の連中で、コソソと隱れた奴も少なくなかつた。フエリス・ピヤも逸早く逃げだしてしまつた。

セイヌ川の南方にはコンミユンの兵力が猶ほ少しばかり殘つてゐた。そこでウロブレウスキイは、此の左岸に勢力を集中して、更に最後の一戰を試みようといふ計畫を立て、それをデレクリユーズに提案したが、武器も彈藥も糧食も既に缺乏した今日、モウどうする事も出來なかつた。公安委員と國民兵の中央委員とは、ヴエルサイユ兵に對して、パリの同胞に發砲するといふ張札をしたが、それも今では全く無効であつた。其の日の夜には、敵はもうパリ市の半分以上を占領してゐた。

十一　赤旗と三色旗

廿三日の夜は、百個所の大火事が至る處の血の池を照してゐた。パリ全市の半分は現實の修羅場と化してゐた。

其の夜、オテル・ド・ヴイールの窓下の上に一つの屍體が横た

はつてゐた。其の頭のほとりには寂しげな蠟燭が一ツともれてゐた。人々は皆な其の前にカウベを垂れた。それはドンブロウスキイの遺骸であつた。明方になつて、それがペール・ラシエーズの墓地に運ばれる時、途中のバリケードでは、國民兵が皆な肅然として筒を捧げた。

チユイレリーの宮殿は夜どほし燒け續けてゐた。廿四日の朝にはパレイ・ロアヤル其他で最後の激戰があつた。午前九時、オテル・ド・ヴイールに集まつた數人のコンミユン議員が、もう此の本據を撤退するより外はあるまいと相談してゐる中、忽然として其の屋の棟が燃えだした。一時間の後には、オテル・ド・ヴイールの跡形もなかつた。コンミユンの本據は第十一區の役所に移された。

コンミユンの防備はいよ〳〵全く混亂に歸した。其の間には斯ういふ悲慘た滑稽もあつた。或る士官が火急の使命を帶びてバリケードのそばを通りかゝると、『オイ、オイ。もう肩章なんど付けた士官ヅラは駄目だよ』『早くこゝにて來て土運びでもしろよ』などと皆がそれを引捕へて、バリケードを築く手傳をさせた。

人の好いパリの勞働者も、今では疑ひぶかくなつて、スパイといふ嫌疑が掛れば、證據があらうがあるまいが、直ぐに引ツつかまへて射殺したりした。然しそれも無理か、敵は男でも女でも子供でも、國民兵の親戚だとか、コワイと云つたとか氣の毒だと云つたとか、ほんの僅かの口實さへあれば、片つぱしからドシ〳〵と虐殺した。然し餘り多く女を殺したので、其の言ひわけには少し困つて、女が石油を持つて火をつけて歩いたといふ神話まで捏造した。

そこでコンミユンの生き殘つた人は最後に三百人の人質の事を思ひ出した。此の人質は、敵が何千人の男や女や子供を虐殺した今日まで、手もさへずに監獄に入れてあつたのだが、保安委員のフエレがとう〳〵意を決して、此の復讐に依つて少しでも敵の虐殺熱を冷まさせようと考へた。然し彼は僅かに其の三百人の中から六人の巨魁を選んだ。卽ち大僧正ダルボア、控訴院長ボンジヤン、外四名であつた。所が、いよ〳〵彼等が射殺される段になると、大僧正殿は餘り天國に行きたい樣子も見え

大火の初まりであつた。

廿三日の朝早く、ドイツ軍のビスマークは中立地帶を開放して、ヴエルサイユ軍のパリ侵入を援助した。こんな事實を見ても、階級的利益の前には『愛國心』といふ空虚な者が泡となつて消えてしまふ事が分る。愛國的なフランスのブルジヨアは、フランスのプロレタリヤを亡ぼす爲に、平生から惛んでゐるプロシヤ兵の助を求め、甘んじて泥靴を嘗めたわけである。

然るに一方では、コンミユンの人々は此の共同の危險の前に平生の憎みも悲みも忘れてしまつて、多數派も少數派も、只だ最後の努力を競つてゐた。けれども今となつてモウ何が出來よう。其の日の晝頃には、難攻不落のマンマルトルが脆くも敵軍に乘り取られた。そして其の時が即ち『血みどろ週間』の大虐殺の幕あきであつた。四十二人の男、女、子供等が、ロジエー街に引きずりだされて、ルコントとクレマン・トマとの人身御供(ヒトミゴクウ)として、[illegible]銃殺された。其の時、敵の兵卒等は彼等に迫つて皆な一様に跪づまかせようとしたが、中々一人の婦人は兩手に子供をかゝえたまゝ、どうしても跪まづく事を肯んじないで『此の奴等に、我々の立派な死にざまを見せてやれ』と仲間の人々に向つて叫んだ。そんな間に、ツイ二三日前まで大言壯語、悲憤慷慨をやつてゐたコンミユン會議の連中で、コソコソと隱れた奴も少なくなかつた。フエリス・ピヤも逸早く逃げだしてしまつた。

セイヌ川の南方にはコンミユンの兵力が猶ほ少しばかり殘つてゐた。そこでウロブレウスキイは、此の左岸に勢力を集中して、更に最後の一戰を試みようといふ計畫を立て、それをデクリユーズに提案したが、武器も彈藥も糧食も既に缺乏した今日、モウどうする事も出來なかつた。公安委員と國民兵の中央委員とは、ヴエルサイユ兵に對して、パリの同胞に發砲するといふ張札をしたが、それも今では全く無効であつた。其の日の夜には、敵はもうパリ市の半分以上を占領してゐた。

十一　赤旗と三色旗

廿三日の夜は、百個所の大火事が至る處の血の池を照してゐた。パリ全市の半分は現實の修羅場と化してゐた。

其の夜、オテル・ド・ヴイールの窓の上に一つの屍體が横た

はつてゐた。其の頭のほとりには寂しげな蠟燭が一ツともれてゐた。人々は皆な其の前にカウベを垂れた。それはドンブロウスキイの遺骸であつた。明方になつて、それがペール・ラシエーズの墓地に運ばれる時、途中のバリケードでは、國民兵が皆な肅然として筒を捧げた。

　チユイレリーの宮殿は夜どほし燒け續けてゐた。廿四日の朝にはパレイ・ロアヤル其他で最後の激戰があつた。午前九時、オテル・ド・ヴイールに集まつた數人のコンミユン議員が、もう此の本據を撤退するより外はあるまいと相談してゐる中、忽然として其の屋の棟が燃えだした。一時間の後には、オテル・ド・ヴイールの跡形もなかつた。コンミユンの本據は第十一區の役所に移された。

　コンミユンの防備はいよ〳〵全く混亂に歸した。其の間には斯ういふ悲慘な滑稽もあつた。或る士官が火急の使命を帶びてバリケードのそばを通りかゝると『オイ、オイ。もう肩章なんど付けた士官ヅラは駄目だよ』『早くこゝにて來て土運びでもしろよ』などと皆がそれを引捕へて、バリケードを築く手傳をさせた。

　人の好いパリの勞働者も、今では疑ひぶかくなつて、スパイといふ嫌疑が掛れば、證據があらうがあるまいが、直ぐに引ツつかまへて射殺したりした。然しそれも無理か、敵は男でも女でも子供でも、國民兵の親戚だとか、コワイと云つたとか氣の毒だと云つたとか、ほんの僅かの口實さへあれば、片つぱしからドシ〳〵と虐殺した。然し餘り多く女を殺したので、其の言ひわけには少し困つて、女が石油を持つて火をつけて歩いたといふ神話まで捏造した。

　そこでコンミユンの生き殘つた人は最後に三百人の人質の事を思ひ出した。此の人質は、敵が何千人の男や女や子供を虐殺した今日まで、手もさへずに監獄に入れてあつたのだが、保安委員のフエレがとう〳〵意を決して、此の復讐に依つて少しでも敵の虐殺熱を冷まさせようと考へた。然し彼は僅かに其の三百人の中から六人の巨魁を選んだ。卽ち大僧正ダルボア、控訴院長ボンジヤン、外四名であつた。所が、いよ〳〵彼等が射殺される段になると、大僧正殿は餘り天國に行きたい様子も見え

ず、拷問院長さんは腰を抜かしてしまひ、如何にも哀れな様であつた。そこでフエレは發射を命ずる前に、コンミユンは彼等の死に對して責任がない、責任は總て虐殺を恣いまゝにした彼等の仲間に在る事を、篤と彼等に申し聞かせた。

　兎かくする中に大火はいよ〳〵蔓延して、セイヌの岸の片側が一面の火の壁になつてしまつた。そして赤旗の見える處は段々に少なくなり、到る處に三色旗が飜つてゐた。二十六日の夕方、病み疲れてゐたデレクリユーズは、もう之までと見極みをつけ、第十一區の役所から歩みだして、杖を一本持つたまゝでシヤトウ・ドウのバリケードの上に登つた。一分間の後には彼は既に敵兵の弾丸に當つて仆れてゐた。彼は一八三〇年と一八四八年との二革命に參加した人である。それで今又この敗北を見てオメオメ生き延びるには忍びなかつたのである。

十二「血みどろ週間」の最後

　コンミユンの防禦がいよ〳〵弱くなると共に、敵の虐殺はいよ〳〵甚だしくなつた。有らゆる建物は捕虜で一パイになつてゐた。そして一たばねにして引張りだされては射殺された。時に依ると榴霰弾で一齊に薙ぎ仆され、半分生きながら埋められた。

　廿六日の夕べから防禦はベルヴイールに集中した。廿七日は砲火の結果として、雨と霧との暗い日になつた。第十一區は既に廿五日の夜半に撤退したのだが、ドイツ兵はヴエルサイユの依頼に應じて其の東北の退路を遮斷した。敵の暴虐無殘は時々刻々に報道された。醫者も看護婦も殺された。赦免の約束で降伏した者も撲された。コンミユンの生き殘つた勞働者はとうとう堪りかねて、更に人質の中四十八人を射殺した。

　○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

　廿八日の日曜、即ち『血みどろ週間』の最後の日、煙に包まれ

たショボショボ雨の中に、まだベルヴイールの一部分が持ちこたへてゐた。然し晝近くなつた頃、パリ街にあつた最後のバリケードがとう〳〵陷落してしまつた。そして其の最後の十五分間は生き殘つた只の一人が支へてゐた。而も其の一人が逃げのびたとは、驚くべき話である。其あとに殘つた、いよいよ最後の壘は、ヴアンサンヌの外營只ひとつであつたが、そこでも翌廿九日に赤旗が取りおろされた。

これでいよいよコンミユンが亡びた。無數の死骸は累々として燒け跡の煙の中に横たはつてゐた。セイヌ川の片側には赤い水が流れてゐた。下水には血が溢れ、道路は血に染まつてゐた。肉蠅は雪のように集まり、烏は屋根の棟に群れてゐた。そして此の大虐殺の責任が悉くコンミユンに塗りつけられた。

虐殺はまだ六月三日まで續いてゐた。屍體が餘り多く堆積して始末がつかないので、流行病でも起しては大變だと、彼等は只その恐れの爲に、此日で虐殺を思ひ止まつたのであつた。〇〇。

此の虐殺の最も多く行はれた場所は、『ミユール・デ・フエデレ』（國民兵の壁）と呼ばれ、世界中の社會主義者が尋ねて行く、〇〇〇〇名所になつてゐる。筆者が先年フランスの一同志から受取つた手紙の中に、一枚の枯れた木の葉が包みこんであつて、其の包み紙に面白い書體の走りがきで、『ミユール・デフエデレの木の葉』と書いてあつた。今でもそれは大事にして、抽出しの奥にしまつてある。

以上の話に名の出てゐる人々の中で、ブランキイは後に許されて代議士になつた。ヴアイヤンは近ごろまで社會黨の首領であつた。プロトウは今年の二月まで生きてゐた。カメリナは現にまだ生きてゐる。パリ・コンミユン五十年紀念の雜誌に北[illegible]肖像が載せられてゐる。

ず、控訴院長さんは腰を拔かしてしまひ、如何にも哀れな様であつた。そこでフエレは發射を命ずる前に、コンミユンは彼等の死に對して責任がない、責任は總て虐殺を恣いまゝにした彼等の仲間に在る事を、篤と彼等に申し聞かせた。

兎かくする中に大火はいよ〱蔓延して、セイヌの岸の片側が一面の火の壁になつてしまつた。そして赤旗の見える處は段々に少なくなり、到る處に三色旗が飜つてゐた。二十六日の夕方、病み疲れてゐたデレクリユーズは、もう之までと見極みをつけ、第十一區の役所から歩みだして、杖を一本持つたまゝでシヤトウ・ドウのバリケードの上に登つた。一分間の後には彼は既に敵兵の彈丸に當つて仆れてゐた。彼は一八三〇年と一八四八年との二革命に參加した人である。それで今又この敗北を見てオメ〱生き延びるには忍びなかつたのである。

十二　「血みどろ週間」の最後

コンミユンの防禦がいよ〱弱くなると共に、敵の虐殺はいよ〱甚だしくなつた。有らゆる建物は捕虜で一パイになつてゐた。そして一たばねにして引張りだされては射殺された。時に依ると榴霰彈で一齊に薙ぎ仆され、半分生きながら埋められた。

廿六日の夕べから防禦はベルヴイールに集中した。廿七日は砲火の結果として、雨と霧との暗い日になつた。第十一區は既に廿五日の夜半に撤退したのだが、ドイツ兵はヴエルサイユの依頼に應じて其の東北の退路を遮斷した。敵の暴虐無殘は時々刻々に報道された。醫者も看護婦も殺された。赦免の約束で降伏した者も殺された。コンミユンの生き殘つた勞働者はとうとう堪りかねて、更に人質の中四十八人を射殺した。

○○。

廿八日の日曜、即ち「血みどろ週間」の最後の日、煙に包まれ

たショボショボ雨の中に、まだベルヴイールの一部分が持ちこたへてゐた。然し夜近くなつた頃、パリ街にあつた最後のバリケードがとう〳〵陥落してしまつた。そして其の最後の十五分間は生き殘つた只の一人が支へてゐた。而も其の一人が逃げのびたとは、驚くべき話である。其あとに殘つた、いよいよ最後の壘は、ヴアンサンヌの外營只ひとつであつたが、そこでも翌廿九日に赤旗が取りおろされた。

これでいよいよコンミユンが亡びた。無數の死骸は累々として燒け跡の煙の中に横たはつてゐた。セイヌ川の片側には赤い水が流れてゐた。下水には血が溢れ、道路は血に染まつてゐた。肉蠅は雪のように集まり、烏は屋根の棟に群れてゐた。そして此の大虐殺の責任が悉くコンミユンに塗りつけられた。

虐殺はまだ六月三日まで續いてゐた。屍體が餘り多く堆積して始末がつかないので、流行病でも起しては大變だと、彼等は只その恐れの爲に、此日で虐殺を思ひ止まつたのであつた。○○。

此の虐殺の最も多く行はれた場所は、『ミユール・デ・フエデレ』（國民兵の壁）と呼ばれ、世界中の社會主義者が尋ねて行く、○○○○名所になつてゐる。筆者が先年フランスの同志から受取つた手紙の中に、一枚の枯れた木の葉が包みこんであつて、其の包み紙に面白い書體の走りがきで、『ミユール・デ・フエデレの木の葉』と書いてあつた。今でもそれは大事にして、抽出しの奧にしまつてある。

以上の話に名の出てゐる人々の中で、ブランキイは後に許されて代議士になつた。ヴアイヤンは近ごろまで社會黨の首領であつた。プロトウは今年の二月まで生きてゐた。カメリナは未にまだ生きてゐる。パリ・コンミユン五十年紀念の雜誌に其の肖像が載せられてゐる。



放浪俠客
竹川森太郎

宮嶋資夫

濃洲郡上郡下川新田、百姓森右衛門の忰森太郎、十三歳の時に岐阜矢島町の
彌太郎の身内となつて、竹川森太郎と名乘つた男でありますが、二十一歳の時ふ
した事の間違ひから、城下に於て武家を殺しましたので國元にも居られず、長い草
鞋をはく事となりました。

ところが此の男、劍術は當時の博徒仲間で古今の使手と謡はれる程の腕達者、度
胸はよし、氣風もよくて金の切れ離れも好いところから、どこの親分の所に廻つて
行つても、ぢきに兄貴と立てられるようにもなれば、親分手合からも一目おいて
扱はれ、時には

『どうだ森、僅かなものだが、俺の繩張りを少し分けるから、こゝで松杉を植ゑる
氣になつて、一つ男を賣り出して見たらどんなものだ』

などゝ引止められる事もあるのでありましたが

『お志しは有難えが、俺のやうなやくざ者は、かうして旅から旅へうろついてゐる

方が、どうも性に合つてゐるようだ。それに俺はどう云ふものか、カスリ取りになつて親分にならうつて氣はしねえ、早え話が主のやうに親分になると、懐手をして樂をしてゐるようだけど、手前で一つの繩張を押へると云ふ事になりや、隨分下らねえ事でも我慢して、いやな奴にも頭の一つも下げなきやならねえような事も多くなつて來るのだ。そんな事あどうも俺の性にや合はねえ、俺あやつはり行き當りばつたりに、手前の勝手な月日が送りてえと思ふから、どうかまあ惡く思はねえでくれ』

と辭退して、相も變らず、旅から旅へ流浪の月日を續けてゐるのでありました。

さて森太郎はかうして國を出ましてから彼れ之れ十年、めぐりめぐつて駿州掛須賀の鐵五郎を尋ねようとやつて參りました掛須賀の並木道、冬の日の八つ刻過ぎの事でございます。白つぽけた砂道は、昨日も一昨日も歩いて來たように、行く手の方に果てもなく續いてをり、兩側の並木の松は、日照續きの埃を被つて白々と弱い夕日を受けて立つて居ります。

森太郎は、かうして毎日同じような田舍道を歩いて來ました故か、身も心も疲れはてたように思はれるのでありました。またもとより急ぐ旅と云ふでもなければ、どこへ行つてどうならうと云ふ的てのある身體でもありませんが、何か知らこの退屈に堪えかねるちり／＼とした心持が、何となくその行く手を急がせるのでありました。

『國を出てからもう十年だ、早えものだ』

『どこへ行つてもつまらねえ、慾張野郎ばかりゐやがる世の中だ』と云つたようなきれ／＼な考へが頭の中に浮んで來るかと思ふと、『また旅人にいやな冬が來やがつた、どつか氣持の好いとこがあつたらもぐり込んで、しばらく足休めでもしてやらうか』などゝ考へながら、すた／＼と歩いて來ましたが、並木外れの楢林のとこに來ると、足拵へを嚴重にした若い男が三人ほど、往來に立つてしきりとあたりに目をくばつて居ります。林の中からは壺皿の音にまぢつて、丁だ半だと云ふ人聲も時々もれてくる。

『はゝあ、さては之れがひよつとしたら、掛須賀一家の者かし

ら』と心に思いましたので、森太郎は若い者に向ひまして、
『ちよいとお尋ね致しますが、掛須賀の鐵五郎親分のお宅はどちらでございませう』と尋ねますと、
『鐵五郎の宅は、此の並木を外れますと、掛須賀の町に出ます、町の中程で右側の格子のはまつた家をお探しになれば、ちきわかります』と身内の者らしく叮嚀に教へてくれました。
森太郎は、その日も暮れ合の頃、鐵五郎の家に着きましたが、かねて岐阜の彌太郎から手紙も廻つて居りましたので
『あゝ彌太郎さんからかね／＼手紙のあつた森太郎と云いなさるか、さあ／＼』と奥へ通され、挨拶も濟むと
『何にもないが有合せで』と酒肴も運ばれる。しばらくしてから出て來ましたのが鐵五郎の女房
『これはいらつしやいまし、私は鐵五郎の女房縫と申します、どうぞお見知りおき下さいまして』
と云はれましたので、森太郎、
『之れは姐さんでいらつしやいますか、森太郎と申しますもので、よろしく』と頭を下げたが、森太郎と云はれて、女はふいつと顔を上げる、つゞいて森太郎も顔を上げて、二人の眼と眼が出合つたとき、たゞならない驚きの色が、さつと流れたのでありました。しかし森太郎の眼の中には、
『何にも云ふな』と云ふ言葉が明らかに現はれる、とまた氣まづさうに、
『何分よろしく』と挨拶の仕直しをやるのでありました。
これを見てゐた掛須賀の鐵五郎、
『お縫、お前はこの男を知つてるか』といきなり尋ねました。
お縫はしばらく、何か思案に暮れてゐるようでありましたが、思ひ切つたと云ふように、
『ねえ森さん、かうなれば仕方がないから私は皆な親分に話をするよ、どうも飛んだ事でお前さん達二人に、氣まづい思ひをさせるような濟まない事になつてしまつたけれど、親分實はこの人は、私の先の亭主なんでございます。』と云はれて鐵五郎もはつと驚いた顔附を見て森太郎は、
『なんだお縫、お前のようにさうずば／＼云つてしまつちや仕様がねえぢやねえか』

『だつてお前さん、本當の事なら話してしまはなければ、却つて氣持が悪いだらうぢやないか、それにお前さんがこゝに來てから親分の眼を忍んで、悪い事でもしたと云ふなら云い憎い事もあるだらうけど、かうなつたら何も彼もお話しゝてしまつた方が好いぢやないか』

と云はれましたので森太郎も、

『なるほどお前の云ふとこにも理窟はある、實は親分この女は、八年ばかり前名古屋にゐた頃、つい出來合つて嬶に持つた奴でしたが、之れも三年と續かねえ中に、又あつちでも間違ひが出來て、土地にもゐられず捨てたまゝ、草鞋をはくようになつてしまつたような始末、お前さんも變な氣がしたらうけど、惡く思はねえでおくんなさい』と鐵五郎に話してから、

『なあお縫、お前も俺と別れてから、親分と一緒になるまでにや、随分苦勞もした事だらう。俺も段々に苦勞をして來たが、そんな事を並べ合つても今更ら愚痴で下らねえこつた。それに俺はもう足弱を連れて歩けるような身體ぢやねえ、何しろ早旅の身の上だ。之れから先きだつて、とても二人で世帯を持つようなな時もねえ、縁あつてこちらのお世話にもなつた事だから、俺の事は夢と諦めて、親分を大切に御世話になつて暮してくれ』と涙も浮べず云ひ放つたのでありました。

お縫は之れには何にも答へず、下を向いてぢつと默つてゐるばかり、座は何となく白けわたつて見えたのであります。その時に鐵五郎が、『森、つまらねえ義理立てはやめにしろ、お縫にして見ても、お前は若えし、又元木心、俺にして見た處で、かう云ふ話を聞いた上までお縫の世話もしちやゐられねえ、俺に少しも遠慮はいらねえから、もと／＼通りお縫と一緒に添いとげてくれ』と云つて立上ると、簞笥の抽斗から取り出した五十兩の金をお縫の前におしやつて、

『さあお縫、俺も長え事お前には厄介をかけたけれど、今日限り縁を切る。俺に遠慮氣兼はいらねえ事だから、森太郎の方に歸つて、仲よく一緒に添ひ遂げてくれ』

之れを聞くと森太郎、一膝乘り出して、『エヽ、親分、お前さんのお話も一應で尤もと思ひます。しかしさつきも女に話した通り、私は早旅の身體でございます。一人でさへ大手を振つて歩

く事の出來ねえ程兇狀を背負つた身の上、それに昔は之れでも己惚れて、たとへ小さな繩張りでも一つ持つて親分だ貸元だ位は云はれて見てえと考へた事もありましたが、ちつと考へる事があつてからそれもすつかり諦めました。身體の利く限りはぶらついて、やくざで終る考へで居りますから、お縫の事は何分どうぞ、お前さんの方で御面倒を願います、なあお縫幾度話しても一つ事は同じ事だ。お前とは今日限りプッツリ緣を切つたから親分に御願ひして、扱き戾してお世話の願へるようお賴みしろ』

と懐ろに手を入れて取り出した五十兩の金、『之れは手切の印だ』、之れもお縫の前に押しやつたのでありました。二人の話をぢつと聞いて居りましたお縫はそのまゝしばらく首垂れて、考へに沈んで居りましたが、顏を上げると、

『成るほどね、男同志のお話でかうなつてしまつたら、どちらもどつちと云ふわけにもゆかないでせう。私も未練がましい事を云はないで、奇麗に手を切つて貰ひませう。と云つて私も之れからすぐに、何處へ出て行くと云ふあてもない身體だから、しばらくの間は、いやでもありませうが、妹と思つて面倒を見て下さいな、』と云いましたが、お縫の眼には、涙のうるんだ跡が見えるのでありました。鐵五郎もかう云はれてはいやとも云へず、

『すると森とお前と三人で、兄弟になれと云ふのか、之れもよからうが森はどうだ』

『お前さんさへ御迷惑でなければどうぞ』

とこゝで三人は、有り合せの酒肴で、兄弟分の盃と云ふ事になりました。

一日二日はこの儘に打ち過ぎて、森太郎も久方振りでのらくと旅の疲れを休めて居りますと、三日目になりましてお縫は二人の前に來て、

『ねえ二人の兄さん、私も若い時に身體を賣られて、中仙道から名古屋へ行つて、隨分旅はして來たけれど、まだ京大阪は知らないんですよ、之れで丁度お前さん方に貰つたお金のある中に、見物でもして來たいと思ふから、しばらくお暇を下さいな』と云ひ出しました。鐵五郎も森太郎も、お縫の心の中は讀

むように判つて居りますので、鐵五郎

『そりや氣晴しにもなつて好いだらうからゆつくり遊んで來たが好い。途中で不自由な事があつたら、遠慮せずに云つて寄越せ』と云いますので、森太郎も、あゝ女に先手を打たれたか、と心の中では思いましたが、

『兄貴も好いつて云ふのだから、それぢやゆつくり行つて來ねえ』と云ひますので、

『それぢや今日を吉日にして、之からすぐに立ちませう』とお縫は暗い心を笑にまぎらして、上方を差して出立してしまいました。

後に殘された森太郎、お縫が上方見物に名を借りて、行衛を晦ました心の中が判つて居りますだけに、しまつた事になつたわい、と心の中に幾度か悔んだのでありました。もとより森太郎とてもお縫は、今まで數度も出逢つた女の中で、たとへ僅かの間でも世帶を持つ程氣に入つた女の事でありますが、一旦思い諦めたと口を切つたが最後、生涯無妻で終るまでも、別れた女の後を追つて行くような心の男ではありません。しかしさすがに何處か、心の底に殘る寂しさをまぎらす爲めに、直ぐに自分もこゝを立つたら、女の後を追ふとでも思はれはしまいかと考へると、立つにも立たれず、暗い心を押し隱して、心ならずも鐵五郎の許に、滯在致す事になりました。が、玆二三ケ月の間は、お話し致す程の事もなく、掛須賀の宿も至極靜かでありました。けれども森太郎にとつては、此の平穩無事と云ふ事は、命を捨てるよりもつらい位ゐ、時々三下相手に酒などを飲みました。

『兄貴なんかは腕つ節も強いし、旅先も廣いから、隨分面白え事もありましたらう』などゝ油をかけられても、

『なあに人間の世の中に、面白え事なんてありやしねえ、どこへ行つたつて、こすかれえ野郎が、上役人だ金持だ親分だつてなりやがつてよ、働く奴あひもじい思ひをしてる丈けの事よ。俺なんかたゞさう思つてる、人間の一生なんて、文なしで旅をしてるようなもんだつてな、朝方に宿を立つ時にや、今日は何か甘え事にでもぶつかりやしねえかと思つて出かけるんだ。そうして何とか彼んとか苦勞してよ、晩方に宿につく時にや、明

いてお話し致します。

さて森太郎が鐵五郎方に、心ならずも足を留めて居ります中し、虐げられた民衆が解放の聲を叫ばんとするのを、權力者の手先になつて壓迫しようと企てゝ居るような、所謂侠客連も時に、名古屋の濱七と濱松の浪七なる者の間に、繩張爭ひの事から大きな間違ひが出來まして、已に大騷動にも及ばうと云ふ狀として、そこへ現はれるようでございますが、それでこそ[illegible]て當[illegible]郎が[illegible]の中人に入りまし[illegible]張爭ひ[illegible]と、侠客の道に[illegible]如何となりは致しません[illegible]た。

誠にどうも此の侠客と申しますも、然の深い親分共にな[illegible]ちか、無に見を尊ると申す事が如何なる[illegible]りますと、常に此の繩張りの擴張計りを企てゝ居りまして、之[illegible]ませうか、とに餘り長々と理窟を述べたてるのも[illegible]

今日人智の斯くまで開けた世に於きましても、世の大勢に遂行[illegible]けて居りません時代の事でございますか、

ますから差し扣へますが、一寸この機會を利用してこれ等の諸君の再思と三考を煩はしたいと存ずるのであります。

余談はさておき、濱七、浪七の爭ひに、治郎長が仲人に入りまして、無事に手打の運びに至りましたが、治郎長が他に大きな用事が出來ました爲めに、その席上に出る事が出來なくなりまして、餘儀なく掛須賀の鐵五郎を名代として立たせて、その場は無事に濟みました。ところが治郎長が仲人に入ります前に、長樂寺の淸兵衛と云ふ男が仲人に這入つて居りましたので、一應之に亘りを附けておかなければならなかつたのを、治郎長か鐵五郎に云ふのを忘れたばつかりに、長樂寺一家の中、鐵五郎に對して内々恨を含む者が出來て參りました。誠に昔の賭博打と申します者は、繁文縟禮を極めた上に、一寸の手落がありますと、直ちに刄に訴えると云ふ仲々七むづかしく、厄介な規則を持つてゐた者でございます。

一方鐵五郎におきましては、親分治郎長の云ひ附けの儘、無事に濟ませた上でありますから、何の事とも知らずにをりましたが、長樂寺身内の者は事あれかしと待ち構へて、何かのきつかけを狙つてをりましたが、こゝに些細な男女のいきさつが導火線となりまして、一騒動起き上るやうな事となつたのでありました。

頃は丁度舊暦二月末の事でございました。梅にも遲く、櫻に早く、何となく慌しくもあればうつとりとしたやうな時節、女房のお縫に別れてからも、後添もなく、男手ばかりで暮して居りました鐵五郎、陽氣に誘はれたと云ふわけでもないが、朝からぶらりと家を出て近々の茶屋で飲み暮して、夕暮に我家へ戻つて參りますと、入り口の茶の間に火鉢をはさんで森太郎と、十八九になります田舍には珍らしい奇麗な娘と、何やらいそ〳〵話をして居ります樣子鐵五郎も心の中では、はゝ森の野郎もまだ三十を出た計りの男盛り、之れには何かいきさつのある事だらう。それにしても森が此の土地で、世帶を持つやうな事になつてでもくれたらば、など、考へながら奥の部屋へ通つてしまいました。しばらくすると、あとから入つて來た森太郎、

『これは親分お歸んなさい。今日はどちらへ』

『別に用事もなかつたが、たゞぶら〳〵ほつき歩いて、一杯や

…の[illegible]…まで開けた世に於きましても、世の大勢に逆行[illegible]

——く

さて森太郎が鐵五郎方に、心ならずも足を留めて居ります中し、虐げられた民衆が解放の聲を叫ばんとするのを、權力者の[illegible]に、名古屋の濱七と濱松の浪七なる者の間に、繩張爭ひの事から手先になつて壓迫しようと企てゝ居るような、所謂侠客も[illegible]ら大きな間違ひが出來まして、己に大騷動にも及ばうと云ふ狀として、そこゝに現はれるようでございますが、され[illegible]際に立ち到りました時に清水の治郎長が[illegible]より以上に、侠客の道に背く[illegible]は致しませ[illegible]た。

誠にどうも此の侠客と申します者も、慈の深い親分共でありませうか、眞に男を賣ると申す事か、如何なる道に進むべきであり[illegible]りますすと、常に此の繩張りの擴張計りを企てゝ居りまして、ござりませうか、こゝに餘り長々と理窟を述べたてるのも如何と心得[illegible]

ますから差し扣へますが、一寸この機會を利用してこれ等の諸君の再思と三考を煩はしたいと存ずるのであります。

余談はさておき、濱七、浪七の爭ひに、治郎長が仲人に入りまして、無事に手打の運びに至りましたが、治郎長が他に大きな用事が出來ました爲めに、その席上に出る事が出來なくなりまして、餘儀なく掛須賀の鐵五郎を名代として立たせて、その場は無事に濟みました。ところが治郎長が仲人に入ります前に、長樂寺の淸兵衛と云ふ男が仲人に這入つて居りましたので、一應之に亘りを附けておかなければならなかつたのを、治郎長か鐵五郎に云ふのを忘れたばつかりに、長樂寺一家の中、鐵五郎に對して內々恨を含む者が出來て參りました。誠に昔の賭博打と申します者は、繁文褥禮を極めた上に、一寸の手落がありますと、直ちに刄に訴えると云ふ仲々七むづかしく、厄介な規則を持つてゐた者でございます。

一方鐵五郎におきましては、親分治郎長の云ひ附けの儘、無事に濟ませた上でありますから、何の事とも知らずにをりましたが、長樂寺身內の者は事あれかしと待ち構へて、何かのきつかけを狙つてをりましたが、こゝに些細な男女のいきさつが導火線となりまして、一騒動起き上るやうな事となつたのでありました。

頃は丁度舊曆二月末の事でございました。梅にも遲く、櫻にも早く、何となく慌しくもあればうつとりとしたやうな時節、女房のお繼に別れてからも、後添もなく、男手ばかりで暮して居りました鐵五郎、陽氣に誘はれたと云ふわけでもないが、朝からぶらりと家を出て近々の茶屋で飲み暮して、夕暮に我家へ戻つて參りますと、入り口の茶の間に火鉢をはさんで森太郎と、十八九になります田舎には珍らしい奇麗な娘と、何やらいそ〳〵話をして居ります様子鐵五郎も心の中では、はゝ森の野郎もまだ三十を出た計りの男盛り、之れには何かいきさつのある事だらう。それにしても森が此の土地で、世帶を持つやうな事になつてでもくれたらば、など、考へながら奥の部屋へ通つてしまいました。しばらくすると、あとから入つて來た森太郎、

『これは親分お歸んなさい。今日はどちらへ』

『別に用事もなかつたが、たゞぶら〳〵ほつき歩いて、一杯や

つて歸つたとこだ。どうだお前ももう一杯つき合はねえか』
『え丶有難うございます、時に親分今日お前さんの留守中に、可笑なものが飛び込んで來たんでね、お前さんに話てからと思たけど、どうせ俺も何も彼も引被つてしまへば好いと思つたので、引張り込んでおきました。』
『可笑なもんて部屋にゐた、あの若い娘の事ぢやねえか、ありや森、お前の何かぢやねえのか』
『笑談云つちやいけません親分、俺はいつかも言つたやうに、かうしてぢつとしてゐた所で、いつ御用と來るか判らねえ身體だ。若い女とちゝくりやつてゐるやうな呑氣な事が出來ますかね』
『いや森、そいつはどうも俺が惡かつた、ところであの女がやつて來たわけと云ふのはどう云ふ事だ。』
『いや實は親分、今日お前さん留守中に、私があつちの部屋でごろ〳〵やつてゐたとこへ、眞蒼な顏をした爺さんが飛び込んで來たんでさ』
『ふむ』

『爺さんは格子を明けて中へ這入ると、膝までぶる〳〵振はて、掛須賀の親分様のお宅はこちらでございますか、と尋ねから、掛須賀の鐵五郎の家はこゝですが、親分は只今居りまんつて云いますとね、はゝあ親分様はお留守ですか、そい困つた事になつた、つてお前さん、落膽したやうに蹲ぎ込んしまつたんでさ』
『ふん。それでどうした』
『それから私も何だか氣の毒になりましたからね、親分は留だけど、私は留守を預つてる平吉と云ふものです、つて相手何だか判らねえから、出鱈目な名前をいつてやりました。そで、お急ぎの御用事なら、私が伺つて親分に取次ぎませう、私で取計らいの出來る事ならば、一存で何でも致します。御支へがなきやお話し下さい、つて云いますとね、有難うごますつて、爺さんは嬉し泣きにわい〳〵泣き出してしまつたでさ』
『それで私も、まあお年寄そんな土間に立つてゐちやお話が出來ねえから、遠慮はいらねえ、こつちへお上んなさい、つて二

いますよね、いえどう致しまして勿體ないつて、上口に手をついてしやがんでゐるんでさ、それから私も、つまらねえ事を云ひなさんな、お前さん方は堅氣に米を作つてるお百姓、こつちらは無職渡世のいはゞならず者だ、お前さんにそんな事をされたんぢやどうにも出來ねえからつて、手を引つ張つても爺さん頑固でどうしても上らねえ、それから俺ァ癪にさわつたから、お前さんがそんなに一克を云ふなら俺だつて土間に降つて飛び下りると、爺さんはこんだは、そんな事をされちや濟まねえつて、土間に手を突いてお辭儀をするんだ。俺も今日ばかりは、本當に弱つちまつた』

『それで仕方がねえから二人とも土間に坐つて、お爺さん、急ぎの用つてなんですかね、つて聞きますとね』

『實は私は、藤枝の在の百姓八右衛門と申す者でございます、家內や惣領にも早々亡なられて、たつた一人殘つたのが娘のお初と申します。所がこちらの親分さんのお身內となつて居ります、留吉と申しますのは私共とは遠い緣續きで時々、昔から時々に藤枝へ參ります序でには私の所を見舞つて與れて居りましたが、その內に若い者同志の事でございますから、どこが好いのか好かつたのか、妙な仲になりまして、私もうす〳〵知つては居りましたが、留吉も商賣柄に似合はない、親切な優しい男の事でございますから、出來たものは仕方がない、その中に折を見て二人一しよにしてやらうと思つて居りました。とまあかう云ふんでさ』

『ふん』

『處が親分、藤枝の宿に目明しで與吉と云ふ奴がゐるさうですね、お前さんご存知かね』

『藤枝の與吉は俺も知つてる、長樂寺身內の博勞の定五郎とは兄弟分になつてゐるとか聞いたつけが、性質のよくねえ惡い野郎だ』

『性質のよくねえ奴だつて、爺さんも云いましたよ、ところがその與吉の野郎がお初に首つたけ惚れやがつて、三日に揚げず爺さんのとこへやつて來ちやお初を口說く、爺さんには泣くやうに賴み込む、二人もほと〳〵弱つてゐたと云ふんでさ。それに與吉の野郎も今までは、留の事を薄々知つてるやうではあつ

たけれど、口に出しては云ふような事はなかつたそうです、ところが昨夜遅くなつて、喰い醉つて八右衛門の所へやつて來て、「爺さん、あれ程頼んでも、娘はどうしても俺によこさねえのか」と戯談づくで懸合を初めやがつた。そこで爺さんも仕方がねえから何しろ娘の一存にある事でございますから、私からは何とも申上げられませんと云ふとねお前さん、そうだらう、手前の娘は掛須賀身内の留吉とくつゝいてゐやがるから、俺の云ふ事は肯かねえのだらう。肯かなきや肯かねえでそれも好い、俺も俺だけの了見がある、無職渡世はお上の法度だ。留の一人位えは暗い處へ叩つ込まうと込むまいと、俺の胸一つで出來る事だ。先きに掛須賀の鐵位へくつゝいてゐてぐづ〳〵云やがつた處で、長樂寺の身内の者は、仲人の直りがつかねえので皆な怒つてゐる矢先だ。掛須賀が何か云ひ出しや云い出す程、野郎の首も序でに飛んでしまふか恥洒しな事でも起るだけだ。それもお初の奴〳〵つてゐるんだから今夜〳〵既務〳〵て、明日の晝までに返事をしろつて、たんかを切つて歸りやがつた。爺さんは驚いて、お初にすぐとこの事を話したら、私一人の爲めに、留さんが牢屋に入れられたり、掛須賀の親分に間違ひでもあつた日には申譯のない事だけれど、どうしてもあんな與吉なんて奴と一しよになるのはいやだから、死んでしまふつて泣いてばかりゐると云ふんです。それで爺さんも途方に暮れて、留に一應相談でもして見ようと、娘をつれて今朝起き拔けに留を尋ねて來ただけれど、留は生憎家にゐなかつたと云ふんでさ。與吉には晝までの返事をすると云つた言葉があるし、どうしていゝか判らなくなつて、親分に御願ひでもして見たらと思つて伺ひました。老人一人と娘一人を助けると思つて、何とかお取計らいを願ひたいつて、またお前さん、土間に手を突いて頼むんぢやありませんか』

『ふゝん、與吉の野郎か性質の悪い野郎だと云ふ事は俺も疾ふから知つてゐたが、そいつあ長樂寺身内に尻押をされて、やつた仕事に違いねえ』など鐵五郎もしばらく手を拱いて考へに沈んで居りました。

『ねえ親分、お前さんがゐない中に、あの親子二人を、私が無手に止めておいたは濟まなかつたが、相手はたとへ木葉目明し

しろ何にしろ、お上の威光を笠に着て、長樂寺を後ろに背負つて、あんな爺さんや娘つ子を脅してまで自分の思ひを遂げようとする了見が俺は憎いと思います。また長樂寺の身内も身内だ。どんな間違ひがお前さんにあつたか知らねえが、悪けりや悪いでおほつぴらに、ちやんとかけ合つたが好いぢやねえか。それを何んだ、目明し風情を焚きつけて、間が好きや役人づれでも抱き込まうつてえ魂膽だらう。お前さんは、何に百姓の親子二人位の事で、大きな間違ひにでもなつちやいけねえと考へなさるか知らねえが、俺あ一人でも半分でも、こんな事を我慢しちやゐられねえからよし俺が親分になり代つて、お前達二人は引受けた。俺の眼の黒い中はお前達に指一本でも指させやしねえから、安心してこゝにゐろと云ひました。それで親分、もしお前さんが此の事について不服がありなさるなら、どうかさう云つて貰ひてえと思ひます。どうせ俺なんかはいつ、ふん捕つた所で、背負い切れねえ程兇狀のある身體だ。俺のした事の爲めにお前さんの心にもなく、掛須賀一家に迷惑をかけちやあ何とも済まねえ事になる。目明の與吉がどんなこすかれえ野郎か、長樂寺一家にどんな野郎が揃つてゐやがるか知らねえが、たかゞ役人風を笠に着たり、多勢を頼みに爺や娘をとりこめようつてけちな野郎だ、俺は俺一人で乗込んで片をつけてやらうと思つてゐる。然しこれも、お前さんのとこへ驅け込んで來た人間であつて見りや、一度はお前さんと相談して見てからの事と思つて、お前さんの歸りを待つてゐたような始末です。親分お前さんは何と思ひなさる』

と云はれました時に掛須賀の鐵五郎、

『いや森、お前の云ふ事はよく判つてる。俺が今考へたのは、自分の身内の留の事から、出入りにでもなつて間違ひが起つた日にや、清水の親分にも申譯がねえと思つたから、どうしたものだらうと思つたゞけに、何にかうなりや俺が一人で粋な背負う。俺ゃ掛須賀の何とか云はれて、同職の者が驅け込んで來た時ばかりちやほやして、お百姓衆を袖にしたと云はれちや男がすたる。お前のした事にいざこざは決してねえ、爺さんゃ娘も話のつくまで、安心して家にゐろと云つてやつてくれ』

と云ひましたので森太郎も、

から、何とか文句をつけてくるかも知れねえが、その時は私も身體を張ります。何とでも好いからお前さんのやりたいようにやっておくんなさい』と話はこゝで極りまして、鐵五郎森太郎相談の上、八右衛門親子をかくまうように致しました。

ところがその後、二日經っても三日經っても、長樂寺からも、與吉からも、何の音沙汰もありません。扨ては與吉奴、口では大きな事を云いながらも、八右衛門に掛須賀へ驅け込まれたので、手も足も出ずにゐるのか、それとも隙を見せて、何か企らんでゞも居るのかと油斷をせずに待構へて居りました。と

ところが間違ひの起る時と云ふものは仕方のないもので、これ程警戒して居りました鐵五郎も、止み難い用事の爲め、子分一人を連れて出掛けた歸り途、掛須賀の並木に於て、長樂寺の清兵衛の若い者、三[illegible]はれて居ります者を初め、目明しの與吉も交り、惡口雜言をつかれた揚句、袋叩きに[illegible]して、釣臺に乗せて、我が家へ送り歸されました。之れを見ると驚いて

ふに暴れ込んで、命を取られるか話をつけるかする所だったが、お前さんの身をすたらせちゃいけねえと思った斗りにこんな目に逢はせて何とも濟まねえ』と傷手當を致しましたが鐵五郎は、

『なに、つまらねえ間違ひだ、森、決して家の若え者に云って呉れるな、話がこたれて大きな間違を起す位なら、俺はちっとかうして我慢はしてないから』と何處で何者にどうされたとも一口も云はずに、ちっと默って居りました。さて四五日經ちましてから、鐵五郎の身體の工合も、ほゞ大丈夫と見込のついた時、森太郎は枕元にやって參りまして、『さて親分、お前さんとも不思議な縁で、こうして兄弟の盃までした中だが、何かお前さんの役に立ちたいと思ってゐる中に、却って迷惑をかけてしまった。俺も長えこと一つとこにちっとして、安閑として暮してゐると、氣が腐って仕方がねえが、まあやっとこの土地を離れるような[illegible]って來た。ついては俺も行きがけの駄賃に、

藤枝身内の奴等の首を二つ三つ貰つて行かうと思ふ。甘く云つたらお前さんも、それで氣を晴らしておくんなさい。どぢを踏んでも、お前さんの名にかゝるようなけちな、眞似はしないから、お前さんも身體を大切に、またどこかで逢ふ時もあるだらう』と云い出しましたので、鐵五郎も何うかして、引き留めておき度い男とは思つて居りましたが、どうせ落着いてはゐない氣性を知つてをりますので、

『さうか森、お前がさう云い出したからには俺がいくら引き留めても、ゐついてゐちや貰えまい。ちやお前も丈夫で行くが好い、一人者は暢氣で好いな』と思はず羨ましさうに申します。

『苦勞も多いがこれがこつちの身上さ、お前さんのように多勢乾分子方を持つちまふと、ふだんは親分だ貸元だつて、威張つてゐられるとこは好いが、しまいにや手前の身體を手前で始末が出來なくなる。俺はあそんな事が大嫌いだ。どうせたまげる程嬉しい事だの面白い事だのつて俺たちにやありさうもねえ世の中だ。せめて打倒れるまでも窮屈な思ひをしねえで俺は歩きてえと思つてゐます。ぢやお前さんも大切にしなさい』と別れを告げて、掛須賀の家を立ちました。思いもかけず長い事一つ所にくすぶつてゐた森太郎は、再び流浪の旅に登る事と、すぐ眼の前に起らうとしてゐる、命をかけた出來事が、長い間くすんでゐた心を湧き立たせて、果しもない退屈から脱れたようにほつとしたのでありました。

さて森太郎は十分に支度をして、藤枝の宿に入つて參りまして、その日も暮れ際と云ふ頃になつてから、長樂寺の淸兵衞の門口にやつて來て、

『ご免下さいまし』と訪れる。

『へえいらつしやいまし』

『私は名古屋の森道と申します半可打でございます。親分御在宿ならばお目にかゝりたく、當期御厄介になりたい考へで、何卒よろしく御取次を願いたう存じます』と、半素人の博突打になつて、入りこんだのでありました。

こゝで長樂寺の淸兵衞にも對面致すと。

『まあ心易々悠り遊んで行きなさい』と云つてくれる。年の頃六十五六刧つて溫厚な人出でありますから、扨は矢張り噂の通

森太郎は清兵衛方に來ましてから、三羽烏と自ら名乗る三名の者に心をつけて居ります。此の三名と申すのは、一番年長が博勞の定五郎、之れが與吉と兄弟分の男でありまして、年頃は四十そこ／＼、色の黒い背の高い、頑丈な男でございます。次が上傳馬の新助、これは三十二三位、色の淺黑いどこか精悍な氣の溢れたような男前、その次は一軒屋の粂吉と云ひまして、色の白い俳優のような男ではありますが、何となく凄味を帶び

—（竹川森太郎）—

て居ります。森太郎は常に心して三人の様子を伺つて居りますが、さすが三羽烏と云はれるだけあつて、五分の油斷もありません。さしもの森太郎も手を下す事が仲々出來ません。殊に一人だけやつて、跡の二人をやり損なふような事があつては、切角の苦心も水の泡となつてしまふ。ので、何かと心を碎きながら、此の三人を「兄い／＼兄い」と立てゝ取り込んで行く。目明しの與吉も時折は定五郎の許に遊びに參りますので、[illegible]しまた如才なく、ほい／＼と煽て上げる。人間と云ふものは可笑なもの

輕蔑しながらも、それだけにだん／＼心を許して行く。人間らしい心持のない奴等が金でも出來て、衣食住に不自由もなくなると女も買い飽きると云ふ事になると幇間などゝ云ふものを集めて、彼等の沒個性を弄んで喜ぶと云ふ風になる、之れは金持ばかりではない、隨分自覺したような人間にも、かう云ふ傾向はよく見えます。誠に淺間しい人間の弱點と申さなければなりません。

さて三名の者は、いやにおべつかる嫌な奴だと心に思いながら、いつとはなく『森造、森造』と、からかひ半分に心を許して行くやうになりました。

處が一晩、清兵衛の宅では、何か心祝ひがあると見えまして、この三名の者を初め、二三人の乾分を集めて、内輪の酒宴が初まりました。森太郎は例の如く、『さ親分、兄い、野郎のお酌ぢや面白くねえか知らねえが、酌を[illegible]。[illegible]を歌ふ、幇間同様に、一坐の間を

つて廻して居ります。これを見て淸兵衞も、

『森つてえ奴あ、本當にひようきんな野郎だな』とくす／＼笑つてゐる。その中に男同志の酒の坐と云ふものは兎角話が武張つて來て、喧嘩の話、勝負事などの話もそろ／＼出て來る。すると何を考へたか森太郎、

『時に博勇の兄い、かうして野郎ばつかりで酒を吞んでると、話が固くなつて仕方がねえ、ついちや私が若え奇麗な娘を一人引張つて來ようと思ふのですが、どんなもんでせう』と云い出しました。

『何を又森の與太野郎が、つまらねえ事を云い出しやがつて、女が欲しけりや女郎買にでも行くが好いぢやねえか』

『なにそれがお前さん、是非今夜こゝへ引張つて來なきやならねえ女なんで』

『引張つて來なきやならねえ女だつて、そいつあ可笑な話だな、一體その女つて云ふなあ何者だい』

『兄いの前だけど、お前さん、お初つて娘を知つてるでせう』と云はれて定五郎、知らないとも云はれないから、

『うむ知つてゐる』と答へました。

『そいつにお前さん今日逢つたんでさ、私が今日お滑婆さんの茶店に行くと、そのお初と云ふ娘が來て、婆さんと色々と話をしてゐる。だん／＼話を聞くつてえと、爺さんと二人で掛須賀の身内を頼つて逃げて行つたけど、此頃ぢやどうしたものかつらく當る、相手の留吉と云ふ男まで、根つから構つては呉れねえで、二言目には出て行けと云はれるが、長樂寺の定五郎さんや、與七さんにも申譯ない事がしてあるので、話をしない中は自分の土地にも歸つて來られない。それに自分はもうあんな薄情な留吉なんかの世話になるなら今では與吉さんに身を任せて、親にも安心をさせて暮したいが、何とか方法はないだらうかと、相談してる所でした。それに私が定兄いなら俺も本當の兄貴のやうに世話になつてゐる。折を見て話してやるから、婆さんの家へ隱れてろつて、あすこへしばらく忍ばせておいたんでさ。ところが今夜丁度かうして酒が始まつた好いとこだ、與吉兄いも呼んで來て、こゝで何とか話をつけてやらうぢやありませんか』

とまことしやかに云ひましたので、

『ふゝん、そいつあ面白え、掛須賀の奴等も何だか俺達が薄氣味惡くなつて來たんだらう。親分どんなものでせう』と清兵衛に尋ねます。清兵衛は何にも譯を知らないから、

『お前たちの好い事なら好いようにやつたら好いぢやないか』と年寄だけに何にも子分に任せて居ります。

『それぢや定兄いからして下さい。お前さんが今夜親分のとこで一杯やつてるから、與吉兄いにちよと來てくれつて、手紙を書いておくんなさい。與吉兄いだつてお初の事を云はれたんぢや少し極りが惡いだらうからそいつを持つて私が兄いに屆けてから、お初をこゝへ引張つて來る。こゝで二人が出くわす。こいつは面白い事になつて來た』と森太郎は一人で浮れてゐる。計られるとは知らないから。

『そいつも面白え事かも知れねえ』と醉つたまぎれに定五郎は手紙を書きます。之れを受けると森太郎、部屋へ歸つて支度をして彫枝の宿外れ、與吉の家にやつて來て、

『今晩は、兄貴はお宅ですか、定五郎兄いから手紙を持つて使ひに來ました』と件の手紙を渡す。與吉も兄貴分の定五郎からの手紙であり、持つて來たのが部屋で馴染の森造だから、

『やあ森ご苦勞だつたな、何か用事がありさうだつたか』と尋ねますと、

『なあに今日珍らしい客人があつたんで、兄いもお呼び申して來い、そうして手前お伴して來いと云はれましたんで』

『さうか、それぢや一緒に行かう、手前提灯を持つて先きに行け』と大きな顔をして我家を出る。畔道までやつて來ると、先きに立つた森太郎、はつとつまづいたふりをして提灯を投り出した。

『森、どうした。氣をつけろ、眞暗になるぢやねえか』と怒鳴つたところを

『なにを、』と横なぐりに切りつけた。

『あつ、なにをしやがるんだ』と、云つたがばつたりそれへ倒れたところを押へ附け、

『やい與吉、うぬは女にふられたつて、けち臭え十手風を吹かせやがつて、年寄親子を脅した上、よくも俺の兄弟分掛須賀の

鐵五郎の面に泥をぬりやがつたな、己のやうな蛆虫は、かうしてやるんだ』と起き上ると同時に首を打つて落し、髻をつかんで戻つて來て清兵衛の宅表ての方から

『たゞ今戻りました。森造でございます』と怒鳴つて格子を開けて中に這入つた。奥では森造が戻つて來たのだなと、氣をゆるして飲んでゐる、襖の外までやつて來た森太郎。

『えゝたゞ今』と云ひながら、氣合を計つてガラりと明けると、

『えいつ』と叫んで、與吉の首を叩きつけた、

『やゝ森、汝は』と定五郎が驚いて脇差を取つて立ち上らうとする所を、

『何をつ』と肩口へ割りつけた。

『うぬ、飛んでもねえ事を』と一軒屋の兼吉が、立向はふとする奴を、胸の當りに諸手突きをくれたので、兼吉もそれに倒れる。

『畜生、兄弟をやりやがつたな』と上傳馬の新助が脇差を拔いて斬つてかゝるを、

『何を洒落臭え』と、切り込んだ一刀に、新助は腕を切り落されてばつたり倒れる。

『これ森、何をするんだ』と年を取つても長樂寺の清兵衛、重い身體で立ち上つて居るところを、

『邪魔しちやいけねえ』と足を上げて腰を蹴つたので、清兵衛はそれに倒れたのを、帶をとつて縛り上げてしまつた。殘る子分の者共は、之れを見て驚いて逃げてしまふ。

森太郎はほつと息をつくと、それにあつた燗冷しを、二三杯ぐつと飲んで、まだぴく／＼動いてる三名を後目にかけて、

「やいこの蛆虫奴等、引導代りに名乘つて聞かせるからよつく聞け、名古屋の森造などゝは出鱈目だ、眞の俺は濃州郡上郡下田新田百姓森右衛門の伜森太郎、當時竹川の森太郎と云ふのは俺の事だ。己等はよくも、目明風情の與吉の尻押をして、罪もねえ八右衛門親子を苦しめ、また、多勢を賴んでよくも掛須賀の鐵五郎を並木で袋叩きにしやがつたな鐵五郎と俺とは兄弟分だ。兄の鐵五郎は、事が大きくなると面倒だと云つて我慢をしてゐるか知らねえが、弟分の俺にや我慢が出來ねえ、汝等四

人の素首を捕えて貰はうと思ふから、今日まで我慢して、手前達を兄貴兄貴つて云つてやつたんだ。お初が藤枝に來てるなんて、そんな事は皆な嘘だ。與吉をおびき出す爲めに、俺が書いた狂言だ。己等も卑怯に似合はねえ、飛んだ間拔な野郎共だ。もうかうなつちや仕方がねえ、念佛でも題目でも勝手に唱へろと云ひながら。片つぱしより首を打ち落しましてから、清兵衛に向つて、

『さて長榮寺の親分、長い間御厄介になりました。今度の事はお前さんは知らねえだらうが、お前さんの子分定五郎始め三人は、目明與吉の尻押をして、罪もねえ親子を苦しめた、たゞでせえ目明は、こちとらの瘤つ玉だ。そいつにへつらふ計りでなく、一緒になつて百姓衆を苦しめるなんて無職者の風上にもおけねえ奴、それ計りぢやねえ、それやこれやを根に持つて、掛須賀の鐵五郎を袋叩きにした。つまりどいつも此奴も、ありもしねえお上の威光を笠に着たり、お前さんの名を後ろに背負つて仕事をするけちな野郎ばかりだから、俺が命を貰いました。これからもある事だ。子分にも旅人にも、よく氣をつけた方が好うごんすぜ。ではご免なせえ。その中に誰か來て繩でも解いでせう』と云ひ捨てゝ、清兵衛の家を出ました。

思ひを遂げた嬉しさと、再び自由な流浪身となれたのとで、森太郎の心は、輕々となつたように思はれるのでありました、

『あゝ、また的もねえ長旅か、その中にや又何かにぶつかるだらう』と呟きながら、同道坂道を行くでもなく、清水を差して森太郎は、悠々と步いて參りました。

（完）

彫刻師ソクラテスの犯罪

生方敏郎

一

社會講談と云ふことが創められてから、はや一年に成る。「はや一年に成る」と云へば大變に光陰の早いのに驚いた心から出た言葉であるが、同じ一年でも「まだ一年にしか成らぬ」とも云へば云へる。偖、そこで、社會講談もまだ創められてから一年にしか成らないものだから、世間さまも何んな物であるか、その正體をよく御存知ない。それもその筈、執筆を依頼されてる當人の私さへも、一體全體社會講談とは何んなものかと云ふことを、よく知らない。講談にかこつけて自家の磊塊を吐くことなのやら、講談本を今風に書き代へて下手な現代小說家の眠氣を覺ましてやらうといふ茶目的老婆心なのやら、一寸見當がつかない。すると或人のいふには、そんな事は何うでも君の任意として置いて、兎に角やつてみたらよからう。とのことであるから、「いや、それはやつてもいゝが、若し出來そこねると人さまから笑はれるし、萬一うまく出來た日には、すつかり講談師に祭り上げられてしまふ、こいつは尙ほ堪へられないことだ」と苦笑すると、「いや、然うでない。上手にやれば美酒のやうに快く人を醉はせるし、拙かつた日には促眠劑に成り、短か夜の良い伽だ。何う轉んでも世の爲め人の爲めに成る」といふ。

世の爲め、人の爲めに成るのが、即ち社會講談である。社會講談の社會講談たる所以である。さう說き付けられると、何んだか一つ演つてみようかといふ氣もする。だが、待てよ。昔から、「世の爲め人の爲め」を絶叫して騷いだ奴等は、何時の間

にやら、田地を買ひ込み銀行へ貯金が出來るが、本當にマジメで世の爲め人の爲めに働いた連中は、皆悉くひどい目に會はされてゐる。ソクラテスはその爲めに毒杯を仰ぎ、キリストはその爲めに十字架に懸けられ、孔子は何とかいふ野原で餓えに苦しんだ。芝居でやる佐倉宗五郎なんかも然うだ。人は知らないやうだが、私の國元の眞庭の茂左衛門なんかも百姓の爲めに惡大名と爭つて、月夜野河原に三族を誅された。さうして殺して置いてから、總て聖人だの哲人だのと讃めそやし、或は神樣に祭つたりする。殺した後で神樣に祭つてくれるのは。それこそ世に謂ふ後の祭りで何にも成らないが、それでもまだ我慢する。そして祠を建てゝ、鳥居を建てゝ、そうして然る後に賽錢箱を置くことを忘れない。神樣にするのはいゝが、早速それで以て飯の種にする。蠟燭を上げ、線香を立て、お米をバラ〱投げる。そして參詣人は何を祈るかと思へば、相場を當らせて大儲けをさせてくれ、金持のいゝ旦那がつくやうにしてくれ、亭主を往生させて色男と一所にしてくれ、徴兵檢査に免れさせてくれ、とそれは自分勝手なことばかり註文するが、生きてるときにすら、貧乏で無智な民百姓（たみひやくしやう）の爲めに貴重なる生命を擲つ程のバカ者だから、神樣に祭り上げられて置いて賴まれたら、まだ〱何んな註文にも應じないものでなからう。といふので斷然からは近頃流行神へ刑事が張り込み、神樣を監視するといふ話。ずいぶん突飛な話だけれども、それは拙者一人の作り話に非ず、東京の大新聞に出てゐたのだから、確かも確か、國務大臣の一諾位には確かな話。

だが實のところ、之は笑ふ話でなく、凡そ世の爲め人の爲めに働く位の甘い人間の運命は、正にこんなものである。生きては則ち縲絏の辱めを享け、死しては神樣に祭り上げられても尙ほ且つ刑事に監視せらる。それ故、萬一、この社會講談なるものも、世の爲め人の爲めに成るといふなら、浮つかり手を出すのは危險極まる。君子は危きに近寄らず。と云へば、說き付ける者、私を說き付けて曰く

「まあ〱、そんなに惚れ玉ふな。君の書く社會講談の益益位は多寡の知れたものである。いゝ意味に於いて誰も對手にしやしないから、安心し玉へ。それでも、まだ世の爲めに成り

はしないかといふ心配が有るなら惡人共の講釋でもすればいゝ」と。

二

惡人共の講釋なら、成程いかにも世の爲めに成るといふ危險は有るまい。すると、私も十字架に架けられる心配はいらぬ。だが、今日惡人といへば、まづ郵便局長、滿鐵社長、東京市會議員、××會代議士などと相場が極り、毎日〳〵新聞に連載せられてゐる。そんな卑俗な材料では折角書く張合が無い、荷も講釋でもしやうといふやうな物識り學者のやることではない。そこで、私は遠い西洋の歴史から、誰も知らぬ相な大惡人を探すことにした。

紀元前三百九十九年に、ギリシヤの國アゼンス市の、彫刻師ソクラテスと云ふ者が、時の僭王から死刑の宣告を受けて、毒盃を仰いだ。そして牢屋の中で死んだ。

この男は、頭も、もう大方つる〳〵に禿げてゐた。顔付は頗るまづく出來上り、凶惡と殘忍の魂の外は、こんな不出來な面構への肉體には宿り相にも見えなかつたが、その時彼の屍體に取り付いて泣いてゐたプラトー及びクリトーと呼ぶ二人の青年は「おゝ、アゼンスの最も尊い賢人は死んだ。」

「尤も偉大なる魂は、この世を去つた」

と云つて泣いた。

又、その細君のクサンチツペは、平素彼とは非常な仲惡だといふ評判を裏切つて、訃報に接するやさめ〳〵と歎き悲しんだ。人々はこの有樣を見て「流石、夫婦の情合だ」と云つて感じた。

この彫刻師は、存命中、なか〳〵の學者で、殊に倫理道徳の議論にかけては、誰にも負けた事がない。人を說き伏せるに妙を得てゐた。當時有名な詭辯家のプロタゴラスでさへも、彼には到底敵し得なかつた。そんな鹽梅だから、このソクラテスには、多く學問の弟子達があつた。ソクラテスが死んだので弟子達も皆悲んだ。

彼の罪名は、青年を煽動し、國教に反對する危險思想を抱いて、青年の間に、盛に害毒を流すといふのであつた。多くの人が彼を告發したので、こう云ふことになつてしまつたのだ。

れのみならず、この彫刻師は、家庭が治まらず、常に、夫婦喧嘩の絶間がなく、斯様に、告發されるに到つたのも、もとをたゞせば、その妻の口から出たソクラテスに對する悪罵が、不幸にも、反對黨の利用する處となつたのだ相である。

三

ソクラテスの母は産婆で、父は石工であつた。そして、父は、同時に彫刻術の心得があつたので、彼は父から教へられて、彫刻師となつたのだ。さういふ職業上の關係から、ソクラテスは、共産主義のシアソースと云ふ勞働組合に屬して、公共食堂に、出掛けて行き、そこで仲間の者に、友愛とか、親睦とか、福徳合一論とか、勞働の神聖とか、物質的利益と精神的平和との調和とか、さういふ勞働階級に必要な道徳を說き、彼等の徳行を鼓舞督勵した。そして、何時も利己的な、或特權階級の御用學者等を大道の眞中で捕へて、議論を吹きかけ、へこませた。さういふ時、ソクラテスは、何時も跣足であつた。だから。跣足で歩いてゐて、議論の達者な彫刻師と云へば、アゼンスの人々が、すぐに『あゝ、あのソクラテスか』と合點がいく位、全市によく知れ渡つてゐたのだ。

さて、この様に、名物男となつた彼は、その友達も亦、天下一流をもつて許された人物ばかりであつた。政治家としては有名な、その時代の大統領、ペリクリース、彫刻家として一流のフィディアス、また、戯曲作家としては名聲嘖々たる、ユーリピディース、そしてまた弟子には、貴族の出である、プラトー、才氣橫溢たるアルシビアデス、その論敵としては、詭辯派のプロタゴラス、そしてまた女の友達としては、當時、才色兼備し唯一人者であつたアスパシヤがあつた。その連中が一緒になると、上は天文地文から、下は市政・工藝・風教・衛生に至るまで、議論百出で常に夜の更けるのも知らない位であつた。從つて彼は家にゐて、自分の本業たる彫刻などを、こつこつやつてゐる時間よりも、外でしやべつて、時を費す方が多いといふ有様であつた。

ソクラテスは、この通り外へ出ては幸福であつたが、家庭にあつては、極めて不幸な男であつた。ギリシャ一不幸の男と云はうか。世界一不幸な男と云はうか。迚もお話にならない家庭

であつた。

四

そんな家を作つて、死ぬ迄苦しんだと云ふ事は、彼の不明の致すところか、或は彼の不德の致すところか、それとも亦さういふ惡緣といふのか、兎も角も、そんな女と早く離婚しなかつたことは、全く彼の不明であつた。だが、彼の細君も、始めからの悍婦ではなかつた。猫を被つてゐたと云ふのでもなからうが、花嫁時代には、何と云つても、まだ初々しいところがあつた。なる程、來ると間もなく、ソクラテスに、一寸小言を云はれた時など、一つ位口答へをするやうな事もないでもなかつた。然し、その位の事に、ソクラテスは、驚きもしなかつた。何故なら、彼は、議論にかけては、竝ぶものなき達者な男であつたから、細君の口答へ位、一言のもとに、云ひ伏せてしまつた。そんな事はあまりに容易な事であつた。若しその反對に、彼が、議論下手であつたとしたら。早くから、細君の口答を云ふ事を氣に病んで、別れてしまうなり、何とかきまりをつけたであらう。然し彼は、細君の口答へ位は記憶に殘らない位、小さな缺點として取扱つてゐた。のみならず彼は、誠意を以つてその妻を愛した。間もなく、愛の結晶たる子供が生れた。

子供が生れると、そこに夫婦の鎹が出來た。細君は、安心すると同時に、前よりも更に一段我儘になつた。これ迄慎んでゐた我儘をそろ／＼出し初めて來た。少しの事にも、顏色を變へたり、ソクラテスの云ふ言葉尻を捕へて、やかましく、喚き立てたりした。然し、剛氣なソクラテスは、それをさまでの强敵とは感じなかつた。その中にまた第二番目の子供が生れた。細君クサンチツペの我儘は、更にまた增長した。然し、ソクラテスは智慧に於いて自分の方が、遙に優つてゐるから、何と云つても妻は自分に、內心推服してゐるものと、己惚れてゐたソクラテスの友人の中には、窃に、離婚を諷諫する者もあつたが、彼は取り上げなかつた。それればかりでなく、自分の樣な者なればこそ、かういふ女を制御して行く事も出來るが、一旦自分が見放すならば、この女は、唯盲目的に突進するより外を知らない。そして盲馬の樣に、崖から落ちて死ぬに決つてゐる。自分が見放したら、誰も、この悍馬を御するものがなく、ま

た、その、盲進を、遮り止める者もあるまい、その時には、クサンチッペは、亡びの淵へ落ち込む外はない。それを憐れだとも思つた。また、彼は我儘と無謀とは、或程度迄、女の通有性だとも考へてゐた。女と云ふものの數を細君以外に、餘り多く知らなかつた彼は、彼の細君を捨て、他の女と結婚したところで、五十歩百歩だと、考へてゐた。更にまた、彼は我儘と無謀とは、若い者の通有性だとも考へて、その若い細君を宥した。また彼は、無謀と我儘と、粗暴とは教養のないもの〻通有性だとも考へた。それ故、細君が、もつとだん／＼年を取れば、その惡性は、その度を減じるに違ひないと考へた。更にもう一つ彼は、彼の啓發と教導とによつて、その細君の品性を、より良き方向へ引き上げて行く事が出來るとも考へた。そして其細君に對して絶望しなかつた。單に絶望しないのみならず、教育のい〻材料だとも考へた。或時はまた、さういふ難物を取扱つてみて、そこに初めて、自分の品性の鍛錬が出來るとも考へた。

彼の家庭を知つてゐる親しい友達は、彼の呑氣と、己惚れの望さとを、密に笑つてゐた。またその自信力を、感服しもした。そして、「何と云つても、夫婦の中だ。また人の知らない何處かい〻處があると見える。」などと笑ひもした。けれども彼に、さまで近くない世間の普通の人達は、彼の家庭を、い〻家庭だと、買ひ被つてもゐた。ソクラテスに向つて、

「あなたの家庭の樣に、溫い家庭を持つ人は全く幸福ですなあ。」

と、云つた者もある。さういふ時、ソクラテスは、

「いや、僕の家庭は、溫いと云ふより寧ろ、熱いと云つた方が當つてゐるね」

と、笑つて答へた。然しその深い意味は、無論先方には分りはしなかつた。

溫い家庭には、駘蕩たる春風が吹く、花が開き、鳥が歌ふ。熱い家庭には。焦げ付く樣な夏の日が照り、夕立が降り注ぎ、暴風が吹き、稻妻が光り、雷が轟く。ソクラテスは、その二つの全く違ふ家庭を胸に描いて、答へたのだ。

もう、三番目の子が生れてからは、ソクラテスも、かなり悲

親し初めてゐた。然し、もと〳〵彼は意志が強く、剛腹で、そのくせ自分の瞑想やら他人との哲理談との間やらに、明るい、のび〳〵した氣持になつて、家庭のくさ〳〵などは、きれいに忘れるといふ様な、根が樂天的に出來てゐる男で、惡く云へば極樂蜻蛉の方であつたから、悲觀と云ふ字を當て嵌める程悲觀してゐたわけではないが、然し兎角、家庭にゐ付かず、外をのそ〳〵遊び歩く様な習慣がついた。そして、ヘミクリオンと呼ぶ半圓形の大理石の座席に、アゼンスの名士達と、屢々會合して、夕日に輝くアクロポリスを遠く望んで、雜談に耽りもした。また、或時は、市場や辻に立つて、誰でも通りかゝりの人を捕へて哲理談を持ち出したり、または居酒屋や、妓樓に登つて、商人とも職人とも、テーブルを圍んで、飲み、大いに人生問題、社會問題を論じたり、またはピレアスで、船頭を相手に盃のやりとりをしたり。また、大統領のペリクレースと話すのでも、放蕩者のアルシビアデスと話すのでも、同じ調子で、さつくばらんにメートルを上げた。そして、奇人としてアゼンスの町に知れ渡つてしまつた。

五

ソクラテスの家は、もとより勞働組合に屬する位だから、豐ではなかつたが、然し、また、生活に追はれる程貧乏でもなかつた。ソラクテスは、それだけの生活でも、物質的には滿足を得てゐたが、細君のクサンチッペは、その位の生活程度では、不平不滿に堪へなかつた。ギリシヤの文明は既に爛熟しきつてゐて、五年前と、五年後とでは、その贅澤の進み方は驚くべきものであつた。ソクラテスは、さういふ奢侈の進歩については、殆ど全く見逃してゐるのではないかと。思はれる程、着物も調度も、二十年も前の流行後れのものを用ひて平氣な顔ですまし込んでゐた。のみならず、彼は、美しい着物を着るよりも、裸でゐる事が最も好きであつた。細君のクサンチッペの目には、一年一年の流行と華美とを、見逃さなかつた。而もそれを手に入れる事が出來なかつたのだ。美しいものや、新しい流行を見る毎に、夫の意氣地なさが腹立たしかつた。かういふ、非常識な奇人に連れ添ふて、あたら若い半生を、空しく過すかと思へば、それだけでも、ソクラテスの、獅子鼻を引搔

むしつてやりたい様な氣がするのであつた。

流行ものづくめで、盛裝して、女王の樣な心持になつた經驗などは夢に見たくてもない中に、もう五人の母になつてしまつた。子供一人産む毎に、自分の容色が衰へて行くと云ふ事だけでも、クサンチツペには、隨分つらい事であるのに、さういふ事に、少しも同情のないソクラテスが、つくづく怨めしかつた。なる程、家の人は深切だといふ事は、彼の女にも分つてゐた。然し、ソクラテスの深切は、自分にばかり專門に注ぐ愛ではなくして、彼に近づく誰に對してでも、同じ樣に、例へば、春の空の太陽の樣に、平等に暖いのが、細君には物足りなかつた。彼の女は、夫の愛を自分一人で欲しかつた。然るに夫は、居酒屋で初めて出會つた船頭に對してですらも、惜氣もなくその温情を傾けた。

「だから、家の人の愛情には價値がない」

と、クサンチツペは考へた。

六

アゼンスの郊外セラミカスの、柱廊もない質素な住宅の庭を、ソクラテスはあちこち、何か考へながら歩いてゐた。細君は、羊毛を撚きむしる棧に、櫛つてゐた。

「あなた何してゐるんです」

「さういふ質問に對しては、私は答へる義務は持たないけれども、特に厚意を以つて答へれば、私は考へてゐるのだ。然し、なるべく沈默を守つてゐて貰ひたい、わきから話しかけられると、折角立てかけた腹案が、滅茶々々になつてしまふから」

「おや、お氣の毒樣、あの人の事でも考へてゐるのでせう」

ソクラテスはそれには答へずに猶、ぶらぶらと歩いてゐた。

「本當に話しかけたりして惡い事しましたのね。いろいろ、面白い空想をしてゐるところを。さういふ勝手な眞似ばかりしてゐながら、世間へ出ると、やれ幸福と德行とは一致してゐるの、正義の神は、我が心に宿つてゐる良心であるなどと、體のいい事ばかり言つて、人さまがやれ、聖人だの、哲人だの、やれアゼンスの名士だのと、お追從を云へば、すつかりその氣になつてゐやがる、どう己惚れたつて、かまふ事あないけれども、さういふそばから女房を踏み付けにして、他女の事なんか

考へ乍ら『私は答へる義務は持たないけれども、特に好意を以つて答へれば、私は考へてゐるのだ』とさ、聞いて呆れらあ、僞善者、畜生、獅子鼻の禿爺イ。」

「お前は、先刻から何を云つてゐるんだ。何かまた感違ひをしたな。若し、私の方に過失があるなら、どういふ過失であるか、それを正確に見とゞけた上で、私に忠告してくれたらそれが好意と云ふものだ。唯、頭から當て擂りと罵倒を浴せかけられては、どうしてみやうもない。お前の今の言葉から、推察すると、私がお前にかくれて、女でも拵へた樣に聞こえるが、お前はさういふ事實を、お前自身の肉眼を以つて見とゞけたのかね。それとも亦、何人か信ずるに足る程の人から、確實性のある具體的の話を聞かされたのかね——他人の妻に對して夫の僞を誹謗して聞かすと云ふ事は、實に不德義千萬な事だが……」

「さうで御座いませうとも、あなたにとつちやあ、かなり迷惑ですからね。僞善者は秘密が知れゝば、化の皮が剝げるのですからね。」

「お前の云ふ言葉には一面の眞理がある。然しその言葉は私の場合には當て嵌らない。そこで私は前の話をつゞける。先づ、私の行爲に對して誰かがお前に告げたとした場合には、果してそれが事實か、否かを、たしかめなければならない。それからでなくては、人を批難する事は出來まい。いや、それからですら、相手によつて、批難していゝ場合と、批難して惡い場合とある、また、批難の程度と云ふものもある。國家の刑法ですらも、微罪はこれを措いて問はない。また、その罪の輕重により、刑罰にも輕重がある。峻厳なるべき國家の刑法ですらも、その通りである。かりに百歩を讓つて、私が若し、お前以外の女と關係したと云ふ事實が、あつたとしても、その關係と云ふものにも亦、度合がある。單に、二人きりのところで話したと云ふ場合、肉體が接觸したと云ふ場合、また、子供迄出來た云ふ場合、それもいろ／＼ある。頭から何にもかまはず、先刻の樣に人を罵詈讒謗すると云ふ事は間違つてゐる。まして子供のゐる前で、殊に物心付いた子供の前で、兩親が爭ふと云ふ事は良くない事だ。さうはお前は思はないか」

「やかましい。子供のゐる前なら、亭主にどんな事をされても

默つてゐるなんて事があるものか」

「たとひ私が惡いにせよ――事實に於て私は惡くはないけれども――かりに百歩讓つて私が惡いにしても、夫たるものに對して、『やかましい』と云ふ口の利き方はあるまい。無教育な、車夫馬丁の家庭に於てならいざ知らず、我々の樣な、アゼンスの知識階級の家庭に於て、さういふ言葉は夫婦の間に使ふべき言葉でなからう」

「え〻、どうせさうです、私は無學です。無教育です、いくら私が、無學でも、無教育でも、自分の顏を踏み付けられて、だまつてゐなければならないなんて、そんな慘酷な道德がありますか？、人が從順にしてゐればい〻氣になつて、女房なんて、どんな事をしてもよいと考へてゐる。いまに見やがれ、アントスが來たら、あなたの始終云つてる事を、話してお役所へ訴へさせてやるから、さうすれや、あなたなんか、すぐに、牢屋にほうり込まれるんだ」

「アントスつて、あの鞣(なめしがは)の職工か、あんな男が何が物がわかるか？」は〻あ、あいつからお前くだらない事を聞かされたな。失業して、困つてゐるから可愛さうだと思つて、あんな者を世話をしてやつたのが、私の誤りだつた。私の留守と云へば來て、さういふ家庭の平和を紊す樣な事をする。うむ。昨日、丁度アスパシヤの家を出る時、あの男と、表で一寸出會つたが、あれから氣を廻したと見えるな。」

「アントスが、深切に私に話してくれたのが何が惡いんです、泥棒をする者が惡いか、泥棒を教へてくれたものが惡いか、どつちです。アントスは泥棒を教へて吳れた人ですよ、そして泥棒をしたものはあなたです。」

と、クサンチツペはもう羊毛も何もほつたらかして、ソクラテスを睨め付けて云つた。この上激昂させれば飛びか〻つて來てむしりつくか、近所八方へ聞える樣な大聲を上げて、喚喚くかに決つてゐる。それは、ソクラテスも前々の經驗から知つてゐるのだ。然し、泥棒とまで罵られては、一本氣の彼は、默つてはゐられなかつた。それに先程も何事か、アントスに告げて、自分を牢屋へぶち込んでやると近罵るのを聞いては、いましめずに置く事は、後日の爲、却つて危險の樣にも思はれ

た。いづれにせよ、アントスを家庭へ入れる事は禁物だと思つた。

「泥棒などゝ、人聞きの悪い事を云ふものではない、私が若し泥棒だとなれば、お前は泥棒の妻である。子供達は泥棒の子供となるのだ。それを思つたら、さういふ極端な罵倒はするものでない。第一お前自身の爲にも不名譽な事になるぢやないか。」

「不名譽でも事實なら仕方がない」

「事實であつてさへも、妻とし又夫として云ふべき事ではない、まして、事實でも何でもない、ほんの言葉爭ひの機から出たものなのだから、尚更だ。だがこんな事は、議論するにも當らないが、アントスと云ふ男はお前も、もう、近づけてはいかんよ。あれは俺達の政敵クレオンと近頃非常に親しくなつてゐる。あれにお前が接近する事は非常に危險だ、どんな事を初めるか分らない。」

「あなたの敵かも知れませんが、アントスは私には敵ではありません。」

「私の敵ならお前にも敵ぢやないか。兎に角、お前はどうも私の敵になる樣な奴等を好んで、私の親友を皆悪く云ふが、困つたものだ」

　クサンチツペは嘲笑つて、

「だつて、あなたのお友達は皆、悪い人達なんですもの。」

「馬鹿な、ペリクリースがアゼンスで最も大人物である位な事は、どんなバカにも分りさうなものだなあ。そして、フィディアスは最も善良で、ユーリピディースは、最も高潔な人物で、プラトーは最も賢明、アルシビヤデスは最も天才的、プロタゴラスは最も鋭利である事位は誰からでも許されてゐる」

「へえ、御尤づくしなのね。でも、私にはそんな事は道理だとは思はれないわ。それからアリストフアネースは？」

「あいつは、私の仇敵だ。何だか私の事を、喜劇に書いたとか云ふ評判だ。」

「さうですよ、私もアントスから聞きました。あなたも見ていらしつたでせう」

　と、面白さうにクサンチツペは笑つた。先刻の不機嫌はその喜劇の事を想ひ出したので、何時しかとれてしまつたのら、

い。ソクラテスの方が今度は佛頂面をして吐き出すやうに言つた。

「昨日『蜂』を見たが馬鹿々々しいものだ。」

クサンチッペは、ます〳〵笑つて、

「大變面白い相ぢやありませんか。よく出來てゐますね。あなたの非常識で我儘で、押しが強くつて、そのくせ間拔けなところが隨分よく、素破拔かれてゐますわね。」

ソクラテスはます〳〵いやな顏をして、

「私を諷刺した心算のものが、皆的を外れてゐる。あゝいふ誠意のない作者は味方にしても賴母しくなし、敵にしても、穢らはしいだけだ。」

七

走馬燈のやうに世の中は變つて行つた。政治家のペリクリースは既に死んだ。アゼンスの平民政治家、煽動政治家等が内訌してゐる間に、軍國主義のスパルタが俄に攻めかゝつて、アゼンスは陷つた。久しくギリシヤの盟主であつた。アゼンスの榮華は、最早、昔の夢となつた。プロタゴラスは國外に放逐された。フィディアスは、反對派の爲に誣ひられて、投獄せられ、牢屋の中で殺された。アリストフアネースは、喜劇の上場を禁じられた。ユーリピディースは、招かれてマケドニヤへ行く事になつた。そしてソクラテスは一人寂しく取り殘された。彼は今は後家さんであるアスパシヤの許へでも行つて、ヘミクリオンに坐して語り明した友人等の昔噺をするより外はなかつた。彼は足繁く通つた。もう、アスパシヤもかなり姥櫻となつてゐた。

ソクラテスは

「先刻ユーリピディースと道で會つて、お別れをしたのですが彼も、いよ〳〵妻妾から別れてマケドニヤへ行くさうです」

アスパシヤは寂しさうに笑つて、

「長生をして、私達は、衰亡の跡を、あき〳〵する程見ましたのね。そして今の僭主等は、市民を殺すばかりですもの」

「それが、あの人達の職業です」

「それでも、軈て平安になるでせうか」

「―セラミカスの棺桶の中でね」

「私は死にたくはありません。唯平安に生きてゐたいと思ひま
すわ」
「奥さん、生活は平安ではありません」
「えゝ、でも、幸福でしたら」
「その幸福と云ふ事が、むづかしい事です」
「えゝ、本當にあなたの様な不仕合せな結婚をなさいますと
ね」
　ソクラテスは歎息して、
「上には上がある。下には下があります。けれど、先づ〱私
の妻などは、最も惡いところなのでせうね。あの人も、若し外
の夫を持つたものなら、もうとつくに、殺すか、殺されるかし
てゐますよ。なにしろ惡人と云ふのではありませんけれど、喧
嘩好きと云ふ事がその血の中に流れてゐるのです。あの人の兄
弟や親も兎角、人と爭ひを好む性格です。無論美點もないので
はないのですがね、喧嘩の相手にさへなつてやりさへすりや、
毎日でも、喧嘩をしますよ。夫とでも、親族とでも、近所の人
とでも、そして家事の事からでも、子供の教育の事からでも、
自分の衣服の事からでも、娯樂の事からでも、嫉妬の事からで
も、すべての方法に喧嘩の材料を求めてゐるものです。」
「かう云ふ時代になれば、全く奥さんが口をおつゝしみになら
ないと、あなたの身の上が危い様に思はれます。」
「えゝ、もうその懸念がないでもないです。あの女は、私を惡
く云ふ事によつて、自分が正しいものとされる様に思ひ込んで
ゐるのです。世界を私と二人きりの世界の様に考へて、何でも
かんでも私を負かしさへすれば、自分が世界の女王になれると
でも考へてゐるらしいのです。」
「随分、あなたを誤解してゐらつしやるやうですのね」
「誤解して惡く云ふ場合もあり、惡く云ふ爲に惡く云ふ場合も
あり、いろ〱です。別れるにも子供があり、まあ不仕合せな
結婚とでも云ふのでせうね」
「あなたの社會的位置と云ふものも、あなたの名譽と云ふもの
も、奥さんはちつとも考へてゐらつしやらないやうですのね」
「さうです。唯本能的に生きてるだけです。夫の社會的位置な
どゝ云ふものは、全く眼中にないのです。」

「然し、外に男を拵へて、主人の顏へ泥を塗ると云ふ人さへありますからね、それを思へば……」

「ですけれど、嫉妬深い事は、決して、貞女の證據にはなりません。却つて、浮氣な女の方が、自分の身に較べて、夫の操行を疑ふものです。」

八

彫刻師ソクラテスは、青年の間に危險思想を鼓吹して、國家の神々を冒瀆すると云ふ罪名のもとに、牢屋へ入れられた。その告發の中に、青年詩人、メリトス。鞣職人アントス及び雄辯家ライコンの名が見えた。

ソクラテスはそれに對して一通りの辯護をした。彼は常に神を信じ、良心の聲を聞いてゐたと云つた。けれども彼は、鴆毒を飲むべく宣告せられて牢に置かれた。細君のクサンチツペは、許されて、牢に會ひに來た。そしてさめ〴〵と泣いた。その時にソクラテスは何時もと少しも變つた樣子もなく平然として語つた。

「泣くな、これはお前の罪ではない」

さう云はれて細君はます〳〵泣いた。

「いゝえ〳〵、私の過でございます。それから子供も連れて參りませうか」

「いや〳〵、無用な暇乞ひなどして、あの軟い子供の心に、痛ましい、傷をつけるには當らない。裏の森へ遊びに連れ出して、面白く遊ばせてやつてくれ」

「あなたが死なうと云ふ時に、私達ばかり、樂んでいゝものでせうか」

「よろしい、私の苦痛が終る事を喜んでくれ。私が名譽の最期を遂げる事を喜んでくれ」

「もう何も望みはございませんか。」

「もうない、唯、お前の悲しい涙と溜息と、騒がしい罵詈から免かれて、平和を得ると云ふ事の外には何も望んではゐない。もう歸れ。ソクラテスは疲れてゐるから唯眠りを求めてゐる。だが又再び活々した、幸福な、若やいだ心持になつて、彼の魂は目さめるだらう。さう思ふがいゝ」

「私はもう前に、何度もその事は、あなたから教はりました」

「うむ、さうか。俺もお前から隨分學んだよ、忍耐と、克己心とを」

「私を宥して下さいますか」

「今更、宥す事は出來ない。もうすでに一度宥してしまつたのだから。私が旅に出ると思つて、さよならと云つて呉れ、だが、私がまた、直に歸つて來ると思つて、またお目にかゝりませうと云つてくれ。」

「では、さよなら、私の事はもう怒らないで下さい」

「怒るものか、私は一度もお前に對して心から怒つた事はないよ」

「では、あなた、これがもうお別れです」

と、クサンチッペは聲を上げて泣いた。ソクラテスは手を振つて、

「あゝこれ〳〵、泣くのではない。機嫌よく笑つて、御機嫌ようと云つてくれ」

「ご――き――げん――よ――う」

「よし〳〵、ではまた會ふな。さうして一緒に子供等を連れて森へ遊びに行かうよ」

クサンチッペはその時しみ〴〵後悔して云つた。

「あゝ、私は見損つてゐました。私の夫は、私が前に考へてゐた様な人でなかつたのでした」

「もう行きなさい、私は眠りたい」

クサンチッペは出て行く時、戸口で、プラトーとクリトーとに出會つた。

ソクラテスは彼等を見て、愉さうに云つた。

「もう時間が來る。早く此方へお這入り」

「先生、そんなに平氣でゐられるのですか」

「眞實の事を云へば、私は全く平氣だ。私は嬉しいとは云はない。然し、私の良心は少しも私を煩はさない」

「先生、最期の時が……」

「最期の時が來ればと云ふのか?、我が愛する友、プラトーよ、私は今丁度、一眠りした。私は川の向側へ行つて來た、私は暫時、不滅の美の原形を見た。それに較べれば、地上のものは總て、その模寫に過ぎない……。私は人類の未來、運命を

見た。私は、力強く、高く、純潔なるものと語つた。私はこの世の大なる混沌を導くところの、賢き秩序を知つた。私は宇宙の底ひ知られぬ秘密の前に、おのゝいた。そして私は、自分の大いなる無智を耻ぢた。プラトーよ、お前は私が見て來たものを書いてくれ。お前は物の適當なる價値に於て、物を評價する様に、畏敬の念を以つて、目に見えぬものを仰ぎ見、美を尊び、徳を養ひ、そして克己、献身（けんしん）の心を實践窮行する事によつて、最期の救ひを望むべく、世の人の子等に教へなさい。」

　こう云ひ終つてソクラテスは、褥の上に横たはつた。

「先生、おかげんが悪いですか」

と、額の廣いプラトーが聞いた。

「いや／＼、今はどこも悪くはない。」

　プラトーは師の顔を覗き込むやうにして、

「先生は最早――」

「うむ、毒盃を仰いだ」

「世の最も賢い人が、今この世を去る」

「人間は誰も賢くはない、唯私はへりくだりと、良心とを私に與へた神々に感謝する」

　牢の中には何の音もしなかつた。

　ソクラテスは死んだ。

（完）





幡隨院長兵衛

新居格

夜ふけて通るは何者ぞ加賀爪甲斐か
泥棒か、さては坂部の三十か

こうした落書がそここの塀や壁に書かれてあつた位寛永の頃には加賀爪甲斐守や坂部三十郎、水野十郎左衛門、近藤登之助なぞ云ふあばれものの手合が旗本の武士にはあつて道行く人に故意にわざと衝き當つては喧嘩をしたり、手向ふものがあると切捨てたりした。神祇組、白柄組、四介六法組、公方の尻押組其他何々が彼等の徒黨の名であつた。が、そうした旗本の狂暴に張合ふ町奴と云ふのが一方にはあつた。そうして幡隨院長兵衛は町奴の頭目として旗本武士から憎惡の贓を投げかけられて居たのであつた。

その對峙は木挽町の芝居小屋での喧嘩となり、吉原仲之町での出遭ひにあらはれ、町奴の贔屓する櫻井五郎藏と旗本庇護の黒鷲勘太夫との相撲一件でます〳〵宿恨を深かめて行つたのである。

或日の午前十時頃、一人の馬に乗つた旗本武士が長兵衛の家を訪ねて水野十郎左衛門が近付きを得たいから明日屋敷に來て貰ひたいと傳えた。長兵衛はいよ〳〵カタストロヒーが來たなと心の中では思つたが、さりとて男を賣る身として卑怯にもことわる事が出來ないので快く承諾した。所が、同じ日の夜には仲間を伴れた六十近かい武士がまたも長兵衛の家の門扉を叩いた。それは等しく水野家の用人で菅野重兵衛だと名乗つた。

長兵衛は懇ろに座敷に招して來意を訊くとどう思つたのか重兵衛は立ち上がつていきなり長兵衛を上座に据え、脇差を鞘

るみ彼の前に投げ出すと共に頭を畳にすりつける計りにしてこう云ふのである。

「さて元締、今朝の使で大方、樣子もお察しでせう。相撲の遺恨で元締を明日お招き申し大勢の手を借りてあなたを討たうと云ふ主人の魂膽、それを知つて私は主人に意見を致しましたが更にお聞入れにはなりません。それにお親類の近藤樣や兼松樣は諫めて下さるどころか一緒になつてお遣りにならうと云ふ量見。私は御先代の仰付けで主人の御幼少から今日まで始終お側について居りましたし、御先代がお病死にも不束な私を枕元に呼寄せられての呉々の御頼み、悴は短氣で事を過まる。重兵衛**お前は側に居て悴に心得違ひがあつたなら遠慮なく意見をして呉れろ。水野の家名は悴には遣らぬ。お前に預ける**との御遺言かしこまりました、重兵衛及ばずながら身に代えてお引受致しますと申上げたのでお座います。所が、子を見ること親に若かずと申す通り、主人の御氣象はあの通り、でも家來の御手討位なら内輪でも濟みませうが明日、元締をお招きしてお一命を絶つたと云ふ事にでもなりますと子分衆が江戸市中にどれ丈あるか分らぬ元締、それが頭立つた人達のお指圖で水野の屋敷に切込んで血で血を洗ふやうになりますとたとひ主人は其時は助かつても切腹は必定、次第によれば安城以來の水野家の家名が斷絶いたします。それでは私が御先代にも濟まない譯、夜中にお邪魔を致しましたは元締の義俠を見込んでの御願ひです。こゝの道理を聞分けられ水野の家名を不憫に思召してどうか一時の間、江戸表を立退いて居ては下さるまいか、そのうちに主人の怒りも自然に薄らぎ萬事がまるく納まりませう。元締のお氣象として一旦男が約束をしたからには水火も辭しない、行かなければならないとお思付すのもお無理ではございませんが、どうあつても行くと仰言るなら何卒かこの場で重兵衛の首を門出の血祭にして頂きたい」

長兵衛はこの老いたる用人が主家を思ふて涙ながらした長物語に誠意の輝きを見て心がほだされない譯にはゆかなかつた。そして卑怯だと笑らうなら笑つてもいゝ。自分は一先づその誠意を受け入れるより外はないと考えた。「よろしうございます。萬年生きるも三つ兒で死ぬも持つて生れた定業と明日は水野樣

のお屋敷で元より生命は捨てる覺悟と決めては居ましたが、何ぼわからぬ長兵衛でも事を分けてのお頼みをそれでも嫌だとは申し兼ねます。なあに、私が默つて笑はれて居さえすりや、それで濟む事、長兵衛しかと引受けました」

「それを承つて辛つと安堵が出來ました」

こう云つて重兵衛は心を明るくして歸つて行つた。

翌日、長兵衛は唐犬權兵衛、夢の市兵衛を初め頭立つた人達を招き事の成行を話し留守中の萬事を賴んだ。そして家重代の彥四郎貞宗の一刀を差し半合羽、菅の笠と云ふ旅裝をして海道筋の各所〳〵を樂みながら大阪へ行く事にしたのである。

大阪へ來た長兵衛は不圖した事の行き違ひから、土地の俠客朝日奈藤兵衛と果し合ひを初めたが、百年目長兵衛の仲裁で丸く納まり却つて藤兵衛と親密な間柄となつた計りか、小喧嘩五郎吉、帆柱の伊之助、伊達の小六なぞと云ふ土地の親分株とも直ぐ懇意になり、そうした顏役達の世話で道頓堀河岸の九郎右衛門町に小薩張した家を借りることになつた。

そして土地の俠客たちは每日のやうに訪ねて來たり大阪の名所〳〵を案内したり雨の降る日なぞは賑やかな酒宴をして他郷に居る長兵衛の旅情を慰めて與れるのを長兵衛は心から感謝して暮らしてゐた。時には大和巡りをして奈良や三笠山の風光に親しんだり、播摩路の方面へ出掛けては須磨や明石の海景を賞したりして氣散しな悠揚たる生活を過ごす事も出來た。

或日、長兵衛が九郎右エ門町の寓居で江戸の事取分け、自分の留守中は間違ひのないやうに輕挙を戒しめて置いたが、巧く遣つて居て與れるかしら、なぞと考えつゝあつた時朝日奈藤兵衛が訪ねて來た。

「ねえ、江戸の兄貴、今日は兄貴に相談があつてやつて來たんだ。實はとつくから話そうと思つて居たんだ。話と云ふは外でもねえ。兄貴もこうして當分の間にしろこちらに居なさるからにや野郎計りぢや兎角お世話が行屆くめえ。それについてあの梅野だ、がとくから兄貴を慕つて居て江戸の親分〳〵と俺等にそれとなく謎をかける、あの女なら器量はよしそれに氣立も優

にしたが[illegible]的眼に[illegible]
居て色白で、顏なら姿なら一際目立つた梅野の美しい幻影は長
兵衛の心に妙に絡はつて來るのを否定は出來なかつた。幡隨院
兵衛（——

門前の口入稼業伊勢屋清兵衛の後を引受けて大名屋敷に出入り
をするやうになつてから元のお主人櫻井庄右衛門殿の御執成も
あつたにせよ、隨分と忙がしい生活のうちに世間に顏が賣れ出
すと兎角氣[illegible]かし[illegible]長兵衛との喧嘩は益々長兵
衛の噂を高めに行くと共に法華の身内の庵崎の小平、揺場の

事となつたので長兵衛の配慮は益々休みなきものとな
た。彼の若き日は戀愛を空しくして過ごして來たと云
なさがこうして大阪へ來て今迄にないのんびりした生
するやうになつて三十五を過ぎた中年期に目覺る
られたのではないか、まして梅野は二度から三度
度と座敷へ呼ぶ度毎に長兵衛の最初の印象は深か
[illegible]
れ弱められない事件を見逃かす[illegible]

熱はいくらかさめて行くにしも、それは一時の沈靜でこの後とも旗本との衝突は、この長兵衛の生き永らへてゐる間消えない計りか早晩再演される運命にあることは明かである。さすれば大阪滯在中はしばし目睡な甘美の夢として、自分に惠まれた又とない幸福ではあるまいか、こうした考えが電光よりも疾やく長兵衛の心を掠すめて行つた。

藤兵衛の親切を辭退はしてみようとするのは本當は間違つてゐるのかも知れない。そうだ、それは慥かに間違つてゐると決心が出來たとき、彼は明るい氣持を感じながら云つた。

「それぢや、梅野の事は萬事こんたの御心任せに致しやせう」

梅野がお座敷に出るを止して九郎右衛門町の長兵衛の住家に意氣な姿を見せたのはそれから多く日數を經てはゐなかつた。

長兵衛の家には毎日のやうに大勢が遊びに來て江戸の話を聽いたり、浮世譚を仕合つたらするので、長兵衛は龍宮に行つた浦島太郎のやうに面白可笑しい日が送れたのである。

春雪のまどろみは醒まされねばならなかつた。或る日のこと、丁度、朝比奈藤兵衛、帆柱の伊之助、喧嘩屋の五郎吉なぞが、例のやうに九郎右衛門町の家に集つて酒を酌交しながら、長兵衛を圍んで談笑して居た時、思ひがけずも尼崎の小平がこの玄關に姿を見せた。それは元締代理として長兵衛の留守居をして居た、枝の仁兵衛が飯田町に圍つてある妾お文の處から夜ふけての歸り路、組橋の所へ來ると黑頭巾で覆面した水野の家來廿人計りに待伏せられて膾のやうに慘殺されたと云ふ凶報を齎らしたのである。小平が一伍四什を話し終つた後に皆んなは直ぐにも水野の屋敷へ切り込まうと云つたのだが、阪本の夢の兄哥が相手の逃げる譯ではなし、大阪に居る親分の許へ早速知らせなきあならないと云ふのでこうしてわつちが遣つて參りましたと譯を話すのであつた。「それぢや斯うして居られねえそんなら小平一緒に江戸に歸るとしやう」

と長兵衛は云つた。居合はす面々もそのいきさつを聞いて是非江戸に同道したいと申出たが長兵衛はそれを斷つ、ていよいよ大阪に出立することとなり在阪中、交際つてゐた人達には少し面倒な用が起つて一度歸らねばならなくなつた、逗留中はい

ろ〳〵お厄介になりましたと其日のうち暇乞ひして、夜小平をつれて家に歸つたが梅野の事を思ふとさすがに見果てぬ夢を思ひ出さずには居られなかつた。けれども長兵衛は決心した。旗本の連中はしつこくも自分の生命を欲しがるのだ。二つの階級は妥協の餘地のあるべきでない事を知つた。殘されたものは階級戰の開始のみだ。」とこう思つた。暴力に對する暴力の倫理を長兵衛は肯定しない譯には行かなかつた。水野の用人管野重兵衛が涙ながらの懇願故、一旦江戸を立退いては見たがそうした姑息の手段が少しも役立つものでない事がハッキリと分つて來た。もう敢然として驀進するより外はないのだ。疾くから生命は捨てる覺悟でゐたのだから、自分の生命は旗本の前に投捨てやう、しかしそうした生命が決して無駄にはならない事をも確信が出來るのであつた。いや、自分が死ぬるによつて町奴の階級意識は更に〳〵に深かめられやう。このことは水野の家が潰れる機縁を造るのであらねばならぬ。で、こうした感情を抱いた長兵衛は江戸に歸ると直ぐその由を唐犬を初め身内の人々に知らせたので彼等は何れも長兵衛の屋敷に集まつた。

一同が揃つたと思つた時彼は口を開いた。

「時に、長兵衛の留守中は唐犬を初め一同の骨折で稼業の方も滯りなくやつて呉れたことに對して御禮を云ふ。枝の仁兵衛の出來事も小平から詳しく聞いたがもうこの俺もこれ以上に我慢は出來ない。水野の屋敷に斬込む事にしやう」とキッパリした決意ある聲明をした。

一同は喜んだ。今迄割合に無抵抗主義を執つてゐた元締の長だから、何とか異見をするか若しかすると叱言でも云やしないかと迄思つてゐた一同の想像外に出て敢然として火蓋を切らうと斷言したのであるから、血氣の一同が小踊りする程喜んだのも無理はなかつた。

長兵衛は更に言葉を續けた。

「それにしちやお互にこれまで八百八町に顔を賣つて來た俺等だ。水野の屋敷を始めとして諸方の旗本屋敷へ斬込むと云ふ話らにや思ひ〳〵の支度ぢや氣がきかねえ、愈々切込むのは明日の夜としてそれ迄に揃いの着物をこさえやう。其の揃衣も知らせ後へ殘る物、後で町奴が旗本屋敷へ斬込んだ時こうした着

度をしてゐたと人に笑はれたくはねえから、揃衣高端はこの俺に任せて呉れ、俺はそうと大丸へ往つて見計つて大急ぎに誂えて來ようから」と一同に申渡した。そして明日の晩は最後の晩餐、明後日には斬込むとして明日の夕方來て貰いたい。俺は二三の友達に他所ながらの暇乞やら、歸つて來た禮廻りを今夜のうちにしやうと思ふと云ふので「尤もだ、それぢや何事も明日の晩と」その日はそれ〲家に歸つて行つた。

一同が歸つて行くと長兵衞は支度を直し貞宗の一刀を帶してこつそり外出した。それは丸の内に屋敷のある本多中務太夫の家來で同時に長兵衞の恩人である櫻井庄右衞門を訪ねるためであつた。

長兵衞は先代庄右衞門のために十二才の春、宇多川町の八百屋久兵衞の所から屋敷に引取られて同年生れの當主幼名庄太郎と一緒に可愛がれて養はれたのであつた。常平と云ふ名の下に仲間のやうになつて居たが、十六才の時から庄太郎に附いて白山御殿下れ道場のある石川軍刀齋巖流先生の許に通つたものであつた。後に口入稼業をやるやうになつても先代庄右衞門からどれ丈取持をされたかは長兵衞の感謝して居た所である。が當主は當主で何しろ同じ生れの十二の年から兄弟のやうに親しんで來た庄太郎、長兵衞が何處よりも眞先きに櫻井屋敷へ訪づれたのは當然であつた。

長兵衞の來訪を聞いた庄右衞門は心から喜んで云つた。

「おゝ、長兵衞歸つたか、長らく江戸表を立退いて上方へ行つて居たと云ふが、上方よりは何と云つても江戸に限ぎる、何うか江戸で花を咲かしてゐて貰ひたいものだ」

「有難うお坐います。何しろ永らくお無沙汰勝で居りました。やつと歸つて參りましたが、又還國へ出かけなくちやなりません。で、密談があつて伺ひました」

庄右衞門は意外の言葉に只事でないと察し、近侍を遠ざけて長兵衞のみと對坐することにした。

「還國とは中國か九州か」

「えゝずつと先きでございます。西方は西方です、十萬億土の冥途の道に」

「何と申す、冥途へ行く……」
「はい、それでお暇乞に參つたのでございます」
こうして長兵衛は事の成行を詳しく物語るのである。
庄右衛門は兄弟のやうに思ふて居る長兵衛の悲痛な運命に胸を打たれた。そして若い頃黄昏の灯に親しんで吉原は仲之町三浦屋の花魁高窓大夫と馴染を重さねお互ひに惚れ合つた青春の美しい回想が急に蘇生つて來たと共にあの時、法華長兵衛に難題を持ちかけられて困惑してゐたのを救ふて呉れたのは幡隨院元締、自分こそ長兵衛に恩があることを思ふた。これが最後の夜となるのかと思ふと、夜を徹してあくまで物語らねばならないと考えたのであつた。
「只今、酒の用意をさせるから盃を擧げて今宵は終夜話し明そう」
「私もそう存じまして家を出ました。では緩くりさせて頂きませう」
酒はあれど兎角にしめやかになり勝になり、初夏の夜は明け易すかつた。

朝――最後の朝の太陽は鮮やかに晴れた空に輝やいて爽やかな朝風は若葉の上をさら／＼と流れてゐた。
三十六年の生涯は短かいと云えば短かいかも知れないが、何時までぐうだらに生きて居た所で詰らない。いま、犠牲になつて、氣元滿ちた壯年時代を玉と碎くのは男の中の男一匹、と人に立てられた長兵衛に取つて決して惜いものではないのだ。それ許りかこの一個の長兵衛の存在が長らくの間水野を初め旗本の一團の目の上の瘤となつたかと思ふてむしろ痛快な氣持がした。
「天地は新綠に燃えて居る。躑躅のやうな鮮紅の血を流すのにはいゝ時だ」と彼は思つた。
そこで庄右衛門が盃を遣はすと云つて手渡した冷水の滿々とした水盃を氣持よく飲み、庄右衛門から秘藏の水田國重の刀を貰ひ受け甲斐／＼しくいでたちして街に出た。先づ水野の用人菅野重兵衛を訪ねて約束の取消を申出で。そこでも別れの盃をして午前十時水野の屋敷の玄關に立つた。そして
「お頼みします」
と案内を乞ふたのである。

（終り）



火つけ彦七

伊藤野枝

一

今から廿年ばかり前に、北九州の或村はづれに一人の年老つた乞食が、行き倒れてゐました。風雨に曝され垢にまみれたその皮膚は無氣味な、ひからびた色をして、肉が落ちてとがり切つた骨を覆ふてゐました。砂ぼこりにまみれたその白髪の蓬々としたひたいの下の奥の方に氣味の惡い眼がギヨロリと光つてゐました。

行き倒れの傍を取り卷いた子供達はその氣味の惡い眼光に出遭ふと皆んな散り／＼に逃げてしまひました。が、子供達が、その日暮方の暫くの明るさの中を外で遊んでゐますと、其處にさつきの乞食が、長い竹杖にすがつてよろ／＼しながら歩いて來たのでした。子供等は、また氣味惡さうに一と處によりそつて乞食を通しましたが、やがてそのよぼ／＼した後姿を見ると、ぞろ／＼後へついてゆきました。

乞食は、村にはいつて街道を少し行くと左側にある森の中にはいつてゆきました。其處は此の村の鎭守なのです。子供等は其處までついてゆきますと、木立の暗いのと乞食が再び後をふり向いた恐ろしさに、一目散に逃げてかへりました。

次ぎの日、子供達は昨日の乞食の事などは忘れて、お宮の前の廣場で遊ばうとしていつものやうに、その森の中にはいつてゆきました。すると昨日の乞食がお宮の石段に腰を下ろしてそのやせた膝を抱いて白髪の下から例の氣味の惡い眼を光らして子供達を睨み据ゑました。子供等は思ひがけない邪魔にびつくりして外の遊び場所をさがすために、お宮から逃げ出しました。

しかし、夕方になると、彼れ等はあの乞食の事を忘れられませんでした。其處で皆んなは、若しも恐い事があつて、逃げるときに、逃げ後れるものがないやうに、めい／＼の帶をしつかりつかみあつて、お宮の森をのぞきに出かけました。

今度子供達の眼にまつさきに見えたのは、お宮の森で一番大きな楠の古木の根本に盛んに燃えてゐる火でした。そしてその

次ぎに見えたのは、その眞赤な火の色がうつつて何んとも云へない物凄い顏をしたあの乞食でした。

『ワツ！

子供達は今日は何うしたのか悲鳴をあげてめい〳〵につかまへられてゐる帶際の友達の手を振りもぎつて、馳け出して來ました。

丁度、其處を通り合はせたのは、村の巡査でした。子供達が眞青になつて、逃げ後れたのは泣きながらお宮を飛び出して來たので、巡査はいそいで、お宮にはいつて行つたのです。子供達は巡査がはいつて行くと、しばらく通りに一とかたまりになつて立つてゐましたが。やがて巡査が、お宮の傍の家の裏で働いてゐる男に聲をかけるのを聞きました。

『おうい、爲さん！水を持つて來てくれ、桶に一杯！』

巡査はさうどなりながら、爲さんの家の方へ近づいてゆきました。爲さんが水桶をさげてお宮にゆくのを見ると子供等はまたゾロ〳〵暗くなつたお宮の境内にいつてゆきました。

『誰もろくにきかん癖にかう火を燃いて、あぶなくつて仕様がない。』

などゝ、二人は話しながらシュウ〳〵と音をさせて、火に水を注いで消しました。

『斯んな乞食は何をするか知れたもんぢやありませんよ、追つぱらつてしまひませう。爲さんは口を尖らして巡査を煽動します。

『何に、俺もさう思つたが、まるでダタ〳〵で、動かないんだ、今からおつぱらつてもどうせ何處までも行きやしないから、今夜は勘辯しておいて、明日の朝追立てる事にしよう』

巡査は仕方がなささうに笑ひながら、爲さんと一緒に引きかへしました。子供等もゾロ〳〵家へかへりました。

其の晩、此の邊には滅多にあつた事もない火事がありました。老人達は二十年目だとか二十五年目だとか云つてさはぎました。火を出したのは、村の眞中頃にある荒物屋で、台所から火が出たらしいのです。大きな藁屋根ですから一とたまりもなく燒け落ち、その並びに隣り合つて建つてゐる三軒がまたゝく間に燒けてしまつたのです。そして四軒目に火がうつつたときに、やつと消防手の手で消されたのでした。

しかし、珍らしい火事沙汰で、その夜から翌日まで、村中がひつくり返るやうな騷ぎだつたのです。そして翌晩はさはぎつかれて皆んな寢てしまひました。

すると、續いて又、昨晩の火事の場所から一町半ばかり東よ

りの村で、一番賑かな通りにある居酒屋と隣りの床屋とが、同時に燒け出しました。

『火事だつ!』

パタ〳〵騷ぐので、起き出した方々の家ではびつくりしてしまつたのです。火事が大變だと云ふ事よりも昨夜と今夜が、まづ皆を驚かしたのです。今度は二軒とあと兩方にわかれて一軒づゝ燒けました。そして、その火が消えかけた時に、その火事場の向ふ裏にある百姓屋の納屋がどん〳〵燃えてゐたのです。

明かに放火だと云ふ事は分りました。しかし、あまり思ひがけない火事に、村の老人等は色を失つてしまつたのもあります。

翌朝、町の警察から五六人も巡査が來るやら、何かえらさうな人達が火事跡に來てウロ〳〵見まはつたりして、村中が何となく殺氣だつて來ました。

『つけ火だ、つけ火だ。』

と皆んな云ひながら、犯人の見當はまるでつかないのでした。巡査や刑事達は村人の誰彼を捉へてはいろんな事を尋ねました。しかしさうなると、皆んな自分の云つた言葉の結果がどんな事になるかしれないと云ふ、不安と恐怖で、だれも、巡査達とはか〳〵しい口をきく事はなかつたのでした。

二晩つゞけての火事におびえた村では、多だけにする火の番をはじめました。そして二時間位に一度づゝ村中を見まはる事にしました。

二

三晩は何事もなくすぎました。村人達は、時はづれの火の番が馬鹿々々しくなつて來ました。

『二た晩つゞけて火事があつたからつて急に火の番をしたつて、さう幾度もつけ火をする奴もないだらうから、何だかつけた奴が見ると馬鹿氣てるに違ひないと俺は思ふよ。』

『さうさ、さうまたつゞけて燒かれてたまるものかい。』

四晩目にはそんな不平がましい口をきゝながらほんのお役目に通りを一とまはりして來たのだ。

處がどうでせう!彼等が、西の端の番小屋に歸つて一服してゐますと、急に騷々しくなつて來ました。番の人達がびつくりして外に出て見ますと、たつた今、自分達の見て來たばかりの、東の方に火の手が高くあがつて盛んに火の子を降らしてゐるのです。

『アーツ』

と云ふなり一人の老人は腰をぬかしてしまひました。

他の人々が、騷ぎ出して大勢で馳けつけた時には、燒けた床

屋の丁度向ふにある小さな駄菓子屋が燒けてゐるのでした。

　しかし、此度は夜明前に、此の村を騷がせた放火の犯人はつかまつたのです。丁度其の夜、隣り村から或る家の不幸を知らせに村へ來た二人連れの人達が、村にはいらぬうちに火の手が見えるので、急いで來かゝる途中、村はづれの共同墓地の邊に來ると、影のような人間が、向ふから來かゝつたが、自分等の姿を見ると、急いで墓場の中へはいつた、と云ふ話をしたのです。集まつた消防手連中が早速墓場へ馳けつけて、さがして見たのですが一向分りませんでした。

　東が白んで來る時分に、さがしあぐねた連中が、ボツ／＼歸りかけて、フト氣がついたのは、墓場のそばの共同の葬式道具を入れておく小屋でした。

　二三人で其の戸を引きあけて見ますと、案の定其處に痩せさらばつた一人の男がうづくまつてゐたのです。彼等はそれを見つけるとカツとなつて、ろくに腰もたゝないまゝの老爺を往來まで引きずり出して來ました。そして皆んなで顔を覗いて見ましたが、それは見知らない、汚い乞食でした。

　彼れ等は、一度はガツカリしましたものゝ思ひ起して此の乞食を引き立てゝ來ました。そしてその乞食の姿を見た巡査はブカ／＼傍によつて行きました。もううすら明るくなつてゐるのでしたが、さしつけられた提灯のあかりにその乞食の顔がハツキリ照らし出されました。彼れは三四日前に村にはいつて來た乞食でありました。

　晝頃になつて、その乞食が、三回に渉る放火犯人だと云ふ事と同時に、此の村や、其他近在を充分に驚かし得るような事の内容が、村の人達の間に傳はりました。

　此の乞食は、其村の片隅にある特殊部落の××原と云ふ處に生れた彥七と云ふ男でした。彼は、其の生れた處からは何十年と云ふ間行衛不明になつてゐたのでした。それで、其の村でも彥七の家と關係のあるものか、年老連中でなければ彥七を記憶してゐる者はない位なのでした。

　彼れの生れた部落でも、或時は、彼れがすばらしい金持になつて或る處に豪者な暮らしをしてゐるのだ、と傳はり、或時は彼れは博徒の中にはいつて、すばらしい喧嘩をして監獄に行つてゐると傳はりました。しかし實際どうなつてゐるか確かな事は分らなかつたのです。

　處が、三十年と云ふ長い月日が經つてから人々に忘れられた時、彼れは見る影もない乞食姿になつて祖先の墓を故郷に尋

び、さうして放火犯人として捕へられたのでした。しかも彼れは、放火犯として、前科二犯も持つてゐる放火狂なのでした。しかもなを彼れは、息の根が絕えるまでは、此の火をもつての呪ひを止めないと云つてゐると云ふのです。

三

『穢多ん坊！穢多ん坊！』

彥七は小さい時からさう云つて村の子供等から、自分等部落の者が卑しめられるのが心外で仕方がありませんでした。

自分達には何處と云つてちがつてゐる處もなければ、村の奴等の世話になつて生きてゐる譯でもないのに、何故村の奴等は俺達を馬鹿にするのだらう、口惜しいな、と始終考へつめてゐました。そして彼れは其の友達と何時もその事ばかり話してゐました。

だん／＼大きくなるにつれて、彥七はさうして村人達に卑しめられるのが、譯もなく口惜しく、馬鹿々々しいと云ふ氣持がます／＼激しくなつて來ました。さうして、遂に或る時、自分の家をぬけ出して、城下町に行きました。其處でなら、誰にも卑しめられずに、愉快に働く事が出來るにちがひないと考へたからでした。

處が彼れは、町に一人の知るべもありませんので、仕事もなか／＼見つかりません。彼れは二三日足を棒にして仕事をさがしまはりましたが、奉公人を置きたいと云ふ家でも、誰れか、知人か親類の者でも一緒に賴まなければ、使はないと云ふのです。

それでも、數日してから、町はづれの瓦燒き場の火を燃す仕事にありつけました。其のとき、彼れは十六でした。生れてはじめて、彼れは其のときに普通の人間として他の職人達と交際が出來たのです。

彥七は、それは可なり激しい勞働だつたのですが一生懸命に働きました。彼れは湯にも他の人間と一緒にはいり、食事も一緒にし、他のどの人間とも區別なく、枕を並べて眠りました。彥七が自分の部落で話しに聞いたり見たりしたように、人間としては到底忍べないような侮辱を受ける事はありませんでした。彼れは村を出るときに考へたとほりに氣持よく一年ばかりを働くことが出來たのでした。

或る日、彥七は若い職人の一人に誘はれてお祭りを見に町の方へ出かけてゆきました。二人が、もう少しで、お祭りの雜踏の中にはいらうと云ふ處で二三人の若い男が向ふから來て、彥七の顏を見て何か頷き合ふと、一ぺんすれちがつたのを、またわざ／＼引きかへして、彥七のそばをすりぬけて前へ出るとそ

の中の一人が、彼れを呼びかけました。

『こら！彦七！誰も知つてるものがないと思つて、いやに生意氣な面をしてゐるな。穢多の分際で、あんまり大巾にこんな處を押しまはすと承知しないぞ。こんな處、貴様みたいな畜生がウロ〳〵する處ぢやないや。』

彦七は自分の名前を呼ばれた時に、ハツとしました。その連れは、自分もよく顔を知つてゐる村の者達で、やはりその町に奉公に來てゐる連中でした。

穢多畜生、と云ふ言葉を聞くと彼れはカツとしてしまひました。彼れは物をも云はずにその連れに打つてかゝりました。相手はびつくりして身を引きましたが、然し彼れが自分等に反抗して來るのだと知ると彼等も一とかたまりになつて、彦七に立ち向いました。彦七は、何時の間にかぬいて手に持つた下駄で、相手の横ツ面を手ひどく打ちました。

『アツ』

相手が其處に手を當てゝ身をそらすと一緒にまたもう一と打ち續けて打たうとした時に彼れは足を拂はれて横ざまに倒れました。と同時に體中の、彼方も此方も用捨なくこぶしが當てられ下駄に踏みにぢられるのでした。彼れは、彼れ等を取り卷く群集のさはぐのを耳にしながら口惜し涙をながしてゐるのでした。そして彼れは起き上ると、砂まみれ、血まみれになつた顔を引きつらせて群集の中を突きぬけて、一刻も早く町外れの瓦屋の方へ歸つて行かうとしました。彼れが、漸くその家の近くまで行つた時に、まだ彼れを追つかけて來た一團がありました。

『かりにも友達が貴様のやうな穢多に疵つけられたのを其の儘にして置くことが出來るものか。』

彼れ等は、さう云つてよろ〳〵してゐる彼れをまた〳〵散々になぐり飛ばし、蹴とばして、彼れが虫の息になるまでいぢめぬいて引き上げて行きました。

彦七は遁ぶ事も出來ないで、瓦屋近くの藪のそばで、一と晩呻きとほしてゐたのでした。

あくる朝、近所の人がその慘めな姿を見つけて瓦屋へ知らせました。しかし瓦屋では彼れの穢多であることを知つたので、もう親切に扱はうとはしませんでした。昨日までは仲よくしてくれた二三人の職人が、一枚のムシロをもつて來て、何か汚い者をいぢるように、彦七の體をムシロの上にころがしのせて、三人でそのムシロを引きずつて、瓦屋の裏口の納屋の軒に置きつぱなしにして仕事場にはいつてしまひました。

彦七は、昨日までの友達が一と言も慰さめてもくれず、水一

杯持つて來てくれないのを恨むよりは、死にかけた犬つころのように納屋の前の大地に敷いたムシロの上にころがされた自分の身が情なさに、また新しい涙をボロ〳〵と流しました。穢多と云ふものは斯んな犬猫のやうな扱ひをするのを他の者共は當り前にしてゐるのだ。俺が、あの部落にさへ生れて來なかつたら、昨夜のような目に遇ふ事もなし、またこんな扱ひを受ける事もないのだ。何故俺はあんな村に生れたのだ？だがあの村に何の因縁があれば、其處で生れた者が迫害されねばならないのだ。……、彦七はガン〳〵鳴る頭の中で繰り返し繰り返しそんな事を考へてゐるのでした。

四

さうした惨めな彦七の體を、七月頃の暑い陽が、遠慮なく照りつけて、一層彦七の苦惱を増さすのでした。納屋の前を折々通りかゝる人達はみんな、其處にころがされてゐる彦七を汚いものでも見るように横目で睨んで通りながら『ペッ』と唾を吐いたり、わざわざ近づいて、その醜く腫れ上つた汚い顔を嘲り氣味に覗き込んでゆくばかりで誰一人聲をかけるものもないのでした。

彼れは恥と怒りでそのたびに體をピク〳〵させながら、何うかしてこんな處からのがれようと思ひました。けれども彼れは昨夜から咽喉がピリ〳〵する程かはいてゐるのに水のある處まで行くことはおろか、少し動かしてもたまらない程いたむ體をもてあつかつてその、のどかはきの苦しみと體のいたさとを我慢しなければならなかつたのです。

しかしひる頃になりますと、彦七はもう我慢がなりませんでした。

『死んでもいゝ、死んでもいゝから、こんな處は出かけよう。そして村へかへるのだ。そうして、今に見ろ、何かで仇うちをしないでおくものか。此の恥と苦しみをこれから出來るだけ貴様達に脊負はしてやるぞ。』

彼れは、非常な決心で、その體を少しづつ起しました。しかし、起した體は激しい痛みの爲めに直ぐくづをれるようにべたりと落ちるのでした。それでも彼れは恐ろしい我慢でとう〳〵起ちました。そうして、彼れは一足々々にこたへる痛さを堪へる爲めに全精力を集中させたように物凄い上づつた眼を据ゑてソロ〳〵と歩き出しました。

納屋の前から四五間歩きますと、井戸は右の方にまた五六間行つた處にあるのです。彦七は井戸端まで眞直に歩いて行きました。廣い瓦干場にも誰も人の影は見えませんでした。井戸端まで辿りつきますと、彦七はホッとして、痛む手をさしのべ

て、其處に据えた水がめにつけたひしやくをかはき切つた唇につけやうとした時でした。

『まあ汚い！お前なんかの唇つけられてたまるものかい。』

頓狂な聲を出して臺所から下女が飛び出して來て、其の太い手で、彦七の手からひしやくをもぎとりました。彦七の體は怒りの爲めにブル／＼震えました。彼れはそのカサ／＼にひからびた唇を嚙んで燃えるやうな眼で下女の眞赤にふくらんだ顔を睨みつけました。

『おゝ恐い。そんな眼をして、化けて出られちや大變だから、水くらいならタントおあがんなさいだ！ホラ、あすこにお前さんのお茶碗がありますからさ、あれでどつさりおあがんなさい！』

彼女は臺所の入口の敷居際の土の上に棄ててある、昨日まで彼れが使つた茶碗やお椀を指さして、憎々しくさう云ふと、此度は臺所のまどから顔を出してゐるもう一人の朋輩と顔を見合はせて笑ひながら、

『穢多ごろつてものは執念ぶかいつてから恨まれると大變だ。おむすびでも施してやるかねお松さん。』

『ふゝゝゝ』

彼れは棄てられた茶碗をぢつと見ました。こみ上げて來る涙をのみ込みながら唇をふるはせて、そろり／＼その茶碗をとりに行きました。そして生ぬるいかめの中の日向水を息もつかずに、續け様に五六杯も飲んだのでした。

今の今まで、責めさいなんでゐた渴きが癒やされると、彦七はがつかりして其處に倒れようとしました。しかし、ボーツとしかけた意識を漸く取り直して、自分が一年間寢とまりした職人の爲めの長屋の方に歩いて行きました。

彦七が漸々其の長屋の前まで歩いて來ました時に後ろから瓦屋の隱居が聲をかけました。

『彦七、ひどい目に遇つたさうだな。まあそれもお前が先きに手を出すと云ふ法はないのだから仕方がない。家でも、お前の體が不自由なのを見かけて云ふようで濟まんが、お前の身分を知らなかつたからこそ、今日まで使つたようなもの〻分つて見れば、皆と一緒に置くわけにも行かず、殊にお前の仕事は火を燃くことで、これは一番清淨な者のやらねばならん仕事だし、體が動くなら、今日限りで家へ歸つて貰ひたい。昨日まで預りになつてゐる分の金は此處に置くから——』

隱居は自分の云ひたい事だけさつさと云つて、手に渡して、るのもけがらはしいと云ふやうに、持つてゐた紙包を入口の敷居の上に乘せて母屋の方に引き返して行つてしまひました。

彦七はその敷居の上の金包をぢつと見つめて立つてゐました。そしてその眼を屋内にやりますと、僅かばかしの彼れの持物が、職人等の下駄を片よせた土間の隅に放り出してあつたのです。

　彼れは復讐心に燃えながら疵ついた體を故里に運びました。彼れの兩親や兄弟は彼れを大事にいたはつてやりました。彼れは引つつれたやうな顏をして、長い間ぢつとこれから先きの自分の生活を撰んでゐました。そして何んの罪もない自分を、死ぬ目に遇はした世間の奴等の仇になつて、どうすれば一番彼れ等を苦しめる事が出來るかを一生懸命に考へました。

　やがて、健康の回復した彼れは、驚くばかりに働き出しました。彼れは一體あまり口數をきかぬ人間でしたが、それが輪をかけただまりやになつてしまひました。そして、一日中或は一年中のどの時間でも無駄に過ごす時間と云つてはありませんでした。

　彦七の家は部落でも暮らし向きはいゝ方で六七反の田畑はみんな自分のものなのでした。彦七は兩親や兄弟をたすけて、激しい百姓仕事を二人前も働きました。そしてひま〳〵にはわらじをつくる草履をつくる、繩をなふその外、何にかぎらず、金になる仕事ならば何んでもしたのです。盆だ正月だと、他人の休む日でも、彼れは一時間も怠けませんでした。たゞ默々として働きました。

五

　彼れが廿歳の秋の收穫がすむと直ぐ、彼れは、兩親の家の傍に小さな堀立小屋を自分ひとりの手で建てました。それは普通の農家の馬小屋よりも小さく、見苦しいものでした。彼れはだまつてそれを建てて、だまつて自分ひとりだけ、其の大地の上に並べた板の上に蒲團を敷いて寢ました。勿論食事も自分ひとりでしました。他の家の者よりも、彼れ一家の者が此のだんまりの仕事に先づ驚きました。

　いろいろな質問や反對に對しても彼はたゞ默つてゐました。部落では、彼れの變人だと云ふ事をば知つてゐますので、別に驚きはしませんでしたが、親の家を離れて一戸を構へたものが當然しなければならない、部落の交際を彼れが斷つたのに對しては非常な批難がありました。しかし、そんな事には耳も傾けずに、彼れは平氣で、どんな慣習でも禮儀でも容赦なく無視して、たゞ働くのに夢中でした。

　たつた一つ、彼れの樂しみらしいのは、何處から連れて來たのか、一匹の小さな犬でした。彼れは、此の犬を少しも放した事はありませんでした。犬と一緒にだけ食べ、犬と一緒に寢、

そして犬と一緒に話し、犬と一緒に歩くのでした。

晝間は彼れ自分の借りた田に出て働くか、山に枯枝を集めにゆくか、畑に出るか、とにかくうすら明るくなつた早朝から眞暗に暮れてしまふまで外で働いてゐます。そして夜になつて晩飯をすますと、土器の中に少しばかりの種油を注いで細い燈心をかきたてながら、たゞ手許だけがボンヤリする位な明るさの中で、藁をうつて草履やわらじや、繩をつくるのでした。そして彼れは手をせはしなく動かしながら、何かボツ／＼一緒にうづくまつてゐる犬に話しかけてゐるのでした。

彦七が、どの位金を溜めたらうと云ふ事は部落中のものが始終氣にして話し合ふ事でした。しかし、誰れも見當のつくものはゐませんでした。

彼れは殆んど三人前の働きをして、その利益をみんなおさめてゐたのです。そして彼の食物は玄米でした。彼れは調味料として僅かばかりな鹽を父親の家から分けて貰つてゐました。畑のものもろくに彼れは口に入れてはゐない様子でした。彼れは、決して自分で買物に出かけないのでした。そして他人に賴んで買つて貰ふゝのは僅かばかりの種油と燈心だけでした。

彼れは夜になると蒲團にはいつて寢ましたが晝間はどんな場合でも汚くよごれた仕事着を着てゐました。何年かの間盆が來ようが正月が來ようがそれで通しました。彼方此方が破れて、襤褸が出ても平氣なものでした。其處で、母親や兄弟が見兼ねて、別のものを着せると云ふ風にして、これにも金はかゝらないのでした。

かうして、彼れは四年間獨居生活をした後に或る夜其の住居を引き拂つたのです。彼れの姿は犬と共に見えなくなつてしまひました。

彼れの第一期の生活がそれでおしまひになつたのです。彼れに復讐心をあほつた町に、再び彼れは姿を現はしたのでした。

彦七は先づ一軒の家を借りました。そして彼れは家主に、自分が少々金を持つてゐる事を話して、それを貸し付けたいのだから、困つてゐる人があれば、世話をしてよこしてくれと賴んだのでした。賴まれた家主の爺さんは、若いのだか年老りだか分らないやうな干からびた貧相な顏をした此の男が金貸しをしたといふのを怪しむように、だまつて彦七の顏を見てゐました。

彦七は爺さんに賴んだだけでなく、いろいろな方法で、自分の商賣の廣告をしました。世間には僅かな金で困つてゐる人は隨分多いのですから、勿論彦七が金貸をしたいなどゝ云ふ本當

の眞意を知つてゐるものはありませんし、彦七の商賣は忽ちの間に繁盛しました。

　それから彦七がどんな事をしたかは、讀者の想像にまかせます。彼れは世間の人間を出來るだけいぢめる爲めに金貸しをはじめたのですから、世間の非道な、たゞ金に目がくらんでする金貸の慘忍よりはもつと〱ひどい慘忍を平氣で重ねました。そして一方には金をふやしてます〱魔の手をのばすと同時に世間の人間を泣かせて思ふ存分樂しんでゐたのです。

　勿論、彼れは十年十五年とするうちには、ずいぶんひどい迫害にも幾度も遇つたのですが、そんな事には決して屈しなかつたのです。金をつかんでゐれば、どんな者にもまける心配はないと云ふのが、彼れの築き上げた信條でありました。

六

　彼れから金を借りた悲慘な貧乏人のうちで殊に悲慘な一家がありました。それはつい彼れの住んでゐる隣り町の鍛冶屋でした。鍛冶屋と云つても、その男は田舍の百姓の農具に用ひてゐる金物をつくる鍛冶屋の向ふ槌を振るより他に藝のない、殊に働きのない鍛冶屋でした。その代りに又、彼等夫婦は誰にも憎まれる事のない好人物なのでした。彼れ等の間には十一になる男の子と九つになる女の子二人の子供がありました。鍛冶屋の細い働きは到底此の二人の子供と女房を安穩に養つて行く樣にはゆかないのでした。其處で女房は一寸した洗濯物をしたり、彼方此方の使ひあるきをしたりして、暮しを助けてゐたのです。

　此の一家の一番大切な役目をつけとめてゐる女房が或る時突然大熱を患つてしまひました。鍛冶屋は心配して、因業な奴とは聞いて知つてゐたのですが、彦七から參圓ばかりの金を借りて、女房の療治につとめました。そして、女房は漸々快方に向いて來ましたが。借りた金は、返すどころの沙汰ではなく、少々の利息もなか〱拂へないやうになつて來ました。

約束の期限が切れると、カタのやうに彦七は矢の催促をはじめました。最初の間は尋常に手をついてあやまつてゐました鍛冶屋も、イロ〱彦七が慘忍な金貸の態度を見せはじめますと、もう我慢が出來なくなつて、三度に一度は彦七の云ひ分に楯をつくようになつたのです。

　處が、或る夕方鍛冶屋は仕事がへりの往來で、パツタリ彦七に出會ひました。

『オイ、寅さん、お前さんは一體何時あの方の埒をあけてくれるつもりだい。もう期限が切れてから一と月あまりになるのに、利子も碌々拂つてくれないぢや、俺の方も商賣たからた、

困るよ。僅か三圓かそこいらの金ぢやないか』

彦七はいきなり高聲に催促をはじめたのでした。鍛冶屋はムッとしたのでせうがそれでも下手に出て。

『それや、云はれなくつてもわかつてるがね、何しろ其の日稼の事だから、お前さんはたつた三圓と云ふけれど、此方にやなか〱大變さ、もう少しまあ待つてお呉んなさい。何んとか工夫するから。』

『工夫〱つて此の間からお前さんはさういつてゐるけれど、工夫ぢやおつつかないよう』

『まあさ彦七さん、此處は往來ぢやないか。私も今仕事のかへりでくたびれてる。云ふ事があるなら、あとでうちへ出掛けて來たらどんなものだい、往來のまん中で、高聲で借金の催促はあんまり見つともない。』

『へん、見つともなきやお前さん、他人から金なぞ借りないがいゝや。此方は貸した金を返して貰はなくちやならんのだ。往來中で催促してはならんといふ理窟はないしさ。貧乏のくせに贅澤な事いひなさんな。催促されるのがいやなら、借りないが第一だ。借りたらさつさと返すがいゝや。』

『まあ何を言はれても仕方がないけれど、さうしたもんぢやないよ。まあ何にしろ往來では催促は御免を蒙むるよ。』

鍛冶屋はムシヤクシヤするのをおさへてさう云ひ放したまゝ行きかけました。

『これ〱寅さん。さうお前さんの勝手にゆくものか。俺はさう閑人ぢやないから丁度此處で會つたが幸ひだから何んとか返事をして貰はう。何？家へ來ない？いけないよ。家へ來いとは何んだ。本來ならお前の方から出て來てこれ〱だと斷るのがあたりまへなんぢやないか。それを何だつて！家へ來いだ？此處で埒をあけて貰ふのだよ。僅か三圓ばかりの金ぢやないか。逃げずと男らしく埒をつけな。』

彦七は憎々しく云ひつのりました。これが平生それ程借金を苦にしない貧乏人ならそれ程でもありますまいが、生憎と鍛冶屋は、これまで貧乏はしてゐても、借金をした事のない男ですから、氣にかゝつて仕方がない處を往來で耻かしめたのだから堪りません。をとなしいけれど一徹な鍛冶屋はすつかり逆上してしまひました。

『もう分つた！こん畜生！貴様のような因業な奴は斯うしてやるんだ！』

彼れは夢中になつて、丁度持ち合はせてゐた大きなヤツトコでいきなり彼の頭をなぐりつけました。

彦七の横びんから夥だしい血が噴き出すのとその體が倒れる

のと殆んど一緒でした。鍛冶屋は夢中になつてヤツトコを振り上げて倒れた彦七の上にのつかゝりました。が直ぐに傍の見物人に抱きとめられました。そして初めて我に返つた鍛冶屋は其處に倒れてゐる彦七の顏を流れてゐる血を見ると、呆然として大地に座り込んでしまつたのでした。

鍛冶屋はそのまゝ歸りませんでした。彼れは警察の拘留場から監獄に放りこまれてしまつたのです。

半月ばかりすると、まだ繃帶をしたまゝ凄い顏をした彦七が、近所の人達にいたはられながら漸く其の日々々と悲しみながら暮らしてゐる鍛冶屋の家にはいつて來ました。彼れは、女房の嘆願には耳もかさず、何日も眼ぼしい物のない家の中をかきまはした後で子供達二人が縮こまつて眠つてゐる蒲團をハギとつて子供達を疊の上にころがし、臺所のかまどから釜を持つて出てゆきました。

此の無情の仕打に、泣きぢやくる二人の子供を抱いて女房は齒ぎしりをして恨み泣いたのでした。そうして近所の女房が見兼ねて貸てくれた蒲團に子供達を寢かすと女房は自分の二人の兄弟に子供の行末を賴む書置きをして家を出て行つたのでした。

其の夜中過ぎ、彦七の家は三方から火をかけられて燃え上りました。彼れが目をさました時には、火はすつかりまはつてしまつてゐました。それでも、彼れは枕頭の手文庫をかゝへて走り出しましたが、入口でしたゝか足を拂はれて轉んだ拍子に、飛び出して來た人間にその文庫は奪はれてしまつたのでした。

彼が氣狂ひのやうになつて、その怪しい者の後を追はうとしました時には、文庫はもう火の中に投込まれてゐたのでした。鍛冶屋の女房は、とう〱彦七を素裸にしてしまつたのです。

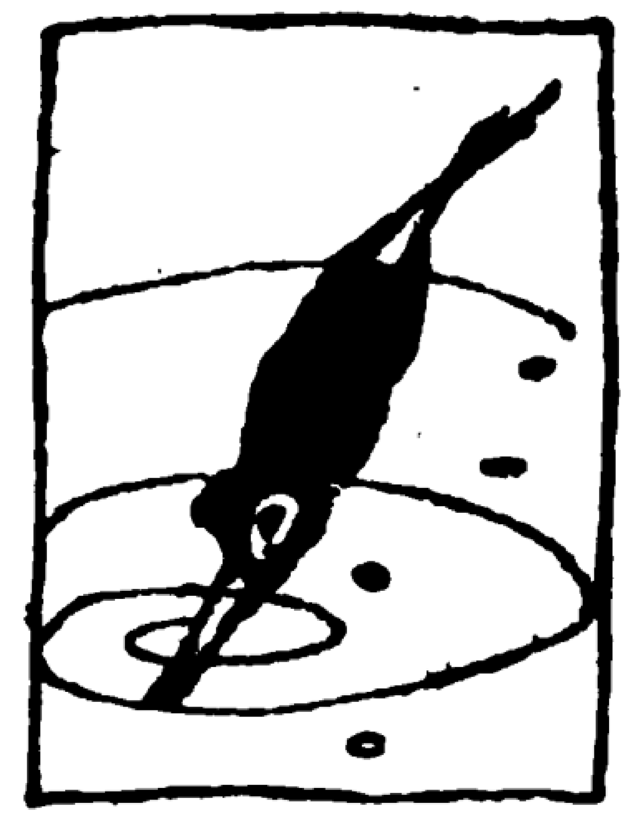
火は彦七の家から三軒目でとまりました。彦七は何一つ殘らぬ燒け跡に呆然と立つてその醜い顏を引きゆがめてゐました。

彼は火の爲めに、彼が命をけづるやうにして築き上げた彼の今までの生涯を跡かたなく失くしてしまつたのです。彼れは激しい落膽の爲めに、失神したやうになつて、二三日の間は、ただ燒けあとをうろ〱してゐたのです。

しかし、やがて、彼れの眼にあの盛んな何物をも一氣に燒きつくしてしまふ火焰が不斷にチラつくやうになりました。彼れは今までの金による復讐を、此度は魅力にとんだ火焰と取り換へました。そして、長い間、彼方此方を徘徊しながら、その呪ひを止めなかつたのです。

彼れが生れた村に歸つて來たのは、最後の思ひ出に、最初に彼れの呪ひ心を培つた土地に呪ひの火を這はす爲めでした。


上高地。
明神池



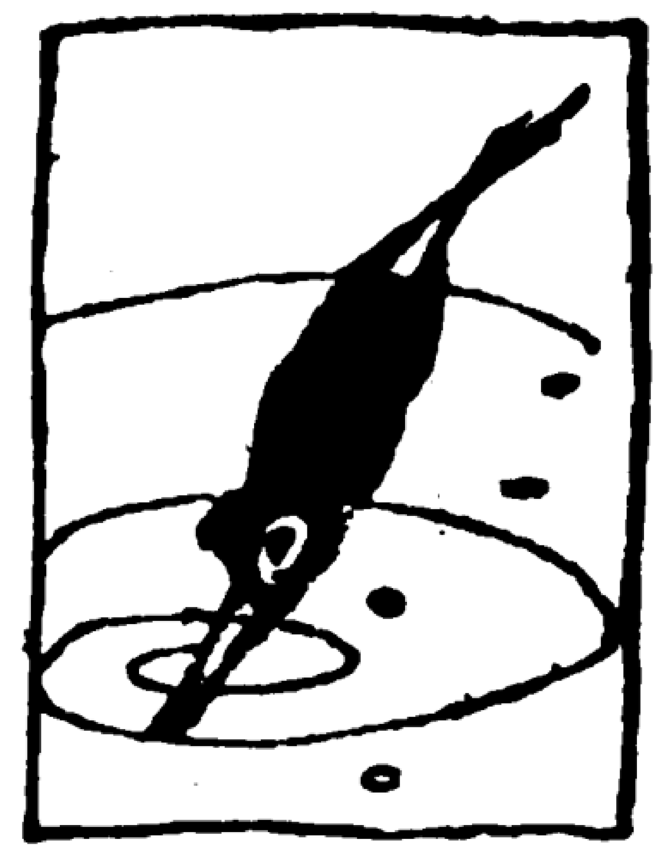
豐田貢

馬場孤蝶

一

宗敎といふものは、大抵前に存在して居た宗敎を改作したり、補足したりしたものです。佛敎もさうでありました。耶蘇敎——即ち、猶太敎もさうでありました。歐洲諸國の耶蘇敎の各宗派は殊にさうでありました。耶蘇敎は偶像敎で無いとか、多神敎で無いなどゝ云つて、耶蘇敎の信者は威張つて居るのですが、歐洲の耶蘇敎各派は、耶蘇敎と耶蘇敎移入以前にあつた古い宗敎とが自然に結合して出來上がつたものでありますから、偶像崇拜的なところも、多神敎的なところも、大分入つて居る譯であります。されば、後から出來た宗敎が必らずしも、一番宜しいといふ譯のもので無いと共に、後から出來た宗派が必らずしも前々のものに劣つて居るとは云へ無い譯であります。更に又、面白い事には、後から出來た宗敎の敎理が必らずしも新しい合理的なものだといふ譯には參りません。まして、未だ宗派といふ程まで纏つて居らぬ信仰の如きに至りましては、前々の宗派の敎理のうちの極く卑近なところばかりを集めて、專ら俗人の心に入り易いやうにしたものが少く無いのでありますが、さういふ點が反つて何だが新しい、深みのあるところのやうに思はれるとなどがありまして、所謂る知識階級の人たちの心の修練の行きとゞいて居無い連中が、ふと共所へ迷ひ込んでしまつて、飛んだお利口になる例が少くない、中には又宗敎道樂とでも云ふやうな人々がありまして、何か新しさうな宗派らしいものばかりをさがして歩いて居るやうなのがある。さういふ人々になると、何でも彼でも、後から出來たものであり


上高地。
明神池



豐田貢

馬場孤蝶

一

宗教といふものは、大抵前に存在して居た宗教を改作したり、補足したりしたものです。佛教もさうでありました。耶蘇教——即ち、猶太教もさうでありました。歐洲諸國の耶蘇教の各宗派は殊にさうでありました。耶蘇教は偶像教で無いとか、多神教で無いなどゝ云つて、耶蘇教の信者は威張つて居るのですが、歐洲の耶蘇教各派は、耶蘇教と耶蘇教移入以前にあつた古い宗教とが自然に結合して出來上がつたものでありますから、偶像崇拜的なところも、多神教的なところも、大分入つて居る譯であります。されば、後から出來た宗教が必らずしも、一番宜しいといふ譯のもので無いと共に、後から出來た宗派が必らずしも前々のものに劣つて居るとは云へ無い譯であります。更に又、面白い事には、後から出來た宗教の教理が必らずしも新しい合理的なものだといふ譯には參りません。まして未だ宗派といふ程まで纏つて居らぬ信仰の如きに至りましては、前々の宗派の教理のうちの極く卑近なところばかりを集めて、專ら俗人の心に入り易いやうにしたものが少く無いのでありますが、さういふ點が反つて何だか新しい、深みのあるところのやうに思はれるとなどがありまして、所謂る知識階級のうちの心の修練の行きとゞいて居無い連中が、ふと其所へ迷ひ込んでしまつて、飛んだお利口になる例が少くない、中には又宗教道樂とでも云ふやうな人々がありまして、何か新しさうな宗派らしいものばかりをさがして歩いて居るやうなのがある。さういふ人々になると、何でも彼でも、後から出來たものであり

さへすれば、氣に入るのであつて、新しく出來る宗派をば片つぱしから渡り歩く。まるで、不人情な男がみすてんを取つかへ引きかへ買ふやうな風であります。さういふ風で、新しく出來た宗派といふやうなものには、存外流行的に信者が多く附くものであります。

然しながら、幾ら新しく出來た宗派だからといつて、その主唱者が不熱心では、信者の寄る譯のものでは無い。新しい宗派が繁昌しやうといふのには、その主唱者が熱狂的であることが、必要であります。所が、新たに宗派を編み出す者は大抵さういふ資格を具へるやうになるのであります。

一體何の道にしても、新しいことを考へだすのは、その道の素人が多い。發明だとか、改良だとかいふものは、存外學者の手にならぬことがある。これは、その道に深く入つて居ると、傳來の掟の有り難さが善く呑み込めるので、向ふ見ずに法外れの方へ踏み出すことができ無いからであります。宗教、宗派の場合も先づそれと同じ譯で、その宗教なり、宗派なりの傳來によく通じて居る人々は、無暗に改革とか、新派を開くとかいふ氣にはならぬ。また、古來からの大きい宗教になると、內典、外典の經文なども可なり澤山あり、それに關する書物も少く無いのであるから、それ等を十分に調べるのは、なか〳〵の仕事で、唯の熱狂的信仰だけではできることでは無い。で、宗門の大知識などゝいふやうな人々は──門閥その他の關係は別として──大抵は皆落着いた人々である。謂はば常識的な人々である。さういふ點で、お利口連は餘り寄りつか無い。いや、少くとも下級なお利口連は寄りつかない。

所が、古來の宗門に關する學問的素養の無い行者のやうな者だと、唯だ熱狂的な信仰で進むのがその生命であるのだし、また直きさうなれるのであるから、從つて、迷信的標榜の如きに、新たな宗派を立てるといふやうな氣になり勝なものであります。

所で、お利口連や、宗教道樂の人々から見ると、さういふ熱狂的なところが有り難いのであつて、其所にすつかり引き附けられてしまうのであります。世の中は盲千人といふ古い喩の如く、善い物よりか、パッと派出やかな物が、世俗には氣に入る

のと同じ理であります。

所で、男と女とでは、何ちらが熱狂し易いでせうか。それは無論女です。耶蘇教の方で云ひ傳へられて居るマグダラのマリアなどは、定めし餘程熱狂的な信仰を持つて居た女であつたらうと想像せられます。佛蘭西のオルレアンの處女ジャンヌ・ダルクの如きも無論熱狂的信仰の女であつたのでありませう。彼の時代には、熱狂的な女行者のやうな者が多かつたやうに傳へられて居ります。我國に於ても、巫子のやうな者で隨分熱狂的な女は多かつたらうと考へられますが、明治になりましてからの、天理教の教祖と云はるゝみきといふ老女、大本教の教祖と稱せられる直といふ老女などは、明に熱狂的信仰の女であつたらしく思はれます。所謂る筆先といふやうなものが、正氣ではさう出來る譯はありません。此でも一つ申し上げて置か無ければならんことは、女の熱狂的信仰は本氣なのが通例でありまして、大抵の場合、男の行者が時に虛の熱狂的信仰を裝ふやうなのとは、全く違ふといふ點であります。それで、女の行者の方が多く信者の信心を得ることができるのであります。

二

本題の豐田貢といふ老女が丁度さういふ女であつたと傳へられて居ります。

豐田貢が京都八坂上町に神殿を設けましたのは文政年中のことであります。肥前唐津の浪人水野軍記の弟子で、前身は、祇園の藝子であつたとも云ひますし、又、軍記の家へ時々雇れて働きに參つた八兵衛といふ者の妻でありましたが、夫の八兵衛がある時家出をして行衛知れずになつてから、軍記の弟子になり多少の學識を貯へ、軍記の歿後遂に右の八坂上町に、神殿を立て、稻荷大明神を祭つて、諸人の歸依を得る事に至つたといふ兩說があります。

前の說は『大鹽の餘聞三津之白浪』といふ小說の作者の記したもの、後の說の方は『今古實錄大鹽平八郎傳記』に載つて居るものであります。

それは何れであるか、唯今考證の方はありませんが、年はもう五十に近いのであつたに拘はらず、何處と無く垢拔のした、昔は嘸と思はれるやうな眼鼻立ちの調つた女であつたといふの

ですから、或は、『大盛の餘聞』の作者の說の方が正しいかも知れません。

何にしろ、さういふ少し凄い程眼鼻立ちの調つた、上品な好い年配の女が、出で立ちはといふと、白綾の重ね着に緋の袴を穿き、檜扇を持つて、神々しく飾り立てた神殿めいた座敷にキチンと坐つて、如何にも鷹揚に落着き拂つて、辯舌さはやかに應待するのでありますから、誰でも一寸と威かされずには居られません。吉凶の卜筮から、加持祈禱、何うせ常識でも判斷の付くやうなことまで卜ひにかけ、一寸とした精神作用で直つたり、有り來りの草根木皮で快くなるやうな軽い病氣まで、加持を頼み、祈禱を請うといふやうな者が多かつたのでありますから、卜ひの方は思案に餘つて居る無智な人々の相談相手になつてやるといふやうな親切ないき方でやり、加持祈禱の方は、勿體振つた神前の祈りをしてから神示と稱して何か處方のやうなものを教へてやればよかつたのでありませう。勿論貢は、さうは意識せずに、總てさういふことは、神靈によつてやつて居るやうに思つて居るやうに見えたのであります。

さア、直ぐに京中の評判は大變なものになりました。極く近邊の者は内心では、妬み心もあつて、貢のことを善くは思は無かつたのですが、何にしろ、困るものなどに對しては、貢の家からはいろ〳〵と親切な世話が行きとゞくといふ風であつたのですから、表てだつて、惡くいふ譯に行きません。お利口連の取り沙汰は實にエライ騒ぎで盲の眼が明いたの、蹇が起たなどは愚か死人が一祈禱で生き返つたなどゝ、實際見たやうに觸れ廻る。從つて、本當の弟子どいふやうなものも出來、自稱皆傳の弟子などゝいふものは幾何あるか分らん位にありました。そのうち大阪方面へも貢の名は鳴り響きまして、そちらにも大分信者が殖え、取り分け播州西成郡川崎村の京屋傳助の母さよ、天滿龍田町播磨屋藤藏同居きぬなどは、貢の教に深く歸依して、貢の教の傳道者となつて、熱心に說き廻りました。

文政十年頃になると、貢の住居は最早立派な宗派の本部の觀をなすに至つて、月に幾度かの重立つた信者の定會日には、可なり身分のある町人や、浪人にしても生活の樂らしい帶刀の男などが寄り合ふのであるらしかつたのであります。

三

文政四年に大阪の東町奉行になつた高井山城守實德の知遇を得て、吟味方に擧げられた與力大鹽平八郎が、豐田貢に眼を着けだしたのは、正に此の時でありました、

その時分にはもう既に、後年物の見事に德川氏三百年の支配を破壞した勤王論が、勃興する氣運を表はしかけた時代でありました。高山彦九郎、林子平、蒲生君平、山縣大貳などの名が、當時の有識者の間には、餘程强い意味で記憶されて居ました。賴山陽の『日本外史』の起稿も大凡其の頃でありました。

やゝともすると、處士の集り來る傾のあつた京都に近い大阪の町奉行高井山城守は、老巧な有司だけに、さういふ處士横議の形勢の惡化し行くのを虞れて居ました。少くとも、當時の第三階級にまでさういふ反幕府的思想の波及するのは、防止し度いと思つたのです。

『學者が多少矯激な意見を吐くはせん方無いに致しても、馬童走卒までもが、恐れ氣も無く、柳營の權威をないがしろに致すやうになるのは、捨て置けん』

山城守はさういふ風に、思つて居ました。

高井實德は又、當時餘程形を纏めだして居た神道の宗教思想にも、餘程危險分子の含まれて居ることを認め無いでは居られませんでした。敬神の歸着點は自から皇祖の崇拜となり、その窮極はやがて幕府の權威に對する服從の念に少からず動搖を及ぼすものだと看て取つたのであります。

山城守は更に又、當時の知識階級の一人として、且は又、牧民の職に在る者の責任上、當時の如き迷信の行はれ勝の世の中では、淫祠邪教と認め得べきものは、極力驅除し無ければならんと考へて居た。切支丹の教の如きは、勿論國禁のものであるから、これに歸依する者は嚴罰し無ければならんとは思つて居たのであるが、さういふ方の考は法を重んずるといふ方の、役吏としての考から出たものであつて、外教を忌むといふ念は切支丹の存在が有るか無しになつて了まつた當時にあつては、單に因襲的な考になつて心の隅に殘つて居るのみで、山城守は、切支丹をも單に淫祠の一つとして憎むやうな心持になつて居たのであつた。

さういふ牽行の心持を善く知つて居た大鹽平八郎は、八坂の老巫子豊田貢の教會に、監視の眼を向けた。

豊田貢の師匠と云ひ、或は貢の夫であつたとさへ云はれる水野軍記は、何うも所謂勤王的思想を持つて居た男のやうである。その教を受け傳へたといふ貢の宗門の根本思想は、何ういふものであらうか。貢は高が女のことであるから、それ程の感化力は無いにしても、宗門、信仰の力は人の心に染み入ることの深いものであるから、貢の傳へる教にして、若し反幕府的思想を明らさまに信者の心に吹き込むものであつたとしたら、決してさう輕視する譯には行かぬであらう。

貢の奉祭して居るといふ稻荷大明神なるものは、何であらうか。所謂神道の教理をば誇大に說くものであつて、幕府の權威を疑ふに至る道程をば信者にたどらすやうな性質のものなのであらうか。

此れまで、切支丹の信仰か、さま／＼な日本の神の形を装せられて、密に行はれて居た例は決して少く無い。貢の稻荷大明神が果してさういふ切支丹のデヨウスの變形であるのだらうか。

平八郎は、山城守とは違つて、先年弓奉行となつて大阪に居た近藤重藏から此邊の話などをよく聞いて居たのであるから、外教の勢力をばもつと生きた問題として、可なり重大な響を生ずるものと考へて居た。

さうで無いにしても、貢の稻荷教なるものが、世間によくあるなみ／＼の淫祠邪教的なものであつて、貢は唯漁利の目的でさういふ教を廣めて居るのであらうか。

理智の教を主とする陽明學の主唱者であつた大鹽平八郎はさういふ迷信によつて衆俗を蠱惑する者は決して捨て置けんと思つたのであります。

其所で、斷罪に關しては、何時も愼重な注意を拂ふのであつた大鹽は、部下の同心や、手先の中の最も心利たる者を豊田貢の門に入り込せて、十分に探らせたのであるが、なみ／＼の吟味方ならば、無理にこじつけて、貢を刑に處するであらうと思はれるやうな捉まへどころは無くは無いのであつたが、然し、積極的に動し難い證據といふのは一つも擧つて來て居無い。さ

れぱと云つて、打ち捨てゝ置くべきかといふに、貢の教の精神には唯その儘にはして置け無いやうな何物かゞあることは、確に感じられた。法文の掟通りにしてしまうのが、公平であらうかそれとも精神的解釋から行つて、謂はゞ今日の行政的の斷罪をやつたものであらうか。

地下の一老婦の事ではあるが、決して輕々に處分すべきで無い事件であると思つた大鹽平八郎は、十分熟議を凝らした上でといふ考で或夜、奉行山城守の役宅へ行つた

山城守の役宅の書院で、主人と近々と向ひ合つて、大鹽平八郎は先づ部下が調べ上げて來た豊田貢に關する材料を悉く報告した。その報告を掻い抓んで云へば、豊田貢の祭つて居る稻荷大明神といふのは、土の神、即ち、國の神であるといふのであつて、人は食が無ければ生きて居られぬのであるが、その食の材料を産む土、即ち土地を支配するのが稻荷大明神であるのだと云つて居るといふのであつた。又、天候の順不順が穀物の收穫には大關係があるのだからして、穀物の出來高を左右することのできる稻荷大明神は又天を支配する力を持つて居るといふのであつた。更に又稻荷大明神は何の爲めに、天候を掌り、農産を支配するのかといふと、それは人間を生長させ、人間を繁榮させる爲めであるのだからして、稻荷大明神即ち人間を護る神である。であるから人間の病を醫する藥種、藥草の如きも勿論此の神の支配するところだと云ふのであつた。

貢の祭つて居る稻荷大明神は女體の神であつて、謂はば、日の大御神の權化であるやうに說かれて居るといふのであつて貢は信者に向つて、天に二神なく、地に二王無しといふことをよく云ふといふのであつた。大鹽の注目したのは、さういふ點ではあつたが、それに關する明確なる證據は摑むことがまだでき無かつた。それといふのは、信者のうちにいろ／＼の階級があつて、謂はば、初傳、中傳、奥傳といふやうな形になつて居る、本當の教理はその奥傳を受けた者で無くば知つて居無いらしいのであつたが、さういふ奥傳を受けた信者たちは、なか／＼用心深くつて、口數が少く、さういふ者どもからは、貢の稻荷教を罰するだけの確たる證據は得られ無いといふのであつた。

八坂の本部では、『邪神拂』といふ式を月に三度宛行ふことに

なつて居る。それは新しい信者を合掌さして、坐らせて置いて、貫が例の緋の袴の出立ちで、檜扇を翳して、神前に現はれ、人間には各自邪心があつて、それが爲めに、人間の本心の鏡が銹らされて、神を見ることができ無い。だから、我宗門の信者とならうとする者は、先づ以つて、その邪心を拂は無ければならん、何れもは、心にまつはるさま〴〵な邪念、悪心を此所でよく考へ定める爲めに、一心に祈念を凝しなされいといふやうなことを、如何にも莊重な言葉附で、云つて聞かして、やがて、一齊に默禱を始めさする。そのうちに、信者のなかで熱病にでも罹つたやうにガタ〳〵慄えだし狂氣のやうになつて途方も無い懺悔の言葉を口走しるのもあり、甚しきは、自分の體には蛇の怨念が宿つて居ると云つて、蛇ののたくるやうに這ひ廻つたり、又、自分の心には狐が入つて居て自分を苦しめるのだと云つて、狐の如く飛び廻つたり、鳴き聲を出したりする者もあつて、その光景を見る者は、一見慄然とせざるを得無かつた。

所で、さういふ點に就て、貫を詰るものがあるといふと、貫は平然として、あゝいふ風に、自分の心に蛇が宿つて居るの、狐が憑いて居るのと思ふのが、卽ち邪心である。我が敎に於ては、一端さういふ邪心の存在を當人に口外させそれが邪心であることを次第に自ら認めさせ、それで澄み渡つた本心に至らせるのである。迷妄の雲をまことの神の道、まことの心の持ち主とならしめるには、いろ〳〵と方便のあるもので、隨分ともに愚しい、笑止な事も、苦々しい事も、耐へ忍ば無ければなるものでござるわよ、と答へるといふのであつた。

その外、熱鐵を掴むとか、刄を平氣で手で扱くとかいふやうなこともしたのであるが、此れも貫自身は、神を信じて、心を凝らせば、誰にもできることで、決して不思議なことでは無いと云つて居るといふのであつた。

で、大凡さういふやうな報告をしてから、平八郎は斯う云つたのであります。

『その外、夏の庭先へ雪を降らして見せたの、座敷を忽にして海に致したのといふやうな噂はあるのでござるが、貫自身は、聊でも物の道理の分かる者に問はれますると、人は自分の心の持ちやうで無い物までも見えるものでござる、自分に於ては、

まことの心を以つて、誠の神に仕へまつるのみで何の不思議をも致す譯ではござらぬ、信者どもはめいめい氣でさまざまなものを見るのでござると、一應は理に協つたことを申す由にござる。なれども、古來よりの由緒ある神佛とは事かはり、如何にも怪しげなる神を祭り、神社佛閣にもあらぬに、人を集めて、祈禱加持等を致すは、御法を恐れざる不屆きなる仕方ではござるもののなべて宗門の始めと申すのは、先づあれ體のものゝやうにも存ぜられる。彼の老女が唯私慾の爲めにのみ、彼のやうなる敎を説いて居る體にも見えませぬ。一圖に御法の表によつてのみ斷じまするも如何ござらうか』

山城守も考へ込みながら『如何さまな、足下の遠慮もなさることぢやな。承はるところでは、怪しき節も少くは無いが、知らるゝ通り、神職、僧侶の行ひ、在家の者どもにはるかに劣る當世であつて見れば、その職に無き者にして敎を傳へるといふ箇條のみにて貢とやらを罰するも、聊か苛酷の嫌もあらうな。なれども、その稻荷なるものゝ正體が心元無い確とした證左は握れんであらうか』

『御意のところ如何にも御尤。ではござるが、女體と申すが、切支丹の神像らしくも疑はるゝでござるが、これとても、貢は、御國禁の邪敎もさまざまな形にて、皇國の敎と混り合うて居りまする有樣でござるによつて、貢の神像が一眼では怪しきものでござらんやうに見えるに致しても貢の敎が外來の邪敎に非ずと申す證左には相成らんでござらう』

『如何さまな。踏み込んで、神壇を開き、正體を突き留めるは、いと易いことではあるが、その曉切支丹の像で無かつたと致したら、兎もあれ、衆人の渴仰致し居るものに對し、無體の取り扱ひを致したとやうに、衆庶に思はするも、有司としては好ましく無からうな。なれども貢の師であつたとか傳ふる水野軍記は、西國方の浪人ではある、柳營の權威を疑るやうなる言議を唱へた者のやうにも聞き込んで居る。その軍記の敎を受け傳へたる由であれば貢自身は無學の老女でも、決して油斷はなり難い。貢が人の心を本心に戻すなどゝ申して居るのが、存外に上を恐れぬ考に基いたものであるも知れ申さぬ』

『いや、恐れながら、柳營に對しまつり不屆な念を抱く者どもは、唯今では存外多く相成つて居りまするぞ』

ために其所せ[illegible]此[illegible]宗門類似のものに依つて此の際愚民を蠱惑し、煽動致す者があつては、その影響は重大ぢや』

さういふ風で山城守は、兎に角豊田貢の身分柄宗門を起さうとする行動は僭越至極であるのだから、其點で吟味を始めてみて其上で、所謂不屆な考がある宗門の教理の中に含まれて居る樣であつたら、嚴刑に處したら宜しいでは無いかと主張した。

平八郎は、此の吟味は餘まり氣が乘ら無かつたけれども、自分を十分信任して呉れた長官たる高井山城守の熱心に主張することであつたので、遂に決心して、八坂の邸へ捕吏をやつて、豊田貢を捕へて、大阪へ護送して來て、奉行所で吟味を始めたのでありますが、この老女貢は、偽の世間有り觸れの巫子では無かつた。大鹽平八郎が極めて峻嚴な吟味方であることを聞き知つて居て、もうすつかり覺悟をきめて、殉教者になる決心をしたものと見えまして、少しも顫びれたところ無く、白洲に坐して、悠然として、自分の信仰を陳述しました。

この老女貢は、救世濟民の道に就て餘程徹底した考を持つて居つた。當時もう餘程形をなしてゐた勤王論に對しても貢は餘程强い信念を持つた共鳴者であることが、分つて來ました。

切支丹でさへ無くば、怖くて所拂ひ重くて遠島、決して生命にかゝるやうな裁きにはし無い積りで居た大鹽も、何うしても貢の首を繋ぎ得る方を見出すことができ無くなつて了まつたのであります。けれども八坂の巫子と云はれて、隨分多くの歸依者を得て居た豊田貢が勤王論の熱烈な主張者であつたといふ事が、公になるのは面白く無いといふ高井山城守の考からして、貢は妖言を放つて衆庶を迷はしたといふ罪名の下に死罪に處せられて了まひました。それは文政十二年のことであります。

その時を去ること八年にして、當時隱居致して居つた大鹽中齋が、丙申の飢饉に苦しむ衆庶の慘然な有樣を見るに忍びず當路の有司の冷淡無能に憤慨し、全くの青天霹靂的の暴動に出たことは人の知るとほりでありますが、之は大鹽の爲めに捕へられて刑死した豊田貢の亡魂の祟りだといふ俗說があります。

大鹽は豊田貢のことが、可なり深く氣になつて居つて、貢の就刑後時々は親近の人々などに、貢のことを話したのでありませう。亡魂說はさういふ處から起つたものとも考へられます。が、大鹽の暴動が貢の亡魂にそゝのかされたといふ說には、他の意味で甚だ面白い暗示が含まれて居るものと、私は考へざるを得無いのであります。

（をはり）



白木屋お駒

村松梢風

一

白木屋お駒を一席辯じます。是れは淨瑠璃の方では「戀娘昔八丈」といふ外題で有名な物で御坐いますが、一寸搔い撮んで申上げますと、爰に白木屋の獨娘にお駒といふ者があり、行儀見習のため、さる大名の屋敷に奉公の砌、家中の侍で尾花才三郎と申す者と戀中に落ち、末は夫婦と固い契約を取交してお駒は我が家へ歸つてゐる、と、白木屋の番頭に丈八なる者が御坐いまして、此奴の計らひでお駒は喜藏といふ持參金附きの聟を取らねばならなくなる。一方才三郎は、主家の寶物の茶入が紛失致したところから其の詮儀のために浪人して、町家廻りの髮結ひと成り下つてゐるうちお駒と邂逅致しますが、お駒が聟を取ると聞いて大いに立腹致すので、お駒は泣きつ恨みつ眞情を吐露して必ず心變りでない事を誓ふ。愈々婚禮の當夜と相成る。聟の喜藏は正裝して白木屋へ乘込んで來る。是れを才三郎が物蔭から覘つて見ると、意外にも喜藏といふ奴こそ自分が豫々其の行方を尋ねてゐた茶入れの盗賊である事が知れた。其處で此の事をお駒に告げるとお駒は謀を以て喜藏を嬉しが

らせた上、油斷を見濟して一刀の下に刺殺した。が、番頭丈八の逐電によつて、證據の品が失くなり、お駒は夫殺しの罪に問はれ鈴ヶ森の刑場で死罪に行はれることになる。代官堤彌平治お駒に向ひ「最前屋敷にて役人中申し渡されし如く――重き刑にも行はるべきをお上のお慈悲を以て死罪に仰せ付けらるる、有難く存じ奉れ」と云ふ。ちつとも有難くない。此の時お駒は少しも悪びれず見物の群衆に向つて「世上の娘御達、此駒がよい見せしめ忘れても親の許さぬ不義いたずら必ず必ず遊ばすなえ」と一場の教訓を試みる。娘義太夫は見臺から伸び上り、眼を細く致し、黄色い聲を絞つて聽者を恍惚たらしめる條で御座います。お駒の一命アハヤ風前の燈火と見えた時、遙か彼方より「其の仕置暫く〳〵」と呼ばはりながら馬を驅つて遣つて參りました戀人の才三郎、番頭丈八を召捕り其の白狀に依つて喜藏が盗賊である事迄一明細に相成つたり、然る上はお駒の人殺しも罪にはならぬと、赦免の狀を懷から取り出して讀み上げるので、見物も聽き手も始めてホッと胸を撫でおろし、目出度く落着といふのが大詰の筋で御座います。此の淨瑠璃の作者は吉

田角丸で安永四年の刊行で御座います。作者はそれより五十年程前にあつた社會の事實をとつて脚色を加へたものでしたが、餘程當時の人氣に投じたものと見え、一時は才三郎格子とかお駒染めなぞといふが流行致したといふくらゐ、白木屋お駒と云へば八百屋お七と相並んで江戸を代表する娘兩横綱の位置に上り、大層な人氣者になりました。處で實說の方はどうであるかと申しますと、淨瑠璃とは全然趣きを異にして居ります。馬文耕の「近世江都著聞集」の中に其の委曲が記されてあります。白木屋といふのは白子屋で、お駒の實名はお熊で御座います。」大體を申すと、白子屋の娘お熊が夫のある身で手代忠七と密通して、剩へ其の夫を殺害致そうと企み種々の悪事が露見に及び一同大岡越前守の裁きを受け、お熊忠七の兩名は引廻しの上草に於て獄門。其の他關係者一同それ〳〵處罰を受けたと云ふのでして、甚だ香ばしからぬ事件、當今ならば差し詰め夕刊新聞の三面を賑やかそうといふ種で御座います。だが併し、總て人間のする事は善でも悪でも皆それぞれ道理のありますもの、結果だけを見て一概に罵倒も出來ない。此の意味でお熊なども

頗る同情に價する點も御座います。偖。餘事は置きまして――

　享保年間の事、江戸は新材木町に白子屋といふ材木問屋があつた。家持角屋敷で大層な分限者、此の角屋敷の主となると年頭に營中へ出て將軍家に拜謁する事が出來た大層な家柄、當主の名前は庄三郎と云つて是れは悉く好人物、女房お常との間に出來た獨り娘のお熊、蝶よ花よと育てるうちに齡頃(としごろ)にも相成ると此のお熊が非常な美人になつた。庄三郎の女房といふのは至つて派手好きな性分、それに姥櫻ながら標緻もなか〳〵佳かつた。が何しろ金があるに任かせて贅澤三昧、其の上亭主がお人好しなのですから何をしようと勝手です。ヤレ芝居だ花見だ交際(つきあ)ひだと云つて、娘のお熊は勿論の事女中腰元まで着飾らせて明け暮れ家を外に致し、金錢を湯水の如く遣ひます。湯水の如く金を遣ふとはよく云ふ譬へですが、當節はなかなかどうして湯水だつて滿足には遣へない。ヤレ水道税だヤレ石炭の値上げだと吾れ吾れは脅やかされ通しだ。今に飲料水を瓶詰めで買ふやうになるに違ひない。先達て僕は古い雜誌に載(の)つてゐた柳の藝者の懷舊談を讀んだが、其の中に維新當時の名妓柳の小萬に關する話があつて、小萬といふ人は恐ろしい綺麗好きな人で、湯屋へ行つて鼻の穴を洗ふだけに留桶に六杯宛の湯を遣つたといふ事が云つてあつた。是れ位アンダンに遣つてこそ初めて湯水の如くといふ言葉に實感が伴なつて來ると思つた。偖白子屋の內儀で御座いますが、何事に依らず人のしない事をして見度いといふ性質、其處で女だてらに腰へ印籠を提(さ)げて歩いた。殊には是れが世間一般の婦女子にまで波及して一種の流行となりましたが、其の魁は全く白子屋のお常から始まつた事、當時の風俗として印籠は男子の持物と極まつてゐたので御座います。萬事が此の調子で押し廻るのですから江戸中で白子屋の內儀を知らぬ者はない。人呼んで印籠お常と云ふ。堅氣の商人の女房があざ名で呼ばれるやうになつてはお仕舞ひで御座います。兎に角此の白子屋の身代は大したもの。角屋敷と云ふものは十字街なら四軒ありさうなものだが、江戸城から見て右に當る場所と限られてゐて、其の實十字街でも一軒しか無かつた。白子屋の屋敷は新材木町內萬河岸(よろづがし)にあつて總土藏造りの大層立派な物だつた。現今では土藏造り位何んでもない、鐵筋コンクリート

の迷電によつて、証據の品が失くなり、お駒は夫殺しの罪に問はれ鈴ヶ森の刑場で死罪に行はれることになる。代官堤彌半治お駒に向ひ「最前屋敷にて役人中申し渡されし如く——重き刑にも行はるべきをお上のお慈悲を以て死罪に仰せ付けらるる、有難く存じ奉れ」と云ふ。ちつとも有難くない。此の時お駒は少しも悪びれず見物の群衆に向つて「世上の娘御達、此駒がよい見せしめ忘れても親の許さぬ不義いたずら必ず必ず遊ばすなえ」と一場の教訓を試みる。娘義太夫は見臺から伸び上り、眉を細く致し、黄色い聲を絞つて聽者を恍惚たらしめる條で御坐います。お駒の一命アハヤ風前の燈火と見えた時、遙か彼方より「其の仕置暫く〳〵」と呼ばはりながら馬を驅つて遣つて參りました戀人の才三郎、番頭丈八を召捕り其の白狀に依つて喜藏が盜賊である事逐一明細に相成つたり、然る上はお駒の人殺しも罪にはならぬと、赦免の狀を懷から取り出して讀み上げるので、見物も聽き手も始めてホツと胸を撫でおろし、目出度く事落着といふのが大體の筋で御坐います。此の淨瑠璃の作者は吉

程前にあつた社會の事實をとつて脚色を加へたものでしたが、餘程當時の人氣に投じたものと見え、一時は才三郎格子とかお駒染めなぞといふが流行致したといふくらゐ、白木屋お駒と云へば八百屋お七と相並んで江戸を代表する娘兩橫綱の位置に上り、大層な人氣者になりました。處で實說の方はどうであるかと申しますと、淨瑠璃とは全然趣きを異にして居ります。馬琴の「近世江都著聞集」の中に其の委曲が記されてあります。白木屋といふのは白子屋で、お駒の實名はお熊で御座います。大體を申すと、白子屋の娘お熊が夫のある身で手代忠七と密通して、剩へ其の夫を殺害致そうと企み種々の悪事が露見に及び一同大岡越前守の裁きを受け、お熊忠七の兩名は引廻しの上獄門。其の他關係者一同それ〴〵處罰を受けたと云ふのでして、甚だ香ばしからぬ事件、當今ならば差し詰め夕刊新聞の三面を賑やかそうといふ種で御座います。だが併し、總て人間のする事は善でも悪でも皆それぞれ道理のありますもの、結果だけを見て一概に罵倒も出來ない。此の意味でお熊なども

頗る同情に價する點も御座います。偖、餘事は置きまして――

享保年間の事、江戸は新材木町に白子屋といふ材木問屋があつた。家持角屋敷で大層な分限者、此の角屋敷の主となると年頭に營中へ出て將軍家に拜謁する事が出來た大層な家柄、當主の名前は庄三郎と云つて是れは悉く好人物、女房お常との間に出來た獨り娘のお熊、蝶よ花よと育てるうちに齡頃にも相成ると此のお熊が非常な美人になつた。庄三郎の女房といふのは至つて派手好きな性分、それに姥櫻ながら縹緻もなか／＼佳かつた。が何しろ金があるに任かせて贅澤三昧、其の上亭主がお人好しなのですから何をしようと勝手です。ヤレ芝居だ花見だ交際ひだと云つて、娘のお熊は勿論の事女中腰元まで着飾らせて明け暮れ家を外に致し、金錢を湯水の如く遣ひます。湯水の如く金を遣ふとはよく云ふ譬へですが、當節はなかなかどうして湯水だつて滿足には遣へない。ヤレ水道税だヤレ石炭の値上げだと吾れ吾れは脅やかされ通しだ。今に飲料水を瓶詰めで買ふやうになるに違ひない。先達て僕は古い雜誌に載てゐた堀の藝者の懐舊談を讀んだが、其の中に維新當時の名妓堀の小萬に關する話があつて、小萬といふ人は恐ろしい綺麗好きな人で、湯屋へ行つて鼻の穴を洗ふだけに留桶に六杯宛の湯を遣つたといふ事が云つてあつた。是れ位フンダンに遣つてこそ初めて湯水の如くといふ言葉に實感が伴なつて來ると思つた。偖白子屋の内儀で御座いますが、何事に依らず人のしない事をして見度いといふ性質、其處で女だてらに腰へ印籠を提げて歩いた。後には是れが世間一般の婦女子にまで波及して一種の流行となりましたが、其の魁は全く白子屋のお常から始まつた事、當時の風俗として印籠は男子の持物と極まつてゐたので御座います。萬事が此の調子で押し廻るのですから江戸中で白子屋の内儀を知らぬ者はない。人呼んで印籠お常と云ふ。堅氣の商人の女房があざ名で呼ばれるやうになつてはお仕舞ひで御座います。が兎に角此の白子屋の身代は大したもの。角屋敷と云ふものは十字街なら四軒ありさうなものだが、江戸城から見て右に當る場所と限られてゐて、其の實十字街でも一軒しか無かつた。白子屋の屋敷は新材木町西萬河岸にあつて總土藏造りの大層立派な物だつた。現今では土藏造り位何んでもない、鐵筋コンクリート

なぞと云ふ建物が出來て來た、が、享保時代に土藏造りと云へば珍らしかつた。「享保世說」と云ふ隨筆に、此度町屋土藏作りに成候に付狂歌として「裏屋は土藏こそ普請しませうが裏屋の者は藏しかねます」「雲の上は有し昔に瓦やね見し塗だれの內ぞかなしき」「見渡せばみな白妙に成に鬼かきがら屋根の火事の明ぼの」「世の中は渡りかねたる小商人米の高さに腹はあけぼの」下層社會の生活難の叫び聲や、官僚だの資本家に對する無產階級の反抗的氣分に昔も今も變りはない。江戶時代の狂歌や川柳落首等の中には堺さんの隨筆以上に皮肉で辛辣なのが澤山ある米騷動なども舊幕時代の方が猛烈だつた。民衆運動が旺んになつて來たのに對して、社會主義の諸先生が、是れ偏に吾黨宣傳の効果などと自惚れて居られると、大きな御油斷であらう。

二

母親からして斯樣な有樣ですから、自然と娘のお熊も其の風に染みます。家にゐて燻ぶつて裁縫なぞしてゐるから見ると、綺麗な着物を着て外を出歩いて、芝居を看たり遊藝で[illegible]騷いたりしてパツパと金を遣つて遊んでゐる方が何處の娘さ[illegible]つて贊成だ。それにお熊は誰れより縹緻がよいから、何處へ行つても乾度大騷ぎをされる。嬉しくて面白くて溜まらない。親子揃爭で贅澤を盡します。是れでは幾らあつても終ひには足りなくなる。主の庄三郎はお人好しだからそれを抑へる力がない。のみならず店の取締りも十分に出來ない、商法で損をした上に奉公人共が各々蔭で惡い事を働く、と云つた工合でさしも大身代の白子屋も近頃では內幕がヒドク苦しくなつて來た。丁度其處へある世話好きな人があつて「お熊さんも齡頃の事だから聟を貰つてはどうか」と云ふ咄。お常が云ふには「宅も近頃では以前のやうにいかない場合ですから、持參金のある聟だつたら貰つてもいい」といつたやうな話から、それではと云ふので早速緣談が持ち上つた、當の相手といふのは、大傳馬町一丁目地主彌太郎通稱川喜田の番頭又四郎といふ人物、五百兩の持參金で白子屋へ聟養子に來ることになつた。愈々緣談が纏り好道吉日を選んで立派な祝言を擧げて、又四郎は目出度く此の評判娘の聟になつた。處で、又四郎といふ男はどんな人物かと申しますと生れは勢州松坂在の百姓の倅、幼少の時から川喜田へ奉公し

年季を叩き上げた上に十年のお禮奉公まで勤めた實直一方の男働く事なら人の三倍掛けも働くが遊ぶ事は大嫌ひ、年中澤庵と味噌汁と乾物と油揚を食つてゐれば一向痩せないといふ重寶な體、丈が低くてチンチクリンで、色が炭團のやうに黒く、若白髮がある上に禿げてゐる。獅子鼻で鰐口だ。言ふ事が下等で錢勘定以外に物の面白味といふ事は更に解しない。永年川喜田に奉公してゐても唯の一度も自腹で茶屋酒を飲んだ事もない。吉原の大門がどつちを向いて立つてゐるか卅五歳の今日まで未だに見當が付かない。其の又四郎がお熊を見染めたのだ。爪で火をともして貯めた命より大切な金もお熊のためなら惜しくはない了簡になつたのが恐ろしい。だから望みが叶つてお熊を女房にすることが出來た又四郎の歡喜と得意は非常なものだが。災難なのはお熊だ。お熊は無論最初から此の縁談は死ぬ程厭だつたけれど、家が潰れるか潰れないかの瀬戸際だからどうか我慢して承知してお呉れと生の親のお常から手を合せんばかりにして頼まれて見ると、そう我儘ばかりも云へないやうな氣がしてつい首を縱に振つて仕舞つたのだつた。が今となつて見るとそれは取り返しの付かない失策だつた。怎んな事ならいつそ勘當されるまでも強情を張り通すだつたのにと後悔しても後の祭りです、どう氣を取り直して見ても又四郎を愛する氣にはなれない。戀女を女房にした又四郎がしつこく附き纏へば附き纏ふほど、お熊は身顫ひが出るほど厭になる、「わたしは日本一の好い男を亭主に持つつもりでゐたのに」と思ふとお熊は現在の我が身が死ぬ程情無くなる。男といふ男が誰れを見ても自分の亭主よりは好男子に見えます。雪駄直しでも肥取り百姓でも、眼つかちでも鼻つかけでも、まだしも又四郎に比べると遙かに増しな所かある「全體」とお熊は考へるので御座います。「怎んなに厭で厭でならない夫に從つてゐなければならない理屈が何處にあるのだらう?わたしは五百兩の金で身を賣つたやうなものだ、花魁は身を賣る替りに勝手に好きな男をこしらへるそうだ、わたしだつて同じ事だ、わたしが好き勝手な事をしたからつて何が惡い事があらう?」と母親のお常が髮結ひの清三郎と内々でしてゐる事をお熊は思ひ浮かべました。それは内緒事には違ひないが、其の實隨分大びらな場合もあるのでした。此の外にもお常

は、芝居茶屋の二階とか船宿とかいふ所でいろ〳〵な事をしてゐるのをお熊はチャンと承知してゐた。此の事は今生みの親に對する不快な念を醸させる原因になつてゐたのだが、今となつて考へて見れば母親の行爲だつてそう大して惡い事のやうには思はれない。母には母で又同情すべき所もあるやうな氣持が致してまゐります。今日も今日とてお熊は獨りで考へたり、じれたり致して居ります處へ「御免下さい」と這入つて來ましたのは番頭の忠七で御座います。

「おや忠七、何か用なの？」

「否え、別に用事も御座いませんが、今日はお獨りでお淋しからうと存じまして、お部屋の前を通りましたからお邪魔を致しましたので、したがお孃樣、どうやらお顔の色が勝れぬやうですが、御氣分でもお惡いのでは御座いませんか」

「いいえ忠七、氣分なぞ惡い事はないけれど」お熊は多年同じ家にゐて氣心を知つた忠七の顔を見ると、此の胸のムシャクシャを聞いて貰ひ度くて仕方がなくなるので御座います「まあ忠七もつとこちらへお寄り、今お茶でも上げるから――。本當に忠七聞いてお呉れ、妾アねえ、もう此の頃はつく〴〵情無くて仕樣がないんだよ、何んて妾ア因果な身の上なんだらうねえ、いつそ一と思に死んで仕舞ひ度いと思ふくらひなんだよ」

「ハテネ、判りませんなあ。私共の考へでは世の中にお孃樣ほど幸せなお方は二人とあるまいと存じますがなあ、お金は腐る程有り餘るお家にお生れ遊ばして、御兩親も滿足なら今度は又結構なお聟樣をお貰ひ遊ばし、お聟樣はあんなに堅いお方でお道樂をなさる心配はなし、先づ何一つ御不足の無い御身分ぢやあ御座いませんか」

「忠七、後生だから揶揄ふのは止してお呉れ、妾アね、あの人の事を云はれ〻と體がぞッとして來るの。本當にお前察してお呉れな、妾アお父樣やお母樣のお言ひ付けだから承知したやうなもの丶、考へると悲しくつて悲しくつてなりませんわ」と云ひながらお熊は情無さと口惜しさとで自然に涙が涌いて來るのを黄八丈の着物の袖で拭ひます。黒襦子の幅の廣い掛襟と色の配合の宜ろしいまだ元服前の娘風でゐる紅い半襟の中からスルナリと抜け出した首が、髮の重さに堪へられぬやうにうなだれ

て居ります。下ぶくれの頬、横から見た形に申し分の無い鼻、口許は齢の割りに少し仇ッぽ過ぎるやうで御座います。帯は上方風に両端をダラリと下げて結んでゐるのが、圓いお尻の下から現はれてゐる透き通るやうな足の平の上に垂れ掛かつて居ります。本物の講釋師がよく申します沈魚落雁閉月羞花とか海棠の雨に惱める風情とか云ふのは正に是れで御座います。番頭の忠七は思はず恍惚として仕舞ひました。と同時に何んとも云へない嫉妬の情がムラ〳〵と込み上げて參ります。白雲頭の小僧の時分から三十近い此の年迄主人大事と奉公して來たのも、洗つて見ればお熊といふ對照物があつたればこそ出來た永の辛抱併し乍ら相手は何を云ふにも主人の娘、それに贅澤で人一倍氣位の高い性分だから奉公人風情の身では浮つかりした事も云へないと餘計な遠慮をしてゐたばかりに、突然(だしぬけ)に飛び出して來たあのチンチクリンのヘナチョコ面(づら)の土百姓に横取りをされて仕舞つた、鳶に油揚を浚はれたとは全く此の事だ、何んたる莫迦げた事だらう――と思ふと忠七はムラムラ腹が立つて參ります。斯うなればもう破れかぶれだ、遲蒔きながら當つて砕けろといふ度胸も起きて來る。

「もしお孃樣、さう仰つしやれば此の忠七も、實は蔭ながらお察ししてゐない譯では御座いません。廣い江戸中でも指を折られるお前樣の御縹緻なら。どんな立派な旦那樣でもお持ちになる事が出來ましたのに、斯う申しちやあ誠に失禮で御座いますが又四郎樣ではちと不釣合ひだと誰れでもお噂申して居りますやうな譯で、全くお氣の毒で御座います」

「おや忠七、お前本當にさう思つてお呉れかへ?、妾ア實に厭で厭で、顏を見るのも聲を聞くのも厭――」

「御尤で御座います。したがお熊樣、世の中といふものは妙な物で御座いますなあ。早い咄が、唄の文句でも思ふ人とは添はれず思はぬ人と添ふのが浮世の慣ひだなぞと申してありますが貴女樣のためなら命も要らぬまで焦れてゐる男は世間に幾らも御坐いますのに、其の御當人の貴女樣はお心に染まぬ旦那樣をお持ち遊ばして御苦勞なさらねばならぬといふのは、出雲の神樣も飛んだ罪作りで御坐いますよ」

「お前は何時の間にか大層口が上手になつたね、何んで妾見た

には大ていの男が不足に見え、殊に子供の時分から同じ家の中　ら直きに氣が付きます。大體最初から、お熊の自分に對する

で暮らして、「忠七、忠七」と呼び付けてゐた人間なんか問題にし　といふものは甚だ物足りない。それが近頃では夫たる自

て見る氣はテンテ起きた事もなかつたが、斯う云はれて今初め　然度外視致して眞に目に餘る振舞ひをする。又[illegible]

て相手の顔をしみじみと見るやうな氣が致すので御座いました　は是れ並面白くない事はない。が、併しどうとも致[illegible]

ましたる男振りではないけれど、[illegible]しと思へば[illegible]ではない。[illegible]何處か[illegible]分の方が[illegible]だらけだ。第一お熊に[illegible]

[illegible]、稍もすれば[illegible]けた、江戸っ兒だけに何處か[illegible]る、理を立てて[illegible]するには未熟があり過ぎる。それ[illegible]

悲しさ、自分の方から離縁を取ろうと云ふ日になると、持參金の五百兩を此の家へ置いて出て行かなけりやならない。女房に嫌はれて惡い事をせられた上に、命と釣り替への五百兩をフイにして追ん出たのでは全く立ち場がない。又四郎も飛んだ處へ聟に來たもので御坐います。今では家内中誰れ一人知らない者もありませんが、唯一人主の庄三郎だけは一向それに氣が付かずアッケラカンと致してゐる。それも其の筈だ、自分の女房の不義をさへ知らずに居る男だ。お常は年甲斐もなく、廻り髪結ひの清三郎といふノッペリした男を家まで引き入れて、亭主が帳場へ坐つてゐる間は奥で勝手に巫山戯てゐる。肝心の母親が恁んな風だから娘の所業に意見の出來よう筈はない。又醜男の聟の顔を見ると、吾が身に引き較べて娘に同情する氣にもなつてくる。其處で親子競爭で不行跡をする。いやもう白子屋の家の中はお話にならない亂脈だ。家庭に締りのない家に店の締りがあろう筈はない。庄三郎がボンヤリしてゐるのに付け込んで奉公人が各々惡い事をする。聟の又四郎は薄々それに氣が付いてはゐるけれど部屋住みの身だから商賣の事に口を出す資格がない

そんな有様で、又四郎が持つて來た五百兩の金も僅か一二年の間に無くなつて仕舞つて、白子屋の財政は又もや運轉がとまり掛けて參りました。其處で、庄三郎夫婦と忠七とが額を集めて凝議の結果、祖先傳來の此の角屋敷を賣つてそれで負債を償却するのほかはないといふ事になりました。が世間體もあると[illegible]だから極く内々で事を運び度いものだと考へまして、同じ町[illegible]に住んでゐる加賀屋長兵衛といふ人に來て貰つて譯を話し、屋敷を買つて貰ひ度いと云つて頼んだ。すると長兵衛が駭いて「それあ誠にお氣の毒な譯だ。併し御先祖から貰つた此の角屋敷を賣りなさるのは如何にも惜しい話だ、又、聟殿の又四郎さんとても家屋敷があればこそ五百兩といふ持參金も持つて養子に來なすつたといふもの、旁々屋敷を賣りなさるのは惡い分別だ。金が御入用なら私が貸て上げませう」と、此の長兵衛といふ人が大俠[illegible]のある人で、三百兩といふ金を無抵當で貸して呉れた。是れで身上の繰り廻しは何やら凌ぎが付いたけれど、濟まないのは家庭の亂れで御坐います。加賀屋の長兵衛も是れを大層[illegible]に掛けてたびたび白子屋へ來てはそれとなく意見を加へ

には大ていの男が不足に見え、殊に子供の時分から同じ家の中ら近きに氣が付きます。大體最初から、お熊の自分に對する
で暮らして、「忠七、忠七」と呼び付けてゐた人間なんか問題にしといふものは甚だ物足りない。それが近頃では夫たる自[illegible]
て見る氣はテンテ起きた事もなかつたが、斯う云はれて今初め然度外視致して實に眼に餘る振舞ひをする。又自[illegible]
て相手の顏をしみじみと見るやうな氣が致すので御座いましたは是れ位面白くない事はない。が、併しどうと云[illegible]
きしたる男振りではないけれど、[illegible]しく思はれない。私も何故かと云ふ[illegible]の方が[illegible]たらけた。第一、お熊には[illegible]
[illegible]稍[illegible]した[illegible]た。江戸つ兒だけに何處かある、[illegible]を立てて離縁するには未練があり過ぎる。それ[illegible]

悲しさ、自分の方から離縁を取ろうと云ふ日になると、持參金の五百兩を此の家へ置いて出て行かなけりやならない。女房に嫌はれて惡い事をせられた上に、命と釣り替への五百兩をフイにして追ん出たのでは全く立ち場がない。又四郎も飛んだ處へ聟に來たもので御坐います。今では家内中誰れ一人知らない者もありませんが、唯一人主の庄三郎だけは一向それに氣が付かずアッケラカンと致してゐる。それも其の筈だ、自分の女房の不義をさへ知らずに居る男だ。お常は年甲斐もなく、廻り髪結ひの清三郎といふノッペリした男を家まで引き入れて、亭主が帳場へ坐つてゐる間は奥で勝手に巫山戯てゐる。肝心の母親が恁んな風だから娘の所業に意見の出來よう筈はない。又醜男の聟の顔を見ると、吾が身に引き較べて娘に同情する氣にもなつてくる。其處で親子競爭で不行跡をする。いやもう白子屋の家の中はお話にならない亂脉だ。家庭に締りのない家に店の締りがあろう筈はない。庄三郎がボンヤリしてゐるのに付け込んで奉公人が各々惡い事をする。聟の又四郎は薄々それに氣が付いてはゐるけれど部屋住みの身だから商賣の事に口を出す資格がない

そんな有様で、又四郎が持つて來た五百兩の金も僅か一二年の間に無くなつて仕舞つて、白子屋の財政は又もや運轉がとまり掛けて參りました。其處で、庄三郎夫婦と忠七とが額を集めて凝議の結果、祖先傳來の此の角屋敷を賣つてそれで負債を仕拂するのほかはないといふ事になりました。が世間體もあるで上だから極く内々で事を運び度いものだと考へまして、同じ町にに住んでゐる加賀屋長兵衛といふ人に來て貰つて譯を話し、屋敷を買つて貰ひ度いと云つて賴んだ。すると長兵衛が驚いて「それあ誠にお氣の毒な譯だ。併し御先祖から貰つた此の角屋敷を賣りなさるのは如何にも惜しい話だ、又、聟殿の又四郎さんとても家屋敷があればこそ五百兩といふ持參金も持つて聟にに來なすつたといふもの、旁々屋敷を賣りなさるのは惡い分別だ金が御入用なら私が貸て上げませう」と、此の長兵衛といふ人が大層俠氣のある人で、三百兩といふ金を無抵當で貸して呉れた 是れで身上の繰り廻しは何やら凌ぎが付いたけれど、濟まないのは家庭の亂れで御坐います。加賀屋の長兵衛も是れを大層氣に掛けてたびたび白子屋へ來てはそれとなく意見を加へ

へてまみ[illegible]た[illegible]の[illegible]は[illegible]、[illegible]畢竟「もし若旦那様、お昼で御座います」

又四郎といふ邪魔者が居るから愛しい男の心もくれるのだと考へる。「おゝ誰かと思つたら巨作か。今日は大層早く過ぎ[illegible]

へる。益々夫に對する當りは惡くなつて來る。お富は何時でも奴 ないた。もう家の財布は貴方のだ」

の味方だ。「忠七も困つたものだが、併し彼の身になれば面白く 「へい、[illegible]と[illegible]ました。[illegible]

ならぬも無理はない」と蔭で[illegible]の[illegible]をする。そして [illegible]

[illegible]の[illegible]口[illegible]て逃げ出して 「そうだて。天氣が好いと氣が晴れ〳〵する。

お前はよく働いて呉れて感心だな、私は知つちやあゐるが部屋住みの身分でどうにもならない。何時の事だか分らないが、時節の來る迄お前も家にゐて呉れたら、何んとかして上げ度いと思つてゐるんだよ」

「どう致しまして、俺等あ此の辺りの田舍者で何んにもお間に合ひましねえだ。――時に若旦那樣、異しな事を云ふやうでどがすが、お前樣今朝はお宅で御飯を召し上つちやあなりましねえだよ」

「えツ、それあ長介どういふ譯だ？」

「へい、實あ俺其の事をお耳に入れべいと思つたからお前樣の後からお湯に參りましただ。他ぢやあ御座えませんが、若旦那樣今朝お前樣に差上げる味噌汁には毒が這入つて居りますだよ」

「だ、誰れがそんな事をしたのだ」

「それは俺の口からは云へましねえだ、お前樣お察しなすつてお呉んなされ。俺らあ勝手の仕事をするのが自分の役目、落度になつちやあなんねえと思ふから竊りお前樣だけにお知らせ申しますだよ、ほんにお前樣も並大抵な御苦勞ぢやあ御座えましねえなあ」

「長介、よく知らして呉れた。いづれ此の事についちやあ思召は十分にするからなあ」

流石に我慢強い又四郎だが、此の時ばかりは憎悪の情が溢れた。さらで御坐いませう。幾ら惚れてゐる女にもしろ、毒藥を呑ませられちやあ溜まらない、どんなウンデレガンだつて眼が醒めます。又四郎は血相變へて湯殿を飛び出すと其の足で加賀屋長兵衞の處へ驅けつけて逐一事情を物語る。長兵衞も賢い人。早速白子屋へ遣つて參りまして親子の者に向つて、懇々と異見を加へた。確かな証人もある事なので一寸ダウの音も出來ない、種々詫びを入れて内濟にして貰ふ事になつた。が、加賀長の考へとしても、もう斯うなつた上は所謂離緣の外はないと思ふので、庄三郎を自宅へ呼んで又四郎を離緣する事を勸めた。「持參金の返濟に困るなら今度こそ止むを得ないから屋敷を賣りなさい、あの儘にしてゐると仕舞ひには取り返しの付かない事になり兼ないから」と云ひますと、庄三郎は好人物の事だから早速其の氣になつて、内々で長兵衞に屋敷を賣り渡して五

せん。さうかう致すうちお熊は懐胎して月滿ちて男子を產み落しました。お熊は自分の生んだ兒も忠七の胤だとばかり信じてゐるので御坐います。忠七もお常も矢張りそう思つてゐるのでありました。が、忠七は、漸く近お熊と深くなつて見ると、自分の不義の立ち場をも忘れて、お熊と自分との關係を日蔭にばかり置かなければならないのが不滿になつて來る。又四郎を若且那と仰ぎ、お熊の夫としての權利を認めなければならない場合に、忠七は反感と嫉妬を起さずにはゐられない。人間といふものは得手勝手なもので御座います。面白くない事があると忠七は店を飛び出して遊びにゆく。近頃忠七の廓通ひが激しくなつてまゐりました。斯うなると心配なのはお熊だ、是れも畢竟又四郎といふ邪魔者が居るから愛しい男の心もぐれるのだと考へる。益々夫に對する當りは惡くなつて來る。お常は何時でも娘の味方だ。「忠七も困つたものだが、併し彼の身になれば面白くないのも無理はない」と飛んだ見當違ひの同情をする。そして親子で顏を合せると婿の惡口ばかり、何んとかして追ひ出して

參金を返して遣らなければならない、それは出來ない事だ。何かうまい工夫はあるまいかねえ」と母子は寄ると障ると評議を致して居る。伊勢つ子の又四郎流石に辛抱が宜い、かうなれあ石の上でも針の上でも我慢して坐つてゐる。或る日のこと又四郎は用もないので錢湯に出掛けた。丁度湯は空いてゐていゝ心持ちだ。「あゝいい湯加減だ、どうも此の朝湯の氣持はなんとも云へないな——俺も白子屋へ來てから早いもので足掛け三年になるが、唯の一時でも暢んびりとした事はない、せめて此の朝湯に浸つてゐるやうな氣持で一日でも暮して見たいものだ——」なぞと詰まらぬ事を考へてゐる。と、後から、

「もし若旦那樣、お早う御座います」

「おゝ誰かと思つたら長介か。今日は大層早く湯に來たぢやあないか、もう家の用事は濟んだのか」

「へい、漸く片付けて參りました、好えあんばいにお天氣で御座えますな」

「そうだて。天氣が好いと氣が晴れ〴〵するな。——と時に長介

お前はよく働いて呉れて感心だな、私は知つちやあゐるが部屋住みの身分でどうにもならない。何時の事だか分らないが、時節の來る迄お前も家にゐて呉れたら、何んとかして上げ度いと思つてゐるんだよ」

「どう致しまして、俺等あ此の邊りの田舍者で何んにもお間に合ひましねえだ。——時に若旦那様、異(おか)しな事を云ふやうでごがすが、お前様今朝はお宅で御飯を召し上つちやあなりましねえだよ」

「えツ、それあ長介どういふ譯だ？」

「へい、實あ俺其の事をお耳に入れべいと思つたからお前様の後からお湯に參りましただ。他ぢやあ御座えませんが、若旦那様今朝お前様に差上げる味噌汁には毒が這入つて居りますだよ」

「だ、誰れがそんな事をしたのだ！」

「それは俺の口からは云へましねえだ、お前様お察しなすつてお呉んなされ。俺らあ勝手の仕事をするのが自分の役目、落度になつちやあなんねえと思ふから密(こつそ)りお前様だけにお知らせ申しますだよ、ほんにお前様も並大抵な御苦勞ちやあ御座えましねえなあ」

「長介、よく知らして呉れた。いづれ此の事についちやあ恩返は十分にするからなあ」

流石に我慢強い又四郎だが、此の時ばかりは勘忍袋の緒が切れた。さうで御坐いませう。幾ら惚れてゐる女にもしろ、毒藥を呑ませられちやあ溜まらない、どんなウンデレガンだつて眼が醒めます。又四郎は血相變へて湯屋を飛び出すと其の足で加賀屋長兵衛の處へ驅けつけて逐一事情を物語る。長兵衛も驚いた。早速白子屋へ遣つて參りまして親子の者に向つて、恐々と異見を加へた。確かな證人もある事なので一寸グウの音も出來ない、種々詫びを入れて內濟にして貰ふ事になつた。が、加賀屋の考へとしても、もう斯うなつた上は所謂離緣の外はないと思ふので、庄三郎を自宅へ呼んで又四郎を離緣する事を勸めた。「持參金の返濟に困るなら今度こそ止むを得ないから屋敷を賣りなさい、あの儘にしてゐると仕舞ひには取り返しの付かない事になり兼ないから」と云ひますと、庄三郎は好人物の事だから早速其の氣になつて、內々で長兵衛に屋敷を賣り渡して五

實際も年——と云ふと白子屋事件の結末から卅一年目に當りますが、馬文耕が「近世江都著聞集」を書いた當時は其の跡に和國餅といふ餅屋があつた。是れは當時の人氣役力の和國が其處へ店を出したので、なか〳〵評判で、其の前の橋を和國橋と呼ぶやうになつた。現在では萬橋と云つて居ります。現今京橋區新材木町西岡河岸の北の角五十二號に土藏が三棟ある。橋詰の土藏が白子屋で建てたものださうだ。勿論度々火災に遇つて來てゐるが、其の都度修復を加へて保存されて來たのだと申されます。本宅のあつた處は此の土藏の向ひ側の間口十二間奥行二十五間の地面で、現今長壽庵といふ蕎麥屋と織物商の久保米といふ人の店のある所が全くの白子屋の舊蹟だと申すことで御坐います。

四

白子屋の離れ座敷では、お常とお熊と、それに忠七が加はつて何やらヒソヒソ密談を交して居りますが、どうも思はしい考へも無いと云つた樣子、すると忠七が不圖思ひ付いた體で申し

「怎んな工夫はどうで御坐いませう？あの小間使のお菊さんですが、あの子は除り利口でもないやうですから欺したら多分承知するだらうと思ひますが——あの子に剃刀か何か持たせて若旦那のお寢間へ忍び込ませて突然に少しばかり斬り付けさせるんです。それから自分の體にも幾らか疵を付けさせるんですな、そうすると無論大騷ぎになりますが、其處であの子に「若旦那と心中をする積りだ」と云はせるんです。若旦那が何んと言ひ譯をしたつて兩方の體に疵が付いてるのが何よりの証據、それにお菊さんは一寸顏も綺麗ですから人が聞いてもおかしく御坐いません。そこで否應なしに若旦那を離緣といふことになれあ、持參金も返さないで濟むぢや御坐いませんか」

「感心——ほんとに忠七お前は感者だよ」と直ぐ樣お常は賛成して「早速お菊を玆へ呼んで旨く欺くらかして言ひ付けることにしよう」

「でもお母様、あのお菊がそんな難かしい芝居を旨く演れるでせうか？妾ア何んだか心配でなりませんよ、そんな危ない事を

するより黙つて五百両返して出て行つた貰つた方がいいぢやあないの、妾アどんなに貧乏になつたつて、乞食をしたつて、あの人と別れさへしたら本望たんですから」

「莫迦な事をお云ひでない、お前は乞食になつても本望か知らないが妾達あどうするんだえ。何、乾度旨くいくから心配しないで見ておいで」

と母の言葉にお熊も其の氣になつて同意致しました。早速小間使のお菊を側へ呼び、金や衣類を澤山に與へまして、偖此の仕事を仕了ふせた曉にはタンマリ褒美を遣るからと、少々智恵の足りないお菊を旨く欺して承知させてしまつた。そんな惡企みがあろうとは夢にも知らぬ又四郎、獨り寢の閨の內、最早此の白子屋の家に寢るのも僅かだと思ふと、さすがに感慨無量で眠られません。軈て眞夜半とおぼしき頃、ミシリ、ミシリツといふ足音、「ハテ今時分誰だろう?」と油斷無く薄眼を明けてゐるとも知らず、又四郎の寢所へ忍び込んで來たのは小間使のお菊で御座います。慾に眼が眩れてやつて來たやうなものの、お菊は恐ろしくて體中がガタ〳〵慄へます。漸う又四郎の側迄這寄つて肩突きに剃刀を以て又四郎の喉の邊へ斬り付けた途端にツと跳ね起きた又四郎が矢庭にお菊の腕を促へて膝の下へ敷いて仕舞つた。「曲者だ、曲者だ」と又四郎は大聲で呶鳴りたてたので家中の者が起きて來る。お熊や忠七がマゴマゴしてゐるうちに又四郎は素早く下男の長介を走らせて町役人達を呼んで來さした。心中の言ひ立てどころの沙汰ではない「是れに就いては段々と仔細の有る事、委細は公儀へ出て申立てませう」と又四郎は役人に向つて斷乎として云ひ切りました。加賀屋長兵衞がいろ〳〵云ひ宥めて內濟に扱はふと思つて骨を折つたが今度は其の甲斐がない。第一、又四郎の仲人と親元の川喜田が頑として承知しない。到頭表沙汰になり、大岡越前守の白洲へ白子屋の家內一同呼び出されることゝ相成りました。流石の名奉行も此の事件の調査を見た時には「八逆の者を數多く出さなければならない」と云ふて眉の間に皺を寄せた。事件が落着を告げたのは享保十二年十二月七日の事であつた。一同の罪科は次ぎの如く云ひ渡された。

又四郎妻　熊

寶曆七年——と云ふと白子屋事件の結末から卅一年目に當りますが、馬文耕が「近世江都著聞集」を書いた當時は其の跡に和國餅といふ餅屋があつた。是れは當時の人氣角力の和國が其處へ店を出したので、なか〳〵評判で、其の前の橋を和國橋と呼ぶやうになつた。現在では萬橋と云つて居ります。現今京橋區新材木町西萬河岸の北の角五十二號に土藏が三棟ある。橋詰の土藏が白子屋で建てたものださうだ。勿論度々火災に遇つて來てゐるが、其の都度修復を加へて保存されて來たのだと申されます。本宅のあつた處は此の土藏の向ひ側の間口十二間奥行二十五間の地面で、現今長壽庵といふ蕎麥屋と織物商の久永某といふ人の店のある所が全くの白子屋の舊蹟だと申すことで御坐います。

四

白子屋の離れ座敷では、お常とお熊と、それに忠七が加はつて何やらヒソヒソ密談を交して居りますが、どうも思はしい考へも無いと云つた樣子、すると忠七が不圖思ひ付いた體で申し

「怎んな工夫はどうで御坐いませう？あの小間使のお菊さんですが、あの子は餘り利口でもないやうですから欺したら多分承知するだらうと思ひますが——あの子に剃刀か何か持たせて若旦那のお寢間へ忍び込ませて突然（だしぬけ）に少しばかり斬り付けさせるんです。それから自分の體にも幾らか疵を付けさせるんですなそうすると無論大騒ぎになりますが、其處であの子に「若旦那と心中をする積りだ」と云はせるんです。若旦那が何んと言ひ譯をしたつて兩方の體に疵が付いてるのが何よりの証據、それにお菊さんは一寸顏も綺麗ですから人が聞いてもおかしく御坐いません。そこで否應なしに若旦那を離縁といふことになれあ、持參金も返さないで濟むぢや御坐いませんか」

「感心——ほんとに忠七お前は智者だよ」と直ぐ樣お常は賛成して「早速お菊を茲へ呼んで旨く欺（だま）くらかして言ひ付けることにしよう」

「でもお母樣、あのお菊がそんな難かしい芝居を旨く演れるでせうか？妾ア何んだか心配でなりませんよ、そんな危ない事を

するより默つて五百兩返して出て行つた貰つた方がいいぢやあないの、妾アどんなに貧乏になつたつて、乞食をしたつて、あの人と別れさへしたら本望たんですから」

「莫迦な事をお云ひでない、お前は乞食になつても本望か知らないが妾達あどうするんだえ。何、乾度旨くいくから心配しないで見ておいで」

と母の言葉にお熊も其の氣になつて同意致しました。早速小間使のお菊を側へ呼び、金や衣類を澤山に與へまして、偖此の仕事を仕了ふせた曉にはタンマリ褒美を遣るからと、少々智惠の足りないお菊を旨く欺して承知させてしまつた。そんな惡企みがあろうとは夢にも知らぬ又四郎、獨り寢の閨の內、最早此の白子屋の家に寢るのも僅かだと思ふと、さすがに感慨無量で眠られません。軈て眞夜半とおぼしき頃、ミシリ、ミシリツといふ足音、「ハテ今時分誰だろう?」と油斷無く薄眼を明けてゐるとも知らず、又四郎の寢所へ忍び込んで來たのは小間使のお菊で御座います。慾に眼が眩れてやつて來たやうなものの、お菊は恐ろしくて體中がガタ／＼慄へます。漸う又四郎の側迄這寄つて肓突きに剃刀を以て又四郎の喉の邊へ斬り付けた途端に、ツと跳ね起きた又四郎が矢庭にお菊の腕を促へて膝の下へ敷いて仕舞つた。「曲者だ、曲者だ」と又四郎は大聲で呶鳴りたてたので家中の者が起きて來る。お熊や忠七がマゴマゴしてゐるうちに又四郎は素早く下男の長介を走らせて町役人達を呼んで來さした。心中の言ひ立てどころの沙汰ではない「是れに就いては段々と仔細の有る事、委細は公儀へ出て申立てませう」と又四郎は役人に向つて斷乎として云ひ切りました。加賀屋長兵衛がいろ／＼云ひ宥めて內濟に扱はふと思つて骨を折つたが今度は共の甲斐がない。第一、又四郎の仲人と親元の川喜田が頑として承知しない。到頭表沙汰になり、大岡越前守の白洲へ白子屋の家內一同呼び出されることゝ相成りました。流石の名奉行も此の事件の調査を見た時には「八逆の者を數多く出さなければならない」と云ふて眉の間に皺を寄せた。事件が落着を告げたのは享保十二年十二月七日の事であつた。一同の罪科は次の如く云ひ渡された。

又四郎妻　熊

百兩の金を受取つた。白子屋の屋敷は加賀長の所有に移つて、寶暦七年――と云ふと白子屋事件の結末から卅一年目に當りますが、馬文耕が「近世江都著聞集」を書いた當時は其の跡に和國餅といふ餅屋があつた。是れは當時の人氣角力の和國が其處へ店を出したので、なか〳〵評判で、其の前の橋を和國橋と呼ぶやうになつた。現在では萬橋と云つて居ります。現今京橋區新材木町西島河岸の北の角五十二號に土藏が三棟ある。橋詰の土藏が白子屋で建てたものださうだ。勿論度々火災に遇つて來てゐるが、其の都度修復を加へて保存されて來たのだと申されます。本宅のあつた處は此の土藏の向ひ側の間口十二間奥行二十五間の地面で、現今長壽庵といふ蕎麥屋と織物商の久保某といふ人の店のある所が全くの白子屋の舊蹟だと申すことで御座います。

四

白子屋の離れ座敷では、お常とお熊と、それに忠七が加はつて何やらヒソヒソ密談を交して居りますが、どうも思はしい考へも無いと云つた樣子、すると忠七が不圖思ひ付いた體で申しますには、

「恁んな工夫はどうで御座いませう？あの小間使のお菊さんですが、あの子は餘り利口でもないやうですから欺したら多分承知するだらうと思ひますが――あの子に剃刀か何か持たせて若旦那のお寢間へ忍び込ませて突然に少しばかり斬り付けさせるんです。それから自分の體にも幾らか疵を付けさせるんですなそうすると無論大騷ぎになりますが、其處であの子に「若旦那と心中をする積りだ」と云はせるんです。若旦那が何んと言ひ譯をしたつて兩方の體に疵が付いてるのが何よりの證據、それにお菊さんは一寸顏も綺麗ですから人が聞いてもおかしく御座いません。そこで否應なしに若旦那を離緣といふことになれあ、持參金も返さないで濟むぢや御座いませんか」

「感心――ほんとに忠七お前は策者だよ」と直ぐ樣お常は賛成して「早速お菊を玆へ呼んで旨く欺くらかして言ひ付けることにしよう」

「でもお母樣、あのお菊がそんな難かしい芝居を旨く演れるでせうか？妾ア何んだか心配でなりませんよ、そんな危ない事を

するより默つて五百兩返して出て行つた貰つた方がいいぢやあないの、妾アどんなに貧乏になつたつて、乞食をしたつて、あの人と別れさへしたら本望たんですから」

「莫迦な事をお云ひでない、お前は乞食になつても本望か知らないが妾達あどうするんだえ。何、乾度旨くいくから心配しないで見ておいで」

と母の言葉にお熊も其の氣になつて同意致しました。早速小間使のお菊を側へ呼び、金や衣類を澤山に與へまして、偖此の仕事を仕了ふせた曉にはタンマリ褒美を遣るからと、少々智恵の足りないお菊を旨く欺して承知させてしまつた。そんな惡企みがあろうとは夢にも知らぬ又四郎、獨り寢の閨の内、最早此の白子屋の家に寢るのも僅かだと思ふと、さすがに感慨無量で眠られません。軈て眞夜半とおぼしき頃、ミシリ、ミシリツといふ足音、「ハテ今時分誰だろう?」と油斷無く薄眼を明けてゐるとも知らず、又四郎の寢所へ忍び込んで來たのは小間使のお菊で御座います。慾に眼が眩れてやつて來たやうなものの、お菊は恐ろしくて體中がガタ〳〵慄へます。漸う又四郎の側迄這寄つて首突きに剃刀を以て又四郎の喉の邊へ斬り付けた途端にツと跳ね起きた又四郎が矢庭にお菊の腕を促へて膝の下へ敷いて仕舞つた。「曲者だ、曲者だ」と又四郎は大聲で呶鳴りたてるので家中の者が起きて來る。お熊や忠七がマゴマゴしてゐるうちに又四郎は素早く下男の長介を走らせて町役人達を呼んで來さした。心中の言ひ立てどころの沙汰ではない「是れに就いては段々と仔細の有る事、委細は公儀へ出て申立てませう」と又四郎は役人に向つて斷乎として云ひ切りました。加賀屋長兵衛がいろ〳〵云ひ宥めて内濟に扱はふと思つて骨を折つたが今度は其の甲斐がない。第一、又四郎の仲人と親元の川喜田が頑として承知しない。到頭表沙汰になり、大岡越前守の白洲へ白子屋の家内一同呼び出されることゝ相成りました。流石の名奉行も此の事件の調査を見た時には「八逆の者を數多く出さなければならない」と云ふて眉の間に皺を寄せた。事件が落着を告げたのは享保十二年十二月七日の事であつた。一同の罪科は次の如く云ひ渡された。

又四郎妻　熊

此者儀、手代忠七と致二密通一不屆至極に付、町中引廻し、
於二淺草一獄門に行ふ者也

正三郎手代　忠七

此者儀、主人正三郎養子又四郎妻と致二密通一不屆至極に付
町中引廻し於二淺草一獄門に行ふ者也

正三郎下女　菊

此者儀、主人正三郎妻つね、何程申付候とも、主人の事に
候へば致方も可レ有レ之處、又四郎に疵付候段不屆至極に付
死罪に申付
但し引廻しには不レ及候

正三郎妻　常

右常儀、養子又四郎へ菊疵付候儀に付、常事母子之儀に候
へば、惡事露顯、依レ之遠流申付、但事濟候迄牢舍

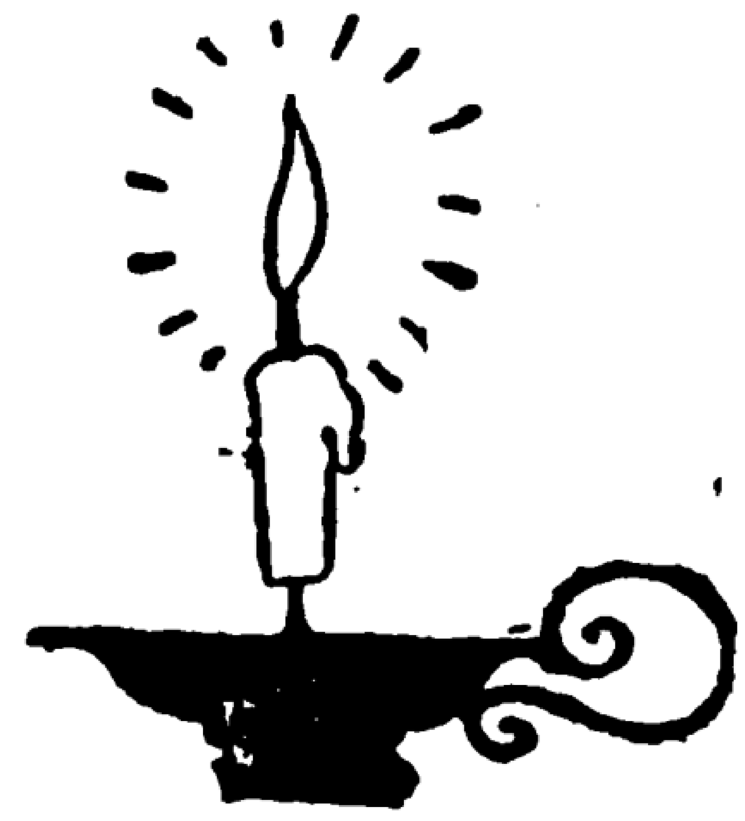
又四郎養父　正三郎

養子又四郎へ菊疵付候節、早速に樣子をも不二見屆一其上妻
娘並手代忠七儀一所に乍二罷在一不レ存段重々不埒成儀に付、
江戸追放申付

正三郎養子　又四郎
同人手代　清兵衛
同人下人　彦八
同　長介
同　權介
同　伊介

此者共御構無レ之候

お熊は引廻しの節、衣裝きよらかに出立ち、白無垢の下着に黄八丈の小袖を襲ね、襟には水晶の念珠を掛けてゐた。其の美しい姿を見ようとして、物見高い江戸の人達は辻から辻へと走るのでした。お熊は馬に乘せられながら、能滅諸有苦、假使興害意、推落大火坑、念彼觀音力……と法華經の普門品を讀誦してゐたと申します。「かゝる時觀音何としてか救ひ玉ふべき」と、「近世江都著聞集」の著者は書き加へて罵つて居ります。併し乍ら僕は、お熊も必ず救はれたに違ひないと堅く信じてゐる人間で御座います。（完）



際物講談 ゲンコツ團長の失望

藤井眞澄

一回

「新社會講談」「大正新落語」といつてなか〳〵雜物ですな。いくら原稿料になるかつて、おつちよこちよいの一夜作り、へんのへもなく、でつちあげられるものぢやありません。何事でも新しく生れさすていことは、相當の年月もかゝれば苦心も入る、況して堂々たる大正の御代の活講談、實落語を創造建設しようといふのですから、さう〳〵たやすく行くわけのものぢやありませんな。

そも〳〵ですな、講談落語なるものは元來文章や讀物ではないので、口舌は音聲の働きを以て耳にうつたへるものぢやありませんか。で若しそれを讀物にしたいとなれば、謂はゆる口演筆記となるのが本當でせう。然るに近頃の大流行、新講談と稱するもの如何と見れば、みんな申合せでもしたのでせうか、通俗はまがい小說、ローマンスは文章體の物語に墮してゐるぢやありませんか。その低腦と無責任な有樣は、實以て言語道斷　至り――と憤慨したいほどですな。「講談」は讀んで字の如く講ずるものであり談ずるものにほかならない、斷じて文章や小說やローマンスぢやねエんだぞ。「イヤちよつと待て」「それは講談の進化ではあるまいか」と逆捩をする人があるかも知れません。が「イヤ決して進化ぢやない」と手前はお答へしたいのです。講談そのものゝ眞意義から見れば、今のこの文章體の講談なるものは德川は封建時代の講談がその內味の直打を欠つて、まだ新しい時代の本物が生れて來ない、謂はゆる過渡の時期のチョンのまの間に合せにと、急いで飛び出たまがいもの、いかさま物

に過ぎませんね。それは恰度その技巧上の質から云つて、近頃大流行の勞働運動ブローカー乃至勞資協調主義ていやつと、同じ藝術的價値を有つものだ――と云はれても致方がありますまいて？全くですな、その材料と云へば資本家は徳川時代の殘りもの貰ひ物で、姿形がまがりなりにも新しい大正の文章體……講談とさへ云へばチョン髷者の幡随院の親方や大鹽の平八郎さん、落語とさへ云へば間拔者の熊さんハッさんがお出ましになるこれぢや遣りきれませんや。これはどうしても「澁六先生一代記」「大杉親方忍術の卷」とかね、それがあんまりぶつさう過ぎるとなれば、せめては「作造教授はデモのクラシー」「賀川師出世譚」、さては「瓦斯喰ひ物語」「ジャリ齧り落語」くらゐのところは遣つて貰ひたヱもんですな。あまりに生々しくて、總ての人間の眞底にせまつて來る、或る人はムカッぱらを立て、或る人は大聲あげて泣きだし、或人はコブシをかためて飛び出とすいふやうな活きた講談を、どなかた拵へて手前共を、どうぞやどうぞひつくらさしておくんなさいまし。

これを要するにですな、その材料はと云へば今日只今の際物問題、その内味はと云へば抑へつけられ…………………………………………………………衆のいのちのあらはれ、その形はと云へば大正現代の一般民衆の言葉、若しそれを活字にしたいとなれば口演筆記體、その見本如何となれば、手前が現に喋りつゝある卽ちこれこのもの――つまり斯ういふ具合にやつて貰ひたいものですな。

斯様にひちむづかしい考から喋べり出す手前の講談なれば、とても完成を期するといふことは望めますまい。その不熟その未完成なところこそ、却つてその特長であり長所であるとごヒイキあつて、末永くお引立の程を願ひます次第ぢや。「よたはいゝかげんにしろト」「手前味噌はひつこめろ―」成程々々よくおつしやつた、だがね、その「よた」その「手前味噌」なるものこそ、元來講談の講たり談たる特長なので、本脈なんか二の次ぎなのでありますぞ――と斯うまア一寸と御注意まで……

さて今晩喋べる手前の題目は、五月一日はメーデーで、感じたお話、「ゲンコツ團長は失望の卷」てい頗るつきの新しいやつ。

天氣もからり氣候もいゝ、海近くだから空氣も綺麗ですな。たゞ惡いのは人間どもの顔色、その顔色を惡くした世の組立だけ――といふやうな三拍子揃ひも揃つた芝浦は埋立地！明治維新の際西郷と勝が出合つたといふ薩摩ツ原邊さへ、十時頃になりますいふと、なんとなく物あやしくソハ〳〵して來ますな。そこいらの電柱には「來れ勞働者諸君！今日は我等の日なり」なんちふビラが貼りつけられます、するとそれを脊の高い蒼黑い朝鮮の學生さんが二三人、物凄さうに立ちとまつて熱心に讀んでゐますのも、この場合なか〳〵見落すことの出來ない、喋り落すことの出來ない光景ですな。

ゲンコツ團長原岡君が顧問の谷君と一緒に、五反田の奥の方からテクで以て、ゲンコツ團の一隊七八十人を引率して會場へやつて來た時、もう芝浦のあの一角にはね、赤や白や黑の會旗が、或はタテに長く延びたり或は横に廣くひろがつたり或は四角になつたりして、ひるがへつてゐるのです。あちこちにかたまつてゐるバラ〳〵の勞働者を見た瞬間ですな、「案外少いな」と團長は呟かざるを得ないのでした。實際、群衆のかたまりが幾つもあつて何かふしよ〳〵囁き合つてゐる有樣は、一面なんだかオツかない秘密な物凄さがあるとも云へますが、他面貧弱な感じを與へるものですな。團長はつく〴〵他の連中の樣子を見たものです、洋服レインコート……筒ツぽう袷……さてはダラリと垂れた袖つきの羽織に呑氣さうな下駄ばきまで其眼にうつつた時、ソツと自分の隊をふりかへつたものです。

「俺の組は谷顧問の紳士洋服姿のほか、みんな揃つて仕事着だ、黑ずんだ青服だ。その上どの他の組よりも一番人數が多いやうだぞ。而かもばくれつだんのやうに固く團結し、はちきれるやうな元氣があるぢやないか。なんていすばらしいこつた……ウヌ今に見てゐろ！」

といふ自信がむく〳〵と團長の全身をおのゝかすのですな。

「僕等の組はあつちへ陣を取りませうね」

「さうだ、あすこがえゝ」

と團長と顧問のちよつと取りかはした斯ういふ言葉の端にも、自負と精氣のあふるゝものがあるのです。やがて「城西筋肉勞働者組合」といふ白い細長い會旗は、スックとばかり右手

の方にお立てられました。それは恰度葬式の吊ひ旗のやうにも見えましたが、然しその周圍を取りまいてゐる團員が悉くヒン握つてゐる紙の小旗にこそ、物凄いゲンコツがあらはれてゐるのを見る時、みんなは、なんだか斯う物たのもしい、そしてこぎみよい感じを受けたものです。會場へ乘込んだ時のおもはゆさが次第にとけ、息づかひも靜かになり血管のふくらみも元に歸つた時でした。

「遣り出したら辨當食ふ時がねエかも知れねエ、今のうち食づてからちやねえか」

と誰か云ひ出しましたので、氣ばやな連中は、脊中や腰につけてゐた辨當をドろして、踏んだり立つたり中には歩きながら、ぱくづき出しました。

「おいゲンコツ!」

と、今まで何處かへ行つてゐました副團長は、ふと其の圓い姿をあらはして斯う怒鳴つたものです。

「なんだ?」「なんだ?」と仲間は一時にサツとその方を見ます。

「俺達は一番後から申込んだので、行列では殿りをつとめることに決まつてるんだが、それでえゝか?」

今日の行軍がどんなものであるかよく知らなかつたものと見えまして、また團長が「殿りをつとめる」と云つた巧妙な言葉にもよりまして、別になんとも不平を云ふ者もありません。それに其の時恰度谷觀間が「いゝでせう」と云つたので、いつさい承諾された形です。

「だがね…だがね、みんな、その代り演說の時は俺達の代表者野田君を一番最初に遣らすやうに、これから談判しようと思ふのだ。サア贊成なら皆んな俺について來い!」

と團長は全身からほとばしり出る聲を一層大きく怒鳴つたものです。

「さうだ/\!」

「いけ/\!」

と仲間は大いに應じます。團長はその眉をピリ/\うごかしたかと思ふと、左肩を右肩より一尺も上へあげて、その元氣のカタマリである身體を踊らしながら、

「ゲンコツ前へ！」

と突進したものです。半分食ひかけてゐた辨當迄も、其のまゝ飛び上つて行きますな。

その猛烈さのせいでもあつたのでせうか、間もなくゲンコツ團は十分その目的を遂した――滿足したやうな顏をして元の處へ引退つて來たものです。辨當はまたばくつかれ出されます。

「原岡先生……原岡先生……」

と云ひながら一人の若い婦人が、後の方から群衆を押分けて、團長の前へとせかせかやつて來るのです。服裝のきたなさに較べるとなかなかの美人――その脊中には四つぐらゐの子供をおんぶしてゐます。

「おやお鶴さんですね！」

「しばらくでございました」

「しばらくでしたね」

「私今日是非先生にお目にかゝれると思つて、さつきから待つてゐたんです――あゝ會へてよかつた……」

婦人はその疲れてはゐるがなかなか根強い賢こさうな顏から、にじみ出る汗をふきながら、息づまるやうに云ふのでした。

「其の後僕はあちこち飛歩いて御無沙汰してますが、岩崎君いかゞですか！」

「先生にはほんとうに色々御厄介になりましたが……とうたういけなくなりました……」

「え？」

「先々月の末――二十七日の朝でございました……」

未亡人は涙を飲んでうつむいてしまひました。その脊におんぶされたといふよりも寧ろくゝりつけられたといふやうな男の子は、何處を見るともなく不思議なその蒼い眼を、ぢつと見はつてゐるのです。團長の肩はぶるぶるとふるへて、其の睫毛の長い目の中から、大きな涙の玉が落ちて來ますな。

「そいつは……そいつは……僕ちつとも知らないかつた！」

「先生にはぜひ一度お目にかゝりたいと申しますので、方々お探ししましたが、さつぱりお行方が分らないものですから……それに……」

「殘念だつた！いかにも殘念だ！」

「それにちつとも私手がはなされませんのでね――この子もゐますし」

「僕あれから神戸から九州の方へ行つてたものですからね」

「死ぬる迄にはたつた一度でもお目にかゝりたいと、どの位い思つてゐました事か……しよつちう云ひつめてゐました……」

「さうでしたか、さうでしたか。それで奥さん、やはりあの會社で受けた傷が元でしたか？」

「え、さうです」

「ウヌ……」と團長は唸つたかと思ふと、やけくそに涙をはらつて「人殺し會社め！」と呟きました。暫らくして團長は「坊ちやん！」とその兩手の太い指を差出して、子供の兩肩をおさへるやうにします。

「正夫や、原岡先生ですよ。お父ちやんの云つてらつした原岡先生ですよ」

不思議な子供の視線は、ハツと團長の顏へうつります。

「加減でも惡いのですか？」

「え、父がなくなりますとそれからといふものは、不思議に何慮がわるいといふことなしに弱つてしまひました」

「そいつはいかん！」

この時です！子供がふと聲を出しました――それは全く奇妙な聲です、細いやうな凄いやうな、喉の奥底から洩れ出るやうな、かすれ聲。

「かたきをとつてくんろよ！」

二人の大人はドキリとしました。

「よし正夫君！」

團長はその兩手を子供の兩脇に入れて、靜かに抱き取りました。子供はなほもぢつと團長の顏を見つめます。

「かたきうちしてくんろよ！」

また奇妙な聲が響きました。

「よし〳〵ぜひともお父ちやんのかたきうつてやるぞ！正夫君、安心しろ、しつかりしろ」と固く正夫君の五體を抱きしめます。

「だがね、若し僕が遣りそこなつて返討ちにでもなつたら、正夫君、お前が早く大きくなつて遣らなくちやいけねえんだぞ！

さアどうだ？分つたかね……」

と團長は正夫の蒼白いその頬へ眞赤な自分の頬をすりつけました。

「坊や先生にだつこされていゝこと」

「お鶴さん、よかつたら僕この正夫君を抱いて、行列と一緒に上野まで行きたいと思ひますがね」

「けど勿體なうございますわ」

「なーに、つまりこの行軍僕に取つては岩崎君の葬式であり亦弔合戰といふわけですな、それから正夫君に取つてはかたきうちの初陣ぢやないですか。」

「全くさうでございますわね！」

「で、貴女は今何處にゐらつしやるのですか？」

「岩崎の弟の宅にゐますの」

「あゝ讓治君の宅ですね」

「え、ついそこの新網町ですの。山崎もそこで息をひき取りました」

「さうでしたか、で讓治君足尾でやられたといふことでしたたが、どうなりましたか？」

「詳しいことは知りませんが、なんだか今日あたり出て來るのぢやないかと思つてます」

「ぢや岩崎君のなくなつたこと、まだ知らないのでせう？」

「さア……知つてはゐるやうですが……」

婦人はなんだかこの話を避けるやうに、口をつむいだのでした。この時分から會はそろ／＼開かれます。

二 回

白い布のきれを片腕に卷いた世話人は、中央へと集ります。そこに丈高い頑丈な一つの机が持ち出されます。各團隊はそれを中心に集つた形となります。

一頻り群衆の移動が起つて、押されおされて團長と婦人は、お互の兩肩をくつつけねばならぬやうになりました。子供を中にして二人の呼吸は、同じ調子を取ります。兩人の血液は同じリズムに流れます。そしてお互の暖か味を感じながらたゞぢつと默つて、演説のはじまるのを待つのです。

この時全場の光景如何にと見れば、先づ中央には大日本勞働

ンコツ團の一隊が控へてゐるのです。

その主義色彩に於て夫々異つてゐる此の三つの流を見ました時、此の會の順序が果して無事に進むか何うか、頗る疑はしいなアと、心ある者は感じたものです。其の上段近足尾銅山の事件で以て、謂はゆる勞働運動指導者と社會主義者との間に、全然正反對の意見があらはれつゝあるのを知つてゐる人々に取りましては、まるで社會劇でも見るやうな興味を有つて、この場の成行を待ち受けたものです。この度の足尾の勞働爭議は、勞働運動指導側からすれば模範的成功で、社會主義派より見れば模範的不成功だとせられてゐるのですから、たまらないわけですな。

各國の學者、思想家、評論家、新聞雜誌記者の殆ど九分九リンまでが、即ち[illegible]を[illegible]つて、勞働運動者側にくつ[illegible]たのは、云ふまでもないことです[illegible]どうかと云ふに、これは足尾の成功[illegible]すな。

世話人諸君の白い腕に押されて、司會者の某君は机の上[illegible]らうとします、と、それ御覧なさい、もうその時から赤と[illegible]旗の下から、鋭い神經的な聲が叫ばれるぢやありませんか。

「演說なんかやめろ!」

「勞働運動ブローカーの演說なんか聞くのは、俺はいやだ!」

「理屈はおいとけ、實行々々!」

「ブローカーを排斥しろ!」

司會者は机の上にその半身をあらはしまして、その四角[illegible]の筋肉を複雜にうごかし、高等學校は雄辯會の手振り身振[illegible]のまゝで、

「ろーどーしやーしよーくーン」

と口を開いたのもです。とそれに應じて「いやだ!やめ[illegible]!」といふ反對の聲は、一層激しくなつて來ますな。は[illegible]

××××××××」といふ歌さへ起つて來るのです。司會者君は流石に溫順しく、にが笑ひながら

「どうか靜かにして下さい、どうか……」と懇願するやうに手を延ばすのでした。兎に角「開會の辭」は簡單に終りますと、次ぎに一人の小さい辯士が上がりますな。この一番最初の辯士こそ、つまりゲンコツ團から選出された野田君なのです。さア事ですな、破れ背服を着た小柄な野田君は、その瘦せた貧こさうな頭をふつて何か云ひ出したのですが、この時防害運動は最も極點に達しまして、何になんだかちつとも聞えないといふ仕末——このまゝだと會の順序はめちや／＼になるのではないかとさへ思はれますな。司會者君は早速机に飛上つて、頻りとなだめるやうな願ふやうな身振りさへしてゐます。

「なにがなんだつて演說の防害はひどいや」

「兎に角演說丈けやらしたらいゝぢやないか」

「なんだつてじやますするんだらう」

などいふ聲さへ見物人の中から聞えます。この時ゲンコツ團長に抱かれてゐた正夫君はぐつたり眠つたので、未亡人の脊中に移しておんぶさしてゐたものです、そして演說の方はたゞ暗しいだけで、どういふ風になつてゐるか分らなかつたものです、と、そこへゲンコツ團の幹部の一人である野田君での兄さんが、その大きな身體を飛ばして來ましたな。

「演說を邪魔するやつは勞働運動の敵だ！メーデーの敵だ！防害者をやつつけろ！」

と野田君の兄さんは、弟の一大事、團隊の一大事は此時也とばかりに、火のやうな顏をしてわめいたものです。最初から、はじきれる元氣をもてあましてゐたゲンコツ團のことですから、さアたまつたものぢやありません。

「やつつけろ！」

「毆れ！」

ウハーッと叫び出したものです。團長もハッと武者振ひをして、この團隊の勢力を示すは此の時にありといふ心持と、おさんに自分の威力を見せようといふ本能とが、思はずも一緒なつたのでせうな。

「ゲンコツ突貫！」

と叫んだものです。

さア大變！右手の眞黒い青服の大きな流れは、堤を破つた洪水のやうに、正面の野次馬の間を無理彌理つききつて、左手の赤い小さいひとかたまりへと、なだれかゝつたものです。もみあひへしあひ毆り合ひ、旗の奪ひ合ひの一瞬間の光景は、とても喋りつくせるものぢやありませんな。白い腕卷の世話人が飛んで行く、警部らしい者さへその渦卷の中へはいつて引分けようとしてゐるのが、パツ／＼と活動のフィルムのやうに見える赤い組は印刷工で躰格なんかみんな弱さうで、主たる者は僅か二三十人もあつたでせうか、これにひきかへ青い團隊は器械工で頑丈で強健な七八十人、それに野次や他の組の連中も加はつて優に百人以上！とても喧嘩になるわけのものぢやありませんな。見る／＼間に赤い組は後へ引退き、ゲンコツは勇ましく凱歌をあげて元の陣へと引上げまして、騒ぎは忽ちのうちにおさまつた形となります。

原岡團長は意氣揚々と、女王の前へ凱旋して來る戰勝王のやうに、お鶴さんの前へと歸つて來たものです。まアどうなることかと心配してゐましたお鶴さんは、この團長のいかめしい無事な姿を見ました時、ほつと安心の吐息をついて、につこり笑んだものです。團員みんなは相手が案外に弱かつたので、なんだかまでもぬけたやうに、今や盛んに雄辯をふるつてる赤野田君の演説を、聞くでもなく聞かぬでもなく、ぼんやりとつゝ立つたものです。

思はぬ敵に、不意に襲撃された赤旗の連中は、元氣の鋒先を折られた姿で、それからといふものはそれといふ纒つた妨害はしませんでした。

「君どこをやられた？」

「俺は腕だつたよ」

「俺は喉よ」

「俺は一番先きにうんとやられたよ、痛快にやられたよ、ハヽヽヽヽヽ」

と毆られたのを却つて面白く思つてゐるのでせうか、朗らかに頻りと自分の毆られたことを吹聽してゐる、氣のよささうな印刷工等さへ見受けます。

「貧乏人同志のこつた、なんでもねえや」
「巡査にまで引分けられるなんて、少々はづかしいなア」
といふせりふも聞えますな。

さてみなさん、冷靜にこの騷ぎを觀察しまするに、そこに様々な現象が感ぜられますな。先づこれは野田君兄弟の私的問題とも思へますし、ゲンコツ團長の一つの示威運動乃至雌雄運動とも見えますし、ゲンコツ團の友情會に對する忠義振りとも思へますし、同時に友情會幹部の巧妙なる政略の一表現とも考へられますし、更らに大きく云つて、急進黨と保守黨の爭ひ、身體が一番弱いくせに頭と神經の秀れてゐる印刷工と、團體だけ大きくて少々低腦な器械工との衝突とも、云はれませうな。そのいづれが眞であるか、恐らくそれのいづれでもあるだらうと思へますな。

翌日の新聞を見ますいふと、この間のこまかい消息を、ちつとも觀察出來なかつたと見えまして、單なるがや／＼騷ぎとしか、どの新聞もこの新聞も、報道してゐませんでしたね。

ちよつとした殴合ひにでも重大な意義が存し、わずかな抑合ひにでも深重な意味が含まれてゐるのを、世の新聞記者諸君よ、決して忘れてはいけませんぞ。――今時の一般の新聞といふものが、いくらえらさうなことを云つたて、どゝのつまりはお金持ちの提燈持に終るといふことは云ふまでもなく、あたりに決まりきつたことではありますが、また紙面の狹いなんていふわけにもよつてはゐませうが、其の觀察の間拔さかげん、にぶさかげん、なまくらさかげん、お話にもなんにもならないやげせんか。一つの事件が起る、先づ報道の事實が間違つとる、それから報道する態度が間違つとる、觀察がにぶい、行きとゞかない、肝心のことが缺げてる……實際困つたものですな。本當の新しいいゝ新聞が出來るまで皆さんは、べそをかいて諦めて、ご辛抱しなさるつもりでげすかね？いやはやご辛抱づよいこつですな、感心――寒心―

第一の騷ぎが靜つてから、演說の順序は先づまア無事に進んで行きます。指導者らしい人の辯舌はナカ／＼巧みではありますが、どうも底力と實感がない、純勞働らしい人のは下手くそではありますが、眞實の力が感ぜられますな。ふと、また何處

はじめられました。あらゆる團隊の代表者が一通り語り

と、有志飛び入りがはじまりました。

こゝで一つ總ての演說の主意を見まするに、大體に於て――或る辯士が現に云つたやうに――「我々の運動は只單に時間の制限や賃金の增加を目的とするものではありません。實に、勞働自治の新社會を建設しようとするのであります」といふのに、一致してるやうに思はれます。が、その言葉はたとへ同じやうでも、その言葉の中に含まれてる內容、それを如何に本質的に握つてゐるかといふ理解の程度、如何に生命的に意識してるかといふ眞面目さ、などから見ますると、こゝに三つの傾向があるやうに思はれますな。第一は、此のメーデを秩序よく無事に終らせようといふもの、第二はひたすらに勞働者の威力を天下に示さうとするもの、第三は機會さへあれば少しでも猛烈な運動に移さうとするもの、即ちこれですな。第一のは友情會系であるやうで、第二のは友情會以外のもの、例へばゲンコツ團のやうなもので、第三のは旗の下にゐる連中、といふわけで

三　回

正午にもなつた時分でしたらうか、「上野へ！」「上野へ！」といふ呼び聲と共に、何時の間にか列は作られ行軍ははじまりますと見れば、眞先きに白い長旗があつて、その次ぎに信進正友の赤と黑が、勢よくついてゐるぢやありませんか。

「毆られても眞先きに行つてゐる！」

民衆の或ものは或一つのショックを感じたものです。演說の進行を無事におさめた、開會第一の殊勳者ゲンコツ團如何？と見れば、例の大旗小旗をオツ立て一番隊伍正々堂々と、殿軍として控へてゐます。

「毆つてもいつとどんじりだ！」

民衆の或者は呟いたものです。

先頭の長旗の下には、白い腕の世話人諸君――お上品な學生のやうなのや、學生の雄辯家そつくりのや、鼈甲緣の眼鏡は發[illegible]の壯士のやうなのが五六名、お互に仲よく腕を組合はして、なるべくゆつくりゆつたりと、進軍させやうとしてゐますな。共[illegible]

の赤と黒とは、その白い腕の線を突き破らう突き破らうと、してるやうに見られます。「こゝに危險あり」と見てかどうか、和服のお廻さんが野次馬にまじつて、野次馬顏をして、その旗をぬすみとらう／＼としたものです。電車道へ出てから幾度、この怪しい×××が襲撃して來たことでせう！お廻さんもいさましい勇者ですが、最後までその旗を守りおほせた信進・正友の孤軍奮闘の勞力は、此の國の××運動史上に、永久に輝くことでせうね！旗をぬすみに來る、それを騒ぐる、世話人がその中へはいつて來る、世話人まで騒ぐる、砂塵がパーッ／＼絶えず捲上る、その砂塵の中を、おとなしい善良な勞働者諸君はそれ／＼其組のリーダー先生にひきいられて、何事もないやうに平穩無事に、テク／＼進んだものです。恐らく後の方の團隊には、先頭でのこの毆り合ひ摑み合ひが、砂塵の爲めに見られなかつたのでせうな。或はたとへ見えましても、賢明なるリーダーさんが、それを救ひに行くことをお引きとめになつたのでせうな――行列が紊れてはいけませんでね。だが、行軍としては、さうあんまり立派でも綺麗でも、美しくも見事でもありませんでした。

片側道にそふて行く、北海道の端てからポツと出の青年新聞記者が、その色白い頬を感情的にそめて申しました。

「こんなに混雜するなんて、ナンちふだらしのない勞働運動だ！僕はモット隊伍整々堂々進行することゝ思つてゐたのに！呆れてものが云へない、實に憤慨にたへん……」

オゝ正しく美しき善良なる勞働運動――正々堂々なる勞働運動――模範的勞働運動！

正しいと云つても美しいと云つても善良だと云つても、なた模範的だとほめましても、それはみんなそれ／＼の立場によつて違つて來るものぢやありますまいか。お金持階級に取つては、元來メーデーなんて厄介なものがない方が、どのくらゐメデたいことか。たとへあんにしましても、勞働者の腰が弱いせいか、お上の干渉がお上手なせいで以て、お流れになつてしまふ方が、頗る模範でげせうよ。中產階級――學者文士新聞雜誌のお先生がたに取つては、藝術的なきれいな旗を澤山オッ立て、各隊の先頭には樂隊をつけてプーカドン／＼、そのはでやかなこ

は女學校や幼稚園のお遊戯のやうなのが、一番正しく美しく善良でがせうよ。だが、だが、だが、勞働者自身の爲めには、果してそれが模範的でせうかね？貧乏人の眞底から云つて、果してそれが本當でせうかね？血を吸はれ腕をとられ肺を犯され、親兄弟先祖代々つぎ〳〵に、不合理にめちや〳〵に、殺されて來つゝある被害常習犯のこちとらに取つて、それは歪くいゝことでせうかね？

古い講談ですと、こゝいらで詳しく細かにその疑ひを說くのでせうが、新しい手前の此際物講談では、こゝいらでチョンぎつてお茶をにごすのが、その最も特色として恥かしながら誇りとするところなのでございます。

帝大は赤門の正帽をかぶつた大學生さんが一人、この行列につかずはなれず片側路にそふて？謂はゆる戰略は悲痛な表情で以て、テクつて行くを見受けました。まことに末たのもしい學生さんですな！こんなのが全く「改造」の愛讀者でせうね、どうもさうに違ひありませんよ。斯かる學生さんは。あの憂國や燕

して、婦人を連れた若者を抑へつけようとしたおまけに、處もあらうに大事な自分の横つぱらへ空氣ヌキをあけられるやうな、あんなヘマは決してすることぢやありますまい。田舍の父兄諸君もどうか、「改造」を讀んでくれる我が子弟には安心あつて、そのお小使をふんだんに送つてあげておくんなさえ。

さて、此の奇妙キテレツな行列は、芝口から本通を無理に避けさせられ、橫道をまがらされましたが、其のちよつと手前の家と家の狹い路次の間に、若い美しい婦人が三四十人もあつたでせうか、まるで伏勢のやうに、或はかくれんぼうでもしてるやうに、「今か今か」と隱れて控へてゐられたものです。これこそ皆さん、當日の萬綠叢中紅一點、赤瀾會の團員だつたのです。羽織はぬいで風呂敷に入れ、足は輕い雪駄といふいでたちは、眞にいさましいことですな。特にその長い兩袖を帶にさしはさんだけなげさには、若い男共の眼を射り頭を打ち、とことに其の印象を殘したさうです、いかにも尤だと思ひます。

恰度日比谷公園前まで來た時です、砂塵をかぶりながら誇り

と行列を整へてゐたゲンコツ團長は、ふと思ひ出したやうに後へさがつて、お鶴さんの側へ行つたものです。未亡人はこの暑さと砂煙にもめげず、細い紐で正夫君を固く背中にくゝりつけて、ぐん〳〵遣つて來ます。

「重いでせう。僕代つてあげませう」

「いゝえなんでもないんですよ」

「疲れが出ても困りますよ」

「このくらゐ平氣ですわ、今日のことですもの、たとへなんだつて構ひませんとも」

「よく眠むつてゐるやうですね」

「え、それやもう死んだやうですの、それが先生、私不思議なんですがね」

「正夫君が？」

「正夫は岩崎がなくなりましてから、ほんの一度もぐつすり眠むつたことはなかつたのです、何時でも眠むつてるやうに起きてるやうな、へんな風だつたのですのに、さつき先生にお會ひしてから、ふいとこんなに眠つてしまひましたの」

「成程ね……」

「私御幣をかつぐやうですが、なんだか斯う父親がついてゞもゐたのではないでせうか？」

「さうかも知れない……さうだ、つまりそれは正夫君のいとけない心の中へね、お父ちやんの臨終のあの言葉が非常に強くしみこんだのでせうね、そして早く僕に會つてお父ちやんの意思を傳へたいといふ意識だけが、子供ながらも强く働いてゐてねぼんやりと謂はゆる半無意識の狀態になつてゐたといふわけでせうか。そこへ僕が出て來たものですから、あんなへんな眠つきをして、あんな聲を出して、あの「かたきをとつてくれろ」と云つたんでせう。あの聲岩崎君そのまゝぢやなかつたですか……」

「えゝさうでした、私あれを聞いてどきつとしましたの」

「それで正夫君、もう十分傳へてしまつたものだから、はじめて安心してね、今までの疲れが出て、こんなにねこんだのでせうね」

「あゝきつとさうですわ」

とは早稻田、一高の運動會に於ける假裝行列のやうなのが、さては女學校や幼稚園のお遊戯のやうなのが、一番正しく美しく善良でがせうよ。だが、だが、だが、勞働者自身の爲めには、果してそれが模範的でせうかね？貧乏人の眞底から云つて、果してそれが本當でせうかね？血を吸はれ腕をとられ肺を犯され、親兄弟先祖代々つぎ〳〵に、不合理にめちや〳〵に、殺されて來つゝある被害常習犯のこちとらに取つて、それは全くいゝことでせうかね？

古い講談ですと、こゝいらで詳しく細かにその疑ひを說くのでせうが、新しい手前の此際物講談では、こゝいらでチョンぎつてお茶をにごすのが、その最も特色として耻かしながら誇りとするところなのでございます。

帝大は赤門の正帽をかぶつた大學生さんが一人、この行列に**つかずはなれず片側路にそふて？謂はゆる嚴肅な悲痛な表情で**以て、テクつて行くを見受けました。まことに末たのもしい學生さんですな！こんなのが全く「改造」の愛讀者でせうね、どうもさうに違ひありませんよ。斯かる學生さんは、あの學園や森樂軒で正宗やビールに醉つぱらつて、衆をたのみ柔道を誇りにして、婦人を連れた若者を抑へつけようとしたおまけに、處もあらうに大事な自分の横つぱらへ空氣ヌキをあけられるやうな、あんなヘマは決してすることぢやありますまい。田舍の父兄諸君もどうか、「改造」を讀んでくれる我が子弟には安心あつて、そのお小使をふんだんに送つてあげておくんなさえ。

さて、此の奇妙キテレツな行列は、芝口から本道を無理に避けさせられ、橫道をまがらされましたが、其のちよつと手前の家と家の狹い路次の間に、若い美しい婦人が三四十人もあつたでせうか、まるで伏勢のやうに、或はかくれんぼうでもしてるやうに、「今か今か」と隱れて控へてゐられたものです。これこそ皆さん、當日の萬綠叢中紅一點、赤瀾會の團員だつたのです。羽織はぬいで風呂敷に入れ、足は輕い雪駄といふいでたちは、**眞にいさましいことですな。特にその長い兩袖を帶にさしはさ**んだけなげさには、若い男共の眼を射り頭を打ち、とことはに其の印象を殘したさうです、いかにも尤だと思ひます。

恰度日比谷公園前まで來た時です、砂塵をかぶりながら頬り

と行列を整へてゐたゲンコツ團長は、ふと思ひ出したやうに後へさがつて、お鶴さんの側へ行つたものです。未亡人はこの暑さと砂煙にもめげず、細い紐で正夫君を固く背中にくゝりつけて、ぐんぐん遣つて來ます。

「重いでせう。僕代つてあげませう」

「いえなんでもないんですよ」

「疲れが出ても困りますよ」

「このくらゐ平氣ですわ、今日のことですもの、たとへなんだつて構ひませんとも」

「よく眠むつてゐるやうですね」

「え、それやもう死んだやうですの、それが先生、私不思議なんですがね」

「正夫君が？」

「正夫は岩崎がなくなりましてから、ほんの一度もぐつすり眠むつたことはなかつたのです、何時でも眠むつてるやうに起きてるやうな、へんな風だつたのですのに、さつき先生にお會ひしてから、ふいとこんなに眠つてしまひましたの」

「成程ね……」

「私御幣をかつぐやうですが、なんだか斯う父親がついてゞもゐたのではないでせうか？」

「さうかも知れない……さうだ、つまりそれは正夫君のいとけない心の中へね、お父ちやんの臨終のあの言葉が非常に強くしみこんだのでせうね、そして早く僕に會つてお父ちやんの意思を傳へたいといふ意識だけが、子供ながらも強く働いてゐてねぼんやりと謂はゆる半無意識の狀態になつてゐたといふわけでせうか。そこへ僕が出て來たものですから、あんなへんな眠つきをして、あんな聲を出して、あの「かたきをとつてくれろ」と云つたんでせう。あの聲岩崎君そのまゝぢやなかつたですか……」

「えさうでした、私あれを聞いてどきつとしましたの」

「それで正夫君、もう十分傳へてしまつたものだから、はじめて安心してね、今までの疲れが出て、こんなにねこんだのでせうね」

「あゝきつとさうですわ」

行列はこの時二重橋前まで來てゐます。日比谷の停留場から電車が、幾台も止まりまして、いかめしい警視廳やなまめかしい帝劇をば、堀にそふて行くきたならしい勞働者には、恰かも見せないやうですな。

「先生私喉がかはいて苦しうございますが、この邊に水なんか飲む處はないでせうか？」

「さア…さうだ、東京驛へ行けばありますよ。僕もひからびて困つてるところですから、一緒に行きませう」

二人はコソ〳〵と電車路を横切り、肩をならべて驛の方へと、あのひろつぱを急ぐのでした。

「行列はあんなに遲く行つてますから、ゆつくり休めますよ」

驛へ着くと手洗所へはいつて、水もどつさり飲み、便所もつかひ、顏まで洗つたものです。女が用事をする間、團長は正夫君を抱いて、待合室で待つてゐたのです、あのふつくらした腰掛へ體を休めて顔を見合しました時、二人ははじめて落付いた氣になりました。そしてもう其の時には、勞働運動の事もメーデーの事も、「敵討」のことも忘れてしまひまして、なんだか斯う何處かの名も知れない土地へ、旅行でもしてるやうな、而かも新婚旅行でもしてるやうな、親しい氣分になつてゐたものです。――男はしみ〴〵女の顏を眺めました、造作はいゝといふ程ではないが、その口の大きさと眼のまるさにその目尻に、云ひ知れぬ愛嬌のあるのが、今更ながら心につき、顏の色の赤黑いのさへ、却つて嬉しい感じを起させるのです。特にその亂れた髮をかきあげた襟頸の白く細いのが、やさしい、いぢらしい、くすぐつたいやうな氣持を起こさしたものです。

「どうも有難うございました、さア出かけませう」

「なアにまだゆつくりしてゝ十分ですよ、これから近路をして行けますからね…それに上野へ着くまで別にこれといふ用事もないんですから」

十分も休んだでせうか、二人は近路を通つて、ゆつくり〳〵話しながら、須田町へと出て來ました。

「どうしたのでせうかね？」

「さア遲れたかな…後になるやうな氣づかいはない筈だが」

二人はやゝ不安になつて萬世橋の方へと向ひます。

「あゝあすこへ！」

と見ると向ふから、異樣な行列が來るのです。

「あれは普選勞働黨のだ――御用黨のね」

眞先きに自動車があり、ついで半纏着の職人らしいのが僅か、その周圍にお廻りさんの多數が、處々によぼ〳〵の立ちん坊らしい爺が白い細長い弔旗を、かついでゐるのです。その旗の中には「〇〇代議士」などゝ筆太に書かれてるナンカ、頗るふるつてますな。自動車が萬世橋へ差かゝると、中の洋服紳士連は急に立ち上がつて「萬歳！」「萬歳！」「勞働者萬歳!!」と、川上に向つて叫び出します。何事かと見ると、松住町の通りを人間の大きな長いカタマリが、やはり此方を見ながら、手をふり旗をひらめかして、「ワーツ！」「ワーツ！」と、わめきながら通るのです。

「あゝ僕等の組はあれだ！」

二人はこの奇々怪々なる御用黨の行列と入違つて橋を渡り、向ふへと急ぎます、と間もなく左の横道から、自分達の行列は見物人の頭を越へてあふれ出るのでした。ですが、――これはまアどうした事だ？別れる時までは確かに、先頭には俺達の毆つてやつた信進・正友の旗だけが威張つてゐたのに、これはまアなんといふことだ――

「社會主義合同」！「新勞働運動社」！「M. L」！「黒瓢會」！「赤蘭會」！オ、「南郊ソヴエツト」!!………………

團長はすつかりどきもをぬかれた形です。もの〳〵しい、物凄い、ぶつさうな、いさましい、これ等の旗は、天から降つたか地から湧いたか、いつたい何處から何時の間に？團長はまるでどたまをどやされたやうに、荒膽をひしがれたやうに、ひるんでしよげてしまつたのです。されば元氣のカタマリのやうなつたあの敏捷な五體も、ぐつたりまゐつてしまひ、マツカに燃えた顔さへ、蒼くなつて來たものです。

「まア先生どうかなさつて？」

「…………」

「ほんとにお顔色が……」

「な、な…なんでもないんです」

「それ先生、今ゲンコツが通つてゐますのよ！」

群衆の垣の直ぐ向ふを、今まで自分が指揮してゐた仲間のゲンコツが、相變らず砂をあびしよげ返りながら、どんじりから、のろ〳〵と、ひきずられて行くのでした。

「さア先生行きませう」

「僕もうあの行列の中へはいることやめにしませう——なんか氣分がわるいものですから。そして後から貴女と一緒に行きませう」

ふぬけのぬけがらのやうに、夢遊病患者のやうに、團長は却つてお鶴さんに、引張られでもするやうに、兎に角上野までは行つたものです。

四回

マツ先では、あの途中からふつてわいた不思議な援勢によつて、信進・正友の孤軍奮鬪連は全く勇氣百倍！ペトグラードの街上でなくては見られないやうなあの旗を狂的に振りながら、不忍池にそふてねつて行きます。

宮殿のやうに立派な或る料理店の二階から、會社の株主か重役らしい旦那様やその奥様や、若様お嬢様が、おもしろさうに下を覗いてゐますな。アルコールで赤化してゐる旦那様のお顔には、極度の冷笑と最高の皮肉がうかんでゐます。——「なんといふ汚ないげびたけだもの共だ、はぢさらしめ！キ様どもが一生懸命になつて我輩等を持ち上げてくれゝばこそ、我輩等は仕方なくお金持になつて、お金持の苦しみをしなくちやならないのだぞ！そしてそのお金持の苦しみを遁がれる爲めに、これ程こんなに酒を呑んでるのだぞ、ゲーブ……」と、まさか云つてゐるのでもありますまいがな。

そこから少し離れて列んだ、風雅なお金持合の或お二階では、右手に半玉を左手に一本かゝえた小説成金らしい若旦那が、昨夕から流連の疲れた悲痛な主観の小さい眼をしばたゝいて、柳と櫻の若葉の間から、此向ふの騒ぎを見てゐますな。

「ふゝん勞働運動か！へん社會主義か！僕はあれが大きらいだつて。まアなんといふ一時的の、物質的のけかなた仕事だ。それにひきかへ此の自分の、唯一無二最高微妙な藝術！永遠な人類愛に任さす、眞に尊いものだ、有難い、有難い、あゝ有難くて

涙がこぼれる！」と云つてるやうですな。

この時、押しおして行つた赤と黒の先頭は、東照宮へ登る石段の下で、お廻りさんの警戒線にぶつかりました。東照宮と云へば例の權現樣家康といふ××の祠ですな、人間よりは國家國家よりは徳川幕府が有難い、といふ思想で以て、日本人種の生命の中から、反抗と創造の種子をぬき取つて狸おやぢを祭つてゐる××だ――徳川三百年の實に巧妙極まる施政で以て、見事に日本人を去勢し盡した、封建武斷の大神樣！自分一家の卑俗的功利主義の爲めに、日本人みんなから、本當に物を見眞を考へる意識をなくしてしまつて、「泣く子と地頭には勝たれない」といふ諦めと、センチメンタルな他力本願の傳統を、呆きれる程上手にうえつけた、えらいおやぢ、超人、權現樣のお祠の石段の前で、此の反抗と創造に目覺めかけたメーデーの行列が、ぴつたり止められたといふことは頗る妙ですな。これは偶然のやうで決して偶然ではありませんぞ――おや／＼斯んなお説教をやつてゐた日にや、此の講談を喋べり終へないうちに、夜があけてしまひますよ、また日が暮れてしまひますよ。

さア、お廻りさんは此の神聖な官僚の權現樣へ、一歩も足をふみこませまいとします、權現樣の催眠術からやつと目覺めかけたこちとらは、どうかして登らうとしますな。たとへ上へ登つたところで、別にこれといふ儲けもないのですが、それを登らうとする、そこに深い意味があるのです、實際その登らうとする要求こそ、永い間抑へられてた民百姓の魂の叫び、民衆の本能、プロレタリアの感激、新しい理智に生き完全な肉體に還らうとする、生命の革命創造ですな。

押し返されたり押し詰めたり、將に突破が成功しようとした刹那！西洋軒の方からかけつけて來たお廻りさんの一隊は、その柔道と劍術にねりかためた、腕力を振つて、こゝに毆り蹴り、ひつぱたき引きづりの、一大活劇は起つたものです。そしあそれと共に、善良にして模範的なる知識階級出の指導者は、美しく正しく、權現樣の護りの例の狸攻略を以て、それとなあれとなく、燃えんとする民衆の本能の薪木に向つて、あきらめの水をそゝいだものです。間もなく司會者君の姿は、石段の一番下の小高い石の上へ、世話人諸君とお廻りさんに取卷かれて、

ぬつと現はれます。

「ろーどうーしやーしよーくん……」

例の雄辯は呼ばれます。

「メーデー芽出度終りました……」

と云ひかけますと――

「馬鹿！」

「まだ終りやしねえぞ！」

「なにが芽出たいんだ！」

といふ怒號が起つて來ます。司會者君はそれにおかまひなしに――

「諸君！メーデーと勞働者の萬歳を絶叫して、解散しようぢやありませんか！」

「戲談ぢやねえ！」

「萬歲いやだ！」

「ブローカーめ！」

「勞働運動の敵！」

「はじを知れ！」

だゝ子のやうな聲は呼ばれます。司會者君はぐすん〳〵してゐましたが、ふと半身をかゞけて世話人諸君と相談して後、また勢に兩手を高くあげました。

「諸君！さア……メーデばんさーいー」

と大際に呼びしました。わずかの聲がそれに應じられます。

「ろーどーしーやーバーンーザーイー――」

いくらかの聲が遠くの方から泣くやうに應じました。なんていセンチメンタルな淋しい大團圓でせう。猶暫時の押し合せり合の末、群衆は次第々々に退いて行きます。と見れば、どうしたことか、赤瀾會の若き女性は、砂埃に顔を埋めて眼ばかりひからして、一人……二人と、たくましいお巡さんにひつぱられて行きます。――これが今日の模範的笑劇を、やさしく惡化して悲劇にした最後の幕切れですな。群衆は此の若き女性の最後の妙技がげせぬらしく、呆れたやうに、面白さうに眺めたものです。開會最初にどえらい元氣でゲンコツを振つたゲンコツ團も、なにがなんだかぼんやりと、これを見たやら見ぬのやら……

人間は次第々々に去り、夕暮はだん〳〵上野の森たか

ゝつて來ます。本講談の主人公原岡團長は、岩崎未亡人お鶴さんとたつた二人、大きな櫻のほの暗い並木の下の、冷たい白い石の上に、悄然とその疲れた腰をおろしてゐます。

「……先生どこかおわるいのぢやありませんか?」

「………………」

「だいぶ暗くなつて來ました、もう何時でせうね……」

「さア……」

「私ちよつと此の邊で用事して歸らうと思ひますが、先生はこれから?」

「さうですか、僕ももうそろ〳〵……」

と團長はヒヨロ〳〵と立ち上がつたと思ふと、なんだか妙にもじ〳〵しながら、女の側へよつて行きました。

「お鶴さん!」

と今までにない嚴肅なかすれ聲を出したものです。

「え?」

「お鶴さん!僕と……ほんとうに僕と……一緒になつてくれませんか!」

「まア!」

團長は急に一生懸命になつて、辯解でもするやうに早口に云ひ出します。

「僕實に今日は非常な感激を受けたのです、それはなんであるか今の僕にははつきりしませんが、兎に角非常な今までにない感じです。その爲めにね、僕世の中がみんな脈になつたのです、人間みんながいやになつたのです――といふやうな氣持がするんです」

とこゝまで云つて少時ぢつとした後――

「……なんにもかんにもつまらなくなつたのです、いつさい奪ひ取られたやうな氣です……ですが……ですが……たつた一つ最後に殘るものは、僕と根強くひつぱるものは、何時までも刺戟するものは、僕を救ひ、僕に光明を與へるものは、お鶴さんたゞ貴女です!貴女の戀だけです!……」

團長は斯う一氣に云ひ終ると同時に、その兩手を長く戀人の方へ差延べたかと思ひますと、狂ひぢみた表情で「あゝー」とうぬが頭をつかんだものです。そしてぶつ倒れるやうに跳ます

いて、石の上へ肘をのつけ、たまらなく顏をおほふひます。戀人は心配したやうに急いで其の側へよりましたが、どうしたらよいものやらと、困つたやうに迷ふやうに、ツヽ立つたのです、暫時は暗い沈默――とその闇の中から

「お鶴さんだね？」

といふ聲と一緒に、一つの黒い影があらはれます。

「讓治さんですね！」

「さうです」

女の前には瘦せて脊の高い男がツヽ立ちました。

「遲くなつて濟みません」

「いーえ」

「兄キはとうとういけなくなつたさうですな」

「え……で讓治さんはそれをどうーして？」

「僕一昨日栃木の別荘からもどつて來ると直ぐ、兄キのこと或人から詳しく聞きました、それで早速あの手紙をあげたんですよ」

「まアさうでしたの、でもなぜ宅へお歸りにならないの？」

「ちよつとわけがあつてね――後で話しませう」と團長の方をいぶかしく見て「誰ですか？」

「原岡先生ですの」

讓治君はツカ〳〵と寄つて團長の肩をたゝきます。

「オイ原岡君！」

團長は恰かも病んだ猛獸のやうにむつくりと起き上がります。

「讓治君だね……君いつたい……」

團長が斯う何か尋ね出すのを、讓治君は振り切るやうに、トンキヨウ聲を出します。

「君！君の連中だね、信進會や正友會の連中を毆たつたのは？」

「僕の組はね、お上品な理屈は大きらいなんだ、ゲンコツ一ばかりさ」

團長はちつつい皮肉に落付いたものです。

「そいつはすばらしい、が、そのゲンコツがお互同志に向かちや……」

「演説のじやまゝしたもんちやからね――僕等は空想家ちやなねんだよ」

こゝで少時一默といふところ三人の息づかひが不安さうに聞えますな。

「君は相變らず理屈屋か」

それで團長が上から抑へつけたといふ形――相手は一歩退つたといふ形。

「さア……僕から見れば、君等の方がどうも理屈屋に近いやうに思へるぞ」

「これはおかしい」

「事實、組合運動が新社會の創造に、一度でも役に立たかね？」

問答はトン／＼調子に進みます。

「英國の三角同盟の事を、君は新聞で見ないのか？」

これも赤讓治君がさかねじを喰つた形。さァどう返事をしますかな？

「それを見てゐればこそ、組合主義がダメな事を思ふんだよ。あれまでに行つてなんにもならない、結句ロイド・ジョージ一派の政治屋にうまい儲けをさすのが、まアをちたらうよ」

「……たが」

「まアよく考へて見たまへ、今日のメーデー、あのみすぼらしさ！あれで以て英や米や佛のやうな、あんな大きな組合に、いつたい何時までたつたらなれると思ふのかね？また假令早くなれるにしたつて、…………にはなんの役にも立たないのぢやあるまいか？」

「いーや役にもたつんだ！一番役にたつんだ！それなればこそ、僕等は身を忘れ家を捨てゝ一生懸命やつてんるぢやないか！」

「一生懸命？頗るけつかう！だが、どういふ具合に役に立つのだ？」

「……を現出するについては、ちつぽけな小ぜり合や小勇氣ではダメなんで、どうしても強い忍從と大きい固い團結が必要なんだ――それがつまり僕等の立場だ」

「成程、それ全くだ。だがね、大きい固い團結は何時でも、各人の十分の共通の利益といふ二つのゝのがなくてはとても出來るものぢやないのだよ」

「それは云ふまでもないことさ」

そこで、こんなみすぼらしい日本の民衆の多數が、何時本當の自覺に達すると思ふ？英や米のあれではないと來たんぢやないよ。まア日本なんかそれを待つたら、我々の死んでしまつた後の後だらうよ。だが僕等は生きてるうちに本當の、世を見たいんだよ、今直ぐ本然の生活がしたいんだよ」

「それはさうさ、然し……」

「まア待ちたまへ。それでね、たとへ大多數が自覺するにしたつて現實に各人の共通利益といふ條件が揃はなかつたら、君の謂ふ固い大きい團結は出來るものぢやないよ、それは何かの煽動で以て一時的にセンチメンタルな結合は出來ようさ。然しそれもまさかの處へ行くつていと、煙のやうに屁のやうに消えてなくならうよ。英國なんかあんな處まで押しててゐるのぢやから、何時でもしてやられるのは、卽ちそこだよ」

「勞働者はみんな相互に共通利害を持つてるさ」

「それが嘘なんだ」

「いや嘘ぢやない！」

「永久的な理論から云へば、それこそ本當の本當さ。然し今日只今の現實からすれば、嘘になるぢやないか――例へば石炭山の坑夫がストライキをすれば、石炭が出て來ないから一般に工業が衰へる、工業が衰れば工場勞働者は減給か失職だらうぢやないか。また同じ石炭山でも、甲の山でストライキをすれば乙の山の石炭が直打よくなり、從つて賃金も上つて來るといふ具合に、早い話が利害相互に反對してるのだ。もつと分かりよい例をとればね、電車の從業員がストライキをするといふと、困るのは自動車や馬車や人力に乘れない、貧乏人だけといふことになるぢやないか。そして肝心な資本階級全體に取つては、儲けこそすれちつとも損はしないといふのが、今日の現實ぢやないかね。一事が萬事いつさいがつさい、斯くも痛切に利害が矛盾してゐて、たまつたものかい、大きい固い團結！……とても：とても……。組合運動を商賣にするものは別として、これが×××の役に立つと信ずる者こそ、理屈屋であり空想家であるぢやないかね？」

「それは間違ひだ」それは間違つとる」

「現に君は器械工のお先棒になつて、利害と感情の衝突してる印刷工の頭の上にその、お得意のゲンコツをまいらしたぢやな

いか、それが當り前なんだ、それが自然なんだ」

「いや、さういふ意味でやつたのぢやないよ」

「いかにも君等はさういふ自覺の元にやつたのぢやあるまい、然しその無意識にやつたことに、間違のない道理があらはれてるのだ。これからだつてそんなこと度々あらうかと思ふ。悲しいかな、それが本當なんだからね」

「君の議論にも一理ある。然し、然しながら僕等は、さういふ一時的の唯物的の現實をつきやぶつて、さういふ外形的の自然を解脱して、人間性の本然、人間愛の根本に生きたいんだよ」

「よし、それなら賛成してもいゝ。それにつけてはどうか、せめては其のゲンコツをね、あの身體の弱い同志の上に加へないで、強い惡い敵の方へ、ふりむけてくれたまへ」

「ム、、、、、」

「ぢやこれでさようなら――僕は急ぐからね」

と讓治君は、今まで大きな眼を寂しさうに見張つて二人の男の議論を熱心に聞いてゐた、女の方へとふり向きます。

「お鶴さん坊やを僕にだつこさしておくんなさい」

正夫君は何時の間にか眼を醒まして、暗の中にもはつきりした顏で、讓治君の方を見てゐます。

「正ちやん、目が醒めて、それ叔父さんですよ」

正夫は可愛い元氣な聲を張上げました。

「叔父さん！」

「おー正ちやん！」

讓治君は正夫君をだつこしました。

「さア行かう」

「さようなら、先生」

忽ちのうちに三人の姿は、暗の中に消えて、大地をぢつと見詰めてゐる團長の小さい姿だけが、葉影を通して來る電燈の光に、淋しく殘つたのでした。暫らくして團長は頭を少し上げたかと思ふと、「はアーッ、、……」と長い吐息をつきました。そして

「おー俺はいつさい失望だ！」

と唸つたのでした。

え――お喋べりしたいことは、山程も海ほどもございますが、お後には……ローマンスは物語先生をはじめと致しまして、通俗小說師匠、それにシンウチの歷史小說翁などが、どさり樂屋へつめかけてゐられる樣子でございますから、手前の未熟な際物講談はこれまで……。



紀伊國屋文左衛門

荒畑寒村

はしがき

いつぞや本誌に、社會講談『鼠小僧次郎吉』を書いたところ、さる御贔負の方から忠告を受けました。あの鼠小僧の拙さ加減は何だい、君は一體、社會講談のコツを心得てないから駄目だ。アンなこつぢやいけない、何でも構はないから精々理窟ツポクやるに限ると。

そこで今度は大に心を入れ替へ、精々理窟ツポイところを御覽に入れて、社會講談の社會講談たる所以を明らかにしたいと、いろ〳〵苦心の結果、『紀伊國屋文左衛門』と云ふ題を選びました。古きを溫ねて新しく、どんな理窟を並べますか末永く御愛讀の程を願つて置きます。

一

紀伊國屋文左衛門と申せば、『沖の暗いのに白帆が見へる、アレは紀伊の國蜜柑船』といふ俗謡で、誰方も御承知の一代分限まづ日本に於ける成金の總大將とも云ふべき男で、今日の社會に生れさせたら、差し詰め政黨の領袖に珍品の五つや六つは贈つて問題を惹起して居るかも知れません。

偖て、今さら文左衛門が紀州和歌の浦の生れだの、先祖が平清盛の家臣五十嵐小文治だの、貧乏で美男だつたから貧乏業平乞食光氏と綽名されたの、玉津島明神の神主藤浪河内の娘、お貞と云ふ美人に想はれて夫婦になつたのと云ふ事を並べて居ると、また理窟ツポクないと云ふお叱言が出ますから、ソンな事は一切抜きにいたします。何しろ業平の再來か光氏の權化かと云はれた美男の文左衛門が、小町娘と評判の高いお貞を女房にしたのですから、まるでお雛さまを並べたやう。二人とも老母の妙林尼に仕へて至孝、『それでノシ』とか何とか、紀州訛りの夜半のかね言も睦まじく、樂しい月日を送つて居りました。

が、此の文左衛門、一代に百萬分限になつた程の傑物ですから、スヰート・ホーム位を理想にして納まつて居る人間ではない。何かなして乾坤一擲氏の壯業を企て、衰へてゐる家業を挽

回して五十嵐の家名を揚げたいと、日夜その機會を覗つて居りました。時なる哉、正保の四年十月、名産の蜜柑が大當りなのに反して、紀州路一帶に大時化で、三千六百峰を押し包む黑雲は啼るゝ時なく、熊野灘は狂瀾怒濤澎湃として、雨は天地を縫ふが如くに降り續き　晝夜を別たず寸刻を措かず、轟々鏗鏘たる山鳴海鳴の音もの凄き有樣でございます。

　これには蜜柑問屋がすつかり弱つてしまつた。御承知の通り昔は蜜柑の出る處は紀州に限つたもので、當今のやうに靜岡縣にも出來れば、アメリカからも輸入する、海が荒れて居たら汽車で積み出すと云ふやうな譯には參りません。從つて紀州から蜜柑が來なかつたら、江戸市民は蜜柑を見る事さへも出來ない恐らく將軍の尊貴を以てしても、味はゝなかつたでありませう所が、毎年十一月八日は江戸年中行事の鞴祭で、此の時には街くも鞴を用ふる商賣をして居る者は、祝宴を開いて蜜柑を撒くのが慣例だから、是非とも蜜柑が無くてはならない。また紀州の蜜柑問屋に取つても之れが附け日で、鞴祭りが過ぎてしまへば、相場がすつかり下つてもう大した利益を見ることは出來ない。それがかう云ふ大荒れで、蜜柑船を出すことが出來ず、山から切出した蜜柑は問屋の倉に山を築き、だん／＼色が黃熟し始めて下積の方はソロソロ腐り出して來たのですから、問屋の主人連が蒼くなるのも無理はありません。

二

　これを見て、吾が時來れりとばかり心私かに喜こんだのは、別人ならぬ文左衞門であります。彼はこゝで一つ、乘るか反るかの大ヤマを張つて、船が熊野灘か伊勢路邊りで難破すればそれ迄、萬が一にも巧く品川に入つたら、其時こそは一擧に何萬兩と云ふ大儲けをして、再び家道を往昔の繁昌に戻す事が出來やう。成功か死か、運賦　賦の大賭博をうつて見やうと、玆に決心の臍を固めました。

　それにしても先立つものは蜜柑や船舶、新しい言葉で申せば資本です。いくら蜜柑問屋がハケ口の無い貨物を持て餘して居ると云つても、マサカ何萬籠と云ふ蜜柑を無代で呉れる筈はありません。よしんば蜜柑は無代で貰つたにした所が、之れを江戸に積み出すには船といふ輸送機關が無ければならない。蜜柑や船はとゝのふとしても、最後に船頭といふ勞働が缺けて居たならば、切角の實も持ち腐れの外はない。卽ち蜜柑といふ資本と、船といふ機械と、船頭といふ勞働とがあつて、初めて文左衞門の望むやうな萬金の富が獲られる事になるのであります。

　文左衞門は貧乏業平、乞食光氏などと、良いやうな惡いやうな綽名を取つて居る位ゐですから、固より金はない。家は廻船

問屋ですから船はあるが、先代の時に失敗つゞきから皆な賣つてしまつて、殘つた一艘の明神丸も今では片田屋惣兵衞と云ふ家に五十兩の抵當に入つてゐる。此の船を請出して相當の修繕を加へ、蜜柑を買ひ込み、上乘りの船頭を雇ひ入れるには、少なからぬ金、即ち流動資本が要りますが、其の肝心要めの物が無いのだから、之れには流石の文左衞門も當惑しました。

そこで思ひついたのは、舅の藤浪河內です。文左衞門は此の河內から、一攫萬金の冒險事業に必要な資金を借り受けやうと思ひました。で、或る日、文左衞門は河內を訪ねて計劃を打ち明け、金一千兩の借財を申し込みました。

『成る程、イヤよく解りました。其の位の度胸が無くつちやア人間、成功するものぢやない。普通ならお止しなさいと云つて止めるべき所だらうが、私は止めない。折角思ひ立つた事だからおやんなさるが宜い。もし萬一の事があつた節は、御老母とお貞の身の上は及ばずながら私が引受けます。たゞ然し困つた事には、その資本ですナ。これが百兩とか二百兩とか云ふのだつたら、造作なくお貸し出來るのだが、千兩と云つては却々の大金、それも―　私は玉津島明神の積立金三千五百兩と云ふものを[illegible]る。これが平生だつたら、其中から千兩だけお貸し出來ない事も無いが、實は今、それに就て大事件がもち上つて居る所で……』

と云つて、藤浪河內が文左衞門に物語つたところに由ると、此の三千五百兩の內、千五百兩を河內の手許に置き、後の二千兩は大阪に貸出してあつた。それが今度、神殿の普請をするに就て金が必要となつたので、別當の神泉院と云ふ者を大阪に遣はして貸金を集める事になりました。所が神泉院が、大阪の新町や難波新地で放蕩をしたので七十兩の食込が出來、それを取返さうと思つて堂島の米相場に手を出した爲に、到頭千兩以上の不足を生じてしまつた。別當の失策は神主の責任、さあ千兩の償ひが出來なければ河內が講中に對して申譯が立たなくなつた。文左衞門に貸す所ではない、河內の方が借りたい位になつて、穴埋に苦勞してゐる最中だつたのであります。

始終の樣子を聞いた文左衞門、深く心に決する所あるらしく一と膝押しすゝめて、

『お舅御、それでは其の殘りの積立金の中から、千兩だけ私に貸して下さい。運よく私が成功すれば、拜借の千兩に千兩の利子を附けてお返しします。さすれば、別當殿の使ひ込みも穴埋が出來ると云ふものですし、また運惡く途中で難船して、文左衞門の身が海底の水屑と消えたとしても、其上で處決されても遲くはありますまい。此の仕事は私に取つては運賦天賦ですが

貴方も乘りかゝつた舟と思つて、一つ乘るか反るか一生の運試しをなさつたら如何です。』

から云はれて、藤浪河内もそれならと云ふ氣になり、千兩の金を文左衛門に貸し與へる事になりました。文左衛門が後年、百萬の大財産に作り上げたのは、固より自分の膽氣才略にも由りますし、番頭長五郎の機智才能にも由りますが、其の根底は實に此の千兩と云ふ資金に在つたに違ひありません。若し此時文左衛門が千兩といふ資金を手にする事が出來なかつたならば、文左衛門が如何に不世出の英傑であつても、到底アレだけの立身出世は出來なかつたでありませう。

早く申せば、紀文一代の暴富は、此の千兩といふ資本が生み出したやうなもので、現代の紳士閥經濟學者の言を藉りて申しますならば、『富を生むものは資本』なのであります。然し、そんなら此の千兩といふ資本は誰が作り、何が生み出したのか、藤浪河内が文左衛門に貸し與へた千兩の金は、玉津嶋明神の講中の積立金の一部であります。それは天から降つた物でもなければ地から湧いた物でもなく、畢竟、講中が粒々辛苦の末に積み立てたもので、現代の言で申せば所謂『勞働の結果』であります。さすれば、紀文が後年百萬長者となるに至つた原動力とも云ふ如き此の千兩は、數百人若くは數千人の、玉津島明神講中の勞働の結晶に外ならない譯で、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

三

閑話休題、望む資金の千兩を手に入れた文左衛門は、すぐさま五十兩の元利を拂つて、片田屋惣兵衛から明神丸といふ九百石積の船を請出し、七十兩でその修繕を船大工に請負せました。

今度は蜜柑です、何しろこれが無くちやア船ばかりが百隻あつたつて、一文の儲けにもなりはしない。工場と機械とが揃つても、原料が無かつたら何一つの生産されないやうなものですから、文左衛門、今度は蜜柑問屋へやつて參りました。

『偖て御主人、和歌の浦の五十嵐文左衛門と申せば、少しは知られた廻船問屋ですが、先代の失敗で今は見る影もない貧乏し、そこで私も男と生れた甲斐には、もう一度家業を昔の繁昌に戻したいと思つて、風の變るのを待つて大浪大風を乘切り江戸へ蜜柑船を出すつもりで、酷工面の資本を拵えて來ました。此の浪風でどちらの問屋さんも、皆な蜜柑をもて餘して出の御樣子。どうでせう、生命を資本の商賣始めに、餞別だと思つて一つ安く見切つて下さいませんか。』

[illegible]皆な貸つてしまつて、殘つた一隻の明神丸も今では片田屋惣兵衛と云ふ家に五十兩の抵當（かた）に入つてゐる。此の船を請出して相當の修繕を加へ、重相を買ひ込み、上乘りの船頭を雇ひ入れるには、少なからぬ金、即ち流動資本が要りますが、其の肝心要めの物が無いのだから、之れには流石の文左衛門も當惑しました。

そこで思ひついたのは、舅の藤浪河内です。文左衛門は此の河内から、一攫萬金の冒險事業に必要な資金を借り受けやうと思ひました。で、或る日、文左衛門は河内を訪ねて計劃を打ち明け、金一千兩の借財を申し込みました。

『成る程、イヤよく解りました。其の位の度胸が無くつちやア人間、成功するものぢやない。普通ならお止しなさいと云つて止めるべき所だらうが、私は止めない。折角思ひ立つた事だからおやんなさるが宜い。もし萬一の事があつた節は、御老母とお貞の身の上は及ばずながら私が引受けます。たゞ然し困つた事には、その資本です。それが百兩とか二百兩とか云ふのだつたら、造作なくお貸し[illegible]千兩と云ふものを[illegible]大金、私も、私は三津島男爵の[illegible]積立金三千五百兩と云ふ[illegible]預かつてゐる。これが[illegible]出來ない事も無いが、貸[illegible]そ[illegible]大事[illegible]

居る所で……』

と云つて、藤浪河内が文左衛門に物語つたところに由ると、此の三千五百兩の内、千五百兩を河内の手許に置き、後の二千兩は大阪に貸出してあつた。それが今度、神殿の普請をするに就て金が必要となつたので、別當の神泉院と云ふ者を大阪に遣はして貸金を集める事になりました。所が神泉院が、大阪の新町や難波新地で放蕩をしたので七十兩の食込が出來、それを返さうと思つて堂島の米相場に手を出した爲に、到頭千兩以上の不足を生じてしまつた。別當の失策は神主の責任、さあ千兩の償ひが出來なければ河内が講中に對して申譯が立たなくなつた。文左衛門に貸す所ではない、河内の方が借りたい位になつて、穴埋に苦勞してゐる最中だつたのであります。

始終の様子を聞いた文左衛門、深く心に決する所あるらしく一と膝押しすゝめて、

『お舅御、それでは其の殘りの積立金の中から、千兩だけ私に貸して下さい。運よく私が成功すれば、拜借の千兩に千兩の利を附けてお返しします。さすれば、別當殿の使ひ込みも穴埋が出來ると云ふものですし、また運惡く途中で難船して、文左衛門の身が海底の水屑と消えたとしても、其上で處決されても遲くはありますまい。此の仕事は私に取つては運賦天賦ですが

貴方も乗りかゝつた舟と思つて、一つ乗るか反るか一生の運試しをなさつたら如何です。』

から云はれて、藤浪河内もそれならと云ふ氣になり、千兩の金を文左衛門に貸し與へる事になりました。文左衛門が後年、百萬の大財産に作り上げたのは、固より自分の膽氣才略にも由りますし、番頭長五郎の機智才能にも由りますが、其の根底は實に此の千兩と云ふ資金に在つたに違ひありません。若し此時文左衛門が千兩といふ資金を手にする事が出來なかつたならば、文左衛門が如何に不世出の英傑であつても、到底アレだけの立身出世は出來なかつたでありませう。

早く申せば、紀文一代の暴富は、此の千兩といふ資本が生み出したやうなもので、現代の紳士閥經濟學者の詞を藉りて申しますならば、『富を生むものは資本』なのであります。然し、そんなら此の千兩といふ資本は誰が作り、何が生み出したのか、藤浪河内が文左衛門に貸し與へた千兩の金は、玉津嶋明神の講中の積立金の一部であります。それは天から降つた物でもなければ地から湧いた物でもなく、畢竟、講中が粒々辛苦の末に積み立てたもので、現代の言で申せば所謂『勞働の結果』であります。さすれば、紀文が後年百萬長者となるに至つた原動力とも云ふ如き此の千兩は、數百人若くは數千人の、玉津島明神講中の勞働の結晶に外ならない譯で、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

三

閑話休題、望む資金の千兩を手に入れた文左衛門は、すぐさま五十兩の元利を拂つて、片田屋惣兵衛から明神丸といふ五百石積の船を請出し、七十兩でその修繕を船大工に請負せました。

今度は蜜柑です、何しろこれが無くちやア船ばかりが百隻あつたつて、一文の儲けにもなりはしない。工場と機械とが揃つても、原料が無かつたら何一つの生産されないやうなものですから、文左衛門、今度は蜜柑問屋へやつて參りました。

『偖て御主人、和歌の浦の五十嵐文左衛門と申せば、少しは知られた廻船問屋ですが、先代の失敗で今は見る影もない貧乏暮し、そこで私も男と生れた甲斐には、もう一度家業を昔の繁昌に戻したいと思つて、風の變るのを待つて大浪大風を乘切り、江戸へ蜜柑船を出すつもりで、融工面の資本を拵えて來ました。此の浪風でどちらの問屋さんも、皆な蜜柑をもて餘してお出の御樣子。どうでせう、生命を資本の商賣始めに、餞別だと思つて一つ安く見切つて下さいませんか。』

てしまつて、殘つた一隻の明神丸も今では片田屋惣兵衛と云ふ家に五十兩の抵當に入つてゐる。此の船を請出して相當の修繕を加へ、蜜柑を買ひ込み、上乘りの船頭を雇ひ入れるには、少なからぬ金、即ち流動資本が要りますが、其の肝心要めの物が無いのだから、之れには流石の文左衛門も當惑しました。

そこで思ひついたのは、舅の藤浪河内です。文左衛門は此の河内から、一攫萬金の冒險事業に必要な資金を借り受けやうと思ひました。で、或る日、文左衛門は河内を訪ねて計劃を打ち明け、金一千兩の借財を申し込みました。

『成る程、イヤよく解りました。其の位の度胸が無くつちやア人間、成功するものぢやない。普通ならお止しなさいと云つて止める可き所だらうが、私は止めない。折角思ひ立つた事だからおやんなさるが宜い。もし萬一の事があつた節は、婿老爺とお貞の身の上は及ばずながら私が引受けます。たゞ然し困つた事には、その資本ですナ。これが百兩とか二百兩とか云ふのだつたら、造作なくお貸し出來るのだが、千兩と云つては却々の大金。尤も、私は[illegible]島明神の積立金三千五百兩と云ふものを[illegible]けお貸し[illegible]貴か[illegible]のたら、[illegible]出來ない事も無いが、貴は今[illegible]ち上つて居る所で[illegible]』

と云つて、藤浪河内が文左衛門に物語つたところに由ると、此の三千五百兩の内、千五百兩を河内の手許に置き、後の二千兩は大阪に貸出してあつた。それが今度、神殿の普請をするに就て金が必要となつたので、別當の神泉院と云ふ者を大阪に遣はして貸金を集める事になりました。所が神泉院が、大阪の新町や難波新地で放蕩をしたので七十兩の食込が出來、それを取返さうと思つて堂島の米相場に手を出した爲に、到頭千兩以上の不足を生じてしまつた。別當の失策は神主の責任、さあ千兩の償ひが出來なければ河内が講中に對して申譯が立たなくなつた。文左衛門に貸す所ではない、河内の方が借りたい位になつて、穴埋に苦勞してゐる最中だつたのであります。

始終の樣子を聞いた文左衛門、深く心に決する所あるらしく一と膝押しすゝめて、

『お舅御、それでは其の殘りの積立金の中から、千兩だけ私に貸して下さい。運よく私が成功すれば、拜借の千兩に千兩の割手を附けてお返しします。さすれば、別當殿の使ひ込みも穴埋が出來ると云ふものですし、また運惡く途中で難船して、文左衛門の身が海底の水屑と消えたとしても、其上で露決されても惜しくはありますまい。此の仕事は私に取つては運賦天賦ですが

貴方も乘りかゝつた舟と思つて、一つ乘るか反るか一生の運試(うんだめ)しをなさつたら如何(どう)です。』

から云はれて、藤浪河内もそれならと云ふ氣になり、千兩の金を文左衛門に貸し與へる事になりました。文左衛門が後年、百萬の大財產に作り上げたのは、固より自分の膽氣才略にも由りますし、番頭長五郎(ばんとうちやうごらう)の機智才能にも由りますが、其の根底は實に此の千兩と云ふ資金に在つたに違ひありません。若し此時文左衛門が千兩といふ資金を手にする事が出來なかつたならば、文左衛門が如何に不世出の英傑であつても、到底アレだけの立身出世は出來なかつたでありませう。

早く申せば、紀文一代の暴富は、此の千兩といふ資本が生み出したやうなもので、現代の紳士閥經濟學者の詞(ことば)を藉りて申しますならば、『富を生むものは資本』なのであります。然し、そんなら此の千兩といふ資本は誰が作り、何が生み出したのか、藤浪河内が文左衛門に貸し與へた千兩の金は、玉津嶋明神の講中の積立金の一部であります。それは天から降つた物でもなければ地から湧いた物でもなく、畢竟(つまり)、講中が粒々辛苦の末に積み立てたもので、現代の言で申せば所謂『勞働の結果』であります。さすれば、紀文が後年百萬長者となるに至つた原動力とも云ふ如き此の千兩は、數百人若くは數千人の、玉津島明神講中の勞働の結晶に外ならない譯で、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

三

閑話休題(あだしごとはさておき)、望む資金の千兩を手に入れた文左衛門は、すぐさま五十兩の元利を拂つて、片田屋惣兵衛から明神丸といふ古石積の船を請出し、七十兩でその修繕を船大工に請負せました。

今度は蜜柑です、何しろこれが無くちやア船ばかりが百隻あつたつて、一文の儲けにもなりはしない。工場と機械とが揃つても、原料が無かつたら何一つの生產されないやうなものですから、文左衛門、今度は蜜柑問屋へやつて參りました。

『偖て御主人、和歌の浦の五十嵐文左衛門と申せば、少しは知られた廻船問屋ですが、先代の失敗で今は見る影もない貧乏暮し、そこで私も男と生れた甲斐には、もう一度家業を昔の繁昌に戻したいと思つて、風の變るのを待つて大浪大風を乘切り江戸へ蜜柑船を出すつもりで、酷工面(ひどくめん)の資本(もと)を拵えて來ました。此の浪風でどちらの問屋さんも、皆な蜜柑をもて餘してお出の御樣子。どうでせう、生命を資本の商賣始めに、餞別だと思つて一つ安く見切つて下さいませんか。』

『イヤ、御先代とはお交際をして頂いた私だ、そう云ふお話には元帳をお見せ申しませう。此の通り、私の所には一番藏から四番藏までの蜜柑が三萬八千三百籠、これが山方から仕入れる元値が一籠一匁一分、それに籠締繩の入費が二分で、都合一匁三分かゝつて居ます。然しかう言ふ時ですから、口錢の利益のと、面倒くさい文句は云ひません。一籠一匁四分なら手を打ちませう。』

『成る程、平生だつたら殆んど値にならない程お安い相場です然し、私のやうな生命知らずの大山師が無かつたら、三萬八千籠の蜜柑は一匁四分どころか、一分にもならずに皆な腐つてしまはなければなりません。腐つた蜜柑を海へ捨てるにも、それ相當の費用は要りませう。どうです御主人、今年は蜜柑問屋の飢饉年だと諦らめ、腐り蜜柑を海へ捨てるのだと思つて、一籠一匁で私に讓つては下さいませんか。』

『それア然し五十嵐さん、余まりアコギ過ぎる。それじやあ宛然、こつちの脚下を見ると云ふもの……。』

『勿論です。この大時化で一隻の蜜柑船を出す者がなく、問屋さんが山のやうな蜜柑をもて餘して居るのが、固より私の附目なのです。其代り、私は生命といふ錢金に替へられない資本を注ぎ込むのです。イヤ、お見切が附かなければ宜しい、數の多い問屋さんの中には、案外話の解る人もありませうから、一寸他さまを當つて見ます。』

『マ、マ、マ、五十嵐さん待つて下さい。解つた、解つた、お前さんの話はよく解つた。ナーニ、蜜柑問屋に來年といふ年の無いじやなし、宜しい一匁で手を打ちませう。』

文左衛門はとう〳〵蜜柑問屋を口說き落して、江戸へ積み出すに必要な蜜柑を買ひ占めました。これでもう後に殘る問題は、上乘りの船頭、卽ち勞働の供給を得るだけです。文左衛門が考へたのは、此の大時化の中をボロ船で江戸まで乘切らうと云ふのは、生命知らずの暴れ者でなくちやならぬと。そこで出掛けて往つたのは、和歌の浦で名代の土左衛門仙八と云ふ船頭の家であります。

門口から家内の樣子を窺ふと、居る、居る、霖雨で商賣が出來ない所から、仙八を始めとして、同じ仲間の唐人の源八、乙名の九郎兵衛、舵の庄之助生死の喜代藏、名不知の市平、こんな連中が集まつて丁半の爭ひに夢中になつて居ります。仙八は一度難船して死んだのを助かつた所から土左衛門、源八は朝鮮に吹流されて戻つた所から唐人、九郎兵衛は錢使ひの荒い所から大名、それから舵取の名人なので舵の庄之助、喧嘩が好きで生傷の絶間がないので生死の喜代藏、自分の名前を忘れるので

名不知の市平なんて云ふ綽名が肩書になつて居ります。

一同は文左衞門の還入つて來たのを見て、大慌てに慌てゝ壺皿や賽を押し隱しましたが、文左衞門から金儲けの話をしに來たのだと聞いて、やつと安心しました。

『金儲けたア耳寄りな話だが、旦那そりア一體何です。金にさへなりや、海坊主とでも取組みますぜ。』

『外じやア無いが、此の逆風もいまに江戸行の順風に變るだらうと思ふが……』

『それア知れてまさア。だが此の模樣じやア、海は容易に穩やかにやなりませんぜ。』

『そこだ、風が江戸行にさへ變つたら、海荒れを厭はずに船を一隻仕立てゝ、蜜柑を江戸に積み出さうと思う。どうだ、片道で一人五十兩の給金を出すが、乘組む了見はないか。』

『ヘエ、其奴ア大層も無え話だが、船は新造ですか。』

『ナーニ、明神丸を積出して手入を加へたんだ。』

、それは御免蒙むりませう、貴方の前じや云ひ惡いが、アレは私共は厄介船と呼んで居る位です。新造の船だつて、此の大時化を乘切るにや、生命がけの仕事です。況してあの厄介船じや乘出したが最後ブツ壞れて了ひまさア。』

さあ文左衞門が之にはまた困つた。資金は調つたし、船の手入れもかゝつて居るし、蜜柑の相談も出來て居る。機械も原料も既に備はつて、今は只だ勞働の供給さへ得れば、富が生産されるばかりになつて居る。然るに、其の肝心な勞働が手に入らないのだから。これは困るのも當然です。

若し文左衞門が、此の際、所要の勞働を雇ひ得られなかつたとしたら如何でせうか。クレオパトラの鼻がもう些し低かつたら、世界の地圖がもつと變つて居る筈だとか云ふ事ですが、文左衞門が仙八始め五名の船頭を雇ひ得なかつたとしたら、恐らく紀文一代の聚富は積めなかつたでありませう。古河が足尾銅山を何百もつて居たつて、住友が別子銅山を何千もつて居たつて、若し勞働者が無かつたならば、一文半錢の富と雖も生み出されはしないのです。資本は決して富を生産する上の主因ではありません。それは單に副因たるに過ぎないので、謂はゞ補助機關であります。否、資本そのものが既に勞働の結果なのでありまして、文左衞門が數萬の富を獲得する事の出來た資本、即ち千兩といふ資本と、何萬籠といふ蜜柑も、又は明神丸といふ船も、孰れか勞働の成果でないものがありませうか。そして亦資本そのものは、啻だ富を生産すべき原因で無いのみならず、絶へず勞働に依つて維持修繕せられない限り、直ちに滅亡してしまはなければならぬ性質のものでありまして、假令ば明神丸

にしろ、蜜柑にしろ、若し其儘に抛たらかして置いて、毫も勞働に依て維持修築を加へなかつたならば、忽ちに物の役には立たなくなるのであります。

是に由て之を觀れば、勞働こそは、〇〇〇〇、〇〇〇〇〇、富を生産すべき主動力なのでありまして、且つ資本と雖も、勞働に依つて始めて作らるゝものであり、勞働にして存しなかつたならば、一日と雖も存在する事の出來ないものであります。故に、文左衛門が一獲萬金の冒險事業に成功して、一躍して成金となつたのも、歸するところ仙八始め五人の船頭、即ち勞働の結果であつたと云ふべきでありませう。

四

文左衛門は何思ひけん、突然百兩包みを抛り出して、

『さあ仙八、俺が百兩包みを一と張る。負けたら俺の運の無いのだ、よしんば船が出やうたつて、途中で難船して鮫の餌食になるに定つてゐる。だが、六つある賽の目の中から一が出れば運が俺に向いて居るのだ。此の仕事は必ず成功するに違ひないたとへ海が荒れて居やうが、船がぶつ毀れかけて居やうが、天道さまが無事に俺達を品川沖へ入れて下さるだらうと思ふ。どうだ、俺に負けたらお前達六人、俺の云ふ事をきいて明神丸に乘組んで呉れないか。』

こう云ふ彼等は、こんな場合には流石に解りが早い。六人の者が異口同音、

『面白い、宜しうがす。これはチョボ一と云つて、一個の賽でやる賭博ですから、旦那が一に張れア五つの目が此方に居る譯で、こんな強い話やアありやアしねえ。それで居て、旦那に目が出る位ゐだつたら、旦那に運勢が向いて居るのだから、これア話に乘らねえなア嘘だ。』

と、茲で一同の者が承諾をしたから、大名の五郎兵衛が賽をふつて賽皿を明けると、文左衛門が百兩の金を張つた一の目が出た。文左衛門は吾が事成れりとばかり、滿面に快心の笑を漲ぎらす、六人はアツと云つた儘しばらくし開いた口が塞がりませんでしたが、こうなると諦らめのいゝ連中ですから、今さら愚痴めいた事は云ひません。潔ぎよ文左衛門と行を供にすることを約束いたしました。

そこで江戸行片道が一人當り五十兩、半金の廿五兩は即坐に手附に打ち、殘りの廿五兩は品川へ乘込んだ時に渡すと云ふ勞働契約が成り立ちました。そして上乘の船頭六人の外に、更に六人の水夫楫取の雇ひ入れを托し、風が江戸行に變り次第、老朽せる明神丸に十三人の身を托し、難風激浪を冒して和歌の浦を出帆することに定めました。

茲でもう一つ、理窟を云はなければならないのは、此の船頭に對する報酬、即ち勞働賃銀の問題であります。一切の富は勞働の所產であると云ふことは、既に述べた所でありますが、文左衛門が六人の船頭に支拂つた報酬は、僅かに三百兩に過ぎませぬ。そして文左衛門自身は、社會的勞働の結果たる蜜柑と、船と、並びに六人の船頭の勞働とに依て、一擧にして數萬の暴富を成したのであります。文左衛門がその才智と、機略と、膽力とに依て、此の富を作る上に寄與貢獻して居る點に就ては、誰しも異存の無い所でありますし、從つて亦、彼が此の富の分配に與かるべき權利を存ずる點に就ても、異議を申し立つる者は無い筈であります。

然しながら、富を作る上に直接にして主要な働らきを作して居る六人の船頭が、僅か三百兩の賃銀しか拂はれない場合に文左衛門一人のみが數萬兩を獨占したと云ふことは、明らかに○○○○○○○○る事實と云はざるを得ません。けれ共、此の怪しからぬ事實こそは、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○、○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

今日、米國で最新の機械を用ひて靴を製造して居る職工は、一日に十足の靴を作るそうでありますが、其の勞働者が得る賃銀は、僅かに二足分の靴を購ひ得るに過ぎません。して見ると八足分の富と云ふものは、悉く資本家の懷中に入つてしまつて居る譯で、斯の如く資本家が、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

○○、○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、文左衛門が社會的勞働の綜合的結果に依て、數萬金を獲得したるにも拘はらず、六人の船頭は僅かに往復五十兩づゝの報酬しか得られなかつたのも、理窟は同じことでございます。

にしろ、蜜柑にしろ、若し其儘に抛たらかして置いて、毫も勞働に依て維持修築を加へなかつたならば、忽ちに物の役には立たなくなるのであります。

是に由て之を觀れば、勞働こそは、○○○、○○○○○、富を生產すべき主動力なのでありまして、且つ資本と雖も、勞働に依つて始めて作らるゝものであり、勞働にして存しなかつたならば、一日と雖も存在する事の出來ないものであります。故に、文左衞門が一攫萬金の冒險事業に成功して、一躍して成金となつたのも、歸するところ仙八始め五人の船頭、即ち勞働の結果であつたと云ふべきでありませう。

四

文左衞門は何思ひけん、突然百兩包みを抛り出して、

『さあ仙八、俺が百兩包みを一と張る。負けたら俺の運の無いのだ、よしんば船が出やうたつて、途中で難船して鮫の餌食になるに定つてゐる。だが、六つある賽の目の中から一が出れば運が俺に向いて居るのだ。此の仕事は必ず成功するに違ひないたとへ海が荒れて居やうが、船がぶつ毀れかけて居やうが、天道さまが無事に俺達を品川沖へ入れて下さるだらうと思ふ。どうだ、俺に負けたらお前達六人、俺の云ふ事をきいて明神丸に乘組んで吳れないか。』

こう云ふ彼等は、こんな場合には流石に解りが早い。六人者が異口同音、

『面白い、宜しうがす。これはチョボ一と云つて、一個の賽でやる賭博ですから、旦那が一に張れァ五つの目が此方に居る譯で、こんな強い話やァありやァしねえ。それで居て、旦那に目が出る位ゐだつたら、旦那に運勢が向いて居るのだから、これァ話に乘らねえなァ嘘だ。』

と、茲で一同の者が承諾をしたから、大名の五郎兵衞が賽をふつて壺皿を明けると、文左衞門が百兩の金を張つた一の目が出た。文左衞門は吾が事成れりとばかり、滿面に快心の笑を漲ぎらす、六人はアッと云つた儘しばらくし開いた口が塞がりませんでしたが、こうなると諦らめのいゝ連中ですから、今さら愚痴めいた事は云ひません。潔ぎよ　文左衞門と行を供にすることを約束いたしました。

そこで江戸行片道が一人當り五十兩、半金の廿五兩は即坐に手附に打ち、殘りの廿五兩は品川へ乘込んだ時に渡すと云ふ勞働契約が成り立ちました。そして上乘の船頭六人の外に、更に六人の水夫楫取の雇ひ入れを托し、風が江戸行に變り次第、老朽せる明神丸に十三人の身を托し、難風激浪を冒して和歌の浦を出帆することに定めました。

茲でもう一つ、理窟を云はなければならないのは、此の船頭に對する報酬、即ち勞働賃銀の問題であります。一切の富は勞働の所産であると云ふことは、既に述べた所でありますが、文左衛門が六人の船頭に支拂つた報酬は、僅かに三百兩に過ぎませぬ。そして文左衛門自身は、社會的勞働の結果たる蜜柑と、船と、並びに六人の船頭の勞働とに依て、一擧にして數萬の巨富を成したのであります。文左衛門がその才智と、機略と、膽力とに依て、此の富を作る上に寄與貢獻して居る點に就ては、誰しも異存の無い所でありますし、從つて亦、彼が此の富の分配に與かるべき權利を存ずる點に就ても、異議を申し立つる者は無い筈であります。

然しながら、富を作る上に直接にして主要な働らきを作して居る六人の船頭が、僅か三百兩の賃銀しか拂はれない場合に文左衛門一人のみが數萬兩を獨占したと云ふことは、明らかに○○○○○る事實と云はざるを得ません。けれ共、此の怪しからぬ事實こそは、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

今日、米國で最新の機械を用ひて靴を製造して居る職工は、一日に十足の靴を作るそうでありますが、其の勞働者が得る賃銀は、僅かに二足分の靴を購ひ得るに過ぎません。して見ると八足分の富と云ふものは、悉く資本家の懷中に入つてしまつて居る譯で、斯の如く資本家が、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

○○、○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○。○○○、文左衛門が社會的勞働の綜合的結果に依て、數萬金を獲得したるにも拘はらず、六人の船頭は僅かに往復五十兩づゝの報酬しか得られなかつたのも、理窟は同じことでございます。

五

いや、あまり理窟に身が入り過ぎて、肝心の本文がお留守になつて了ひました。

偖て、水夫楫取の雇入もすみ、船脚を重くする爲に紀州石を積み込み、用意萬端が整ひましたので、此上は只だ吹き荒れてゐる逆風が、江戸行の順風に變るのを俟つばかりであります。其中に、廿五日の朝に至つて漸やく江戸行の順風となりましたが、然し相變らずの暴風で、海若荒るゝことと天地を翻轉するかと疑はるゝばかりでございます。然しどんなに風浪が激しいからと云つて、十一月八日の鞴祭り迄に江戸に入らなかつたら、蜜柑の相場は夥しい下落を來します。どうぞ生命を賭けた一六勝負、風の變つたのを幸ひに乗り出せと、玆に十月廿六日の未明を以て愈々和歌の浦解纜といふ事に一決いたしました。

そこで明日が解纜といふ前夜、文左衞門は自分の家に六人の船頭と、六人の水夫楫取を集めて、初船出の祝宴を開きました

船頭が見て驚いた、此の霖雨といふのに會席膳の上りは、源平作り分の刺身、鰻の蒲燒、吸物椀などが並んでゐる。

『どうでえ、貧乏業平だなんて惡口を云ふが、こゝいらが舊家の威勢だ。見や、此の霖雨で所方は上つたりだつてえのに、よく此の刺身が間に合つたじゃねえか。久しく魚に焦れてゐるんだ、此の赤え奴を見ちゃ堪らねえ。』

土左衞門の仙八が唾を垂らさんばかりにして、刺身一片口に入れたが妙な顔をして居る。生死の喜代藏、舵の庄之助などもやはり一片口に入れて變な顔をする。一同がどうも妙な味のする魚だ、この刺身は一體なんだらうと思つて文左衞門に尋ねると、變なのも妙なのも道理、魚ではなくて赤いのは色づけの寒天、白いのは蒟蒻、酢味噌で食ふ精進の鱠でした。それから吸物椀の蓋を取つて見ると、これも雁もどきに菜つ葉の身で、鰻の蒲燒と見えたのが、實は湯婆を串に刺して燒いたものです。

さあ船頭達が承知しない、板子一枚下は地獄と云ふやうな生活をして居る者は、平生から非常に御幣をかつぐものですが、況して今日は目出たい船出の前祝ひ。何も縁起ものゝ事ゆゑ、干物でも目刺でもいゝ、尾頭つきの魚が付けて貰ひたかつたのに、これじゃ宛然法事のお逮夜のやうな精進料理だ、と云つて苦情を並べました。

文左衞門は苦笑つて、

『いや其の苦情は尤もだが、然しまあ考へて見て呉れ。今度の船出は十に八九は難かしいと見なけりゃならぬが、難船は何處の沖、何處の浦でするか解らない。自分の家で往生すれば以て[illegible]一家親類が集まつて、それ相當の追善供養致して樂

れるが。風向の變り易い熊野灘、大川のやうな浪の打ち寄せる遠州灘、黒潮の烈しい相模灘で難船をし、底の水屑となつたが最後、訪ひ弔ひをして貰ふ譯には行かぬ。だから、明神丸も今は幽靈丸と名を改め、今夜は俺たちの法事の逮夜のつもりで、わざと精進料理を出したのだ。』

『成る程、理由を聞けばソンなものかネ。マア／＼仕方がねえ今更變代るト云ふ譯にも往かず、人間一度は死なけれアならねえんだ。さあ兄弟、酒だけは灘の生一本だ、どうせ死ぬと覺悟を定めて今夜飲み明かさうぜ。』

と、一同の船頭は自棄半分で、頻りに大きな物で酒をあほつて居ります、文左衛門はやがて妾のお貞を呼んで。呉服屋から屆いた仕着の包みを取寄せさせ、それを自分を始め十二人に割當てました。所が、これが普通の袢纏と違つて經帷子に頭陀袋白の甲掛脚袢といふ、すつかり冥土行の死人の扮装でございます。十二人が呆氣に取られて居る所へ、菩提寺の和尚が小坊主を連れてやつて來た。小坊主が白木の机を据え、その上へ十二人の位牌を並べ、和尚が珠數つまぐつて引導を渡します。さあ生きながら引導を渡された、これでもう思ひ殘すところは無え浪でも風でも持つて來いと、十二人の意氣天を衝くが如く、痛飲淋漓として夜を徹して居ります。文左衛門は一夜のうちで母の妙林尼妻のお貞と別れの盃を酌み交し、母親は傳家の寶刀菊一文字を贈つて、最初の一子が首途の餞けとする。海には狂瀾怒濤の相搏ち相嚙む響き凄まじく、陸には暴風砂礫を飛し猛雨樹枝を碎いて、天と地と暗黒晦冥の裡に戰つて居ります。一室には母子夫妻が生別死別を兼ぬるしめやかな物語、前室には生命知らずの荒くれ男が、今生の思ひ出の鯨飲亂舞、その間に秋の長夜も更けて往き、いつか東の空がほの白く明け初めました。

六

翌くればいよ／＼正保四年十月二十六日、文左衛門を先頭に十二人が例の死裝束で、和歌の浦の濱邊を指してやつて參ります。濱邊には既に一行の親類緣者、知己友人を始め、見物の群集が黒山のやうになつて、別れを惜み行を壯んにいたします。

『旦那、お目出たう存じます。結構なお日和で。』

『旦那、お目出たうございます。いゝ風で結構でございます』

『ウム、いゝ風で目出たい。これなら江戸入は樂だらう。』

『ヤイ、どうだ聞いたか。此の永時化が結構な日和で、此の大浪がいゝ風だとよ。』

『いゝ風に違えねえヤ、沖はまつ闇だし、浪は大山が押し寄せてるやうだ。見や、此の風の酷いこと、こんな大きな礫が面にブツカりやがらア。』

五

いや、あまり理窟に身が入り過ぎて、肝心の本文がお留守になつて了ひました。

偖て、水夫梶取の雇入もすみ、船脚を重くする爲に紀州石を積み込み、用意萬端が整ひましたので、此上は只だ吹き荒れてゐる逆風が、江戸行の順風に變るのを俟つばかりであります。共中に、廿五日の朝に至つて漸やく江戸行の順風となりましたが、然し相變らずの暴風で、海若荒るゝことと天地を顚轉するかと疑はるゝばかりでございます。然しどんなに風浪が激しいからと云つて、十一月八日の鞴祭り迄に江戸に入らなかつたら、蜜柑の相場は夥しい下落を來します。どうぞ生命を賭けた一六勝負、風の變つたのを幸ひに乘り出せと、玆に十月廿六日の未明を以て愈々和歌の浦解纜といふ事に一決いたしました。

そこで明日が解纜といふ前夜、文左衛門は自分の家に六人の船頭と、六人の水夫梶取を集めて、初船出の祝宴を開きました。船頭が見て驚いた、此の霖雨といふのに會席膳の上りは、源平作り分の刺身、鰻の蒲燒、吸物椀などが並んでゐる。

『どうでえ、貧乏業平だなんて惡口を云ふが、こゝいらが富家の威勢だ。見や、此の霖雨で魚方は上つたりだつてえのに、よく此の刺身が間に合つたもんぢやねえか。久しく魚に焦れてゐるんだ、此の赤え奴を見ちや堪らねえ。』

土左衛門の仙八が唾を垂らさんばかりにして、刺身一片口に入れたが妙な顔をして居る。生死の喜代藏、舵の庄之助などもやはり一片口に入れて變な顔をする。一同がどうも妙な味のする魚だ、この刺身は一體なんだらうと思つて文左衛門に尋ねると、變なのも妙なのも道理、魚ではなくて赤いのは色づけの寒天、白いのは蒟蒻、酢味噌で食ふ精進の鱠でした。それから吸物椀の蓋を取つて見ると、これも雁もどきに栄つ葉の身で、鰻の蒲燒と見えたのが、實は湯婆を串に刺して燒いたものです。さあ船頭達が承知しない、板子一枚下は地獄と云ふやうな生活をして居る者は、平生から非常に御幣をかつぐものですが、況して今日は目出たい船出の前祝ひ。何も緣起ものゝ事ゆゑ、干物でも目刺でもいゝ、尾頭つきの魚が付けて貰ひたかつたのにこれじや宛然法事のお逮夜のやうな精進料理だ、と云つて苦情を並べました。

文左衛門は莞爾笑つて、

『いや共の苦情は尤もだが、然しまあ考へて見て呉れ。今度の船出は十に八九は難かしいと見なけりやならねが、難船は何處の沖、何處の浦でするか解らない。自分の家で往生すれば、何は無くとも一家親類が集まつて、それ相當の追善供養はして呉

れるが。風向の變り易い熊野灘。大山のやうな浪の打ち寄せる遠州灘、黒瀬の烈しい相模灘で難船をし、底の水屑となつたが最後、訪ひ弔ひをして貰ふ譯には行かぬ。だから、明神丸も今は幽靈丸と名を改め、今夜は俺たちの法事の逮夜のつもりで、わざと精進料理を出したのだ。』

『成る程、理由を聞けばソンなものかネ。マア／＼仕方がねえ今更變代る丶云ふ譯にも往かず、人間一度は死なけれアならねえんだ。さあ兄弟、酒だけは灘の生一本だ、どうせ死ぬと覺悟を定めて今夜飲み明かさうぜ。』

と、一同の船頭は自棄半分で、頻りに大きな物で酒をあほつて居ります、文左衛門はやがて妾のお貞を呼んで。奥服屋から屆いた仕着の包みを取寄せさせ、それを自分を始め十二人に割當てました。所が、これが普通の袢纏と違つて經帷子に頭陀袋白の甲掛脚絆といふ、すつかり冥土行の死人の扮裝でございます。十二人が呆氣に取られて居る所へ、菩提寺の和尚が小坊主を連れてやつて來た。小坊主が白木の机を据え、その上へ十二人の位牌を並べ、和尚が珠數つまぐつて引導を渡します。さあ生きながら引導を渡された、これでもう思ひ殘すところは無え浪でも風でも持つて來いと、十二人の意氣天を衝くが如く、痛飲淋漓として夜を徹して居ります。文左衛門は一夜のうちで母の妙林尼妻のお貞と別れの盃を酌み交し、母親は傳家の寶刀菊一文字を贈つて、最初の一子が首途の餞けとする。海には狂瀾怒濤の相搏ち相嚙む響き凄まじく、陸には怒風砂礫を飛し猛雨樹枝を碎いて、天と地と暗黒晦冥の裡に戰つて居ります。一室には母子夫妻が生別死別を兼ぬるしめやかな物語、前室には生命知らずの荒くれ男が、今生の思ひ出の鯨飲亂舞、その間に秋の長夜も更けて往き、いつか東の空がほの白く明け初めました。

六

翌くればいよ／＼正保四年十月二十六日、文左衛門を先頭に十二人が例の死裝束で、和歌の浦の濱邊を指してやつて參ります。濱邊には既に一行の親類縁者、知己友人を始め、見物の群集が黒山のやうになつて、別れを惜み行を壯んにいたします。

『旦那お目出たう存じます。結構なお日和で。』

『旦那、お目出たうございます。いゝ風で結構でございます』

『ウム、いゝ風で目出たい。これなら江戸入は樂だらう。』

『ヤイ、どうだ聞いたか。此の永時化が結構な日和で、此の大浪がいゝ風だとよ。』

『いゝ風に違えねえヤ、沖はまつ闇だし、浪は大山が押し寄せてるやうだ。見や、此の風の酷いこと、こんな大きな礫が面にブツカリやがらア。』

『其代り、巧く船が江戸に入りや、小判小粒の雨が降らア。』
『もし途中で難船と來りやア、六文もつて十萬億土へ旅立だ。』
『そうしたら、三途の河で渡舟の船頭よ。食ふにや困らねえから心配するな。』
『五十嵐の旦那、どうぞ御無事に江戸入を。』
『皆さん、目出たく江戸入を。』
彼方此方に挨拶が交されて居ましたが、いつ迄名殘を惜んで居ても果しがないので、一行十三人は船に乗り移り、沖に繋いである幽靈丸を指して漕ぎ出しました。風は荒れに荒れ、濤は狂ひに狂ひ、折柄雨は篠つくやうに降り出して、艀は九天に打ち上げられ、奈落に捲き込まれるばかり。其の中を漸やく漕ぎ抜けて本船に乗り込みますと、文左衛門は船頭、舵は庄之助、親爺は九郎兵衛、炊(かしき)は喜代藏、市平は櫓、仙八は水先、源八は舳、其の他の者は手の足りぬ所を助けると、それ〴〵役割を定めました。それから愈々、碇を巻き上げて船を出すことになりましたが、文左衛門は何思ひけん、船首に立つて腰から謨りの菊一文字、抜くより早く二條の碇綱を丁と切り拂つた。
『やあ一同驚くな、文左衛門、狂氣したのでも無ければ亂心したのでもない。一同が碇づなを頼みにして居たのでは、到底も此の難風激浪を押し切つて、江戸に乗込むやうな大事は仕遂げられぬ船が生命と頼む碇綱を切つたのは、取も直さず背水の陣、さあ一同、固より生命を賭けた仕事だ、未練を出さずに死身になれ。』
『いや判りました、船の名は幽靈丸、乗組は死裝束、引導はもう受けて來た。生命を捨てる覺悟でシツカリやれ。』
土左衛門の仙八が聲勵まして指圖をする、水夫(かこ)楫取(かんどり)は聲はり上げて、『めでた、めでたの若松さまよ、枝も榮えて葉も繁る』と、勇ましい船唄と共に大鵬が垂天の翼の如き帆を捲き上げると、忽ち烈風を膨んで船は弦を離れた征矢(そや)の如く、澎湃たる怒濤を突切り、沛然たる猛雨を衝き、東を望んで駛り出しました。
文左衛門は帆柱の下にドッカリ座を占め、心に住吉大明神を念じつゝ、大磁石を振つて東西南北の針路を圖り、六人の船頭は持場々々に就いて、水夫楫取を指揮して命の限り風浪と戰つて居ります。名も恐ろしき熊野灘を辛くも切り抜けて、鳥羽の沖に差かゝつた頃は風いよ〳〵強く、浪ます〳〵荒く、漆の如き天地の闇に怒れる白象の群のやうな大浪が、顛れては起り、起つては顛れ、五百石積の巨船もさながら木の葉のやうに飜弄されて、乗組の十三人は精も根も盡きんとする位ゐ疲れ果てゝしまひました。

文左衛門は傳家の寶刀を鞘拂ひして額に押し當て、聲高らかに住吉大明神を念じ、『吹けや難風、狂へや荒浪。帆柱を折れ、船を碎け。』と呼ばはり〳〵、一行の勇氣を鼓舞して居ります。やがて熊野灘の嶮を過ぎ、鳥羽の浦の難所を越え、左手に伊良子岬を望んで渥美半嶋の沖を轉ぶやうに駛り、差かゝつたのは遠洲灘七十五里の大難所。三州吉田の沖合に到つた時には、東西南北より逆捲き返す狂瀾は、怒號咆哮して帆柱を呑み、車輪を流すが如き大雨は舷を打ち碎く。暴風は帆柱を折り、怒濤は舵を捲き、黒白(あやめ)も分さぬ大海原の眞只中で、幽靈丸は玆に進退の自由を失つてしまひました。

此時は既に水夫楫取は奔命に疲れて胴の間にゴロ〳〵轉がり荒海を棲家のやうにして「幾度かの難船にも出會つたことのある六人の船頭も、遂に堪り兼ねてそこへ倒れてしまひました。」流石に氣丈の文左衛門も今は身神腦亂して、

『アゝもう駄目だ、俺の運もこれ限り、一同の生命もいまが最後だ。覺悟を定めて船と一緒に沈んで呉れ。』

と、一聲高く叫んだが、後はもう無我夢中、死んだのだか生きて居るのか人事不省に陷ゐつてしまひました。

紀文の成功は紀文の努力奮鬪に由ると云ふ人があります。カアネギーは自分の致富は努力奮鬪の結果だと申しました。成る程、紀文もカアネギーも、努力奮鬪したに違ひはありますまい然し努力奮鬪だけが尊い譯でも無ければ、努力奮鬪だけで富の積まれる譯でもありません。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇の〇〇〇。つい先頃、日本の郵便事業が五十年に達したと云ふので、功勞者が表彰されなどいたしましたが、其中には四十年間も郵便配達をして居る者もありました。カアネギーが如何に努力奮鬪しても、單に賃銀勞働者として努力奮鬪したに止まつたならば、彼は終生、郵便配達か何かで終つたでありませう。即ち紀文にしろ、カアネギーにしろ、或は其他の如何なる資本家にしろ、その暴富を積み、成金となり、ミリオネヤア若くはビリオネヤアとなる事を得たのは、恐く他人の努力を賃銀で買ひ他人に働らかせて其の剩餘價値を掠奪するのでありまして、賃銀を得て他の爲に働らいて居る限り、努力奮鬪は決して所謂成功致富の階段となるものでは無いのであります。

七

十三人を乘せた幽靈丸は、風浪に揉まれ〳〵て、海中に漂つて居りましたが、幸ひにして難破もいたしません。其中に浪風もやゝ靜まり、雨も晴れたので、一同やつと人心地が着いて見ると、船は依然として矢のやうに流されて居ます。

抜けて本船に乗り込みますと、文左衛門は船頭、舵は庄之助、親爺は九郎兵衛、炊は喜代蔵、市平は櫓、仙八は水先、源八は舳、其の他の者は手の足りぬ所を助けると、それ／＼役割を定めました。それから愈々、碇を巻き上げて船を出すことになりましたが、文左衛門は何思ひけん、船首に立つて母が譲りの菊一文字、抜くよりも早く二條の碇綱を丁と切り拂つた。

[illegible]たのでもない。同[illegible]したのでも無ければ亂心して[illegible]碇ぐらゐを頼みにして居たのでは、到底[illegible]の難風激浪を押し切つて、江戸に乗込むやうな大事は仕遂

文左衛門は[illegible]

念じつゝ、大磁石を振つて東西南北の針路を図り、六人の船頭は持場々々に就いて、水夫楫取を指揮して命の限り風浪と戦つて居ります名も恐ろしき熊野灘を辛くも切り抜けて、鳥羽浦に差かゝつた頃は風いよ／＼強く、浪ますく荒く、[illegible]

[illegible]つては頽れ、五百石積の巨船もさながら木の葉の[illegible]れて、乗組の十二人は精も根も盡きんとする位[illegible]まひました。

文左衛門は傳家の寶刀を轉拂ひして額に押し當て、聲高らかに住吉大明神を念じ、『吹けや離風、狂へや荒浪。帆柱を折れ、船を碎け。』と呼ばはり〳〵、一行の勇氣を鼓舞して居ります。やがて熊野灘の嶮を過ぎ、鳥羽の浦の難所を越え、左手に伊良子岬を望んで渥美半嶋の沖を轉ぶやうに駛り、差かゝつたのは遠州灘七十五里の大難所。三州吉田の沖合に到つた時には、東西南北より逆捲き返す狂瀾は、怒號咆哮して帆柱を呑み、車輪を流すが如き大雨は舷を打ち砕く。暴風は帆柱を折り、怒濤は舵を掃き、黒白（あやめ）も分さぬ大海原の眞只中で、幽靈丸は玆に進退の自由を失つてしまひました。

此時は既に水夫楫取は奔命に疲れて胴の間にゴロ〳〵轉がり荒海を棲家のやうにして「幾度かの難船にも出會つたことのある六人の船頭も、遂に堪り兼ねてそこへ倒れてしまひました。」流石に氣丈の文左衛門も今は身神惱亂して、

『アゝもう駄目だ、俺ゝ運もこれ限り、一同の生命もいまが最後だ。覺悟を定めて船と一緒に沈んで吳れ。』

と、一聲高く叫んだが、後はもう無我夢中、死んだのだか生きて居るのか人事不省に陷ゐつてしまひました。

紀文の成功は紀文の努力奮鬪に由ると云ふ人があります。カアネギーは自分の致富は努力奮鬪の結果だと申しました。成る程、紀文もカアネギーも、努力奮鬪したに違ひはありますまい然し努力奮鬪だけが尊い譯でも無ければ、努力奮鬪だけで富の積まれる譯でもありません。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。つい先頃、日本の郵便事業が五十年に達したと云ふので、功勞者が表彰されなどいたしましたが、其中には四十年間も郵便配達をして居る者もありました。カアネギーが如何に努力奮鬪しても、單に賃銀勞働者として努力奮鬪したに止まつたならば、彼は終生、郵便配達か何かで終つたでありませう。即ち紀文にしろ、カアネギーにしろ、或は其他の如何なる資本家にしろ、その暴富を積み、成金となり、ミリオネヤア若くはビリオネヤアとなる事を得たのは、悉く他人の努力を賃銀で買ひ他人に働らかせて其の剩餘價値を掠奪するのでありまして、賃銀を得て他の爲に働らいて居る限り、努力奮鬪は決して所謂成功致富の階段となるものでは無いのであります。

七

十三人を乘せた幽靈丸は、風浪に揉まれ〳〵て、海中に漂つて居りましたが、幸ひにして難破もいたしません。其中に浪風もやゝ靜まり、雨も晴れたので、一同やつと人心地が着いて見ると、船は依然として矢のやうにながされて居ます。

『其代り、巧く船が江戸に入りや、小判小粒の雨が降らア。』

『もし途中で難船と來りやア、六文もつて十萬億土へ旅立だ。』

『そうしたら、三途の河で渡舟の船頭よ。食ふにや困らねえから心配するな。』

『五十嵐の旦那、どうぞ御無事に江戸入を。』

『皆さん、目出たく江戸入を。』

彼方此方に挨拶が交されて居ましたが、いつ迄名殘を惜んで居ても果しがないので、一行十三人は船に乗り移り、沖に繋いである幽靈丸を指して漕ぎ出しました。風は荒れに荒れ、濤は狂ひに狂ひ、折柄雨は篠つくやうに降り出して、艀は九天に打ち上げられ、奈落に捲き込まれるばかり。其の中を漸やく漕ぎ拔けて本船に乗り込みますと、文左衛門は船頭、舵は庄之助、親爺は九郎兵衛、炊（かしき）は喜代藏、市平は楫、仙八は水先、源八は鮹、其の他の者は手の足りぬ所を助けると、それぐ\役割を定めました。それから愈々、碇を巻き上げて船を出すことになりましたが、文左衛門は何思ひけん、船首に立つて母が贐りの菊一文字、拔くより早く二條の碇綱を丁と切り拂つた。

『やあ一同驚くな、文左衛門、狂氣したのでも亂心したのでもない。一同が碇ぐらゐを頼みにして居たのでは、到底も此の難風激浪を押し切つて、江戸に乗込むやうな大事は仕遂げられぬ。船が生命と頼む碇綱を切つたのは、取も直さず背水の陣、さあ一同、固より生命を賭けた仕事だ、未練を出さずに死身になれ。』

『いや判りました、船の名は幽靈丸、乗組は死装束、引導はもう受けて來た。生命を捨てる覺悟でシッカリやれ。』

土左衛門の仙八が聲勵まして指圖をする、水夫楫取（かこかんどり）は聲はり上げて、『めでた、めでたの若松さまよ、枝も榮えて葉も繁る』と、勇ましい船唄と共に大鵬が垂天の翼の如き帆を捲き上げると、忽ち烈風を膨んで船は弦を離れた征矢（そや）の如く、澎湃たる怒濤を突切り、沛然たる猛雨を衝き、東を望んで駛り出しました。

文左衛門は帆柱の下にドッカリ座を占め、心に住吉大明神を念じつゝ、大磁石を据つて東西南北の針路を圖り、六人の船頭は持場々々に就いて、水夫楫取を指揮して命の限り風浪と戰つて居ります名も恐ろしき熊野灘を辛くも切り拔けて、遠州の灘に差かゝつた頃は風いよく強く、浪ますく荒く、[illegible]天地の間に恐れる[illegible]が、頽れては起り、[illegible]つては頽れ、五百石積の[illegible]れて、乗組の十三人は[illegible]まひました。

文左衛門は傳家の寶刀を鞘拂ひして額に押し當て、聲高らかに住吉大明神を念じ、『吹けや難風、狂へや荒浪。帆柱を折れ、船を碎け。』と呼ばはり〳〵、一行の勇氣を鼓舞して居ります。やがて熊野灘の險を過ぎ、鳥羽の浦の難所を越え、左手に伊良子岬を望んで渥美半嶋の沖を轉ぶやうに駛り、差かゝつたのは遠洲灘七十五里の大難所。三州吉田の沖合に到つた時には、東西南北より逆捲き返す狂瀾は、怒號咆哮して帆柱を呑み、車軸を流すが如き大雨は舷を打ち碎く。暴風は帆柱を折り、怒濤は舵を捲き、黑白(あやめ)も分さぬ大海原の眞只中で、幽靈丸は玆に進退の自由を失つてしまひました。

此時は既に水夫楫取は奔命に疲れて胴の間にゴロ〳〵轉がり荒海を棲家のやうにして「幾度かの難船にも出會つたことのある六人の船頭も、遂に堪り兼ねてそこへ倒れてしまひました。」流石に氣丈の文左衛門も今は身神惱亂して、

『アゝもう駄目だ、俺の運もこれ限り、一同の生命もいまが最後だ。覺悟を定めて船と一緒に沈んで吳れ。』

と、一聲高く叫んだが、後はもう無我夢中、死んだのだか生きて居るのか人事不省に陷ゐつてしまひました。

紀文の成功は紀文の努力奮鬪に由ると云ふ人があります。カアネギーは自分の致富は努力奮鬪の結果だと申しました。成る程、紀文もカアネギーも、努力奮鬪したに違ひはありますまい然し努力奮鬪だけが尊い譯でも無ければ、努力奮鬪だけで富の積まれる譯でもありません。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。つい先頃、日本の郵便事業が五十年に達したと云ふので、功勞者が表彰されなどいたしましたが、其中には四十年間も郵便配達をして居る者もありました。カアネギーが如何に努力奮鬪しても、單に賃銀勞働者として努力奮鬪したに止まつたならば、彼は終生、郵便配達か何かで終つたでありませう。即ち紀文にしろ、カアネギーにしろ、或は其他の如何なる資本家にしろ、その暴富を積み、成金となり、ミリオネヤア若くはビリオネヤアとなる事を得たのは、悉く他人の努力を賃銀で買ひ他人に働らかせて其の剩餘價値を掠奪するのでありまして、賃銀を得て他の爲に働らいて居る限り、努力奮鬪は決して所謂成功致富の階段となるものでは無いのであります。

七

十三人を乘せた幽靈丸は、風浪に揉まれ〳〵て、海中に漂つて居りましたが、幸ひにして難破もいたしません。其中に浪風もやゝ靜まり、雨も晴れたので、一同やつと人心地が着いて見ると、船は依然として矢のやうに流されて居ます。

『ヤア、有難い、まだ生きて居る。然し、こゝは一體どこだらう、日本の内だらうか、それとも天竺だらうか。』

『さあ何處だか分らねえが、それよりも和歌の浦を出帆してから、今日は幾日目になるのかなア。』

『何しろ、天も海もまつ暗闇だつたし、それからは人心地が無かつたから、幾日流されて居たのか、全然譯が分らねえ。誰か船櫓へ上つて見ろ、陸が見へるかも知れねえぞ。』

そこで大名の九郎兵衞が船櫓へ上つて、四方を眺めて居ると左手の方に微かに見へたのが見馴れた下田の高燈籠です。

『オヤ〳〵、あれア確かに下田の高燈籠らしいが、それとも俺の眼の迷ひかしら。庄之助、チョツと來て見て呉れやい。』

『ヨシ來た。俺が見りや間違ひつこはねえ。』

今度は舵の庄之助が上つて來て、暫らく見て居りましたが、歡極まつて覺えず泣き出しました。』

『イヤー、確かに下田へ入つた。あれア下田の高燈籠に違ひねえ。旦那ア、お喜びなせえ、皆なも安心しねえ、船はいつの間にか伊豆の沖へきたゾ――。』

さあ之れを聞いたので、今まで夢中でウン〳〵呻つて居た連中も、急に元氣が出ました。文左衞門はこれも偏へに住吉大明神の加護の在るところと、天を拜し地を拜して幸運を喜びました。

『さあ一同、こゝが下田の沖なら、品川まではもう一と息だ、疲れたらうが奮發してやつて呉れ。』

『エー宜うございます、どうも運勢の向いて居る人にや叶はねえアレ程の荒れに會ひながら、難船もしねえでよく此處まで乘切つたものだ。』

一同は夢に夢みる心地で、互ひの幸運を祝し會ひ、初めて蘇生の思ひをいたしました。かうなると乘組の一行は勇氣百倍、一たん下田港へ入つて飲料水を汲み取り、相模沖も難無く越して夜の白々あけに品川に入りました。和歌の浦を出帆して以來滿二晝夜十月廿八日の朝はじめて江戸に入る事が出來ました。

それから直ぐに、見本の蜜柑を艀に積んで品川の船宿港屋七兵衞方に參り、主人に面會して來意を告げました。

『それはどうも偉いことで、何しろ此の時化は近年にない事で多町や四日市の問屋方は、もう日の前に鞴祭りが近づいて居るのに、紀州から一隻も蜜柑船が入らぬと云ふので、落膽して居りました。其處へ[illegible]たと云ふのは、問屋[illegible]速通知を出し[illegible]取つてはまるで救ひの神さま[illegible]たいなもの[illegible]せう。』

港屋七兵衞は、[illegible]の異樣な風體に驚[illegible]

の豪膽と冒險とに感嘆し、すぐさま使ひを出して、神田の須田町、多町、日本橋の四日市と、問屋仲間へすつかり此事を觸れさせました。何しろ江戸中の問屋連は、十一月八日の鞴祭りと云ふ年中行事が目の前に迫つて居るのに、肝腎要めの蜜柑が一と籠も入つて來ない、と云つて何年の得意先や、出入の屋敷へは是非とも納めなければならぬ。こんな時にや、手に入りさへすればいくらでも出すのだがと、毎日天ばかり仰いでは嘆息を吐き合つて居た場合ですから、一同渡りに船と早速金を懷中にして、駕籠を飛ばして乘込んで參りました。

偖て一同の挨拶がすみますと、文左衛門は問屋仲間に向ひまし、

『皆さんに申し上げます。私は五十嵐文左衛門、父の代までは度々江戸へ蜜柑を積み込んで參つて、皆さんとお取引を致した事があるそうですが、私は今度初めて入船いたしました。どうぞ之れからは先代同樣、引立の程を願ひます。』

『いや五十嵐さん、此の大時化の中をよくまあお乘込みなすつた。何しろ此の通り沖が恐いものですから、黄色い蜜柑の色と云つては、江戸八百八街に一粒でも見ることは出來ず、實は問屋が變つて毎日青息吐息で居たのです。時に今年は、海は近年に無い時化だが、蜜柑は大當りだと云ふことですが如何です。』

『どう致しまして、近年に無い大外れで、私の物心ついてからと云ふもの、こんな蜜柑の出來の惡い年は覺えません。蜜柑らしい蜜柑は、私が積んで參つた品物だけで、後にはもう腐つたのが些しばかり殘つて居るだけです。』

『ヘエー、そうですと、定めし仕切は高いでせうナ。』

『左樣です、何しろ私共は生命がけで參つたのですから、些しはお高うございます。一と籠銀三十匁で宜しかつたら、蜜柑は三萬八千籠ございますから、どうかいゝだけお引取下さい。』

文左衛門にかう云はれて、問屋連中はアットばかりに呆れ返り、しばらくは開いた口が塞がりませんでした。

八

それはそうでせう。銀三十匁と云へば金二分です。何しろ其頃は、二朱の米を買ふと持てない位であつたと云ふのですから、これには流石の問屋仲間が驚いたのも無理はありません。

『ヘエ、一と籠三十匁！兩タッタ二た籠ですか。いや五十嵐さん、アナタの仰有ることを決して無理とは思ひませんが、然し例年は大概一と籠十匁、それを三十匁とはどうもチト高過ぎるやうに思はれますが、もうそれよりは引けませんか。』

『これはアナタ方のお言葉とも覺えません。本日程、平生の相場から見たら、一と籠三十匁は仰せ迄もなく高いに相違あ

せんが、マア私共の扮装から考へてみて下さい。これが凪日和の航海でしたら、誰れが酔狂ナ、こんな死神みたいな装束をつけ、幽霊丸なんて云ふ船印しを立てゝ、生命がけで此の難風を乗切つて來るものですか。江戸は畏れ多くも将軍さまのお膝元金にさへ飽かせば日本は愚か、唐天竺の食物だつて口に入れられる。その土一升金一升とさへ云はれる繁昌な都に、如何に海が時化て居るとは云ふ條、千籠や二千籠の蜜柑は馬の背に附けてたつて持つて來られさうなもの、鞴祭りには是非とも無くてはならぬ品物が、この廣い八百八街に一と粒も無いとなつたら青物問屋をして在つしやるアナタ方のお顔にもかゝはりませう。そう思へばこそ、生死を眼中に置かず、生命を的に乗出して參つたので、何も私一人が儲けやうと云ふじやありません。アナタ方にも儲けて頂きたいからなのです。』

『イヤ、アナタのお話はよく判りました。判りましたが、然し兩に二た籠では、如何とも手が出せません。到底も吾々共では御相談に乗り切れません。』

そうだすか、相場が高いから相場にならぬと仰在られゝばそ［illegible］買物ですから、何方へ苦情をもち込む譯にも［illegible］八千籠の蜜柑は殘らず品川沖へ抛り込んで、［illegible］下を見込んで、値引をするやうな吝な男でないと云ふ證據を御覧に入れます。イヤ相摸屋さん、どうも飛だお手數をかけました。ア、ア、江戸つ子つてえ者は、義に勇む任侠な肌合だと聞いて居たが、見ると聞くとは大した違ひだ。かう申したら、定めし愚痴と思し召すかも知れませんが、私共十三人が此の荒浪を乗り切つて參るには固より生命も捨てる覺悟親兄弟や妻子と水盃を酌み交し、先きながらの死装束、船の名さへも幽霊丸と改めて、引導まで受けて來たのも、一つには昔からの得意先、江戸の問屋さんに恥をかゝせない爲からでございます。成る程、蜜柑一と籠が銀三十匁と申し上げたら、高いと吃驚なさるのも尤もですが、一と籠々々に十三人の生命が籠つて居ると考へたら、もしや一と粒百兩だつて安い物じやありませんか。然しまあ、こんな事は云ふだけ野暮だ。さあ、八、庄之助、船へ戻るとしやう。』

文左衛門は氣焔萬丈、紀州訛りの啖呵に江戸つ子の荒肝を取挫いて、上乗の船頭六人を從へ、席を蹴立てゝ立ち歸らうといたします。流石の問屋連もグウの音も出ず、默然としてさし俯向いて居りましたが、此時、一隅に聲があつて、立ちかゝつた文左衛門を呼び止めました。

『ア、、もし／＼、五十嵐さんとか云ひなすつたネ。いや大威張、お若いに似はぬいゝ御氣象だ。私は神田多町の青物

屋、丁字屋徳兵衛と云ふ者だか、今アナタのお話を承まはつて實の所、江戸つ子グウの音も出ません。成る程、蜜柑が兩に二た籠と云つたら馬鹿な相場だが、アナタ方の生命を貰ふと思へば、こんな安い買物はありやしない。此儘アナタ方を歸しちやア、今後他國の方に對して江戸つ子が幅つたい口が利けない。宜うがす、私が千籠引取りませう。さあこゝへ百兩手付を打つ、後金の四百兩は荷が多町へ入ると、同時にお渡ししますから。』

かう云つたのは、年頃六十格好の皮肉そうな親爺、百兩包みを拋り出し、ヘンどんな物だいと云つたやうな顔をして、煙管を脂下りにくはへながら、問屋仲間をヂロ／＼眺めて居ります。

『ヘエ、有難う存じます。私も一旦かう云つたからには、一と籠千兩でも賣るまいと云ひましたが、今のやうに仰有つて頂くと、私もまことに賣り榮がいたします。それではすぐに、荷を積み出すことにいたします。』

『アゝ、五十嵐さん、一寸お待ち下さい。私は神田多町の青物問屋で、西田金兵衛と申しますが、實は先程、相場を聞き洩らしましたが、一と籠おいくらと仰有いましたかナ。』

『エゝ、一と籠銀三十匁で、兩で二た籠……。』

『ナーンだ、一と籠タッた二分ですかえ。宜しうございます、何も丁字屋ばかりが多町の問屋と云ふ譯じやありせまん、私は三百兩だけお貰ひ申しますから、六百籠積みをして下さい。』

『ヘエ、有難う存じます。』

『もし／＼五十嵐さん、私は西田屋與八で、一と籠いくらでしたつけナ。……何だ箆棒ナ、たつた二分ですかい。そりア安いナ、私はまた一と籠千兩と云つたのかと思つた。』

鼻つ張の強い江戸つ子が揃つたのですから、外に負けちやア家の暖簾にかゝはると、吾も五百籠、俺も三百籠と、三萬八千籠の蜜柑が忽ちのうちに、倚麗にハケてしまひました。

九

文左衛門が蜜柑問屋から買ひ込んだ時には、一と籠が一匁、それを江戸の青物問屋に賣り込んだのは、一と籠三十匁。恰ど三十倍の高値に賣れたのですから、まるで小判小粒の雨が降るやうなもので、文左衛門は文字通りに一獲萬金の暴富を積むことが出來ました。

かやうに、紀文が後代百萬兩の大分限者となつた抑々の根底は、實に此の蜜柑船の成功に依て築かれたものでありますが、これは決して紀文一人の努力奮鬪に依て作られた物では無く、實に數萬人の社會的勞働の結果に外ならぬのであります。只だ

一顆の蜜柑が實るにも、そこには數代に亘れる人類の勞苦と、智慧と、技術とが含まれて居ります。只一隻の船舶の構造の中にも、そこには有史前からの人類の社會的遺産が蓄積されて居るのであります。

また若しその存在の痕跡すらも、深奥なる人類學と、考古學と、地質學との知識を藉り來るに非ざれば、夢想だもされないやうな吾人の未開朦朧な祖先が、湖沼河海に沿ふてその不格好な、粗雜な獨木舟(カヌウ)を操つたので無かつたならば、和歌の浦の船頭と雖も巨船大船を操縱して、萬里の波濤を乘切ることは到底不可能であつたでありませう。

若し更に、日本に當時來た鞴(ふいご)を使用する工業が發達して居らず、或は鞴を使用する職人が、鞴祭りに蜜柑を撒いて祝ふと云ふ社會的習慣を有して居なかつたならば、紀文一代の大冒險事業も畢竟無駄骨折に終つたかも知れません。少くとも、一獲萬金の巨富を積むことは出來なかつたでありませう。

卽ち、すべての富は、社會全體の綜合的協力に依て成るものであつて、○○○○○○○、○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○。

紀文が暴富を積んだのは、當に此の社會的の富を壟斷獨占したからのみではありません、彼はまた、需要供給の法則を巧みに利用して、蜜柑の最も必要な場合に、蜜柑が絶無なので困り拔いて居る江戸へ蜜柑船を乘り入れ、此方(こち)の云ひなり次第の價で賣り付けたからこそ、あのやうな奇利をも收められたのであります。卽ち彼は江戸の青物問屋が、如何に脚下を見られても抗ふことの出來ぬ立場に在るとこを附け込んだので、その三十倍の奇利を博したのも、畢竟、彼が相手の商賣上の生殺與奪の權を握つて居たからに外ありません。

然し、紀文の此のやり口は、之を當代の資本家のやり口に比すれば、まだ〱罪の輕い方であります。紀文の方は、暴風難船と云ふやうな不可抗力の爲めに、物資の欠乏を告げて居る狀勢を利用したので、供給が需要よりも少なければ相場が上るのは自然ですから、之はまだ是認すべき餘地もあります。然るに當今の資本家は故意(ことさら)に供給を需要よりも減して、人爲的に相場を釣上げて居ります。

往昔(むかし)、佛蘭西(フランス)にフウリエーと云ふ人がありました。或る時、不作が續いて小麥の値が、暴騰し、多くの人々はパンを食ふことが出來ないで馬鈴薯で餓を凌いで居りましたが、其時、マルセイユ港の穀物商の倉庫には小麥が一杯積み上げてあつたのみか、外國から輸入した澤山の小麥は、ワザ〱海水をブツ掛け

て腐敗させられて居りました。フウリエーは恰ど此の腐つた小麥を海中に捨てる役目を命ぜられ、社會の多數人類が食ふべき小麥が無くて餓えて居る時、却つて其の相場を釣上げる爲に澤山の小麥を海中に捨てると云ふ、兇惡奇怪なる現象を見て大に發憤し、遂にその一生を社會主義運動の爲に献げたと云ふ事でございます。

一〇

然し、これは何も當時の佛蘭西の穀物商の奸策ばかりでは無く、また獨りフウリエーのみの慷慨には止まりません。方今、彼の資本家と稱する者、何者かこの佛蘭西穀物商の奸策を繰返さゞらん。また憂國慨世の志を有する古手、誰かこのフウリエーの慷慨を抱かざらんやであります。

曾て○○○が、朝鮮人參の相場を人爲的に釣上げんが爲に數十萬斤の人參を朝鮮で燒却したと云ふ話は事古りたり。昨春來、經濟的恐慌の大浪が日本を襲ひまするや、紡績業の各會社は一齊に操業短縮を斷行して、綿絲の生産を制限いたしたではありませんか。然らば、社會の多數民衆は織物に有り餘つて居るか、安い綿布にさへも有り餘つて居るかと申せば、決してそうでない。多くの人は、一枚の着更にさへも事を缺いて居るのであります。

然し實のところ、資本家どもに取つては、社會の多數者が困らうと困るまいと、そんな事はどうでも宜いのであります。彼等はたゞ自分達が儲けさへすれば宜いので、物資を多く生產し供給が需要を超過するに至れば、從つて相場が下落する、さうすれば儲けが薄くなると云ふところから、故意に生產を制限するそうして、人爲的に、不自然に相場を釣上げて、自分等の懷中を肥すことに努めて居るのであります。

世間では、勞働者のサボタアヂユをば、ヤレ怪しからぬとかヤレ不道德だとか云つて非難いたします。然し、此の資本家の社會全體に對して、絶えず加へて居るところの組織的な大サボタアヂユに對して、曾て一言の非難の聲の物だけよりないのは何故でありませうか。また曾て斯の如き資本家の組織的な、大仕掛な奸策を目擊して、尙且つ現代の經濟組織、社會制度に疑惑を抱き、彼のフウリエーの如く身を挺して、社會改革の事に當らんとする相手の輩出せざるは、抑々何故でありませうか。

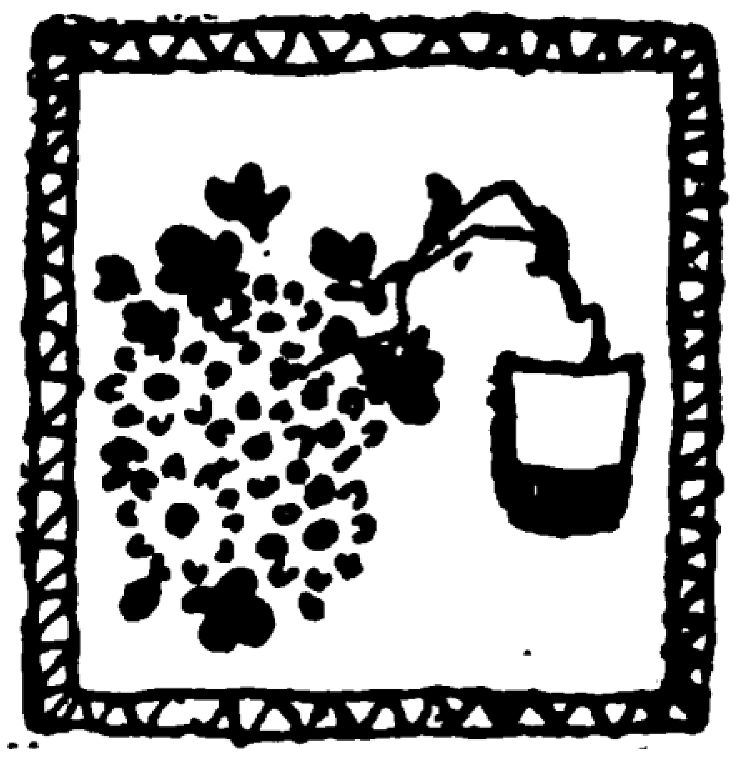
イヤ、これは亦、つい議論に身が入り過ぎて、話が橫道へ逸れてしまひました。偖て、文左衞門は當初の希望どほり、一獲萬金の奇利を博しました上、積んで參つた紀州石を賣つた所がこれでまた二百兩の儲けがありました。そこで、約束通り船頭に後金の廿五兩を支拂つた上、此の石の賣上二百兩と云ふもの

は酒手として悉皆船頭に分配し、それから一行を率ゐて吉原へ繰り込み、底抜け騒ぎを演じました。此時、幇間が作つて座興を添へたのが、彼の有名な『沖の暗いのに白帆が見える、アレは紀伊の國蜜柑船』と云ふ俗謡だと申します。

かうして、文左衛門は大に社會政策を施して勞働者をゴマ化し、巨額の剰餘價値を掠奪いたしましたが、何處までも抜け目の無い彼は、歸航りは更に江戸で買ひ込んだ鹽鮭を、大阪へもち込んで賣つたので再び巨利を占め、めでたく故郷の和歌の浦へ歸着いたしました。

これから文左衛門が江戸に出て、家號を紀伊の國屋と稱し、奇才長五郎を得て龍に翼を添へたるが如く、廣告術を利用して冠下香を賣擴め、天明の振袖火事に際しては材木の買占めを行ひ、**遂に一代にして百萬長者となるお話でございますが、それ**はまた追つて申し上げると致します。何しろ近世的資本家の先驅者たる紀文の一代記が、今日でも講釋席で平民階級に歡迎せられ、〇〇者の軍歌とも云ふべき『沖の暗いのに』の俗謡が、勞働階級の酒宴に唄はれるのですから、日本の資本家制度は當分泰平無事でございませう。





鰯屋の嫁

白柳秀湖

（一）若旦那の失踪

享保十七年の春、日本橋本町三丁目の藥種問屋、鰯屋七兵衛は天にも地にも一粒種の倅七三郎を勘當といふことにして親戚一統に披露してから、とかく氣分がすぐれず、店のことは、すべて大番頭の藤兵衛に任せて、自分は奥の一間に引籠り、ボンヤリとして深き吐息に暮れるばかりであつた。時々は氣をかへて、書棚から好きな俳諧の本を取出して見ることもあるが、心は何時の間にか倅七三郎の身の上に飛んで、想像の絲はそれからそれへと限りなく、明日にも忌はしい知らせがあつて、何處その濁川にあさましい姿を見せられるのではないかと、思ふにつけ、案じるにつけ、當年二十一歳といふ立派な若ものの姿は眼に映らず、客間の壁に惡戯を書いたと云つては呼付けて叱り、丁稚にせがんで隣家の屋根の雀の巣を取らせたと云つては呼付けてたしなめた頑是のない七三郎の、フトした後姿や、横顔ばかりが眼にチラ付いて、初めから恁んなことになると知れて居たら、あの時もアンナにひどく叱るのではなかつた、あの事もアンナにやかましく咎立てするではなかつたと、世間への手前、數多ある奉公人へのみせしめに、平常(ふだん)うはべに平氣を裝つて居るだけ、只一人居て物思ふ時は意地も張りもなく、心ゆくばかり親の愚にかへつて、不覺の涙にくれるのであつた。

七兵衛の心を汲んで、七三郎の出奔を我ことのやうに歎き悲しむのは、番頭の藤兵衛であつた。七三郎が出店の鰯屋市兵衛方から屆いた二百兩の現金を引出して吉原に走り、此春の初會から深く思ひ思はれた若葉屋の九重といふ花魁を請出して、姿

を晦ましたのは正月廿七日のことであつた。二百兩といへば鰯屋の店にとつて、別に取立てていふほどの大金でもない。又、番頭の藤兵衞は今が分別盛り、働き盛り、浮世の酸いも甘いも嚙み分けて恁うした事件の解決には、打つてつけたやうな男である。若し七三郞の行方が分つて居さへすれば、もとより人並み優れて聰明な天性ではあり、よそながら監視をして、急がず、焦らず、徐かに事件を解決するにさしたる困難があるとも思はれぬ。七兵衞とてもそれほどに心を痛める必要はないのである。處が何うしたものか七三郞は九重を請出して、駕籠で吉原を出たまゝ行方が知れない。尤も此若茶屋といふ店へは藤兵衞も正月の九日に一度七三郞を迎へに出向いたことがあり、樓主喜兵衞とはその折、顏を合せたこともあるので、七三郞の失踪後は、藤兵衞自身の計らひで二三度喜兵衞を訪ね、兩人の行方について心あたりを尋ね、其後の消息について聽きもしたが、一向に樣子が分らない。それかと云つて喜兵衞といふのは商賣柄に似ぬ感心な心がけの男で、七三郞を本町三丁目鰯屋の若旦那と承知しながら、九重を僅か六十五兩で手放して居る。段々樣子をきいて見ると、此九重といふ女は、享保十六年の秋に、甲州屋伊兵衞といふ女衒の手から一年の奉公を得心で、七年の年期に陷め込まれたもの、その時喜兵衞が惡漢の手に渡したのが六十五兩、ツマリ原價で七三郞の手に渡したのである。尤も之については九重といふ女が、恁ういふつとめをさせるには餘りにシツカリしすぎて居て底氣味の惡いといふ筋もないではなかつた。年はその時に十七、氣質もよく、容貌は吉原五丁町にも多くあるまいといふほどの美人、若茶屋ぐらゐの中籬に置くのは惜しいと云はれたほどのものであるが、如何にも人間が聰明でハツキリしすぎて居る。それが一年の奉公といふのを、得心づくで賣られて來た。處が喜兵衞と女衒との約束は七年六十五兩といふことになつて居た。初めは親といふ觸出しであつたのが段々きいて見ると親でも何でもない。女は靈岸島元濱町の大工源兵衞の娘たみといふものであるが、源兵衞夫婦は死に、弟の源次郎は、仔細あつて目下行方不明とのことである。して見ると此賣買には親の判がなく、請人も七年の奉公といふのは得心の上でない。ツマリ惡漢が、おたみと喜兵衞との間に這入

つて、巧く騙つたのである。之が普通ならさ方が樓主の緊迫で泣寝入りになつて了ふのであるが、最初の掛合がひどく鮮やかで、シッカリして居たので喜兵衛も舌を捲いて驚き、之は容易ならぬ女である。恁んな女を無理に引とめて置いても、番所沙汰にでもなれば、規則違犯で結局此方が損をしなければならぬ。好い客があつて、請出さうといふことになれば、何でも損をせぬ限り早く手放して了ふ方がよいと思つて居た矢先、不思議な縁で初見世の日に錣屋の七三郎と出會ひ、互に思ひ思はれて、いよ／＼根引といふ相談になつたのである。之が普通の場合なれば代物はよし、錣屋の若旦那といふのでウンと吹かけるのであるが、喜兵衛は至極の好人物であるから、六十五兩一文も吹かけずにおたみを七三郎の手に渡したとのことである。その邊から考へて見ても、若菜屋が七三郎の行方を知つて隠立てして居るものとは何うしても思はれない。

二百兩持出した金の中、六十五兩で九重のおたみを身請けし、三十五兩をその身祝ひとして、家中の者に振り撒いたといへば、残る所は何ほどもない。百兩足らずの金を懐中して足掛

の手にかゝり

たのではないかとは、七兵衛も藤兵衛もひとしく心にダーッ

所であつた。

(二) 大江戸の夜

錣屋には大阪に親類がある。七三郎が江戸に居ないとすれば、一時大阪に身をよせて、其處から詫言を持込ん来るのに相違ないと、藤兵衛は先廻りをして大阪の親類に赤紙の飛脚を立てたけれども、大阪からの返事には、七三郎は未だ此地に入込んだ様子もない。若し何處からかたよりでもあつたら直に知らせるといふ返事が届いてから、十一月の末までに、耳よりなたよりと云つては一度もなかつた。よも／＼と我と我想像の絲を断ち切つて七三郎の無事を信じようとした七兵衛の心は暗くつなた。何も知らぬ丁稚小僧の眼にも此頃の七兵衛はメツキリ老込んで見えた。藤兵衛は時折、音もなく奥の間に吸込まれてゆく七兵衛のさみしいうしろ姿を見送つては、帳場のかげにソツと顔をそむけるのであつた。

十一月の末、乾き切つた西風が、夜の大路に白い砂埃をたてて軒の看板をキイ〳〵と鳴らす時、店の向ふ前に家を持つて居る藤兵衛の女房が、潜戸をガラ〳〵とあけて這入つて來た。店は今蔀を下したばかりで今日の勘定の最中である。

『御免下さい。』

『オヤ、御支配人の御内儀さん、何うぞ此方へ御上り下さいまし。』

『イエ一寸宿に用事がありまして……』

藤兵衛は帳場から此樣子を見て、

『今一寸手が離されませんよ。用なら此方へ上るが好い。』

『アノ急用が出來ましたから恐入りましたが一寸此處まで御顏を……』

『ナニ、急用だと、此勘定の最中を見かけて困るぢやないか。』

『それがアノ一寸大變な用事で……』

『ナニ大變！』

藤兵衛は起つて店頭まで出て來る。女房は藤兵衛の耳に口を寄せるやうにして小聲になり、

『一寸大變で御座いますよ。アノ若旦那がボロボロの打扮をしてお歸りになりましたよ。』

『エー！ 歸つた！ 女も一緒か。』

『一緒處ではありませんよ。女は道中で惡漢に攫はれて了ひ、若旦那は身ぐるみ脫がされて命から〳〵、ヤツト江戸へ著いたんださうですよ。』

『ウーム、大方そんなことだらうと思つて居た。オイおまつ！ 今が大切だ。決して甘い顏を見せてはならんぞ。今勘定を仕舞ふと己れが行つて樣子を見た上で、ミツチリ御意見を申上げるから……』

『宜しう御座います。』

『奥の間へ通して行燈を暗くして置いて呉れ。涙を見せては意見が利かねえ。』

藤兵衛は指圖をして女房をかへす。おまつは一足先にかへつて、

『若旦那、只今お店へ參りましたら、藤兵衛は一寸魚河岸まで參りましたそうで、追付け歸りませうから、マア奥の間でお待

ち下さいまし。其處に御出でになつて、ヒヨツト知つたものでも參るといけません。』

　おまつはいそ〳〵として行燈を奥の間に運び、心を掻き立てるやうな振りをして、態と燈心を一本にした。間もなく藤兵衞は歸つて來た。

『オヽ大分寒くなつて來た。又、そろ〳〵半鐘の音で起されるかナ……おまつ！　門口はモウ閉めても好いかエ。』

『アノ貴方一寸お待ち下さいまし。今お客樣がお見えになりますから……』

『お客樣つて何誰だエ。』

　藤兵衞は平氣な顔をして奥の間に這入つて來た、七三郎は悄然として行燈のかげにうなだれて居たが、藤兵衞の姿を見ると、ピッタリ疊に手をついて、

『御免下さいまし。』

『何誰ですか、大分晩いではありませんか。』

『ハイ、七三郎で御座います。』

『エッ！　若旦那ですか。マア今頃何しに御出でなすつた。見れば此寒空に襤褸一枚で顫へて御出でなさるぢやありませんか。』

　忠義な藤兵衞には是だけいふのが精一ぱいであつた。

『今もおまつに精しい話をしましたが、今年の一月、フトした心得ちがひから、帳場に置いた金を持つて吉原へ行き、女を身受けして上方へ行かうと、追手のかゝるのを恐れて態と中仙道にかゝりますと、途中惡漢どもに見込まれて、女も取られ、金も取られ、既に命も危い所をヤツとのことで或る人に助けられましたものゝ面目なさに江戸へはかへられず、恁んな淺猿しい姿になつて旅から旅へと門乞ひをして今日が日まで命を繋いで居ました。併し恁うして段々寒くなるにつけ、家のことが思出され、御父さんがなつかしくなつては矢も楯もたまらず、お前にモウ一度御詫をして貰ひ度いと、耻を忍んでこゝまでやつて來ました。今度といふ今度は身にしみて不孝の罪が恐ろしくなりました。モウ決して心得違ひはしませんから、何うか今一度お父様へお詫をして下さい。藤兵衞！　これ、このやうに賴みます。』

なさるといふのも、元はといへはミンな貴方の御心柄です。縦令金は二百両でも、幾多の奉公人を召使つて居るお店で、若旦那が先に立つて持逃げの手本を御見せになり、それを親御が知らぬ顔で御出でになりましたのでは、一日も取締がつきませぬ。コレ若旦那！ よく物を考へて御覧なされ、親旦那がア、してまだ老朽ちたといふ御年でもないのに、四方八方からうるさく勧められる後妻をお持ちなされず、不自由を忍んで御川でなさるといふも、ミンナ貴方が可愛いからではありませんか。その可愛い貴方を勘當して、乙の御親類から和三郎様といふ赤の他人を御養子に迎へようとまで御決心をなされたといふのは、ヨクヨク思つたことではありませんか。それ程どまでに御立腹のはげしい親旦那へ、藤兵衛が何を申上げたとて、何で御取上げが御座いませう。私はもう存じません。貴方を此處へ……げて……』

女房のおまつは餘りのことに堪きかねて藤兵衛の袖を引いた。

『モシ貴方！ それではアンマリ……』

『エ、入らぬことだ。打捨つて置きなさい。……ネエ若旦那！ 貴方のやうな方はモウ首を縊らうと、身を投げて死なうと勝手になさるが好い。私は存じません。』

藤兵衛の聲は次第に顫へを帯びて、トウトウ涙聲になつてしまつた。

『藤兵衛！ お前それは本心でいふのかエ。』

『本心とも〳〵 貴方のやうなそんな打扮をしてよく〳〵此町内までやつてこられたものと思へば、腹が立つて腹が立つて口惜しく涙がこぼれます。』

……がそれほどまでに私のことを悪むで居るのなら、私

はモウ死んで了ふより外に途はない。今日で三日御飯を食べないのだから、併し私の死んだ後は、御父様のことを何分賴むよ。』

『貴方がそんなことを御指圖にならんでも私にとつては大切な御主人、忠義を盡すのは番頭の役目で御座います。』

突放されて七三郎は何か口答へでもするかと思ひの外、泣く泣く表の潜戸をあけ、破れ草履を引かけて悄々と出て行く姿は、旅で惡摺れしたものゝやうにも思はれない。藤兵衛はモウ胸が一ぱいになつて了つた。

（三）貞　操　論

外は星あかりに大路が白く兩側の大店は一軒殘らず蔀を下し、大戸を閉めてしまつて潜りの障子戸だけが、所々に淡暗い行燈の火を投げて居る。七三郎は藤兵衛の家を出て園城の天水桶の下に佇み、しばらくは向ふ側のくゞり戸に映る『いはしや』の文字を見つめて居たが、やがて思入つたやうに、跼まつて我家の方を伏し拜み、園城の天水桶を足場にして庇の梁へ細帶かけ、アハヤ首を縊つて死なうといふ刹那、物蔭から此樣子を見て居た藤兵衛夫婦は、ソレとばかり飛出して來て七三郎を支へる。

『若旦那！　マア暫くお待ち下さい。』

『私はモウ死んで了ふ。』

『イヱ、私が惡う御座いました。何うぞ御勘辨をなすつて下さいまし。番頭の役目として一通りは氣強いことを申上げましたが、貴方の御心底の判りました上はモウ大丈夫で御座います。私が身に引受けて貴方の勘當のゆりるやうに致します。その代り何卒是からは心を入れかへて親旦那に御心配をかけないやうにして下さいまし。』

『さういふ譯であつたかヱ。まことに色々心配をかけて濟みません。それでは何分よろしく御詫を申上げてお呉れ。』

藤兵衛はそれから三七郎を家に入れて、沸いて居た鐵瓶の湯で顏を洗はせ、襤褸を脱がせて藤兵衛の着かへをきせると、根が大家の坊ちやん育ちだけに、見ちがへるほど綺麗なものになつた。二月から十一月の末まで十ケ月近くも乞食をして居たといふに何うして恁んな小ザツパリと美しくなるものかと、おま

譯ない、可愛い子には旅をさせろといふのは茲のことだと譯もなく涙が流れて、何も考へる暇がなかつた。

藤兵衛は一刻も早く七兵衛に安心をさせようといふので、其夜の中に本店へ行つて、主人に會ひ、コツソリと今夜あつた事の一部始終を話す。七兵衛は涙を流して喜び、心の底までも打あけて、尚ほ行末のことなどいろ〱と頼み入るのであつた。藤兵衛はそれから尚ほ七兵衛と明日の手筈まで洩れなく打合せて、其後はおそく家にかへつた。

翌る朝になると、七兵衛は親戚から店の重立つたものまで立會はせ、自分の面前で固く將來を誓はせた上で豫定の如く勘當を宥した。[illegible]の店は急に春が來たやうな賑やかさにかへつた。

その年は事なく暮れて翌れば享保十八年の春となつた。七兵衛は藤兵衛と[illegible]るが、旅の辛さは餘ほど身にしみたものと見えて、その[illegible]

く、手づから茶を點れて、

『藤兵衛や今日はマア目出度い日だから店も暇ではあり、ユツクリ話すが好いよ』

『ヘエ難有う存じます。』

『早いもので、七三郎がアノ髪結ひの磯吉に唆かされて初めて惡所通ひを覺えてからちやうど今日で一年に成るではないか』

『ホンにさう御仰られて見れば、若旦那が初めて吉原へ連れて行かれたのが去年の今日で床屋の磯吉がそれを白狀をしたのが、忘れもせぬ正月の十日、アノ晩は私がお迎へに参りましてエライ悪まれ役になりましたよ。』

『ハ、、、、、、時に藤兵衛や何時かお前に一度きいて見ようと思つて、ツヒ忘れて居たが、アノ晩お前は七三郎が[illegible]して道行までしたといふ女を見たのかエ。』

『それができ[illegible]晩は初めから若者を[illegible]

て、店のものとばかり掛合つて居ましたのでツヒその女といふのを見ないで了ひましたが、後でア、いふことになり、惜しいことをしたと思ひました。』

『その九重といふ女は今何處に何うして居るだらう。』

『悪漢が大勢して連れて行つたと申しますから、大かた山の中かなんぞで散々弄みものにした上、何處かの宿場女郎にでも陷込んで了つたもので御座いませう。』

『考へて見れば氣の毒なものだ。七三郎はモウその女の事は思つて居ないだらうかのウ。』

『モウ諦めて御出でなさるでせう。』

『何故?』

『如何に對手が思ひ思はれた女でも、鬼のやうな雲助どもに誘拐され、寄つて集つて弄みものにされた上、宿場女郎にまで賣飛ばされたものを、鋸屋の若旦那ともあらうものが、マサカ何時までも思つては居なさりますまい。』

『さうだらうか。氣の故か知らぬが、私の眼には、七三郎が未だ時々何か考へて思案に暮れて居るやうに見えますが……』

『若しさうで御座いましたなら、飛んでもないことで、若旦那の御改心なすつたといふのも怪しいもので御座います。』

『改心はしたと云つても、あれほど苦勞をした仲なら時々思出すだらう。』

『時々思出すやうでは、女に未練のある證據、如何に苦勞をなすつた仲にもせよ、道中の雲助風情にまで穢されて、オメ〱生きながらへて居るやうな女が何うなりませう。』

『若し其女の居所が分つて、伜からお前にそれでも好いから嫁にといふタツテの望みでありましたら……』

『成りません、そんな穢々はしいものを一歩でも此鋸屋の閾の內に入れることは出來ません。憚りながら此藤兵衞の眼の黑い中は、縱令親旦那が御承知でも、そんな疵ものを若旦那に……飛んでもないことで御座います。』

『ハヽヽヽ藤兵衞、私は未だその女を伜の嫁に直してやれといふのではないからそんなにムキになりなさるな。併し、伜が一旦あれほどまでに思込んだ女であれば、此後とも何ういふ事が起らうとも知れぬ。お前は疵もの疵ものと云ひなさるが、そ

早い話が町内では小西の嫁も、根を洗つて見れば一度は苦界て、御家の爲を思はぬことになりはしませぬでせうか。』
の勸めをしたものだそうな。それでもアヽして嫁に直して見れば、奉公人の氣受けはよし、内も外も一人で仕切つて世間の評判は大したものだ。それに引かへ圓城の嫁は立派な堅氣の家から來たが、舅姑との折り合も惡く、奉公人にもうとまれて居たたまれず、ツヒ此頃離縁になつたばかりではないか。世帶持ちから云へば疵ものだから惡いとは限らぬ。ツマリは當人の心次第でありませう。』

『それは疵ものでも疵ものが違ひます。吉原は町方でも、又、御屋敷方でも隨分立派な御身分の方が御出入りをなさる場所、日毎夜毎にかはる枕と申しますけれども、其實は誰でもといふ譯には參りませぬ。それに吉原の花魁なれば、隨分好い人の養女にして、立派な家の嫁に直した例も世間にないではありませぬ。親なり、夫なりが得心の上で、一時苦界に身を沈めた女と、人とも鬼とも云ひやうのない惡漢どもの手に攫はれて、散々弄みものにされ……

『成る程、親なり夫なりが得心の上で、一時苦界に身を沈めたといへば、力づくで汚されたのとは違ひます。併し吉原に數ある花魁の中、何ほどの女が、得心づくで賣られて居ませう。根を洗つて見たら、大抵は惡もの共の手にかゝり、騙されたり、脅されたりして泥水に陷り込んだものでありませう。吉原は身分の高い人の遊び場所、宿場女郎は身分の低いものの弄みものといへば云ふものの、疵物といふ段になれば同じことです。此頃流行る忠臣藏の淨瑠璃でも、お輕は勘平に斷りなく祇園に身賣りしようとする。身賣りするなら夫に斷りなしに行つても宜女の途が立つといふに、若し山崎街道で見知らぬ男に汚されたら、自害して申譯けせねばなるまい。考へて見れば女の操ほど分らぬものはない。男に都合のよいことは何んな猥らなことも疵にならず、男に都合の惡いことは何んなに苦しい譯があつても疵になる。』

『それは當の前のことではありませぬか。』
『女は男の

持もので御座いますもの……』
『だから私とて何も好んで賤ものを倅の嫁にしたいといふのではない。たゞ倅の嫁が未だきまらぬにつけ、いろ〳〵餘計なことも氣にかゝるやうな譯す。お前に恁ういふ話をするのも面目ないが、七八年前家内を亡くした時も、親類から後妻を持てといろ〳〵にすゝめて與れましたが、知つての通りタツタ一人の七三郎が可愛いばつかりに、トウ〳〵不自由を我慢して獨身で暮して來ました。何うか一日も早く倅の身の固まるやう、何でも好いからアレの氣に入るやうな女を探しあてて、初孫の顏でも見られるやうにして下さい。今日はそれを賴んで置かうとお前に來て貰つたのが、話の機みで飛んだ理窟がましいことを云ひました。』

七兵衛は何事かを見透して居るやうに、それとなく藤兵衛に云ひ含めた。併し生一本の藤兵衛には七兵衛の話の意味が何うしても呑込めなかつた。

（四） 下谷一番の花嫁

『時に旦那様、若旦那もア、して毎日帳場に坐つてばかり御出でなすつては氣も詰りますし、モウ大丈夫御改心の樣子ですから、一つ御心を試す爲にお金のお使をさせて御覽なすつては如何で御座いませう。』
『ア、それは好い所へ氣が付いて與れた。今日はちやうど日も好いし、淺草の幸龍寺樣へ納める筈の御普請金、アレを持たしてやることに致しませう。』
『成るほど淺草といへば御心を試すにはちやうど方角も宜しう御座います。』

其處で藤兵衛は二十五兩包みを二つ縱に封じて、金五十兩、御普請金と書き、本町三丁目緡屋七兵衛といふ判をポンと押して七兵衛に渡す。七兵衛はやがて七三郎を呼び、何喰はぬ顏で淺草への使を命じた。
『お前今日は久しぶりで淺草の幸龍寺樣へ御普請金を納めに行つて來て貰ひ度いが……』
『ハイ、承知仕りました。』
『今日は供など連れないで、一人でブラ〳〵行つて來るがよい。天氣も好いし、日柄も好いし、觀音樣へもお參りをして御

……さい』

『ハイ、成るたけ早く歸つて參ります。』

七兵衛は愈七三郎を出してやることになると急に不安を感じたが、今更止めることもならず、とつおいつして居る中に、七三郎は化度をしてサッサと出て行つてしまつた。ちやうど其日の午少し過ぎ、七兵衛がいろ／＼に案じ煩つて居る所へ、七三郎がイソ／＼と歸つて來た。

『御父樣、何うも申譯のない事を致しました。』

『何うしたエ。』

『私は何うもお金といふと間違ひを起して濟みません。ちやうど駒形まで參りますと、彼處に喧嘩が御座いまして、ワツワツ黒山のやうな人が雪崩れて參ります。間違ひがあつては成らぬと思ひ、人波を避けやうとして揉まれて居る中に、ウツカリお預りの大金を落して了ひました。何うぞ御勘辨を願ひます。』

何事かと思つて胸をとゞろかした七兵衛は金を落したのだときいて、[illegible]した。[illegible]安心して了つた。藤兵衛は未だに氣が付かんで居るが、七兵衛には夙から七三郎のあやしい節々が眼について居た。今日出してやつたらヒョット何んな間違ひが起るかも知れぬと私かに案じて居た處へ、七三郎が五十兩の金を落したと云つて顔色をかへて戻つて來たのでホット安心をした。さうして七三郎の訴へる前後の事情については何事も考へる餘地がなかつた。

『それは飛んだことをして呉れたナ。併し別に何處も怪我はしなかつたか。』

『ハイ、何處も痛めは致しません。』

『それなら今日はモウ宜しい。店へ行つて坐つて居なさい。』

跡で七兵衛は藤兵衛を呼んでモウあれならば倅も大丈夫であらうと喜んで居る。八ツ少し過ぎた時分、[illegible]屋の店先へ、[illegible]を一人供につれた文金高島田の上品なお孃さんがやつて來て、何うやら、[illegible]入り惡くそうにモヂ／＼して居たが、やがて供の女中が先に立つて[illegible]

『入らつしやい。』

『アノ本町三丁目の鰤屋さんといふのは此方様で御座いますか。』

『左様で御座います。』

今度はお嬢さんが代つて前に出た。

『アノ私は下谷黒門町の木屋利右衛門の娘で御座いますが、今日観音様へ御まゐりをいたしまして、南傳馬町から親類へ廻らうと、駒形の邊りまで參りますと、道傍で財布を拾ひました。中をあけて見ますと此方様の判の押した御普請金が入つて居ります。ちやうど通りかゝりで御座いますから、一寸御屆けいたします。』

『アノ！　左様で御座いましたか。それは〳〵アノ一寸番頭さん！』

七三郎も藤兵衛も、凡そ店に居るほどのものは皆一齊に娘のうつくしさとあざやかな口のきゝ振りとに見惚れて居た。藤兵衛は取次の小僧に呼ばれて、ハツト氣が付いた位、急いで店先へ出て來て、

『是は〳〵御親切さまに何うも難有う御座いました。今朝若人が淺草の菩提所へ參ります途中取落しましたものだそうで、確に御受取りいたしました。』

『アノそれでは洵に恐入りましたが、一寸御請取を……』

『ヘイ宜しう御座います。』

藤兵衛はサラ〳〵と受取をかいて渡す。お嬢さんはニツコ笑つてその受取りを懐中に疊み込む。そのあでやかさ、しとやかさは何うしても三千石以上の旗本のお嬢様としか思はれない。奥の一間から出て來て始終の様子を覗つて居た七兵衛はツカリ惚込んでしまつて、倅七三郎の嫁はあれより外にないいふことになつてしまつた。番頭の藤兵衛がその熱心な賛成者であつたことはいふまでもない。

『コレ七三郎！』

『ハイ。』

『何うだ今のは？』

『何で御座います。』

『何だではない、今の上品なお嬢さんが眼につかぬか。』

…木屋利右衛門方へ禮に行く。木屋といへばその頃下谷切つての金持ちで、質兩替を渡世にして居る。藤兵衛が行つて厚く昨日の禮を述べると、利右衛門も江戸で有名な鰯屋の支配人といふので下へも置かぬ持てなし振り、奥の離座敷に通して茶が出る。菓子が出る。之を御縁に兩家は幾久しく親類の交際をといふので、昨日のお嬢さんが出て接待をする。その立居振動のしとやかで見事なこと、流石に頑固な番頭藤兵衛も、ホト〳〵感心して了つた。歸つて七兵衛にその報告をする。七兵衛も大に喜び、段々様子を探つて見ると女は木屋の姉娘で名をおたみといひ、近頃まで仔細あつて母の實家へ預けられて居たが、最近に引取られ、妹のお花と一緒に琴三味線茶道活花香盆石歌俳諧など〳〵の道は一通り何でも仕込んであるといふので、愈七三郎の心を確めて見ることになつた。

七兵衛の眼には、歸つて來た後の七三郎の様子に、何を[illegible]。

…の縁談を危となつたら、七三郎が或は不承知をいふのではないかと、ひとりで心に案じて居た。處が案ずるよりは生むが安く、七三郎の返事は思ひの外に素直であつた。『お父さんや、藤兵衛の御眼鏡に叶つた女なら』といふ紋切型の挨拶に、話は埒もなくスラスラと進んだ。木屋の方でも、長男が二十三で後嗣もきまつて居るので、本町の鰯屋さんならばと直に話が纏まり、二月の中旬には吉日を選んで盛大な結婚の式が擧げられた。

藤兵衛の鑑識は愆らなかつた。鰯屋さんでは好い嫁を貰ひ當てたとお民の評判は三丁界隈に鳴り渡るほどであつた。七三郎との夫婦仲はいふまでもなく、傍の見る眼もうらやましいほどであつた。

間もなく天保の江戸に春が來た、花は上野、向島と咲き揃つてきらびやかな都の子女は織るが如く歡樂の夢を追つて都

（五）　店頭のゆすり

鰯屋の若夫婦が向島の花見に行つて二三日すると、本町の店先へブラリと懐手をしてやつて來た風體の悪い男、

『眞平御免なすつてお呉んなせえ。』

『ヘイ、入らつしやいまし。』

『私は神田小柳町の甲州屋伊兵衛と申すもので御座えやすが、此方様の御嫁さんに御目にかゝつて少々お話し申度いことがあつて參りやした。』

藤兵衛は此奴何か因縁をつけに來たなと思ふから自身それへ出て、

『私が當家の番頭藤兵衛で……シテ、御用の筋と申しますのは』

『ナニおたみさんに御目にかゝりさへすりや直ぐ分ることなんですよ。實はネ、私は斯う見えても昔、おたみさんと一つ鍋の雜炊をつゝき合つた仲なんで……』

『エ！　一つ鍋の雜炊とは？』

『そんなにビツクリなさらんでも、此方様の若旦那は何もかも御承知の上のことで御座えやす。嫁のおたみさんはもと吉原で九重といひ、私が請判をした女で、云はゞ私はおたみさんの義理ある親にも當るもので御座えやすよ。』

甲州屋伊兵衛と呼ぶ男はクルリと尻をまくつて店頭に胡床(あぐら)をかく。大きい聲をするので往來はワイ／＼といふ人だかり、藤兵衛は餘りの事にビツクリ仰天して奥へ飛んで來て七兵衛にそれと告げる。七兵衛には豫て思ひ當る節があるので扨ては倅の七三郎に一ぱい喰はされたかと眞青になつて立すくんだ儘、物をも言はず顫へて居る。

七三郎は扨てこそ露見、之はモウ何うあつても父親七兵衛に合す顔はないと女房のおたみに眼くばせして二人とも足袋はだしの儘で裏木戸から飛出し、辻駕籠に乗つて根岸御行の松の料理店、滿月樓に走る。鰯屋は上を下への騒動で、誰一人出て伊兵衛を追拂はうといふものがない。强請としては少々薬が利き過ぎた形だ。

『サア番頭！　何うして呉れるんだい。奥へ引込んだ儘、何時までも抛つて措きやがつて、斯う見えても此家の嫁が以前吉原へ身賣りをする時の請判だア。請判と云やア親も同然、その己

大きい聲で呶鳴つて居るが、家内の騒ぎが餘りにはげしいので、誰も構ふものがない。其處へ群衆を掻き分けて這入つて來たのが當時江戸で名高い南の町奉行、大岡越前守の與力同心、吉澤藤十郎、今町々の自身番を巡廻して本町三丁目までやつて來ると、鰐屋の前が黒山のやうな人だかり、

『コレ〳〵退け〳〵』

ヒョイと見ると豫ての注意人物、何かの廉で一度懲らしめてやらうと思つて居る女衒の甲州屋伊兵衛であるから『ソレ召捕れ！』といふ聲がかかる。組下のものがバラ〳〵と礫のやうにブツ突かつたと思ふと、尻をまくつて大の字形に寝て居た伊兵衛に忽ち縄がかかつてしまつた。

伊兵衛の申立てで事件が漸次に擴大し、鰐屋の伜七三郎、女房おたみ、満月樓の主人茂兵衛、下谷黒門町の木屋利右衛門、鰐屋の當主七兵衛、[illegible]、吉原江戸町二丁目若菜屋の主

て、享保十八年八月三日、一件の落著までに六十三人といふ證人、参考人が白洲に召喚されたのは、大岡越前守一代の裁判中にも多く例がない。

越前守の御調べによつて、新吉原江戸町若菜屋の抱へ九重が下谷黒門町の御用達渡世木屋利右衛門の長女といふ觸で、鰐屋方に嫁入したのは、概略次の様な經緯であつた事が判明した。

七三郎は享保十七年一月二十七日の夜、九重を身受けして直に上方に走る積りであつたが、親切な若菜屋の喜兵衛がその道中を氣遣ひ、自分の兄弟分で、任侠心に富んだ根岸御行の松の料理茶屋、満月樓の主人茂兵衛に宛てて手紙を書き、駕籠で兩人を満月樓に送り込んだ。満月樓の茂兵衛は一月から十一月まで七三郎夫婦を近所にある自分の住居に匿つて置いたが、[illegible]の末〳〵[illegible]で七三郎に[illegible]の計略を授け、七兵衛が十[illegible]て居る様子[illegible]

せて、夜おそく番頭茂兵衛の住居を訪ね、父親七兵衛へ勘當の詫をさせると同時に、自分の後楯である下谷黒門町の金持木屋利右衛門に事情を打あけて九重のおたみに鰯屋の嫁として恥しくない女一通りの教育を頼んだ。利右衛門は豫て茂兵衛の氣象に惚れ込んで、今の普請も自分が一切引うけてしてやつたほどの間柄とて二つ返事でおたみの教育を引受け、自分の娘のお花と一處に諸藝の稽古に通はせた。

一月七日の朝、七三郎は菩提寺の普請金を懷にすると、直に根岸の滿月樓に走つて、茂兵衛にせがみ、おたみを連れて大阪の親類へ走らうとした。茂兵衛は七三郎の持つて居る普請金を見て一計を案じ、その金を途中で落したことにして、うまくおたみを鰯屋の嫁にして了つた。處が三月に入つて七三郎夫婦が向島へ花見に行つたかへりを、チラリと見たのが、以前おたみと若菜屋喜兵衛との中に立つて巧みに規則をくゞつた女衒の伊兵衛である。尤も此奴は久しい以前から吉原の若菜屋へ掛合つて、おたみの行方を知らうとして居たが、喜兵衛も去るもの好い加減にあしらつて容易に實を明かさなかつたので彼は内々おたみの行方を探つて、おたみを種に一儲けしようとして居る所であつた。彼は金の成る蔓を見出したやうに喜んでソツとおたみの跡をつけた。さうしてそれが江戸中に隱れのない鰯屋の嫁になつて幸福な日を送つて居ることを知り躍上つて喜んだ。

（六） 貧乏を生む親

七兵衛は中仙道を乞食のやうにして江戸にたどり著いたといふ七三郎の姿が餘り小ザツパリとして少しも日に焦けた樣子がなく、目に立つほど面やつれもして居ないので、之は怪しい。誰かの仕組んだ芝居であらうと初めから氣が付いて居た。されば九重が何處から何うして現はれて來るか、何れにしてもそれまでに物堅い藤兵衛を說破して置く必要があると、親は親だけに先廻りをして、藤兵衛に餘計な理窟をきかせたりして居る であつた。併し流石の藤兵衛も幸龍寺普請金の一件にはマンマと一杯喰はされた。それにはおたみが餘りに美しく、しとやかであつた故もある

一件の暴露した時、七兵衛は事の意外に驚いて呆然自失したものの、嫁のおたみが若菜屋の九重であつたといふことには少

しも失望しなかつた。併し、七三郎の家出を幸に次男の和三郎を鍋屋の跡に直さうとした分家の和兵衛や、出店の佐兵衛は、親戚一統の意見を纒めて頑強におたみの離縁を主張した。中には茂兵衛と利右衛門の義侠心を悪く推量して、鍋屋の財産を自由にしようといふ陰謀ではあるまいかなど疑ふものさへあつた。

大岡越前守は八月一日に鍋屋の當主七兵衛、倅七三郎、女房おたみ、番頭藤兵衛、出店の主人佐兵衛、芝の分家和兵衛、その他親戚一統を白洲に喚出して、諄々と噛んで含めるやうに申渡された。

『コリヤ一同の者、三月以來其方の嫁たみの儀に就いて段々と取調べ遣はせし處據て行方不明と相成り居たるたみの弟源次郎の在所も相分り一件も愈落着に近づいた。併し承はれば何かと其方の親類ども打寄りたみの素性が氣に入らぬとか申して離縁の沙汰もあるやうに聞及ぶ。併し奉行の見る所では、たみは世にも稀らしい感心な心さまの女である。鍋屋の嫁として決して恥かしからぬものと思ふ。何うぢや、此越前が口を利いて取らせる。七三郎も望む所なり、茂兵衛利右衛門の計らひも詐りとは申せ、他意あつて致した譯ではない。親類どもに兎や角申さず、たみを元の鞘に納めるやうに致して遣はせ。何うぢや、七兵衛！』

『ハイ。』

『先づ其方から意見を申せ。』

『恐れながら申上げます。若菜屋喜兵衛、満月樓茂兵衛、木屋利右兵衛門此三人の計ひ却々もちまして容易ならざる義侠心と心得決して疎かには存じませぬ。若し此三人の計らひなくば倅七三郎は道中にて悪漢の手にかゝり、無残の最期を遂げましたかも知れませぬ。それを思へばかく世間を騒がせましたた[illegible]でも、一家の都合ばかり申しては居られませぬ。七兵衛はモ[illegible]風からその心で居ります。殊に御奉行様の難有い御言葉[illegible]なり、何の異存が御座いませうや。只親戚一統のものへよろしく御理解……を』

『ウム、神妙である。番頭藤兵衛、其方の考へを申せ。』

『ヘエ、私はモウ、商賣上の事済めば兎も角いふことはす

べて主人の心任せで、何の意見も御座いませぬ。』

『オヽさうあらう。佐兵衛！　其方は如何思ふ。』

『畏れながら私は親戚一統の意見を纒めて申上げます。鍋屋の家憲と致しましてたみのやうな卑しい素性のものを嫁に致すことは構へて相成らぬことになつて居りまする。たみは元々木屋利右衛門の眞の娘と思込み、一統承知の上で目出度嫁に迎へました處、此度、その詐りが露顯いたしました上は、當主七兵衛如何やうに申上げましても、吾々一統先祖の位牌へ對し、たみをその儘に直すことは出來ませぬ。』

『それも一應尤もな次第である。併し先祖は家を大切と思へばこそ家憲も遺して置いたやうなものぢや、その家を大切に思ふ先祖の心に此越前がなつて考へても、たみはよい嫁ぢやと思ふが何うか。』

『御尤もには御座りまするが、たみのやうに一旦賤しい勤めをいたしましたものを、倅の望みであるからと申して大切な嫁に直しましては、大勢の奉公人の示しが付かず、堅氣の家は一日も家風が相立ちませぬ。』

『今日堅氣を誇る其方の家でも、明日貧苦に迫れば我子を浮川竹の流れに沈めぬものでもない。勝敗は時の運、貧富は世の常ぢや。たみが賤しい勤めを致したといふも、元はと云へば貧故ぢや、富貴に誇ることを知つて、貧苦を憐むことを知らぬは眞の人間ではないぞ。』

『恐れながら申し上げます。貧乏をして我子を苦界に沈めねばならぬといふのも、是れ皆富人の心掛けが悪い故かと存じます。今日私共が申合せて先祖の教を守り、鍋屋の家風を相立て度いと存じますのも、貧の苦しみを恐れるからで御座ります。』

『ホヽウ佐兵衛！　其方は却々賢者ぢやの。併し越前はさやうに心得ぬ。世に貧すりや鈍すると申すことがある。貧すればこそ鈍もする。鈍すればこそ酒も飲む、博奕も打つ、女も買ふ。貧乏を恐れぬほどの愚鈍は是れ皆貧乏の生んだ子ぢや。貧乏の親は未だ外にある。』

『恐れながら、貧乏の生みの親と申しまするは？』

『貧乏の生みの親は佐兵衛其方の店にも、本町の店にも土蔵の中に多く買占めてある筈ぢや。』

『私共の店には恐れながら藥種の外に何も買占めたものは御座りませぬ。』

『佐兵衛其方は猾者に似ぬ案外にうつけものぢやの、コリヤ一同の者、藥を買占めるほど無慈悲なことが世にあるか。貧乏の生みの親は病氣ぢや。病氣に罹つては稼ぐにも稼がれぬ。病んで醫藥の給せざるは此世の地獄ぢや。その方どもは堅氣々々と申して毎日此世に地獄を作つて居ることに心が付かぬか。今其方共の眼の前に活きた地獄の畫を見せて遣はさう。トクと拜見せよ。コリヤ、それなる源次郎を曳け！』

聲に應じて一人の若者が腰繩のまゝ白洲に引かれた。七兵衛の背後に小さくなつて控へて居たおたみは、若者の姿を見るとワツと白洲に泣き伏した。囚人はおたみの弟で久しく行方不明であつた源次郎であつた。佐兵衛も、和兵衛も顏を見合せて、怪訝の眉を顰めた。この時越前守は豫て次に控へさせて置いた鰯屋本店の手代新助を呼入れさせた。

『鰯屋七兵衛方召使新助！』

『ハイ』

『面を上げてトクと之なる囚人を見よ。覺えがあらう。』

新助は恐る〳〵面を上げて源次郎の姿を見つめて居たが、

『アー 御奉行樣、之が一昨年お店から大枚の人蔘を騙つた盜賊で御座います。』

『オヽさうあらう。之に就いて憐れな物語りがある。一同よつく承はれ！』

（七） 人蔘の騙取

享保十六年の秋、當時江戸中に聞えた柳橋の大村樸庵といふ漢法醫の玄關へ小ザツパリとした十五ばかりの若い衆がやつて來て、日本橋の鰯屋から來たが病人の事で先生に御目にかゝり度いと申入れた。鰯屋といへば名高い分限者であるから樸庵先生も何んな用事かと直ぐに面會をした。若い衆は主人からの申傳へであるが唯今、商賣のことで少し逆上をした手代を連れて來るから、診察をして癒る見込があるものなら癒してやつて下さいと鮮やかに述べる。樸庵がその病人は何んな容態かと尋ねると、その手代は昨日お店で惡い奴に人蔘を、五匁五十兩ばかり騙取られ、大枚のお金をアヽ申譯がないと思つて居る處へ、若

頭さんからひどく叱られたので、何うやら逆上の氣味で、人の顔さへ見れ人蔘五匁代金五十両と口走つて大きに困らせるとのことである。棋庵はさうか、それはよくあることだ。兎も角も連れて來い。一應診察してやるといふと、若い衆は喜んで辭し去つたが、やがて鰯屋の店頭に現はれて、手前は両國の大村棋庵から參りましたが手前と同道で人蔘五匁ほど御持參を願ひたい。代金は品物と引換へに両國の宅で御拂ひ申しますと申入れた。番頭は有名な棋庵先生の使ひであるから粗略に扱はず、それは御丁寧なことで御座います。直ぐに持參致させませうと手代に人蔘を持たせて同道させた。若い衆は棋庵の玄關で人蔘を請取り、只今先生に御目にかけて代を頂いて參りますから、暫くお待ち下さいと待たせて置いて奥に這入り、それでは先刻御願ひして置いた手代を連れて參りましたから宜しく御診察を願ひ度いと申入れ、引かへして手代に向ひ、先生が直に奥で御渡しするさうですからと、手代を案内して先生の部室に押込み、何喰はぬ顔をして玄關に出ると、イキナリ飛下りて雲を霞と逃去つた。此若い衆が今腰繩で白洲に引出されて居るおたみの弟の源次郎である。

おたみの父は源兵衛といつて、實直な大工であつた。腕が達者である上に氣前もよく、仕事に骨惜みをしなかつたので、彼方でも源兵衛、此方でも源兵衛と大層重寳がられ、少し良い造作でもあると、源兵衛でなければならぬとまで云はれたものである。似たもの夫婦といふ通り、女房のおあきも至つておとなしい、心ざまの好い女で、源兵衛との間にはおたみ、源次郎の二人の子をまうけ、自分も人仕事などをして子供の成長を樂しみに一家睦じく好い日を送つて居た。

處が源兵衛は享保十一年の夏、或る仕事場で手釿削りをして居たが、何うした機みか手釿がそれて足の踵を下へかけてしたゝか打切つた。源兵衛はそれから仕事を休んで床に就き、疵は好い鹽梅に一旦癒つたが、それから餘病が起つて枕も上らず、少しばかりの貯へも藥禮だ何だと瞬く間に遣ひ果し、今は女房おあきと娘おたみとの細い内職に待つより外に途はなかつた。處が源兵衛の家主は靈岸嶋元濱町の近江屋七左衛門と云つて、世にも怖らしい因業た老爺、稼ぎ人の源兵衛が長の患ひで、

一家困り拔いて居ることはよく知り拔いて居ながら、家賃は一ケ月分でも猶豫せぬ。時折近所合壁のものが親切に寄越して呉れる少しばかりの見舞金でも、見付け次第、家賃のかたに遠慮なくブツ奪つて行くといふ鬼とも蛇とも云ひやうのない奴であつた。それも初めの中は近所のものや、仲間のものが氣にして、時々少しづゝでも惠んでくれたからよかつたやうなものの、病氣が永引いて三年四年と經つては忘れるとしもなく忘れて了ふのが人情である。おあきは源次郎を十歳の時から、或る呉服屋の丁稚奉公に出して先づ口を減らし、おたみと二人一生懸命に稼いだけれども、藥禮と家賃とに追はれて、三度の食事も滿足には過されず、親子五に顏を見合せて只泣くより外はなかつた。戸が此憐れな家族の困窮に乘じて、おたみの美貌を種に一儲けしようとかゝつたのが、甲州屋伊兵衛といふ惡漢であつた。伊兵衛は豫ておたみの容色に目をつけて居たが、日頃母子のものが口癖のやうに何とぞ五十兩の金子を手に入れて朝鮮人蔘が求め度い、若し朝鮮人蔘さへ手に入つたら源兵衛の病氣も忘れたやうに癒り、昔の騒で貧乏神を追拂ふことも譯はないで

あらうに、何と残念なことである。欺いて居るのを聞知つて巧く母子のものを丸め込み、おたみは年六十五兩の積りで承知をさせ、なほ自分が親切になつて吉原に乘込むについていろいろと細かにバツを合せた上、トウ／＼おたみを江戸町三丁目の若菜屋喜兵衛方に陷込んでしまつた。

姉のおたみが吉原に身賣りしようとして居ることを奉公先で洩れきいた兄弟思ひの源次郎は、身も世もあられぬほどに歎き悲しみ、何でも其人蔘さへ手に這入れば、姉を庇ものにせずとも濟む譯であると一心不亂に思ひつめ、遂に子供ながらも驚くべき詐欺の手段を思立つたのである。

處が源次郎の苦心は全く無駄であつた。源次郎が大枚五十兩に當る人蔘を懷にして一目散に靈岸島の元濱町に駈付けた時、源兵衛はモウ此世のものでなかつた。おたみの身賣りからいろ／＼の事で心を痛めた源兵衛は急に病が重つて、享保十六年永代橋に引く秋の夜潮の音もなしに此世を去つた。源次郎は父の死體に取ついて前後不覺に泣き悲しんで居たが、長屋中の騒ぎに紛れて何處ともなく姿をかくして了つた。源兵衛の爲に形ば

かりの葬送を濟まして三日目の朝、おあきは梁に細紐をかけて縊れ死んで居た。おあきの死は家主が無慈悲に立退きを迫つたからだと傳へられ長屋中の若いものが七左衛門の宅に暴込んで片端から家財道具を打毀した。さうして反對に七左衛門から謝り證文を取つた上、おあきの弔慰金として十兩の金まで出させた。奉行所の調べに連れてこれらの事情がすべて明白となつた。

『何うぢや佐兵衛！　其方は自ら堅氣の町人と誇つて居るが、商賣といふものの裏には斯樣な暗い影もある。たみの苦界に身を沈めたは親のために其方一家の土藏に封じ込んである人蔘の靈藥を得んが爲であつたぞ。此活きた地獄の畫を見ても未だ貧乏は當人の心柄だと申すか。』

『恐入りました。』

『而も御上は飽くまでも公平であるぞよ。私情を以て天下の御法は枉げぬ。此度、源次郎が三年以前七兵衛方より五十兩に當る人蔘を騙取つたことを自首致したによつて、不憫ながら、斯く入牢申付け置いた。』

『段々との御理解よく合點が參りました。只今まで失禮を申上げました罪は何卒御許し下さいますやう。更めてたみを本家の嫁に直しますことに親戚一統何の異存も御座りませぬ。』

越前守の骨折りでおたみは目出度く元の鞘に納まり、○屋も雨降つて地固まることとなつた。七兵衛は直に書面を以て源次郎の赦免を歎願に及んだ。八月三日に六十三人の關係者に對してそれ〳〵申渡しがあつた中に、靈岸島元濱町の質屋渡世近江屋七兵衛が四千兩の財産を缺所に、伊豆の八丈島へ遠島となつたことは、江戸ッ子のヤンヤといふ喝采を博したと同時に、滿都の分限者の膽を寒からしめた。



編輯を了へて

◇麥稈帽が——パラソルが——東京驛へ——新橋へ——上野へ——兩國へ威勢よく雪崩れ込む、一年の間の奮闘で背縮めた肩が——それでもお陀佛にはならないで——涼しく歸る人、見送る人の山々。

◇何處へ行く——故郷へ——日本アルプスへ——阿寒湖へ——西伯利へ——亞米利加へ——近くば鎌沼か金澤へ——それも懐中物と相談づくの上で——九十日の休暇があれば米國も物もお易いこと——跡に取殘された無產階級は夕顔棚の下蔭で——或は公園のベンチにて一服の凉をとる。

◇臺灣でも新高の峯頂は五月まで雪がある、その頂きから見渡した景色は實に雄大で一萬尺内外の峯々が脚下に幾つともなくゴロ〳〵と雌伏しておるさまは壯觀だ。そしてその日月潭の晩涼と來てはそこに南國特有の情調が漂ふて何とも例へやうもない趣がある。

南九州では霧島三千尺の山頂に、幾通りもの温泉が湧出し、それに一眸の下に櫻嶽や薩摩富士が指呼されて淡き墨繪を現出する。

◇四國路や長曾我部の血の匂ひ、この殺風景な豪傑を弔ふべく池田から高知長岡までの山越へは平家の落人の棲家とも思はれるやうな淋しい、そして都びた丘陵が起伏し、谿々の清冽な水は全く齢まで延びるやう。

◇日本アルプスも古いし、飛驒路の旅は今年の夏には書入れだらう、社同人等は「碎花」氏の紹介の跡を訪ねたいと云ふものもあつた。

◇だが、大部分の同人は百穗畫伯、水島、中戸川氏等の垂涎した北海道の夏を味はいたいと云つていた、S生はヒマラヤの峯頂、Y生は西伯利バラボーエ湖畔へ行きたいと。しかし、それは單なる希望だけだ、我等はこの盛夏に諸君を避暑地へ送るべき計畫にのみ腐心して暑いこと太甚しだしかし雷鳴後の江戸の晩夏は酷く涼しい。

◇朝がたの「苗賣り」の聲は凉しく、金魚賣りの聲はねむく、噴水の飛沫も眠へと誘ふ、隅田川月夜の情緒もまた江戸名物として、捨てがたい。

◇武者小路氏の新しき村、吉野氏の理想郷、賀川氏の貧民窟それ〴〵異つた意味でその發展を祈つておる、その觀察も有益なる結果を齎らし得るだらう。

◇そして一衣帶水の大島や、八丈、小笠原島などの觀察は趣味深いものゝ一つだと思ふ、旭の輝く島の朝ぼらけ、夕陽の沒せんとする孤島の獨愁、それに島々の昔ながらの狀態などは經驗して損はない。

◇その他、探勝に値する十和田湖、洞爺湖、猪苗代湖、阿武隈、北上の河畔、石狩、十勝川の流域等さま〴〵の變つた趣がある——北の國——幾多の不便はあるがそのかはり生活は極く簡單であろう。

＊　＊　＊　＊　＊

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	八十錢	二錢
半ヶ年	四圓八十錢	不要
壹ヶ年	九圓六十錢	不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲増大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割増の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正十年七月四日印刷納本
大正十年七月拾五日發行

本號特價金壹圓

編輯兼發行者　東京府中目黒七七〇　横關利藤太
印刷者　東京市京橋區南鍋町二丁目七番地
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區櫻田久保町七　改造社
電話銀座二九五四
振替東京八四〇二

賀川豊彦著

死線を越えて

八拾五版販賣

◇四六版ポイント組五百九拾頁◇定價金參圓◇

◇バイブル式装幀天金函入美本◇送料拾八錢◇

◇本書に對する

賀川豊彦氏の新著『死線を越えて』は小説體に書いてはあるが、讀んで行く内に、著者の自叙傳を讀みつゝある感がした、所謂專門小説家の目から見れば、抒情叙事の間に齒がゆい點があるかもしれぬ。併し、此書の使命は小説以上である事を感得せずには居られぬ。

主人公が神戸新川の貧民窟に飛込んで以來の記事は、人生の矛盾、悲慘、罪惡を最も現實的に描出してゐる。主人公の周圍に集まり來る人人は皆人生の落伍者である。社會が有する缺陷と其人々の有する自身の缺陷の爲めに、精神的に、物質的に、肉體的に墮落してゐるもの丶みである。主人公の家に泊めて吳れと云ふ者は大抵結核性の半死半生の男である。或は足腰の立なくなつた淫賣である。主人公の救を求めらるるは、子供が死んで葬式が出せない時である。其子供は親が養育料を得んが爲めに貰つた子である。土地の破落戸は短刀やピストルを以て主人公を脅かして金を貸せと云ふ。拵癖の男が來て主人公と同衾する、一夜に四五十匹の南京虫に攻められる。主人公はこんな全ての困苦と迫害を忍びつゝ、基督教を説いてゐる。主人公は無抵抗主義者である。

國民新聞の批評 ◇

惡人に對して、抵抗せぬ。只沈默してゐる。只忍んでゐる。而して一步進んで、あらん限りの愛を注いでゐる。主人公は人間を崇拜すると云ふ。乞食に對し、惡人に對し、淫賣に對しても人として尊敬してゐる
貧民窟の生活は食ふや食はずの生活である、人間を本能化した生活である、之を見て、主人公は矢張り人間に失望せぬのである、每日貧民窟の小兒を相手に嬉々として遊んでゐる。

此現實の社會を見ては、他の凡ての社會が虛僞と虛飾の如く見える、著者は、鐵拳とピストルと病氣に日夜脅かされてゐる。之は眞劍勝負である、之に比ぶれば、他の小說家が美しき燈と、美しき衣服を探すを以て、人生探檢と稱するのを聞くと、全く馬鹿氣た感じがする。

著者は日本の社會に存在する缺陷と病氣とを吾々に見せた。此書が出でた以上、政治家も國民も、貧民窟の問題に知らぬ顏をして居る譯に行かぬ。余は人間の屑に敬意を表する主人公に敬意を表すると共に著者が貧民窟の問題を天下に提供せられたに對して、世人と共に感謝せざるを得ぬ。

社　振替口座東京八四〇一一番　◇

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
TICS. LITERATURE, SOCIAL AEFAIRS. ETC.
E: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
ICE: KAIZOSHA, 7 SAKURADAKUBO-CHO SHIBA. TOKIO
大正八年三月廿一日第三種郵便物認可

